

佐佐木信綱著

明治文學の片影

中央公論社發行

序

現在及び將來の文藝の展開を圖らむが爲めには、其の因つて來る源泉に溯つて、過去の文學を考徵する必要のあることはいふまでもない。近時は殊に、近い過去なる明治大正の文學の再檢討が行はれ、その研究が盛んである。從つて、明治文學の研究團體の興る、項背相望み、資料を搜索し、將た整理し、之を基礎としての傳記研究等も行はれてをる。

自分は多年文壇の一隅に在つて、歌の道に就いて絶えず力めて來たので、現に世を去れる文藝界の先輩や、後進の才人の間にも知つた人が尠くなかつた。今それらの人に就いて、それらの人自らがものがたつたことを傳へたいといふ考で、先輩交友からおくられた書簡を收めて、その思ひ出を書き識すこととする。不用意に書かれた、或は親しい間の音信を公にするのはいかがとも思はれるが、書簡は其の人の生活感情を知り、それによつて其の人と其の時代とを認め得る資料であるから、敢へて之を公にするのである。しかしてここに掲げた書簡は、いづれも自分に贈られたものであるが、中に二三は、故人の交友から得たものもある。また人、によつては、書簡以外

の短冊、原稿のたぐひをも掲げた。その中には、遺族もしくは交友から借りたものも數點ある。自分の思ひ出の文は、あまりに平凡に過ぎるものが多いが、なるべく眞實を傳へたいと思うて修飾を加へなかつた。中には、追悼會で述べた筆記もある。また同事の重復してをる處もあらう。他を語らうとして自らを述べたものもあらう。また百人と限ることとした爲めに、すでに書いたのを省いたのもある。

明治文學の片影と名づけることにしたので、明治に歿した人だけに限らうと思つたが、大正から昭和の時代までの人をも加へた。それらの人は、多くは明治時代に生を享け、明治時代に足跡を殘した人である故である。また文學者ならぬきはの人も載せてあるが、それらの人の文藻もしくは事歴で、文藝文化に交渉があると思うたからである。しかして順序は、歿年月によることとした。

まことに蕪雜なものであり、中には記憶の誤もあつたらば、故人に對して相すまぬと思ひもするが、文中五十頁に掲げたやうなことが動機となつて、世に公にしようと思ひおこしたのである。

昭和九年八月

佐佐木信綱

目次

寫眞目次

裝幀　小村雪岱

明治文學の片影

中野逍遙君

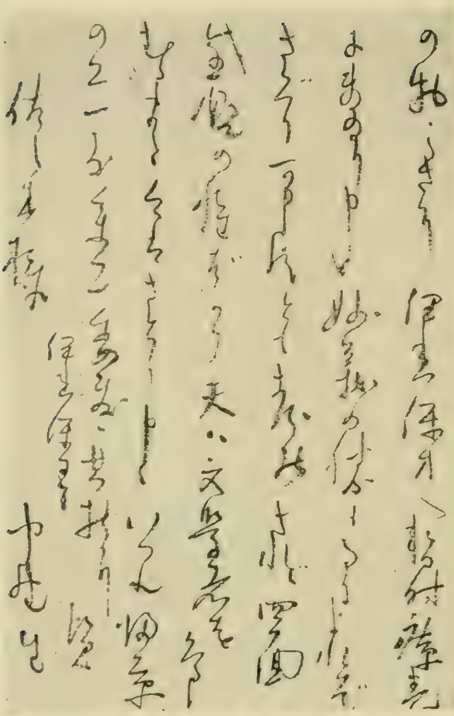
○（明治二十六年四月三日、伊香保）

其後はいかゞ御暮しなされ候歟と打案ずるばかりにて、不本意の御無沙汰、幾重にも御ゆるし下され度候。この一兩月は殆ど病に苦しめられ、神思錯亂、其上にうき世の雲に鎖され、晴れ行く心の容もなきを、自らさとし自らなぐさむる術もなく、又都の花見ん事の物うさに、伊香保方へ暫時療養に參り申し候。妙義の勝も事によればさぐり可申歟とも考居候。されど、四面感慨の種ばかり、天は文學者をくるしむるものと、今はさとり申し候。いづれ歸京のうへ一度參上、委敷は其折に。賢。

伊香保にて

中野生

佐々木様



（中野逍遙君書簡）

多情多恨の人

逍遙中野重太郎君は、明治二十七年十一月、詩集二卷を天地の間に留めて、齡纔に二十七にして世を去つた。君の學才を愛された嶋田重禮博士は、その逍遙遺稿に、「遺芳馥郁」と題し、其の終に、「中野文學士有才而無年、今讀其遺稿、慨然不堪蕙折蘭摧之歎」と識され、その友正岡子規子は、「春風や天上の人我を招く」と哭し、宮本正貫君は、「蓋君之所志、文則不降秦漢、詩亦不下漢魏、書則殊慕王衛」と述べ、小傳には、「更進於帝國大學、攻其漢學科而專修文詩、蓋帝國大學有漢文學生、以學士爲嚆矢」「又嗜劍又嗜詩、好誦西人志留禮留翁詠、自期以翁」と傳へてゐる。

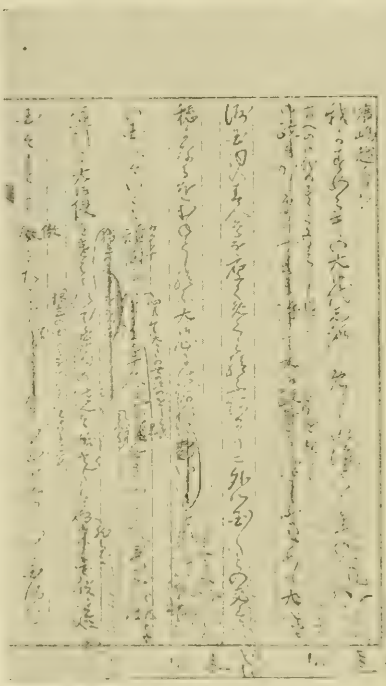
君の熾烈の情は、血と淚とを以て綴つた多くの詩篇を透して世に遺された。君逝いて既に數十年、其の詩の世に知らるゝと知られざるとは、固より君の問はる所ではないが、昭和四年九月、逍遙遺稿の譯文と本文とが岩波文庫によつて世に公にされ、君の詩を愛誦する人の少なからざるを聞くことは、君の友人の一人として眞に喜びに堪へないところである。

君は實に、自分にとつて益友であり、心友であつた。君と自分との交はりは、明治二十五年十月の城南評論なる雨夜文談と題した自分の文に、「學ぶ所同じからずといへども、志す所同じきをもて相視しき狂骨殘月の二子、秋雨軒を撲つ夕べ、月明雁を照らす夜、一室に會して文を談ず。文は二千年の昔に溯り、下當世に及ぶ。談は天外に馳せ、又人情の微密に入る。靜に羽觴をあぐれば、談益深く、談益深ければ、興益高し。」云々とあるが、狂骨は君の號、殘月は當時の自分の號であつた。

小中村清矩先生

明治國文學の恩人

明治十四五年頃、歐化主義が上下を風靡した時代に、當時の大學總理加藤弘之先生が、當時國學者が、次第に少くなつて行くのを憂へて、今のうちに、將來の國學者を養成して置かなければ、國學者



（小中村清矩先生「廣島講演會記」稿本）

の種がなくなつてしまふ。たゞ西洋の學問にのみ通じて、我が國の固有の學問を少しも知らないものばかり出來ては、これは國家の一大事であるといふやうの考から、幾度も文部大臣に上申して、大學に古典科を創設された。このことは、東京帝國大學五十年史の上卷にも書いてある。しかして加藤總理を扶けて國文學の命脈を傳へ、今日の隆盛をいたした小中村先生の功績は、ひとり自分達古典科に學んだ者のみの感謝にとどまるべきでない。勿論自分達にとつて恩人であるが、實に我が國文學そのものゝ恩人といはねばならぬのである。

先生が紀藩の古學館の頭取であつた時代、亡父と親しかつた關係から、自分は、湯島切通下に、池の端に、また西片町の邸におたづねして、學問上の懇篤なお話を聞いた。いつも、ゆつたりしたしづかなお話であつた。

先生は藏書に富んでをられたが、逝去後、その大半は南葵文庫に入つたので、自分は、和歌の歴史的研究に專心した際、同文庫で、茂睡の隱家百首をはじめ、先生の陽春廬の印記のある善本の多くを見て、參考にすることを得たのであつた。

（圖版として掲げたのは、明治二十七年十月九日、先生が貴族院議員として、廣島に於ける臨時議會に列席せられたをりの紀行なる廣島趨會記の稿本の第一頁である。）

樋口一葉女史

〇　（某年某月、半井桃水氏宛のもの）

前略御ゆるし給はり度、一兩日は時候ことによろしからず、御病氣はいかがにや、御案じ〳〵申居候。伺ひ度くてたまらないのに御坐候へども、中島師老母病死いたし、三十一日よりつめ切りに御坐候まゝ、思へどもにて御無沙汰御ゆるし願上候。むさし野のこともいかゞ相成候哉、參上伺ひ度くとはぞんじ候へども、右にて叶ひ不申、心ならずぞんじ居候。兎角は御身御大切に遊ばし候樣、くれ〴〵も祈り上まゐらせ候。いづれ近々に御目もじ可申とは思ひながら、何かと御案じ申上候こと、御笑ひ被下間敷候。取込中にて亂筆御ゆるし、まづはかしこ。

なつ子

師のきみに

（こは、大正十四年六月、半井桃水氏より自分に贈られたもので、次の如き書狀が添つてゐる「拜呈過般御話申上候一葉女史手紙、漸く見出申候間、進獻仕候。御手許に御保存被成下候はゞ、女史も本懐かと存候　先は右迄、頓首

六月十四日、半井洌、佐佐木先生函丈」）

○　（某年某月、田中みの子宛）

この方よりこそ御詫びの文さし上げんと存じ居たるに候を、あべこべにていよ／＼申わけなく候。いかにも／＼我まゝ千萬のことなれど、おはれる用事かた／＼に多く、久々ぐづ／＼と遊び居し餘波、内外よりせめつけられ候まゝ、先生にも御もとさまにも申わけなきことゝ存じつゝ、當分は御免を蒙りて一かたつけ度とおもへるに候。何かは御前様に對してふくめることなどあるわけもなく、もしあらば無言にておとなしくは致し居らず、いつかのやうに、はんけちをくひさきて泣出し申べきに候。決して／＼そのやうの事にてはこれなく候間、御ゆるし下され度、いつかの御話のやうに、大底一週間がはりのやうに、一人づゝは小石川へ御手傳ひに出づるお約束を、自分勝手にやぶりたるに候へば、罪は私こそ御わび申べきに候。いづれそのうち御目にかゝり申すべく、今しばらくの間お見ゆるしおき願上候。あのやうのことをもし本當におぼしめされ候ならば、誠に／＼申わけなく、さうでは決して／＼これなく候ゆゑ、御わびのなんのと勿體なき事はおほせ下さるまじく候。廿日には御前様にも御出おむつかしきの

由、私が出られるとよけれど、前申上し通りにて身動きが出來かね候間、(病人のやうなれど) わざ〳〵下されし御文を無にするやうなれど、事情御察し我まゝのほども御免し下されたく候。何もあら〳〵御返事のみを。かしこ。

御つむり御大切に遊ばされ候やう祈られ申候。私は、嘸かし御前樣が、いろ〳〵の事を思しめしてむしやくしやと遊ばされ候ならんと御察し申居るに候。あまりに御心配はなされまじく、御身體でもわるくなりてはしかたがなく候。御暑さを御いとひ、何もゆるりと御考へ遊ばされ候が御得策かと存じられ候。いづれ私より參上はいたすべく、御話萬々その節に。

なつ子

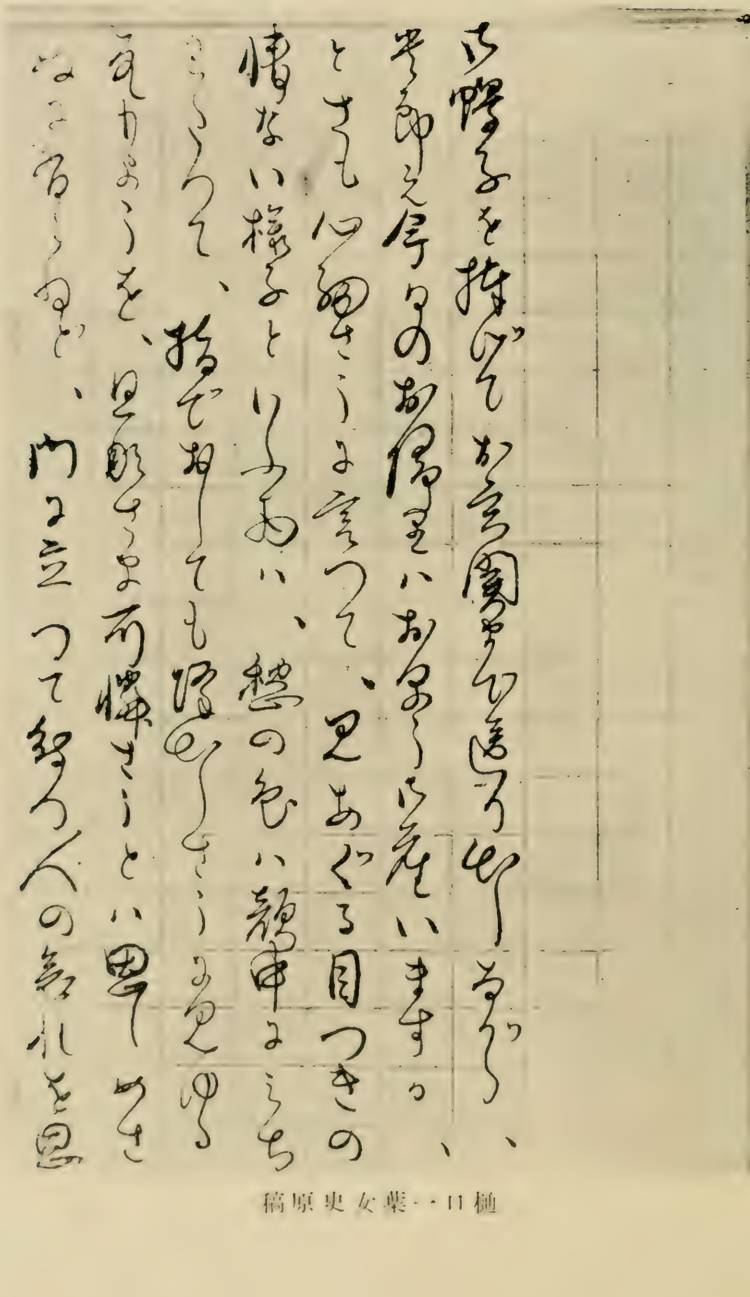
みの子樣

御もとに

(田中みの子ぬしは、同じく中島歌子門の先輩である。この書簡は、みの子ぬしより贈られたのである。)

女歌人としての一葉女史

平安朝の女作家の小說は、或意味に於いて歌の延長であつた。彼等諸作家は、いづれも歌から入つて物語に及んだのであつた。近世の女作家の天才なるわが一葉女史に於いても、自分に稍彼等平安朝の女作家と似た關係を見るのである。一葉女史の小說をその歌の延長であるといふことは、固より妥當でない。しかし、歌から文學的經歷に入つた女史の歌と小說とには、少くとも多少の關係が認められる。



樋口一葉女史原稿

一葉女史の文學的經歷を、その傳記や日記に就いてたどつて見ると、女史は、明治十六年十二歳の冬小學校を退き、その翌年十三歳の一月、父君の知人なる和田重雄といふ歌人の門に入つて歌を學んだ。これがその文學的經歷の第一歩であつた。十九年十五歳の八月、中島歌子の門に入つた。其の後一時中島家に寄宿して、內弟子のやうになつたりして、田邊龍子、伊東夏子と相並んで、中島門下の才媛と稱せられた。樋口家に現存せる女史の遺稿について見ると、十七年の春の詠草、卽ち歌を詠み習つた最初の作と見るべきもののうちで、しかも卷頭に記された作は左の如くである。

をちこちに梅の花さくさま見ればいづこも同じ春風やふく

これは一月中旬の作であるが、同じ詠草にある四十七首の中には、

春がすみ花まつ山にたちなせそ盛の花のかくれもぞする

いづこにかしるしの糸はつけつらむ年々きなくつばくらめかな

などが注意される。これを當時の歌壇における十三歳の少女の作として見れば、何人か、作者の歌才の勝れてをつたことを氣づかぬものがあらう。

女史の歌稿の遺つてゐるものは、樣々に標記された四十冊で、上述の明治十七年一月から、二十八年一月にわたつて、歌數すべて三千七百六十餘首に及んでゐる。二十八年といへば二十四歳の時で、その年の九月には、有名な傑作「十三夜」が作られてゐる。その後の作はさだかでないが、とにかくその短生涯に於いて、十三歳の幼きより斯く多數の和歌を詠んだのである。

幼年にして前記の如き歌才を示した女史が、年をふるに從つて進境に入り、後年小說家として大成する頃に至つ

ては、その作も、またその和歌觀も、同じく進んで來たことは、之を詠草に徵し、殊にまた隨筆中に散見する歌論に照らして、ほゞ斷言し得る。隨筆のうちなる、

> 歌といふものを幼きより詠み習ひて、月花の折ふしにつけてつられ侍るを、おのづからよしなどと人に襃めらるるもあり、みづからの心にはさしもおぼえざるを、人のよしといふは、よきなめりと心得て、宮城野、わか草などと名づけて書いしるしおけど、まことはたゞ言葉をつらねたるのみにて、しのぶ草をふる屋の軒によそへ、わすれ草を住吉の岸になげくなど、大方はいひふるしたる口眞似ぞかし。實景實情をよみてこそと人毎にいふめれど、その實情こそ求めては得がたかりけれ。
>
> やう／＼我が心に世の中のあはれといふこと思ひ知るまゝに、月にも花にも感ふかくなりて、心のうちに忍びがたきふし／＼を、片はし洩らすこそ、眞の情はこもり侍れ。昔よみし歌どもの、人には襃められて、我は其の心もなく詠み出だしたるを立ちかへり見もてゆけば、さし當りて心に協ひて、げにあはれと見ゆるもあり、其のむかしは襃めたる人に心ありて、詠み出だしたる身は何とも知らざりしなりかし。かかるひがことよくあらむやは。かかる歌どもを金玉などとたたへたるは、幼子の心なきをみて、天地のことわりを明らめたる人といふに等し。

の一節の如き、之を熟讀してみると、女史の和歌觀、またその後年における發達が覗ひ知られる。なほ歌集中にも、

> すきかへす人こそなけれ敷島の歌のあらす田あれにあれしを
>
> 敷島のうたのあらす田すきかへしむかしの春は誰か見すべき

など、和歌に對する感想を歌つたものがある。

更に女史の作の價値について考へると、大體に於いて當時の舊派歌壇の作風で、今日の標準から判斷すれば、もとよりその小說の如く光輝あるものとはいへない。しかしこれを當時の標準から見ると、さすがに勝れたものがある。しかして其の勝れたもののうちに、かすかに閃いてゐる女史の詩才や、氣槪や、人格やの一端を把へることは、女史の集を讀む者の爲めに、最も深い興味である。いま集中から、數首の代表的作品をあげると、

見し花のかげ消えてゆく春山のゆふがすみこそ心ぼそけれ

をしまれて散るよしもがな山ざくらよしや盛は長からずとも

わが袖のせばさ忘れて花の上におほはまほしくふく嵐かな

おもふことすこし洩らさん友もがなうかれて見たき朧月夜に

鳴きよわる庭の蟲の音たえだえに夜は明方が悲しかりけり

いたづらにすぎこし年を恥かしみそむきても見る月のかげかな

庭松の名ばかり高くなりにけり宿のあるじは木がくれにして

よしといひあしといふともから衣ただ身一つをつつむばかりぞ

波風のありもあらずもなにかせむ一葉のふねのうき世なりけり

ことし三月、花開きてとる筆いよいよいそがはし、あはれ此の事終り、かの事はてなば、一日靜かに花みんと願へども嵐は情のあるものならず、一夜の雨にも、木のもとの雪おぼつかなし。つくづく思ふに、雪佛の堂塔を營むに似たり。

風ふかば今も散るべき身を知らで花よしばしと物いそぎする

月のあかき夜ふくるまでながめて

さまぐ\の人の上こそしのばるれいづこまで照る月夜なるらむ

などがある

しかして、集中その數も多く、また秀逸に富んでゐる戀歌、それとともに、時事に感じた作のうちには、女史の小說と心の通つてゐるやうに思はれるものがあつて、特に注意を惹くのである。

われはさは戀する身なり人言にきけるがごとき物思ひそふ

誰ゆゑに死ぬ命とも知らぬかな戀ぞわが身をさそひゆくらむ

ひたすらに厭ひは果てじ名取川なき名も戀のうちにぞありける

今はただ思ひじとだに思はぬを涙や何のなみだなるらむ

ひたすらに死なば共にといひゐるかなわが亡き後のうしろめたさに

散りぬれば色なきものをさくら花戀とは何の姿なるらむ

人言のいとさがなきを聞けど、いひとかむもなかなかうるさしとて

行く水のうき名も何か木の葉舟ながるるまゝにまかせてぞみむ

その小說に於ける情調や趣向などに、それぞれ相通じてゐるものゝあることは、一葉全集の讀者の容易に首肯し得るところであらう。殊に、

隣に酒賣る家あり　女子あまた居て、客のとぎをする事、うたひめのごとく、あそび女に似たり　つらね文かきて給はれとて我がもとにもて來る、ぬしはいつも變りて、其の數はかりがたし。

まろびあふはちすの露のたまさかはまことにそまる色もありつや

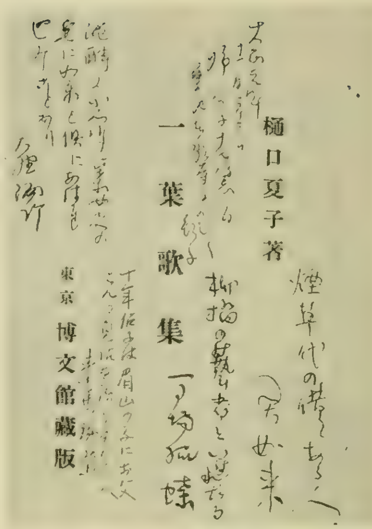
の如きは、かの「濁り江」の女たちをうたつたのである。

時事の作としては、

寒きふすま、かすけき燈火、しづかに仰いで故郷を忍ぶ時、いみじきつはものといへども、涙は襟に冷やかなるべし。

つるぎ太刀さゆる霜夜の月に寢て結ばぬ夢のゆくへをぞ思ふ

敵國のさまをさぐりにとて立ち出でし人の、はかなき終りをとげたるも多しと聞くに、それが妻などの心はとて



(一葉歌集の扉)

さだめたる方こそあらめ旅衣みさへたゝれむものとやは見し

さりながらそれもまた

うらやましいづれ消ゆべき露の世を野原のあらし立ちまさりつつ

丁汝昌が自殺は、敵なれどもいとあはれなり。さばかりの豪傑を失ひけむと思ふに、うとましきは戰なり

中垣のとなりの花の散る見てもつらきは春のあらしなりけり

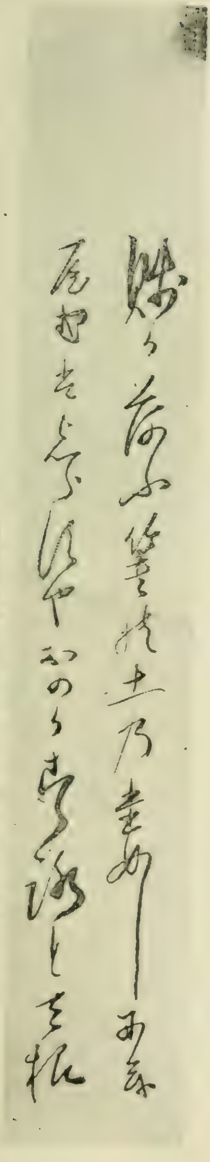
などは、日記中における鋭い觀察の文字と對照して、頗る面白い。

自分は夙くここかしこの歌會に出たので、中島家の會にも行つて、同じく年若い頃の女史とも識つた。その頃會の席では當座の歌合や競點などの歌を集めて書く役をしてをられた。小說家として一家をなして後も、折々會で逢

つて語りあうた。かかる緣故があつたので、去る十七回忌の時、記念として一葉歌集を刊行したいと、幸田露伴君の紹介によつて、令妹邦子ぬしが訪ひ來て囑せられたので、自分は、喜んでその編纂のことに當つた。然るに今年は早くも二十三回忌をむかへることとなつた。文壇の今昔を回想すると、この女流の天才を偲ぶ情が、今更に新たである。ここに些か所感を述べて、女史の歌才を世に傳へる次第である。（大正七年記）

（一葉女史の書簡の前に掲げた原稿は、女史の小説の草稿で、妹君邦子さんから贈られたのである。前の頁に挿入したのは、大正元年十一月十七回忌のをり、一葉歌集の扉に、邦子、大野酒竹、関如來、馬場孤蝶、來馬琢道の諸氏の寄書せられたものである。）

西　周　男



（陸が稀ふ道の世のためしにあやむはしらずやおのがこゝろと　西周）

明治初期の文化に大いなる寄與をされた先覺に、福澤諭吉、中村敬宇二先生のあることは、いふまでもないが、西周先生もまたその一人で、わが國の軍制制定の功のほかに、西洋哲學研究の先驅者であり、また明治の初年に國語のアクセントに就いて述べられた著書があり、その西周哲學著作集の序に、井上哲次郎博士の言はれたごとく、新體詩の萌芽ともいふべき譯詩をも殘してをられる。

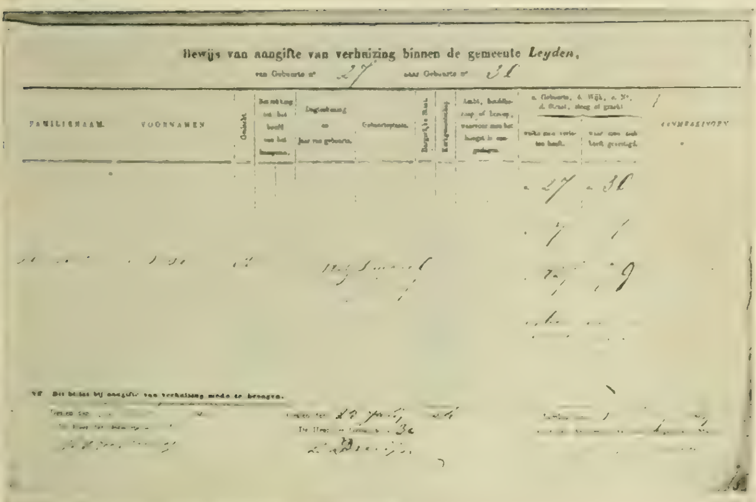
自分は、明治十五年、父に伴はれて上京すると、いちはやく京橋三十間堀の河岸の通に面した奥深い邸宅に先生を訪うた。それは、升子夫人が、兄君相澤朮ぬしと共にはる〳〵と伊勢に詠草を送つて、父の門人となつてをられたからであつた。夫人が、先生のとりよせられたといふ奈良の佛像の寫眞などを見せてくれられるのを見てをるところに、先生が出て來られた。光のするどい目に、なつかしい和らかみを湛へながら、親切に話してくださつた。自分の卽吟を見て褒められ、短册に書けなどいはれた。


（西周男）

古典科に入つて後おたづねすると、其の度ごとに、學問は深くせねばならぬ、精しくせねばならぬと、懇ろな誡を受けたことであつた。今にして思へば、かの「學問ハ淵源ヲ深クスルニ在ルノ論」の趣旨を、わかりやすくいつてくださつたことと思ふ。

明治二十年七月、自分が箱根から大磯へいつた日記がある。あまりに幼いものではあるが、西先生のそのかみを回顧する料として、他事もありはするが、拔抄して次に掲げる。

昨日（七月七日）宮下新道開通式ありて、榎本大臣、沖神奈川縣知事などの來られしと云ふ。（八日湯本）



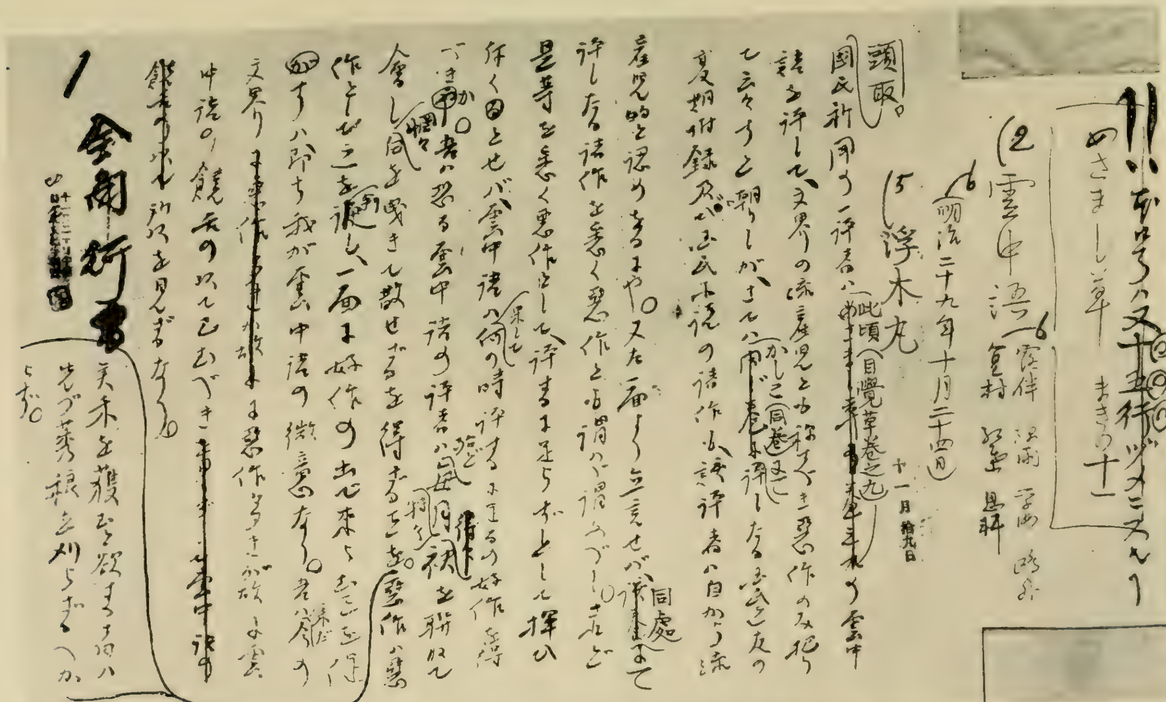
（和蘭ライデン區に於ける轉居屆書兩書）

佛人ボアソナード氏夫妻來れり。昨日新橋にて共に乘れるが今日來たるなり。（九日）

塔の澤の福住に來りぬ。さて湯あみするに、湯下よりは少しあつし。むかひなる三階に福澤諭吉先生宿らる。對面をこはまほしけれど、案内の人もなければえ訪はず。（九日）

百足屋（大磯）に行きて西氏をとひ、樓にて周君介子ぬしにあひて物がたらふに、しばし共に浴せまほしけれど、あやにくに吾等妹背は、明日は鎌倉にゆかんと思へばなど語らる。されど今日は共に浴せんと、周君と共に海邊にゆく　いと涼し。海水浴のさまは、海の岸にいと大きなる木をかなたこなたにたて、綱を引わたしたり。こは女または童などのそれによりて海水を浴むべき爲めなり。とかくして海に入るに、高き浪來りて頭を越す。馴れざればいと苦しけれど、念じて半時ばかり浴みて出でたり。（十日）

先生の晩年、（明治二十八九年頃）先生の舊友にて竹柏園の同人なる松岡隣翁と共に、大磯なる別業に訪うたことがあつたが、その時既に言語が明晰を缺いてをられ、わづかに「きんたさん」と



森田思軒君「雲中語」原稿（初め四行は鷗外博士筆）

いふ狆を病床に愛撫して慰めてをられたが、日の光は、やはりするどいうちに和らかさを湛へてをられた

なほ先生は、國文國語の學にも造詣深く、さきにいうた書物をはじめ、零册ながら萬葉集字訓の著もあり、和歌をも詠まれた。ここに掲げた短册に天根とあるのは、罔の字を天根とも、時には卅系とも書かれたのであつた。

森田思軒君

雲中語のつどひにて

森田思軒君の飜譯の文は、新聞に雜誌にはやくから愛讀してをつたが、初めて逢つたのは森鷗外博士のめさまし草の雲中語の合評會に行つたをりであつた。それは、團子坂の古名である潮見坂の上なる觀潮樓を訪うたある日の夕方が、ゆくりなくも雲中語のつどひの日であつたからであつた。

上野の綠の丘に眞向うてをる階上、人々は床のある方の座敷に、そこの片隅には、いつものやうに低い机上、その側の亂れ箱には文房具がいれてあつた。次の間には、無地の金屛風が一雙、その前には洋書が二十册ほど、きちんと立ててあるのであつた。

その夕の人々は、露伴、綠雨、篁村、紅葉、思軒の數氏であつた。主人の鷗外さんは、いつもの癖の　ヤアー　と聲をかけて、親しみのある目もとでこちらを見られたまま、やがてうつむいて書きかけの筆を執りつづけてをられ

る。その用紙は、特に切らせた小半紙型の厚みのある洋紙である。

筆談をしてをられる諸氏の前には、新刊の本や雜誌がちらばつてゐた。

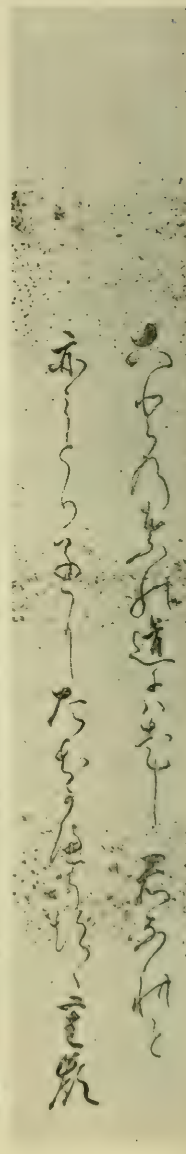
篁村翁は、盃を手にしてちびり／＼と飲んでをられ、緑雨君は、皮肉な笑みをふくみつゝ、低い、しかしよくとほる聲で、ぼつり／＼話をしてをつた。

座中の人々はいづれも面識があつたが、唯一人思軒君は自分には初對面であつた。君は、目もとがくぼんで、聲は一種特徴のある甲高い聲であつた。かねて國民の友でユーゴーの飜譯を愛讀してゐた自分は、その日の君のものがたりのうちの唯一つを記憶してをる。

「國民新聞で磯邊千浪といふ人が、日本新聞の評林の詩のやうに、時事に關する歌を出してをるがどういふ人であるか」と君が問はれたので、それは實は自分の變名であると笑ひながら話すと、君も笑ひながら、昔觀世の家に年久しくをつた老女が、鐵瓶の煮えで若師匠の謠の進歩を知つたといふ話があるが、自分も歌を知らずして知つたわけであると語られたことであつた。

（圖版は、めさまし草の印刷原稿で、初めの五行は鷗外博士の筆、國民新聞の以下は思軒君の筆）

鈴木重嶺翁



（ことの葉の道には老し君なれど亦みどり子にたちかへりつゝ　重嶺）

賑はしき歌會

東京に出て間もなく、自分は父に伴はれて、飯田橋に近い、もと國學院のあつた邊に、翠園鈴木重嶺翁を、庭の廣い家に訪うたが、翌月から今川小路玉川堂の裏二階なる翁の歌會に出席した。

翁は圓滿な性格であつたので、民間の歌人の會のうちでは最も盛んで、ことに、九段の萬龜樓（後に萬源樓とよぶ）で開かれた一月の發會と、十二月の納會には、樓上にあふれるばかりであつた。翁がもと佐渡奉行をしてをられた關係で、勝海舟翁も發會には出席された。この翠園歌會で、梅村宣雄ぬしから聞いた福田行誡上人の話、加藤安彥翁が兼題の披講をされた美しい聲は、忘られがたい。

近く棚橋一郎氏に逢つて聞いた昔がたりに、添田壽一、平沼淑郎、土子金四郎、棚橋氏等は、うちつれて鈴木翁に入門し、萬龜樓の發會にも出席したとのことであつた。

税所敦子刀自

○（明治二十三年某月）

此ほどは日本文範の下篇御めぐみ被下、ありがたく日々拜見いたしたのしみをりまゐらせ候。外に日本畫譜二帖、これまたありがたくふかく御禮申上候。

扨御序文歌認ため候やらとの事、いつもながらみぐるしく候へども、出來候だけ御廻はし申上候。歌といふ御題のかたは一二首よみ試み度く存候へども、此ほどより持病にて少しなやみをり候まゝあしからず思召可被下候。いづれあとより御禮旁くはしく申上まゐらせ候。

敦子

佐々木信綱君
みもとへ

心づくしの作者

税所刀自は、明治時代の女歌人中、夙くから歌文に達してをられた。それはかの「心づくし」によつて知られる。また、「み垣の下草」に見える詠史の作などには、歌才のみならず學問にもすぐれてをられたことが窺はれる。

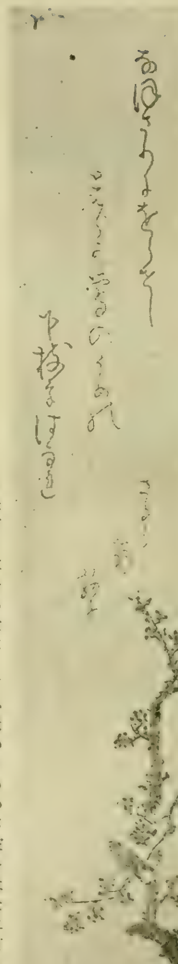


税所敦子自刀色紙



税所敦子自刀

婦徳と文藻とを兼ねて、明治の紫式部と稱へられたが、あまりにつゝましい性質は、僅かに「宮城御移轉記」と「大婚二十五年盛典記」とを殘してをられるだけであつて、紫式部日記のごとき宮廷の御慶事の詳かな日記などのないことが殘りをしく思はれる。



（なほざりにおもはせじとてか言のうめの下葉をはたれさそふらむ　歌子）

晩年市ケ谷佐土原町三丁目に住んでをられた時御たづねして、八田翁をはじめ鹿兒島の歌人のことをお問ひしたことがある。其の折贈られた寫眞が、歳月を經るに從つてうすくなるので、ここに掲げておく。

外山正一先生

日本文明の種子が島

外山先生は、古典科在學當時の文學部長であつたので、氣宇精悍といふ感じのする先生の風丰に屢接した。

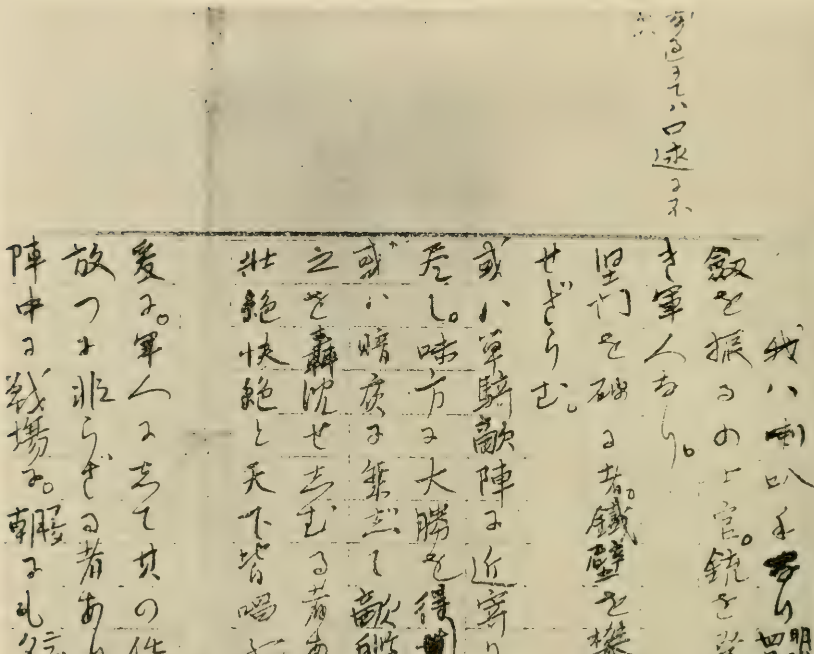
卒業後のことである。日本文學全書がよく賣れたといふので、博文館から上野廣小路の松源に招かれたことがあつた。十人足らずの客のうち、先生も來られたが、落合君と共に先生の前にいつて、新體詩のことに就いての話をお聞きした。落合君もよく語られたが、先生もいろ／＼話された。

その後、神田の日本青年會館で、日本文明の由來といふやうな題目で獨演說をされたのを聽きに行つた。音吐朗朗、水一口をも飲まず一時間以上を續けられた。鐵砲の初めて傳へられた種子が島は、日本文明の種子が島である、とやうにいはれた言葉を今もおぼえてをる。高山樗牛君もこの時の演說を聽いた一人で、非常に感じたといふことを同君から後に聽いたことであつた。

前に述べた中野逍遙君の葬儀の時、先生は棺前で一篇の新體詩を誦されたが、あまりに低い聲で、直ぐ傍にゐた自分らにさへ聞きとれぬほどであつた。後、其のわけをお問ひしたところ、「死者に告げる詩で、會葬者に聞かせる爲めのものではないからである」と答へられた。

先生の體格の良さは、外見通り誰にもわかつてゐたことであるが、その皮膚が極めて美しかつたといふ。それは後年、夏目漱石君と雜話のをり、漱石君が在學中、遠足で一緒に塔の澤の溫泉に行つた時、溫泉では一體に皮膚が美しく見えるものであるが、それにしてもあまりの美しさに驚くほどであつた、と語つてをられた。

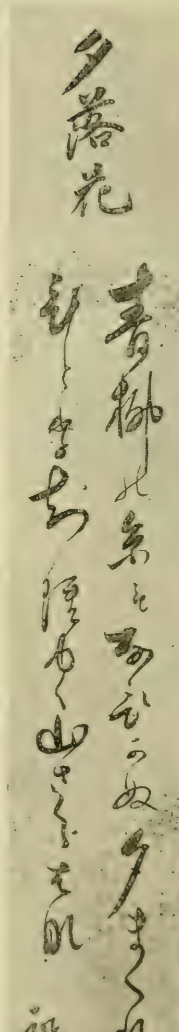
ここに揭げた喇叭手の一篇は、當時の帝國文學に發表されたもので、先生の多くの作中でも殊に有名であつた。これは外山家から贈られたものである。


我ハ喇叭手なり　明治廿八年四月作　文学博士外山正一

剱を振ふの士官。銃を執つの士卒。是れぞ勇まし
き軍人なり。
堅門を破る者。鐵壁を攀づる者。誰か其の勇を称
せざらむ。
或ハ單騎敵陣に近寄りて。親ら偵察の任務を
盡し。味方に大勝を得せしむる者あり。
或ハ暗夜に乗出して敵艦に近寄り。水雷を発して
之を轟沈せしむる者あり。
壯絶快絶と天下皆喝采
爰に。軍人にして其の佩剱を振ふに非らず。弾を
放つに非らざる者あり。之を喇叭手とす。
陣中に戦場に。朝にも夕にも。進撃に退却に。唯々

外山正一博士　我は喇叭手なり　詩稿

大西祝博士



（青柳の糸もたびかぬ夕まぐれひとりちりゆく山さくらばた　祝）

歌人としての操山博士

操山大西祝博士は、學者中の歌人であつた。

君は實に和歌の價値を認め、和歌の意義を了解された點に於いて、明治の學者中第一の、しかもまた唯一の人であつたといへる。君が明治二十年四月、六合雜誌に、和歌に宗教なしの一篇を公にせられて以來、詩歌論一斑、詩歌論、歌話數則、香川景樹翁の歌論、國詩の形式、近時の和歌論等の論文で、和歌を論ぜられたのは、いづれも當時に於いて、精到深邃の見解と稱すべき、特に和歌を十分了解して居られた點に於いて、まことに今日から見て、明治文學史上の一異彩とされる。自分のごときも、その時ごとに讀んで、啓發された所が多かつたのである。君が和歌に對してかく了解と同情とを有せられたのは、君は桂園派の歌人池袋清風氏に歌を問ひ、夙くより歌の道に入られたゆゑであつた。しかしこの素地を開拓するに、泰西の學問の邃い造詣を以てせられたのである。上記の尊重

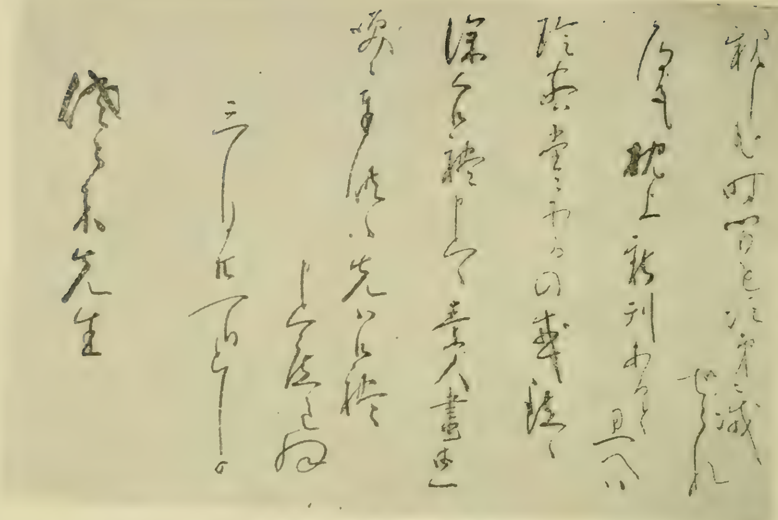
すべき諸論文のごとき、いづれもその結果である。

大西博士は單に歌を了解し、之を論ぜられたばかりでなく、また自ら歌を詠じて、一家の歌人たる境に達せられた。乃、桂園派の長所たる、自然にして調べととのへる風の中に、よく自家の學問的修養の間になし得られた、一種の思想的の深みや、新しみが加はつた點に於いて、明治の一般歌人に到底見られない新調が、君の歌には存した。蓋し歌人としても君は一家をなしたので、今日にして回顧して見るも、君は桂園派の歌風を或る意味に於いて新しい方面に發達させて、また和歌史上、同歌風の最後の光を放つたものと言へる。君が世を去られて以來、和歌界にはさまざまの新しい運動が生じ、歌壇の面目は當時に比して全く一新した。今日に於いて、君がをられたならば、君の嚴正なる歌論は、果して如何なる批評を今日の歌に加へられるであらうか。また君自らの歌風は、如何なる進歩發達を示したであらうか。これを見ることの出來ないのは、まことに遺憾である。

中島湘煙女史

○　（明治廿四年三月廿一日）

竹柏園集賜りて御厚意感じ入り候。病みては書籍より友なるはなし。以前拜顏得し程の元氣なく、書に親しむ時間も次第に減ぜられ候得ども、枕上新刊あると思へば、珍客堂にあるの感致し候。深く御禮申上候。素人書御一哂に奉供候。先は御禮申上度迄。拜。



（中島湘煙女史書簡）

三月廿一日　　　　とし子

佐々木先生

（素人畫とあるは、梅の畫に「湘南波浪靜　開臥夢常溫　春色幾來去　梅花不老門」といふ詩を題しておこせられたのである。）

淸楚なる佳人

明治三十六年の夏、大磯に暑を避けてをつた折、來訪された長壽吉君、川田順君と、雪子とで、海岸に遊んだ歸途、まはり道をして歸ると、湘烟女史の家の前に出た。かねて西升子刀自から、病を養うてをられるよしを聞いてゐたので、一度訪ひたく思つてゐたところとて、刺を通じたに、病中ゆゑ短い時間ならばお會ひするとのことであつた。

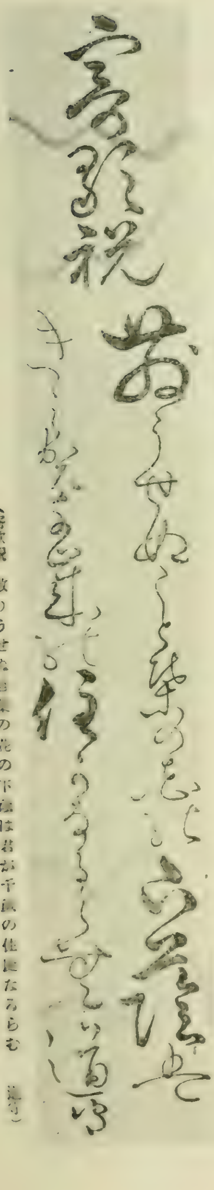
座敷に通ると、病氣の爲めでもあらうが、實に淸らかに美くしく痩せてをられた。ゆくりなき訪問を謝しつゝ、いろ／＼文藝談をした。夫人は漢詩の話、伊太利滯在中のものがたりを多くされた。病に障つてはと辭さうとすると、

なども引きとめて語られ、老いたる母刀自も出で來て、晶の手づくりの芋をもてなしなどされた。

自分のうけた感じは、かつて婦人にして政談演說をされた人とか、漢文體のこちごちしい小說を書かれたといふ人とは思はれぬ、極めて淸楚な東洋的婦人であつた。

後、伊藤梅子夫人が竹柏園の門に入られ、初めて滄浪閣で面談したをり、夫人が、自分は湘煙女史に習字を學んでをつたが、女史は、伊藤公は不在がちのことゆゑ、獨で樂しむことを心がけられるやうにといはれた。何がよいであらうかと問ふと、一つは庭園に花卉をつくること、一つは和歌を嗜むことである。和歌を嗜むのは、心の園に花を植ゑることである、といはれた。それで、重ねて、歌の師はと問うたところ、貴下の名をさして是非にと勸められたゆゑ入門した次第であるが、女史とはよほどお親しいのですかと問はれた。いや、お逢ひしたのはただ一回であるが、と答へたに、夫人は驚いてをられたことであつた。

橘道守君



（寄家祝　散りうせぬ言葉の花の下陰は君が千歳の住處なるらむ　道守）

守部遺著出版の功

橘道守ぬしは桐生の人吉田安平の子で、入つて橘家を嗣いだのであるが、守部冬照二代の後を受けて、歌もたくみに、筆跡も守部に似てをつた。しかして、道守ぬしの功は、短歌撰格、長歌撰格をはじめ、守部の遺著を出版されたことで、學界を益すること尠少でなかつた。

はじめ本所松倉町に、後、小泉町に住まれた。自分は、橘家の歌會には、父に代つて發會納會に出席したことであつたが、席上には、先代から縁故のある松浦家や、紀州家の息女などが來てをられた。會がすむと謡曲がはじまり、濤子夫人のうたれる鼓に、門下なる眞野文二博士と連吟をされたりなど、江戸時代末期の歌會を思はしめる、なごやかな氣分があふれてゐた。

養母とせ子刀自も、守部風の文字に歌にすぐれてをつた。チャンバレン先生は、とせ子刀自を訪うて、稜威道別、稜威言別などの刊行以前の稿本を見ることを得て益せられたことが多かつたとのこと、また歌會にも折々出られたといふ。自分の印行した五百重波に掲げたチャンバレン先生の毛筆の短册は、橘家から贈られたのである。

正岡子規君

○（明治三十二年八月廿五日、上根岸）

拜啓。殘暑はげしく候處、益御清健奉恭賀候。投田安宗武卿の天降言の原書又は其外同様之作歌を載せたる書籍一覽致度、友人ども問合せ候に所持せざる由申候。若し御所持のもの只今御不用にも候はゞ、數日拜借致度不堪懇望候。右御願迄如此御座候。不悉。

八月廿五日　　　　常　規

信　綱　樣

○（同年九月十三日）

拜啓。先日中は御旅行の由、御吟詠定めて多からんと奉存候。前日宗武卿の天降言拜見致度、便宜上候處御出立後にて其意を得ず殘念に存候。若し右書物御手許に有之候はゞ拜借仕度、右御願迄如此候。不悉。

九月十三日　　　　病　中　常　規

佐々木詞兄

○（同年十二月廿二日）

拜啓。歲暮御多忙と存じ候。拜借の天降言、遲延致候。只今御返却に及び候、難有御禮申上候。　以上。

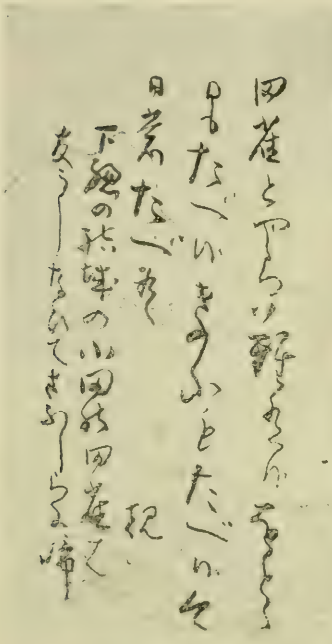
十二月廿二日　　　　常　規

信　綱　樣

子規と天降言

田安宗武は好學將軍吉宗の子で、荷田在滿や賀茂眞淵を聘したこと、聲律の學に詳しくて種々の著述のあること等は、早くから世に知られてゐたが、その家集天降言が續日本歌學全書によつて紹介されるまでは、歌人としては殆ど知られてゐなかつた。

正岡君は續日本歌學全書を見て、その原本を見るべく友人の間に問うたが、誰も知らぬといふ。それはその筈で、近年海量の寫本（三河磐瀨文庫所藏）が發見されたが、當時は竹柏園藏本が唯一の傳本であつたのである。（水戸彰考館本は、竹柏園本の寫本であつたと思ふ。）



（子規の筆蹟）

それで、自分の許に借覽を申越されたのが上に掲げた書簡で、第一のは自分が旅行不在中に寄せられたもの、第二のは歸京後再度の依賴、第三のはその返却の際のである。

返却の時、根岸のこのみ庵の山椒を入れた風流な壺をそへて使に持たせておこされたやうに記憶する。

子規と曙覽

子規君逝いて二十七年。この語は、深い感慨と追憶とを予の胸にもたらす。

君の遺された業績に就いては、しるされる人が多からう。予はここにおもひ出の二三を述べる。

子規君との交はりは、坂井辨君をとほしてであつた。坂井君は當時神田雉子町にあつた日本新聞の社員であり、予はほど近い小川町に住んでをつたので、しばしば訪問をうけた。ある時坂井君は、子規君が和歌の方面にも力をいたしたいから、歌集をかしてほしいとの傳言をもたらされた。予は座右にあつた加納諸平の柿園詠草と、井上文雄の調鶴集と、源俊頼の散木弃歌集とをかしたやうに思ふ。やがてそれを返されたので、次に井手曙覽の志濃夫廼舍歌集をかした。曙覽は福井の歌人としては、生前藩主春嶽公の訪問をうけたほど有名であつたが、子規子の推賞によつて一層名高くなつたのであつた。それから間もなく百中十首の稿をおこされて、十首の選を囑されたことであつた。其の後根岸におとなうた。壁にかゝつた檜木笠が目に殘つてゐる。

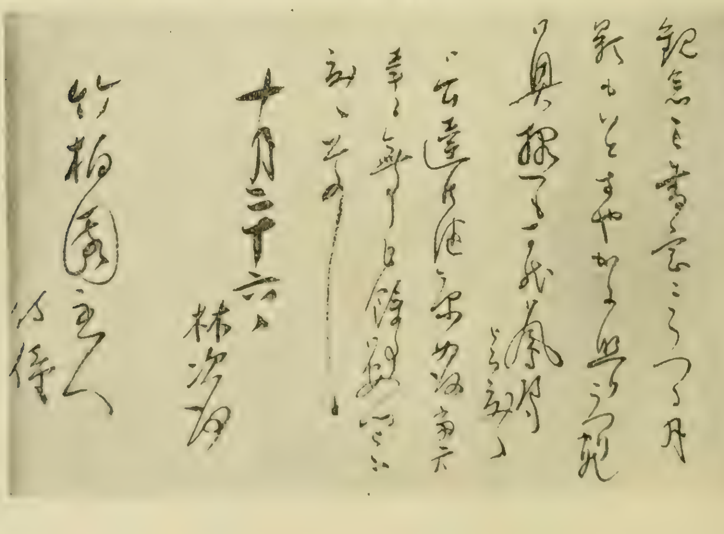
與謝野寛、大町桂月、鹽井雨江の諸君と共に新詩會を興して、不忍池畔の長酡亭や、上野公園の三宜亭で小集會を催した時は、子規君も車に乘つて來られた。落合直文君も來られて快談せられたことであつた。子規君なく、落合君なく、鹽井君、大町君も逝かれた。ただ人々の新體詩をあつめた「この花」一卷が、この新詩會を語つてをる。

君の短册はただ一葉藏してをる。これは、亡父の十年の追悼會を、上野の梅川樓で催した折ので「故佐々木先生十年祭に懷舊といふ題にて、世の中に歌學全書を廣めたる功にむくいむ五位のかゞふり、常規」とある。いふまでもなく、萬葉集十六の卷の歌によつて詠まれたのである。同じ日の黒田清綱翁、中村秋香、落合直文、久保猪之吉、



正岡子規君自畫自賛

尾上八郎、服部躬治の諸氏、小池道子刀自などの短册と共に、記念として藏してをることである。（昭和三年記）



（高山樗牛博士の書簡）

高山樗牛博士

○　（明治三十四年十月廿八日、相州鎌倉、長谷寺境内）

拜啓。秋もやう〳〵深うなりまさり候處、如何御暮被遊や。大磯に罷在候節は色々御厚意を給はり、其後御親切なる御文給はり候しが、例の懶怠の身にて御返事も差上げず打過候事、面伏の至に御坐候。何卒御仁免被下度候。今月初旬當地に罷越、例によつて何事もなく夢の如く朝夕を送居申候。流石に由緒ある土地とて、丘陵のながめもたゞならぬ心地して、心なき身にもくさ〴〵の哀を催申候。體の工合よろしき日には、處々舊跡古社寺を歴訪し、七百春秋の短かきを弔ひ居申候。御承知も候はむが、幕府編纂の新編相模風土記百廿餘卷のもの有之、右參考致候へば鎌倉志など別に見る必要も無之、名所の枝折にはこよなき書物に御坐候。右

書によりて山々谷々殘りなくあさらばやと樂しみ居候。日蓮上人の事蹟も、小生年來研究致度志望候ひしが、この度の卜居を幸ひ出來るだけ調べ見むと、先日より高祖遺文錄讀み初め、昨夜第十卷讀了申候。御承知の事とは存じ候へ共、上人の文、殊に消息文は一種異樣の文體にて、上人の性格そのまゝの氣魄光焰、眞に鎌倉文學の一偉觀かと被存候。尙佐渡配流前後の御書は實に天地の大文字なるよしなれば、先き／＼を樂しみ讀み居候。又此地の美術の殘品をも調べ見たき念願有之、是も追々着手致度き考に候。運慶安阿彌等の作は少々は正物有之候はむ。宅間法眼と稱する佛師の作に秀でたるもの甚だ多く候。右は諸書に見えざる名稱なれば、何人にやと後日の研究を待ち候。過日後藤齋宮と申す北條時代(早雲)よりの舊家の、代々佛師なるが今も扇ケ谷のほとりに住み居候を訪ね、造像のことなどくさ／＼語りあひ、流石老人の事ゆゑ、吾等の知らぬ事も大分知り居り申候。右談話中金澤稱名寺山門の仁王像が關東一の名作なること、小生の鑑識と宛然符合いたし、膝を打つて感嘆致し候。一兩日中には建長圓覺二寺の古書畫檢覽可致、當地にては古書の藏は右二寺と光明寺位のもの、八幡宮のは少々あてにならざるとのことに御坐候。秋晴の頃一日御散策如何に候や。當地は大磯より俗氣も少く心も落付き、觀念の書窓にうつる月影もいとさやかに照りうつり申候。御奥樣へも可然御鳳聲被下度候。

御公達御健康如何。當方幸に無事。乍餘事御安心被下度候。草々。

十月二十六日　　林　次　郎

竹柏園主人侍僮

こよひは晩秋の十五日、天もよく晴れ、夕べのながめ樂しみ暮し申候。

○（明治三十五年六月十七日、鎌倉）

六月十七日

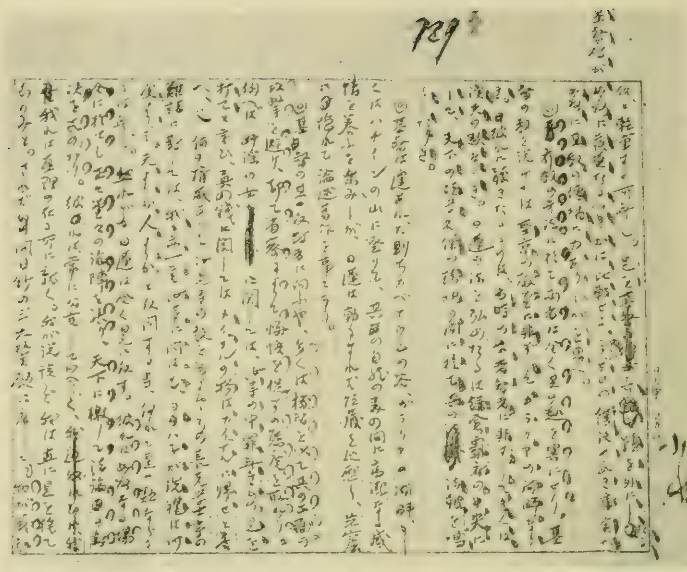
御書ならびに竹柏園歌文集御寄送被下難有奉謝候。此度は甲駿の名勝御探りの趣、うらやましく存じ候。兎角に、からだよわく相成候へば、旅行も心にまかせず、甲斐なき朝夕送り居り申候。

大塚君にも、此夏は度々御めもじ可叶也。樂居候。

鎌倉長谷　高山林次郎

生涯の一轉機の夜

幾年かの前のある夜、本町なる大橋氏を訪うたことがあつた。その時、座に眉目清秀の一紳士があつた。紹介されてその樗牛君であることを知つた。しかも兩氏の間の談話によつて、君が仙臺の高等學校教授を辭して、雜誌太陽の爲めに執筆しようとて、その話に來られたことを知つた



（樗牛博士の原稿「日蓮と基督」）

今から思へば、實に君が生涯の一轉機たる日であつたのである。兩氏の用談はやがて終へて、雜談にうつり、共に酒を酌んで閑語つた。あたかも獨歩氏や花袋氏の長詩の集なる「抒情詩」の刊行せられた時であつたので、その話などをしあつたことを記憶してゐる。

かかる因緣で知つてから、漸う深く交はるに至つたが、君が大磯に病を養はれた頃は、自分も同地に家を借りて住んで居たので、屢相往來した。しかして氏と自分とを親しくさせたには、氏の夫人里子ぬしが杉亨二博士の令孃で、お茶の水の生徒であつた頃、自分の門に學ばれ、故人となつた大塚楠緒子ぬし、また故大橋乙羽氏の未亡人時子ぬしと、三人うちつれて、常に來られたといふことも、少なからぬ因緣となつたのである。

中嶋歌子刀自

九日の安藤坂

明治二十年前後のことである。小石川の牛天神の方からあがらうとする安藤坂の右側に、毎月九日の午後には、當時黒鴨といはれたお抱への黒ぬりの人力車が、數臺竝んで、主人を待つてをつた。それは中嶋歌子さんの歌會の日であつたのである。

自分は、父からいはれて、他流試合といふもこと〳〵しいが、鈴木重嶺、小出粲、中嶋歌子、鶴久子、諸氏の歌

會には每月、橘道守、網野延平、大野定子、松の門三草子諸氏の會には、發會と納會とに出た。

當時女歌人としては、税所敦子刀自が宮中に仕へてをられ、民間では、上に述べた歌子、久子、定子、三草子が、最も盛名があつた。

久子さんの會には、三宅教子（三宅秀博士の女、後の三浦謹之助博士夫人）のごときとりのぞけもあつたが、大方は所謂下町の富豪の夫人が多かつた。然るに歌子さんの方には、貴婦人が多かつた。岩倉家、前田家、鍋嶋家の一門をはじめ、天野瀧子（爲之博士夫人）田邊龍子（三宅雪嶺博士夫人）田中みの子、伊東夏子等、所謂山の手の夫人令孃があつまつてをられた。たゞ一人、例外といふべきに、樋口一葉があつて、一葉は、競點や當座の歌合の清書などをして手傳つてをられた。

久子、歌子は相並んで當時の名手であつたが、歌子の門からは、花圃、一葉の二俊才が出たことは、萩園（歌子の號）の誇であつた。

一昨年（昭和七年）五月、星岡茶寮で歌子さんが世を去つて三十年の追悼會があつた。鍋島榮子刀自、三宅龍子夫人をはじめ、三十人あまりの門下がつどはれ、自分も、昔の安藤坂時代の會に出たといふ緣故で招かれたことであつたが、千葉胤明氏も自分と同じやうに招かれて、かうして、三十年後に弟子の人々から追悼會を開かれる歌子さんは、まことにしあはせな人であると、語り合つたことであつた。

尾崎紅葉君

○（某年某月二日）

又々一人御厄介願ひ上候。此狀持參のもの、小栗磯夫と申候。國文及文法等御教授にあづかり度、委細は本人より御聽取被下度、何分よろ敷願上候。先は用事迄。早々不盡。

二日　尾崎紅葉

佐々木大人

侍史

（文中、小栗磯夫とあるは、風葉子の事である。別に、十二日附で「此人等歌道執心に有之、稽古いたし度志願に候。手爾葉等一向心得無之、可然御教導願上度」云々の書狀がある。それは、この手紙の前月あたりのものであらう。）

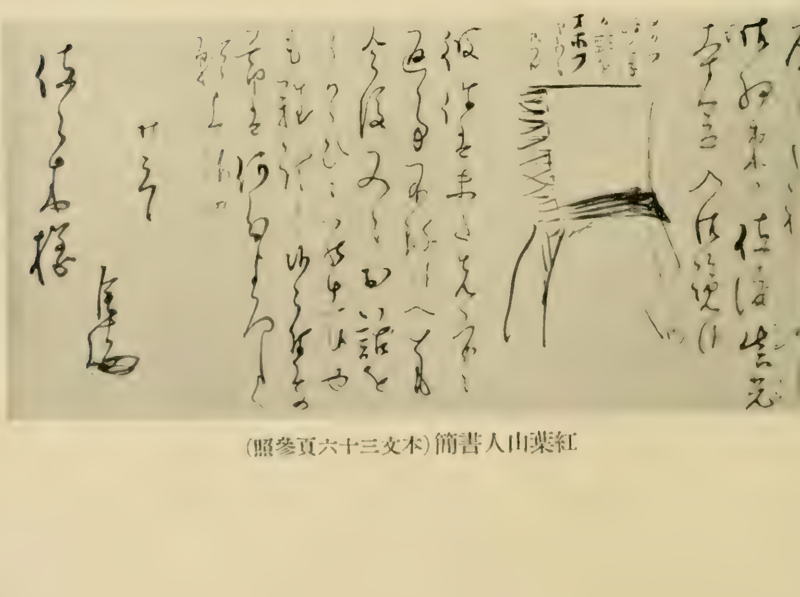
○（某年某月二十三日）

先夜は長座いたし、且御馳走に相成、千萬拜謝致候。猶又見事の人形、子ども大喜にて是又厚く御禮申上候。御約束の佐渡眞光寺笠入御覽候。（編者云、こゝに書あり、省略す。）

彼件は未だ先方に返事不致候へども、今後又々お話をうかがひに罷り出で候やも難計く候に付、その節は何分よろしく願上候也。



尾崎紅葉山人葉書（本文四十頁參照）



紅葉山人書簡（本文三十六頁參照）

廿三日　　　　　　　　　　　　　　　尾崎

佐々木様

（こは、紅葉山人が、佐渡より歸つて小宅を訪はれた翌日、佐渡土産の箋に添へて持たせられたのである。）

○　（明治三十四年五月十一日、修善寺温泉）

先便は醉中の妄筆御目を瀆し、何とも恐縮の至に御座候。早速御挨拶に預り更に〳〵恐縮いたし候。此の用箋即ちいろよしに有之候。御目とめられて御一覽。

先頃の演説速記こゝ迄持參に及び候へども、未だ着手不致候へども、期日忘却は不致候。小生は十五六日頃に一先歸宅致さばやと存居候。

小説起稿のつもりにて參り候へども、氣分すぐれ不申、唯雨に値ひに參り候やうの形にて、唯々因果のほどをくやみ居候。大弓場修善寺畔によろしきのが有之、昨日出掛申候が、東京の達人は伊豆の弓にては一向中り不申、をかしき事に御座候。

寫眞機携へながら、雨のふりづめの爲、二枚よりは試み不申、近處の舊蹟等も問訊の暇を得ず、ばか〳〵しき事に御座候。

十五日前に御出被下候を得ば、こんな喜ばしき事は無之候へども、私がこゝに居てあなたがはる〳〵御出の事では大概雨にきまつて居可申候。もしこの地にて拜眉の機を不得候はゞ、歸宅の上直に御訪問可申と存候。東京に歸り候へば、何やかやと日々日のまはるやうに忙しく、こゝに居候へば唯ぶらりとあて事もなく、世の中と申すものは

實にしかたのないものに御座候。
東北の名勝御遍歷の趣、御歌袋の富知るべしと御羨ましく御座候。令閨に御鳳聲願上候。

十一日　　　　　　雨窓無聊生

竹柏園大人
　　侍史

（伊豆修善寺よりおこされた書信である。先便は醉中の云々とあるは、同じ旅宿に宿つてをつた池田愛子さんと二人で、一行を山人、一行を愛子さんの書いたおもしろい書簡が來たのであつた。それに、いろよしといふ修善寺名産の紙のことが書いてあつたのである　演説筆記とあるは、同年四月十四日の第三回竹柏會大會席上の演説筆記　大弓場云々は、紅葉子も自分も、當時弓を習つてをつたのである。）

○　（明治三十四年五月二十九日、牛込）

然者是と同便にて演説速記校訂の原稿差出候間御受取被下度、席上のはあまり拙く候故大分つくりかへ申候、それでこの位ゆゑ當日のまづさは可恐きものと赧顏に不堪候。來年はいよ／＼演説はやめの事に御座候。先頃湯治中は再々御文被下客窓の樂之に如くもの無御座、尤も感謝いたし候。歸宅後早々參上、宿泊緣の始末など御物語可申存候處、速記出來不申てはちときまりわろく、今迄御無沙汰に相成申候。修善寺一週間ぐらゐの事にては痼疾固より微快をも覺えず、それに用事嵩み候て、唯ムシヤクシヤと致居候。
原稿出來候故、まづ御目に掛けんと先に差出し申候。來月に入り候はゞ拜顏を得度と存候。

令閨によろしく御鳳聲相願候。昌綱ぬしにも。

廿九日

紅葉子

竹柏園老兄

（前の書簡中にあつた演說速記を、訂正推敲して、同便を以て送られたのである。自ら清書され、更に補訂し、ここかしこに張紙がほどこされてゐて、文章に對する山人の苦心がうかゞはれる。）

次に、右の演說筆記を揭げることとする。

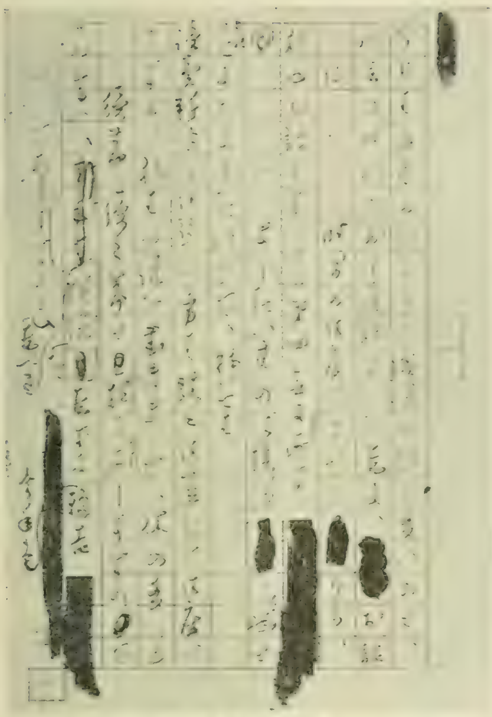
御託宣

今日は每會の例よりは演說の數が多いのと、開會の時刻が少し遲れました爲に、お話を致しまする時間が御座いませんから、私のお話は來年の第四會に延す事に致しました。就いては其の御挨拶に些と是に出ました次第で、讀賣新聞を御覽の方は既に御承知で御座いますが、私は小說を書きまして、休の多いのと、續篇、續々篇と頻に延しますので名高い。でありますから、爲べき演說を爲ずに今年は、豫告だけに致して置いて、來年に延すなどは、別に怪むには足らぬと考へます。都合に因りましては、來年半分お話をして再來年の分に又其の半分を殘して置くかも知れません。然やう致せば、每年此會に出席を致して、皆樣と樂を同うする事が出來る次第で、お聽きなさる方では、演說の續々篇や拾遺などは餘り御感服でもありますまいが、手前は其方が勝手なので御座います。

總て此の了局に出るのは、眞打と云ふことに成つて居ります。私も態して一番後から出た處を見ますると、大きに

貝打の興があります。尤も眞はシンでありますけれど、どうやら菓子のシンのやうな趣があるから、徒に長く此に立つて居て、誰にでも引かれては大變でありますから、手短に申上げる。

實に圓遊會でなければ、私共が近頃致しました口演(こうえん)と云ふのを一席お聽きに入れたいのでありましたが、佐々木先生の言はるゝには、可成く短くして可成く面白い話を願ふと、恁云ふ御注文、どうも二三十分間であつて面白いと云ふお話は些と有りません。今日腹案して參つた者も、小一時間は掛るで御座います。然し唯今申上げましたやうな次第で、お話は來年の事に致して、御挨拶旁今日の此會に成つた理由と云ふ、氣象臺の報告見たやうな事を申上げようと思ふ。



(御話實原稿)

抑も(そもそ)此の圓遊會、又は着物を着更へて他出する。花見に行くとか、人を訪ねるとか、遊山に出るとか、然云ふ場合に一番、いかい大切の物は何かと申しますと、閾を跨げば七人の敵(たゝき)が有ると云ふ世の中の事であるから、金錢が一番大切、金錢が無くては實に充(つま)らないの極、然し金錢ばかり不斷(ふだん)に有つても、眼鏡が善くなくては、是も充らぬ。遠方へ行くのなら車(くるま)も必要であります。多々要る物が有るけれど、其等

は人力を以つて皆得る事が出來るが、爰に一つ、甚だ恐多い申分ではありますが、一天萬乘の君と雖も自由に遊ばすことの成らぬ、而して最も大切な物がある。其は何かと云ふに、卽ち此の天氣都合であります、然やうぢやありませんか、天氣の好いと云ふ事は、何より大切で、今日のやうな園遊會、又は旅行をする、花見に行く、汐干に出掛ける、總て戸外に出ると云ふことになれば、何よりも先に立つのが快晴の天氣であります。其の天氣なる者は、金力を以つてしても、權威を以つてしても、干戈を以つてしても、意のまゝに爲ることは出來ぬ。然れば、外出する場合に臨んで、好天氣を得ると云ふ事は、實に其物が一番大切であるだけ、又人に取つて最大の幸福であらうと考へます。

先日佐々木先生がお出に成つて、十四日に竹柏會が有るから、席上の演説を賴むとのお話でありました。其の前日まで玉のやうな天氣が續いて居たにも管らず、佐々木先生が來られて其話が有つて、私は演説は下手でありますから、何方へも出んのでありますが、唯出席して一言でも二言でも可いからとの折角の思召であるから、さやうなら奈何にか致しませうと、そこで話が付くと同時に、怪しむべし、一天俄に搔曇つて、今にも烈風猛雨の襲ひ來らんとする有樣。

その時佐々木先生の言るゝには、私は頗る降性で、何か事を擧げると必ず雨に値ふ。此の竹柏會も第一回が雨中、第二回がどしや降で、それが霽れて辛うじて庭に出られた始末、今の今迄天氣であつたのが、會のお話をした丈で恁う俄に曇るやうでは、十四日の前途も知るべきのみと、酷く落膽されたのであります。

私も同じく落膽、何爲なれば此人亦古今無類の降性、それは實に太甚しいもので、着物でも着更へて些と出るとか、少し遠走でも爲る日には、必ず降られる、旅を爲れば毎も宿屋に降籠められる、銃獵に出れば山の中で降られる、

寫眞機械を擔いで出れば往復に降られる、始末に可けないと云ふのは、此事です。

所で佐々木先生の言はれるには、是は耐りませんよ、會主の私が尋常ならぬ降性、來賓の貴方が又劇しい降性、園遊會を爲るのだか、雨乞の會を爲るのだか解らない、必ず降りませうから、私も十分其の覺悟を致す、迚も戸外の業は取られぬから、室内でおもしろく遊ぶ御工夫が願ひたいと、先づお別を致したのであります

で、私も非常に今日の天氣を心配致しましたが、又飜つて考へて見ますると、一道の望の光は忽ち胸中に閃いた、佐々木先生が降性、私が降性、是は陰と陰とが折合つたので、箇樣に陰が極つては、陽が生ずるより外に道はない。陰極るとは何ぞや。二人の降性が逢着つたので。陽生ずるとは何ぞや。雨が變じて晴と成る象。當日は今迄に無い天氣に値ふに違無し、と私に卜して居りました。果せる哉今日の此の天氣、ぼんやりとして居るのは、時節柄花曇であります。歌人の會に花曇などは格別の趣が有るでは御座いませんか。實に天の第三竹柏會に幸する良に渥しと申上げたいが、此に些と言分が有るので、皆樣は之を天の賜物とばかり思召すと、大きに御了簡が違ふので御座います。抑も此の賜物たる、一半は天の下す所であるが、他の一半は不肖ながら私の御土産で御座います。若し佐々木先生が本日私を來賓としてお招が無かつたならば甚麼ものでせう乎。乾度降つたに相違無い。私なる者が在つた爲に陰極るを得たので、陰極るを得たが爲に陽が生じたのでせう。陽が生じたが爲に這麼上天氣に成つたと申して苦しくない。

私が出席を致した爲に今日の園遊會が最も大切の物を得たとしましたら、自慢ではありませんが、私は第三竹柏會の守神と申しても宜しいので御座います。

神樣は演說などを爲るものではありません。其の告る所を、御託宣と申します。略しては御託と申します。私のが

お話でなくて、やゝ御託を吐いて居る狀の有るのは、今日は私は神樣なのでありますから已むを得ません。扨此の上天氣をお土産に致しました私の心は、天晴の名演說を致して、皆樣の大に御喝采を博した其の滿足の十倍の滿足を抱くのであります。又謂ふに、私の演說を聞かさるゝの禍を免れて、此麗しい天氣を得られた皆樣の御運めでたさは實に千萬無量なる者と、玆に謹んで竹柏會の萬歳を祝しまする。

○　（某年某月三十一日）

あゝふつたる雪哉。一寸御見舞申上候。
　卅一日

（これだけの文である。双鶴の繪はがきに書かれてゐて、「紅葉山人」の印が捺してある。氣の利いた、しかも情味のあるはがきである）

○　（明治三十四年八月三十日、牛込）

拜復。
秋風立ち候へども殘暑未退、御一同御揃ひ御淸適の趣大賀致候。然者大磯にて新世帶の御模樣先頃新井子より傳聞いたし、その外おもしろさを察し居申候。小生如きは此の五日より仆れ候て、今だに出行不叶、いやはや暑い盛を寢て居る苦しさ、近來未曾有の凶年に遭ひ申候。幸に逐日快方には向ひ居候へどもはかばかしからず、來月十日頃に外出出來可申と籠鳥の雲を戀ふやうに唯々其日を切望いたし居候。當分其地に御滯在の由、折を得て御訪問可致

かも知れず候。何にせよ御美しき御生活、御壽命萬々年迄たしかの事と御察し申候。有の病中、暑氣と俳句とに責められ、身を措く所も無之、此夏ほど哀をとゞめし年は無之、泣面に蜂に御坐候。又十月頃は小説を書かねばならず、それを思ふと慄然と致候。池田氏毎々見舞狀くれ深切に尋ねられ候。新井氏の事についても御聞き申度事も有之候へば、不日拜顏を得度とは存居候。朝夕は秋氣頗る相催し、詩思動くやうに覺え候。御歌ぶくろの豐かさ御察し申上候。昨夜より庭前始めて蟲聲を聞き申候。

　雲に海にさぞ歌あらむ秋の人

いかにや〳〵と御傳へ被下度候。

　卅日　　　　　　　　　　　　紅　葉

佐々木様

　御奥

病褥中の亂筆、偏に乞御免。

（文中、新井子とあるは、自分の紹介した竹柏會の同人新井洸君のことである。俳句云々の事は、七月十七日附の手紙に、「御存の募集俳句十五萬三千と註せらるゝ大數に候へば、本月一盃は遠出致し難く候」とある讀賣新聞の選句の事である。）

○　　（明治三十六年四月十日、牛込）

拜呈。然者每々御存問に預り御芳情感荷仕候。
來る十二日は例年の通り御盛會の御事と、新聞を見候時既に思ひ浮べ申候。此の四五日消化不良にて大難澁致し居候へども、少しにても氣分よろしく候へば是非參會可仕と相考へ申候。
近來は內にのみくすぶり居り候て、空しく神勞れ體倦み候のみにて、何の思出も無之候故、此際勇を鼓して竹柏會席上揮毫大安賣の店でも出し候はゞ却而氣が霽れ可申哉とも存候へば、其朝に相成候ての出來心にて、飄然と御邪魔に出掛候やも知れ不申候。
一昨日より牛込に參居り、明日午後に又芝へ參らんかと存候。
この病氣にて命のみじかきは覺悟の事に候へども、每日氣分のわろきには閉口致候。この生暖き日和にて頭痛致し、苦しき事に御座候。
先日相願候生輓の御歌、御手すきに相成次第是非々々賜はり度願上候。
依田先生より文章、野口氏より七律一首贈られ申候。二六紙上に近々見はれ可申候。草々不盡。

四月十日　　尾崎德

佐々木樣
座下

○（明治廿六年四月廿日、鐵子）

汐ぐもり苫屋に春を惜む日ぞ

海潮し春にわかれのきのふけふ

去る廿三日より參居り、明日歸宅仕候。

卅　日

シモフサ銚子　病

葉

○　（明治三十六年五月三十日、牛込）

拜答。

毎々御心に掛けさせられ御存問を蒙り感荷不淺奉拜謝候。昨日はすこし弱りの氣味にて打伏れ居候際の御入來にて何とも申樣無き失禮仕候。幸に元氣は餘り衰へ不申候やうに相覺候へども、飲食不十分の爲直にへたへたに相成候が如何にも殘念に御坐候。痛苦も一頃よりは大きく相成候へども、未だ凌ぎがたきまでに苦しうは無御坐候へども、食氣の一時よりおとろへ候は、正に此奴の爲業と被存候。この兩三日の時候に可恐き大敵にて、今朝も頭痛いたし筆取る力もよわよわと甚だくるしき事に御坐候。大橋氏の苦勸に因り明日よりスツポンスウプを吸ふ事に御坐候。此頃は牛乳玉子うどんなどにて露命を繫ぎ居申候事なれば、議論風生の勇なきは當然、おもふにこのスウプの力に因りて、學海老人の氣焰を倒すべきと相樂み申候。

昨日賴上候御歌、是非々々近々に拜見相願度と、先生に御傳言賴入候。餘は久々可申上、草々不盡。

五月　晦

佐々木令室

御許

尾崎德

○　(明治三十六年六月十九日、牛込)

スッポンスウプ一合。生玉子四。揃うどん少し。

右中食の後大もたれにもたれの圖

明日御西遊との御事新聞に見えたり。眞乎。

六月十九日

大きな菓子器

博文館から「やまとにしき」といふ、金港堂の「都の花」に對立した雜誌が出て、廣津柳浪君がその編輯主任であつた頃、自分が歌の選をたのまれたので、ある日谷中なる柳浪子の寓居を訪うたところ、座には談笑まさに闌で、尾崎紅葉山人をはじめ、川上眉山人、巖谷漣山人、石橋思案外史など、硯友社の同人がをつた。眉山と漣とは瀟洒たる貴公子の風があり、思案はがつしりした人であつた。紅葉は江戸つ子風で、しかも總帥の重みが備はつてゐた。その前から我楽多文庫を讀んでゐて、その文名に親しんでをつたので、喜んで共に快談したことであつた。

人々と共に歸路につき、語りながら歩いてくると、湯島天神下の通で、紅葉子は道具屋の店先に立ちどまつて、

表が黒く中の朱い六角か八角の大きな菓子器を買うた。自分が、何をいれるのですと問ふと、自分に落花生がすきだから、これに容れよう。今に自分のすきな落花生に、文章豆(？)といふ名がつけられて世に喧傳されるであらうなどと笑ひながら答へたことであつた。

後、親しく交はるやうになつてからは、牛込横寺町の住居を訪ひもし、小川町の宅に迎へたことも屢々であつた。自分の家は、當時小さい通を隔てて依田學海居士の住居と筋向うになつてをつたので、居士を中心として、知友諸氏を招いたことであつたが、さうした折、山人も屢來られた。

當時催した竹柏會大會にも出席され、ある時は上記の講演をされ、ある時は色紙にうつくしい筆を揮はれたりなどされた。

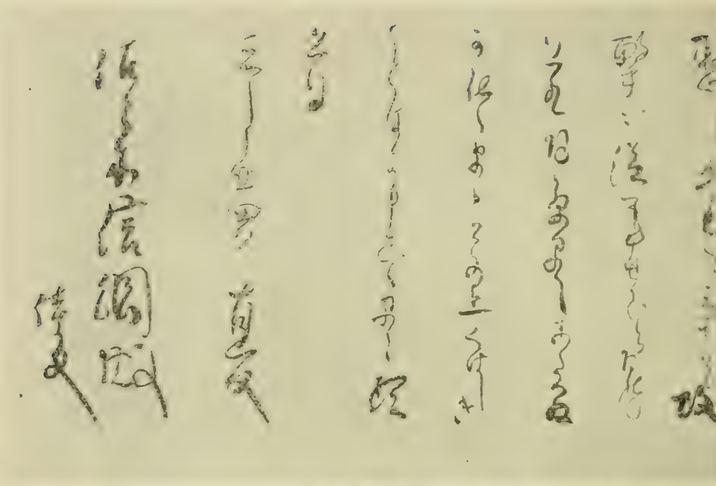
思出は多いが、紅葉子の文藻のうつくしさに、あまり多くの書簡を上に掲げた。これらの書簡が既に物語つてをるゆゑ、省略する。

落合直文君

○　（明治某年三月四日、仙臺）

拜啓。愈御安泰の趾この道のため賀上候。扨過日御書面被下候に付御返事つかまつらむと存せしに、老母病氣の報に

落合直文君



（落合直文君書簡）

接し俄に歸省仕候。しかし案ぜしほどにも無之候に付、この廿六日には歸京の心得なり。

時に心の花のわれ〳〵に對する惡口雜言には、毎度おどろきいり候。余は可成我慢して諸君と提携致し和歌の革進に從事せむとおもひしかど、近來の惡口雜言にはしのばむとするもしのぶこと能はず、頑迷なる强敵猶四方に猖獗をきはめをる今日、われわれ革進派中にて仲間われするは好ましからねど、今はいかにせむ。歸京の上猶一應諸君に御相談をとげ、愈決心の上（新聞に雜誌に）整々堂々辯難攻擊に從事せむと存居候。いづれ歸京早々御たづね可仕候まゝ、その上くはしきことは可申述候　早々頓首

三月廿四日　　直　文

佐々木信綱殿

侍史

御返事のおそなはりたる理由を石榑君にもよろしく〳〵御とりなし被下度候。宿屋の禿筆にてしたゝめたれば亂筆なるかきざまはおゆるし願上候。

雨はげしき夜に

先輩知友の來書の類ひは、その折々に整理して保存をしておくのが禮でもあり、また望ましいことでもあるが、自分は性至つて疎懶で、おろそかにするともなく未整理のまゝに柳行李の中にしまつておいた。然るに昨年の夏、その置き場所がわるかつた爲め、柳行李數箇が盗難にかゝつた。めづらしく箱根仙石原に暑を避けてをつたので、歸京の後そのことを聞き、驚いて買ひ求めた書肆を訪ふと、すでに仲間の市に出したとの事で、數箇所にちりぢりにわかれてしまつた。それで、その數箇所にいつて、出來るだけ買ひもどしたことであつた。

これまで、現存の人に宛てた書簡が商品となつてゐるのを屢見うけて、それを歎かはしく思うてゐたのであつたが、自分宛の書簡が市に出ようとは思ひもかけぬことであつた。

そんなわけで、先頃から來書の整理をひまひまにしてをるが、落合君の書簡（前に掲げたもの）は、買ひもどしたものの中の一つである。

この書簡には深い思ひ出がある。當時の心の花に載せた、落合君の門下某氏に就いての今日の所謂ゴシツプめいた文章に對して、君が寄せられたものであつた。君に就いて書いたのではなく、君の門下に就いて書いた文であつた。固より自分の書いたものでも、石榑君の筆でもなく、投稿をさながら載せたのである。

由來心の花は、常に極めて自由な立場をとつてゐて、投稿の類をも出來るだけ掲げてをつたのであつた。

自分は、此の書簡をおくられたので、先輩に禮を失してはと、落合君の歸京せられたと聞いた夜、直ちに神田小川町から、駒込淺嘉町なる君の宅へ訪問した。それは春雨にはふさはしからぬ雨のはげしく降つてゐた夜と記憶す



（落合君の「明日は何處」の原稿）

る。然るに、その席には、先客として、落合君と古典科の同窓なる今井彥三郎君がをられたのであつた。

　自分は、まづ雑誌編輯の態度に就いて陳べ、個人に關することを掲げたことはよくないので、將來注意するやうに述べたところ、君とても强ひて爭を好まれたわけでなく、斯の道のため革新を計る心に於いてははじめより一致してをることではあり、それに今井君も傍からいろ／＼言はれたので、君の心も解け、互に好む棋局を圍んで、軒の玉水の音のなほ繁きをも忘れ、夜更けて辭したことであつた。

　この書簡は、落合君がいかに其の門下を愛されたかといふことを示すもので、明治和歌史のかたりぐさの一ともいふべきものである。（昭和九年、某誌に寄稿せるもの）

（圖版は明治廿年日本新聞に寄稿せられた落合君の原稿）

落合直文集を讀みつつ

明治時代の國文學の先覺者たる落合君、先輩として尊敬

した落合君が逝かれて、早くも廿五年になつた。君の記念として落合直文集が刊行せられ、歌に詩に文に、君の創作が網羅せられたことは、眞に喜びに堪へぬ。

君が明治の文運の興隆に與かつて大いなる力あり、その清新の作風が一世を風靡したことは、世人の周く知るところ、また新刊の集の後序に詳かであるから、ここには君に就いての自分の思ひ出を述べたいと思ふ。

明治三十六年の秋、君は病を養ふべく高田病院に入られたが、自分は南清に遊ばうとして、歸國の上の物語を約しつつ途に上つた。洞庭を横ぎり長沙湘潭を訪うて歸さ、南京に立寄つて、三江學堂にその教頭なる菊池謙二郎君を訪うた折、落合君もとんだ事であつたといはれるのを聞いて、初めて君の逝去を知つた。湖南の地に入つてより約一月の間は、日本の新聞を見なかつたので、遠く異郷にしてこの悲報を聞いた自分の心は、殆ど堪へ難かつた。とぼ〳〵と歩む驢馬に乗つて、曇つた冬の夕べを愁に沈みつつ客舍に歸つたことであつた。

自分が落合君の名を聞いたのは、夙くからであつた。亡父が古典科の作歌の添削を受け持つてをつたので、家に歸つて來ては、常に君の作の勝れてをることをいつたのであつた。その後君の舊宅の近くなる飯田町に、同窓の友井上甲子次郎君を訪うた時、座に未見の人があつたが、それが落合君であつた。明治廿二三年の事で、三上氏（參次博士）が法律文の文法上の誤謬多きことを非難せられた論文が、日本文學の誌上に出た頃であつたから、その論に就いて、議論風發といふべく、盛んに意見を述べられたことを記憶してをる。

君の淺香社の歌會にも、案内を受けて數回出席した。上野の三宜亭で會のあつたをり、與謝野寛君が朝鮮から歸られた時であつて、はじめて同君に紹介せられた。金子薫園君、尾上柴舟君も久保猪之吉君も同席であつたかとおもふ。さて共に或は連歌をし、或は歌を詠みあつて、傍にあつた數本の卷紙をみな墨にそめたことであつた。

高崎御歌所長が景樹の追悼會を星が岡の茶寮で催された時、落合君、井上君（通泰博士）と自分とが並んで坐つてをつた。向う側には三宅花圃、樋口一葉、伊東夏子の三人が在つた。兼題の披講の濟んだ頃、自分らは、向う側をながめつつ贈答の歌を詠みあつた。それ〴〵紙に書いたのを、達筆な落合君が短册に書き改められた。その贈答があまりに繁かつたので、花圃女史が前に來て、拜見したいといはれて困つたことであつた。この時落合君が代つて書かれた短册と、亡父の追悼會のをりの君の短册は、今も架藏してをる。

淺草なる松浦詮伯の蓬萊園の歌會に、宮中の披講式によつて披講をするからと案内をうけた。いづれも御歌所の人々で、民間歌人としては落合君と自分だけが並んでをつた。式が濟んで肥前名物の鯨料理の宴になつた時、伯は落合君の前に坐つてまづ話され、次に自分に或る事を問はれたので、感じたままを率直に答へたところ、落合君は側から、佐々木君はまだ若いから思ひ切つていひます、と笑つていはれた。此の時の自分の答がおもしろかつたと、後にも屢いはれたことであつた。

明治三十二年十一月、國風家懇親會が開催された。その席上での落合君の演說は、いはゆる舊派新派の歌人に對して、辯舌たくみに述べられた。自分も發起者の一人として演壇の傍にをつたが、實に巧妙な話ざまであつた。（その筆記は、心の花三巻一號に掲げてある。）

落合直文集は、明治國文界の先覺者としての君を、永く傳へるであらう。しかして明治書院が、君の爲に終始よく盡くして、この意義ある記念出版を成したことは、出版界の美談というてよいと思ふ。

齋藤緑雨君

○　（明治三十五年某月廿四日）

けふ、父のゝこし置候屏風をひらき候に、中に尊大人の御歌あり

影うつすはつ雁見れば紙屋河すき入れにけることゝあこそすれ

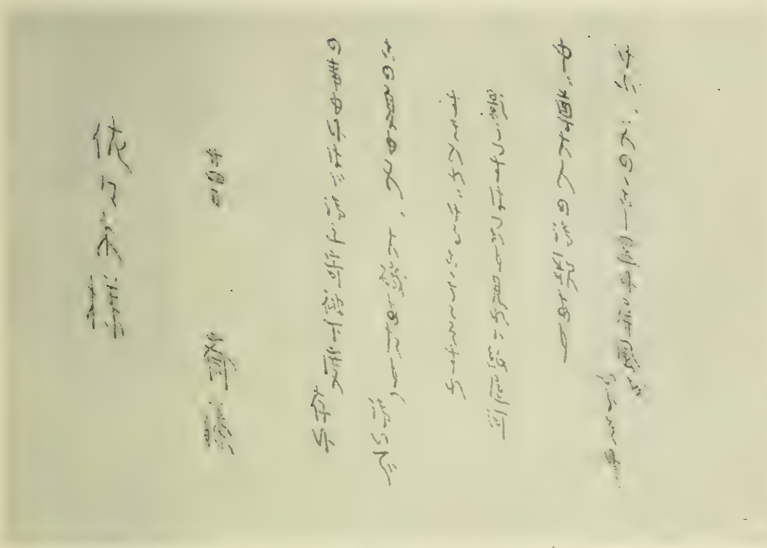
この夏も又大磯あたりへ御いでの事も候はゞ、御立寄被下度存候。

廿四日　　　　齋藤

佐々木様

（緑雨君は、明治三十三年より三十五年まで、病を小田原に養うたことがある。自分は、明治三十二年と四年とに大磯にをつたことがあるので、この書狀は三十五年の春のものである。亡父と緑雨君の父とは次に記すごとき交があつたので、父の歌が殘つてをつたものであらう。）

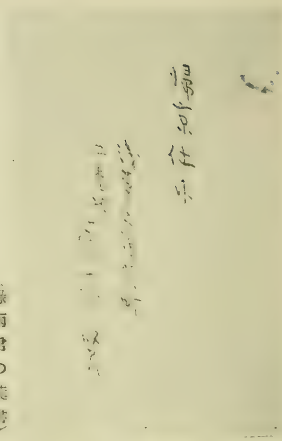
（齋藤緑雨の書簡）


けふ、父のゝこし置候屏風をひらき候に、中に尊大人の御歌あり
影うつすはつ雁見れば紙屋河すき入れにけることゝあこそすれ
この夏も又大磯あたりへ御いでの事も候はゞ、御立寄被下度存候
廿四日　齋藤
佐々木様

明治の上田秋成

緑雨の號は、齋藤君が本所緑町なる藤堂家（伊勢國津の舊藩主）の長屋に住まつてゐたので、それに因んで名づけたものであるといふ。正直正太夫の號も、同じく伊勢の御師の何大夫をもぢつたのである。

藤堂高猷君が津の藩侯であつた頃、亡父が召されて國學を講じてゐたので、上京後、本所の藤堂家に自分も厳父に伴はれて行き、匕醫をしてをられた緑雨の父君の許に立ち寄つたことなどがあり、その頃明治大學に通つてゐた齋藤君が、小川町の自分の家に傘を借りに來たこともあつたりした。



（緑雨君の葉書）

ある晩、緑雨君と、小川町一番地なる明治書院の編輯所にをられた與謝野寛君とが、同道して來られて、おそくまで語つたことがあつた。その當時讀賣新聞に載つた緑雨君の新體詩の見本、與謝野調とか、佐々木調とかいふ諷刺の詩に就いて、いろ〳〵話したやうにおもふ。

鷗外博士の家なる雲中語の會では屢會つた。何時も其處では筆をとらず、骨を刺すやうな皮肉な言葉を吐くだけで、たまたま筆をとる時は、うつむいて、肩下りの字を書いてをられた。其の風丰、上田秋成とはかういふ人ではなかつたらうかと、思ひつつながめてをつたことであつた。

イーストレーキ先生

獵虎のチヨツキ

イーストレーキ先生には、國民英學會で教を受けた。それより前、東京英語學校の夜學に通つてゐたのであるが、先生の教をうけてから、進歩が早かつたやうに思ふ。それは、富士山の高さとか、刀根川の長さとかを、ある事がらに結びつけて話されたり、教へ方が實にたくみであつた。しかしあまりに日本語が上手であつたので、少し答がおそいと、すぐ日本語で話されてしまふ。生徒等は、あまりにわかりよすぎて、と語りあつてゐたところ、母君なるマダムイーストレーキが、渡日して教へられた。此度は又、わからな過ぎて、と語り合つたことであつた。

數年の後、米國の雜誌へ、日本の歌及び歌の會に就いての通信を送りたいからとて、わが家の歌會に來られた。當時の會は、當座題は、通題もしくは探題で、人々が案じをへて、點者――小出翁とか小杉博士とかの先達が來てをられゝばその方に、然らざれば自分が加點したのを、それ〴〵に短册に書く。終ると、兼題の歌の披講がはじまるのである。(一月は懷紙、例月は短册、十二月は竪詠草にかく習はしであつた。)先生は披講をきかれた後、自分も一篇の詩をよむからとて、上に掲げた詩を朗讀して下さつたことであつた。

寒い日の教場で、暖かさうな獵虎(ラツコ)のチヨツキを着て、にこやかに教へてをられた面影が忘れがたい。

Theme:- "A Winter Moon".
(Dedicated to Mr. Sasaki.)

With borrowed sheen the wintry moon
Sails through the chill blue sky;
The light it gives must fade full soon,--
It waxes but to die.

So in this life, at last old age
Must yield the throne to youth,—
He lives alone in mem'ry's page,
His son now shines, in sooth!

The wintry moon -- the cold, pale sky -
What then was left him but to die?

Dec. 12th /95.

F. W. Eastlake, Ph. Dr.

イーストレーキ先生詩稿

野口寧齋君

○（明治三十六年十月二日、麹町區下六番町）

又々嵐に相なり申候。明後日だけなりとも御天氣にしてあげ度きものに候。先夜は思もよらぬ御賜物にて痛み入候得共、折角の御志といひ兎に角拜受はいたし置候。和翁の書は直ぐに床へかけ日々翫賞御禮申上候。思ひ草御題詞御申聞けも有之、旁御送別を兼て一首と存じ候處、外のものと違ひ輕忽に筆を下し兼、屈托致し居しも際限無之に付、只今別紙の如きもの相纏め候間、取敢ず御覽に入れ候。御隣の事故、一應學海翁之加朱を經て御返し被下度、其上にて定稿改て差出し可申候。先は用事而已。早々不具。

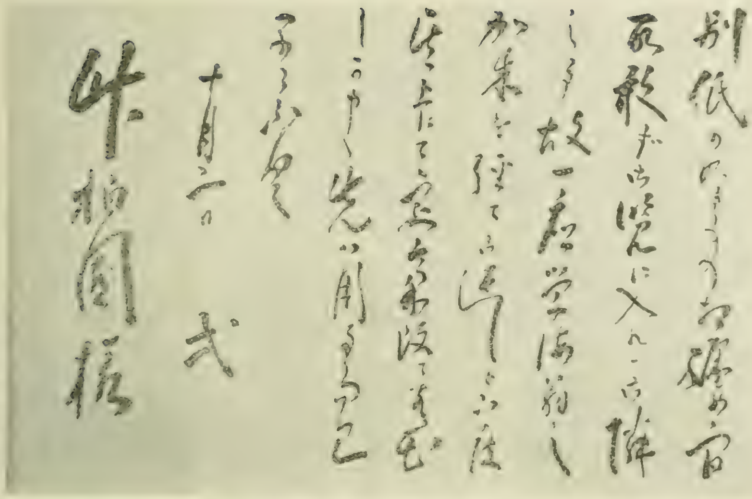
十月二日　　式

竹柏園様

（自分が支那に遊ばうとするに先だつて出版した「思草」の題詞に就いての書状である。）

漢詩と和歌と

寧齋野口式君とは、十數年前、星が岡の會で遇つたのが相識つた初めで、特に音信をかはすやうになつたのは、



(野口寧齋君書簡)

上夢香、松田學鷗の兩氏が、詩を嗜まるゝ餘暇、歌の副詠に屢見えるので、漢詩が我が國に入つて以來、少數の歌人を除く外は、漢詩は漢詩、和歌は和歌と、どこまでも分離して居る、しかし或る點で漢詩と和歌とは一致すべきものと思うて居るといふ事を話したに、野口君が此の事を傳へ聞いて、自分も和歌を試みたいからと、松田氏を介して詠草を送られたのであつた。

その後雜誌百花園の雙魚小觀を見ると、野口君が哲學館に學ばれた事が見えた。自分も古典科に通つてをつた頃、哲學館が大學のそばの麟祥院(からたち寺)に設けられた初めに、一年ばかり通學したが、都合で中途で廢した事であつたといふことを言ひ送つたに、それは不思議であつた、僕も同館の開校當時に入學したのであつたが、其の時は互にそれとも知らずに過ぎたといふやうな詩をおこされた。

自分はかねて、我が國の文學に深い關係のある南清の風物を探りたいと志して居た。たま／＼癸卯の秋、白岩子雲君に誘はれて赴くことになつた。其の前に、歌集思草を編んで、南清の文人にも頒ちたく、學海翁と鷗外博士の序を請ひ、君にその題

詞を賴んだところ、やがて次の詩を贈られた。

佐佐木君歌集題詩

讀萬卷書行萬里養胸中氣而已矣巍其如山浩如水雅音洋洋合宮徵感動神鬼參經史君歌豈齊彫蟲技三十一言千萬旨惟情一字爲本始

山高月小過黃州黃鶴縹渺餘飛樓三閭祠荒天易秋淼淼洞庭湖上舟八九雲夢呑不休歸時一卷驚同儕書到有聲淸吏逾臥我讀之猶作遊

さて南淸に遊んで、洞庭湖の月夜に棹さした折、揚州に遊んだ時など、同行の白岩君と、君が健やかであるならばと屢語り合うたことであつた。西湖に行つて、孤山なる林和靖が放鶴亭の蹟を訪ひ、その墓に詣でたのは一月の初めで、折から墳を繞つて居る梅のうち、一枝の蕾がやゝ大きくなつて居つた。その一枝を折つて、舟中で飲んだ麥酒の壜に挿し、歸るさの輿の中、汽船汽車の中をも、蕾をおとさぬやうに心して、辛うじて東京に持ち歸つた時、數個の蕾が全く笑うて居た。とりあへず歌を添へて、君に贈つたところ、いたく喜んで左の詩を贈られた。

竹柏園主人前遊西湖折林處士墓前梅花携歸見贈其花稍大香最淸昨夕對翫使人神往孤山烟月之間狂喜之餘賦之爲謝

故人江南遊汗漫雪後園林參鼻觀鶴啼不盡明月孤山上山下蒼老幹一枝折取春尙幾千里齋回芳正開對花賦詩如相語橫斜影疎西湖睬

棵花四面高士墳湖光半化梢上雲十二萬年暗香動不齊骨常詩亦董疎氣此夜霏香霧燈壁圖花作轉素水邊籬落橫一枝幻出放鶴亭前路

君の和歌は、豪壯の作、沈痛の詠に富んで居た。若し天が君に齡を假したならば、我が歌壇の爲めにも、また異

彩を放つた事であらうに、君をして世を早うせしめたのは、我が道の爲めにも實に悼むべき限りである。茲に君の作數首を掲げて、君をしのぶよすがとしよう。

山淡く村幽かなる夕容に小鳥むれ行く畫に似たる秋（秋鳥）

みつぎものささげまつりてわれ醉はむ秋もみのれり酒もかもせり（田家幽思）

笠深く蓑も重げに網代守る翁ものいはず雨さむくふる（網代）

大御靈花をめでます春の夜に侍るが如きみさゝぎの月（芳山懷古）

鱸つる翁よ行けよ秋の海夕けに待たむ三尺の魚（秋、海邊）

神嘗の祭かしこし神ながら瑞穗ささげて神を祭らす（神嘗祭）

秋ふけて書よむ窓のともし火も潤ふ如き雨のおとかな（夜秋雨）

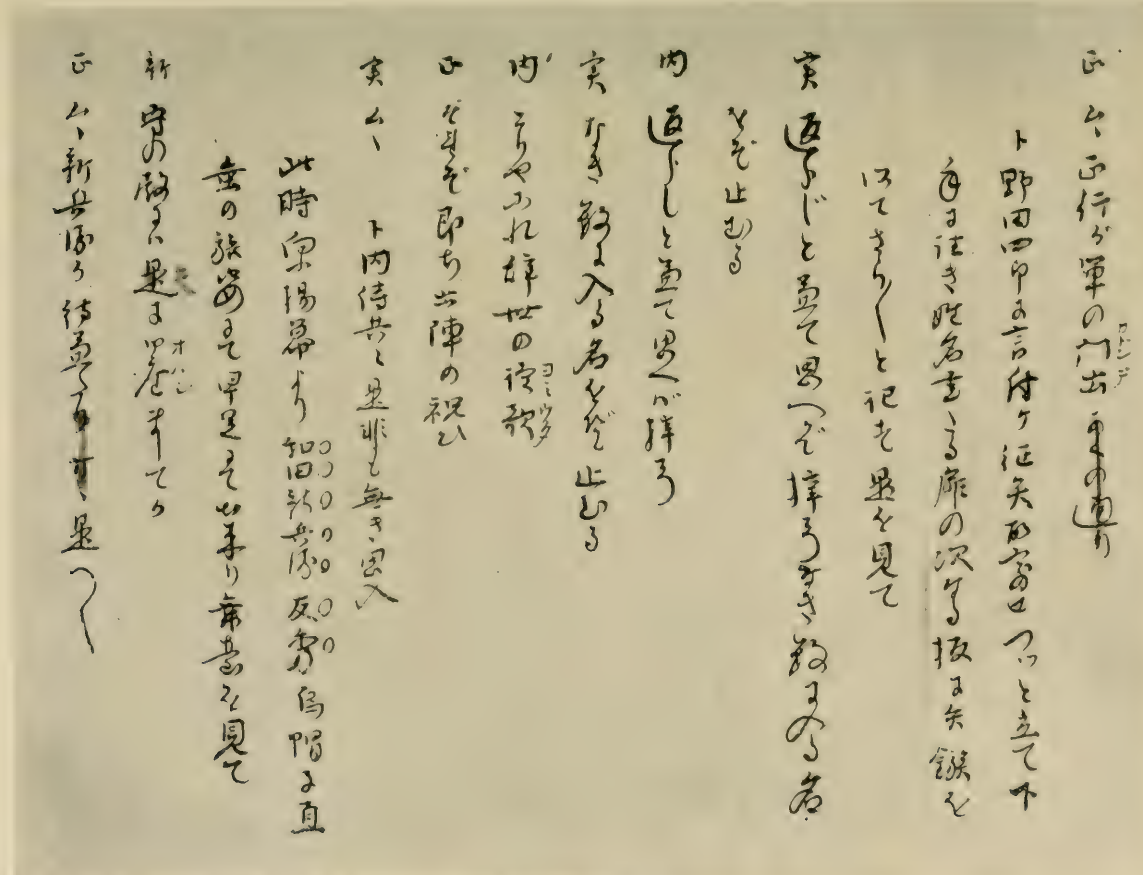
いざや秋すこやかにあれ朝顏の露の命といふなかれ君（尾崎紅葉の朝顏の句をよみて）

あら海の勇魚もやがてのぼるべく綠みなぎる秋の江の水（秋水）

梅映る波にも春の搖ぐらむ褒の湖外のみづうみ（杭州の伊藤君に寄す）

今十里天の龍駒たちうちて躍りて越えむ花の白雲（馬上觀花）

老松の露やこるらむあさりこし君がなさけの露やこるらむ（竹柏園主沼津に遊びて自ら得られし松露を贈られけるに）


正 ム、正行が軍の門出(カドンデ)まかり通り
ト野田四郎に言付ケ征矢取寄せつゝと立て下
自ら往き此名書ける扉の次第抜く矢鏃を
以てさら／＼と記せ墨を見て
実 返らじと兼て思へど梓弓なき数に入る名
をぞ止むる
内 返らじと兼て思へど梓弓
実 なき数に入る名をぞ止むる
内 そりやこれ辞世の詠歌(ヨミウタ)
正 それぞ即ち出陣の祝ひ
実 ム、 ト内侍共と是非も無き思入
此時東揚幕より細川新兵衛立烏帽子直
垂の旅姿にて早足で出来り扉書を見て
新 守の御身是は何(オハシ)まして
正 ム、新兵衛か待兼て居た是へ／＼

福地櫻痴居士原稿

福地櫻痴居士

歌と調

明治三十三年の春、竹柏會第二回大會の講演をお頼みしに幹事の人と同行して居士を訪うた。初對面といふわけではなかつたが、實にくだけた、毎日逢つてゐる者に對するごとき應待ぶりであつた。話が幕末のことに及んだ時、居士が、勤王家の歌のみがとかくもてはやされて、幕府がたの歌は云々と言はれたので、自分は、井上文雄の歌などに就いて話したところ、彰義隊に、女ながら馬を乘りまはして歌を詠んだ女があつたがといはれたので、それは木崎花野のことでせうと記憶してゐた歌をいふと、喜んで、幕末に米國へ行つた村垣範正のことやら、一緒に外國に行つた高島烈の歌のことなどを話された。

しかして、當日日本橋倶樂部での講演をせられた速記は、心の花三卷七號に載つてをる。「歌と調」といふ題であつたが、その時の樣子が、今も目に見えるやうである。前の方が空いてをつて、うしろには立つてをる人がかなり多かつたので、居士は、

皆樣、まう少しこちらへ御進みなすつては如何です。

と言つて、人々が前に進む間しばらく默つて待つてをられ、さて徐ろに、

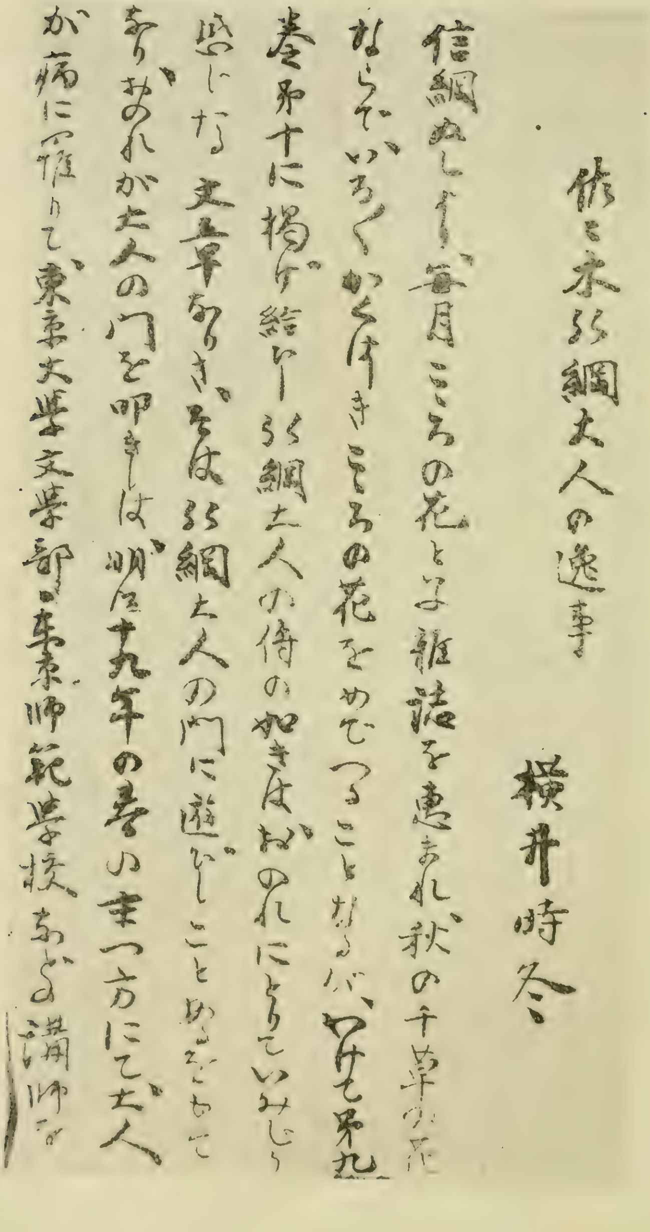
皆樣に態々近くまで御進みを願つて御聽かせ申します程に面白い話ではないのでございます。凡そ難儀なことは黒人（くろうと）の中に素人が手傳ひに來る（く）ので、餅搗の手傳に餅を搗くことを知つた者が行けば大きに宜しうございますが、

料理人が庖丁を持つて行つても何にもならぬ。其通りで、歌よみのお歴々の中に素人が出たところで何も申上げることがない。斯う云ふ所へ手傳に呼ばれるのは、參つた者が難儀、お呼びなすつた者が難儀といふやうなもので。けれども出ました以上には御斷りすることも出來ませぬから、何か考へたことを申上げませうと存じます。
といつた風に、實に巧みな話ぶりであつた。さて本題に入つて、

「うぐひす」といへば春鳴く鳥で大層好いもの、「梅が枝に啼く鶯」と言へば、大層麗かなやうだ。ところが、唄つてみると、此「うぐひす」と云ふ音が「う」と言つたぎりて「うぐひすの」と出ない。どんなにあなた方が美しい聲をお持ちなすつても「うぐひす」をかんで唄はうといふのは無理です「梅が枝に啼く鶯の」と云ふ中に「ア」の音が幾つあるかと云ふと、十二音の中に二音しかない。サア唄はうとなつて見ると甚だ陰氣なものである。
居士が俗曲の歌詞を作るに當つて研究された結果に成る調の說である。更に、平忠度の「さゞなみやしがの都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな」について、內容は陰氣であるが、三十一文字中「ア」の音を十八字持つてゐて、唄つて見ると大さう陽氣な調を持つた歌である。「ア」音の多いほど調べは好くなるといつて、

私などは俗歌を作ります時に、調のためには如何なる趣向も棄てる。と云ふのは音樂の必要から來る。
と音樂と歌との必然的關係を述べ、音樂なしに歌なし、歌なしに音樂なしとて、歌は短册に書いて目に賞するためのものでなく、音樂として歌ふところに眞の興趣がある、と述べられたのであつた。

横井時冬博士



佐々木弘綱大人の逸事

横井時冬

信綱ぬしより毎月こゝろの花と云雑誌を恵まれ秋の千草の花ならでいろくかをはきこゝろの花をめでつることとなるがやがて第九巻第十に掲げ給ひし弘綱大人が伝の如きはおのれにとりていみじう感じたる文章なりきそは弘綱大人の門に遊びしことかずかずありておのれが大人の門を叩きしは明治十九年の春の末つ方にて大人が病に罹りて東京大学文学部東京師範学校などの講師を

辭し給ひし翌年なりき。其の後二十二年の頃かと覺えしが、例の暑中休暇にて故郷にかへり、やがて上京せし折、大人を訪うて、奈良あたりより伊勢路を遊びしことなど語り申しゝに、歌はよまざりしかと問ひ給ひしかば、あとより郵便にて、かきて見せまゐらせし中に、

三河の國川合山中の老樹をきりとりたりときゝて

千世經べきみねの老木も杣人の斧にはもれぬうき世なりけり

といへるがありき。その折の大人の返書に、

久々御詠草、とり〴〵よろし。感吟仕候。扨過日三州岡崎伊東小文司と申す書肆、三川一件にて出府、川合山中の木を伐とるよしを聞て、小子も、

伐取し老木のみかは三輪川も豐川も皆水かれにけり

三輪川のその水上の細るとは知りつゝ人のあきじこりけむ

あきじころとは、萬葉にて商にころ事なり。そのこりに切をかねてよめるなり。御一笑可被下候。右縣令も有之候よし承候。

右伊東は木文と申、小子著述詠歌門在雜部を木版にいたしくれ候。

大人ことに當時奸商どもが、三河の國なる川合山中の樹木を伐りとりし爲、三輪川、豐川の水かれ、灌漑の便を失ひしことを嘆かせ給ふ折なりしかば、おのれがよみし川合山中云々の歌には、「此こと日本人といふ雜誌廿七號にて見たり。實にもかなしき事なり」、又、「いともすべなき世ぞかし」など評し給ひしが、おのれも詠みたりとて、月並兼題の摺物の裏に、一首を認めておくり給ひぬ。大人はかやうなる奸商がしわざをいたく憾みたまひ、かくはお

のれが歌より一層熱したまひてよみいで給ひしものか。この歌を認めたまひし消息文、今なほおのれが家の實底にあるをもて、大人が逸事の料に供しぬ。大人は歌のみにて、かゝる事にかゝづらはぬ方なりとのみ思ふ人もおほかべければ、殊更にかくはものしつ。

篤實な學者

横井時冬博士は、歌を亡父に學ばれた一人であるので、明治三十八年十一月の心の花に、上記の文章を寄せられたことである。
日本商業史、日本美術史等の著者で、本居翁の古事記傳の出版を助けた名古屋藩の家老横井千秋の一門の裔であつたので、鈴屋翁や千秋の逸事をよく知つてをられ、時々聞いたことであつた。篤實な學者とて、極めて篤實な話ぶりであつた。

松波遊山翁

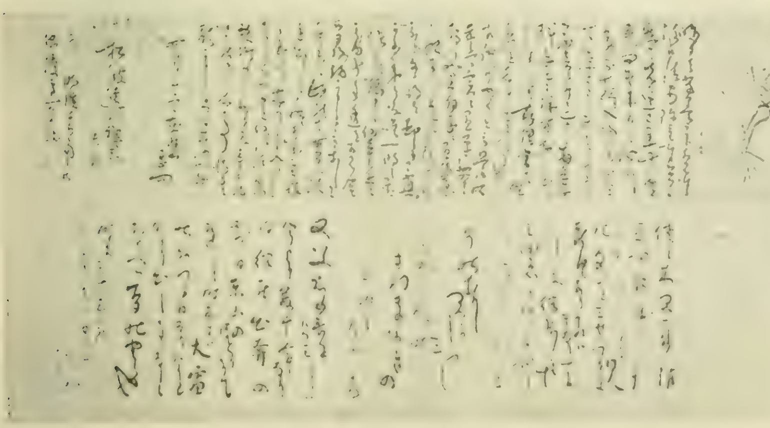
景樹の直門

明治三十九年九月十三日、明治の歌壇は、尊敬すべき老歌人松波遊山翁を失うた。遊山翁の名は、多く世に識られないであらうが、翁は實に歌人らしい歌人であつた。閑居吟詠を樂しび、自ら歌人たる本分を自覺し、よくその

本分に滿足して、敢て他に求むることがなかつた。その人に接するや、春風を胸にみたしむる思あらしめ、しかも凛として犯すべからざる氣慨があつた。

翁は、幼くして桂園景樹翁の敎を受けた。景樹の直門として生存した恐らくは最後の人であつたであらう。ゆゑに、その歌風たる、もとより桂園の風を傳へたのであるが、平淡にしてしかも放膽なところ、また別種の趣がある。特に、今日の所謂桂園派とは類を異にしてをる。翁が私淑したのは熊谷直好であつて、平生景樹を金に比し、直好を銀に比し、幸文知紀等は之を銅に比してをられた。その言の正否はともあれ、以て翁が景仰した所を見るべきである。翁の著書の刊行せられたもの、自分の知つてをる所では三種ある。その一なる花仙堂家集一卷は、明治十四年に公にされた第一の歌集である。その用語の大膽にして着想の奇抜なる、當時の歌壇を驚かした。又、かるかや集がある。桂園の遺文を輯錄したもの、吾人が景樹の日記の一端を伺ふを得たのは、實に翁がこの著の賜である。續花仙堂家集一卷は、わが續日本歌學全書に收めた。翁の第二の歌集である。

翁は餘技多く、いづれもその奥に達せられた。圍棊のごとき、三段の打



（僧月照の書狀と松浦詮伯書簡の一部）

手であつた。書は大師流を巧みにし、脫俗せる風、よくその爲人を現はしてをる。管絃の道また嗜まれた所であつた。

自分が翁と識つたのは、もとの名資之を遊山と改められた後、卽ちその晩年に屬する。先輩なる翁は、後輩の自分を友人として親しく交はられた。或は桂園翁の上に就いて聞いたところ多く、或は翁の人格によつて動かされたところがあり、わづかに年に數回相逢ふに留まり、その交や淡として水の如くであつたといへども、翁のごときは自分の爲めに、貴い得やすからぬ友であつた。

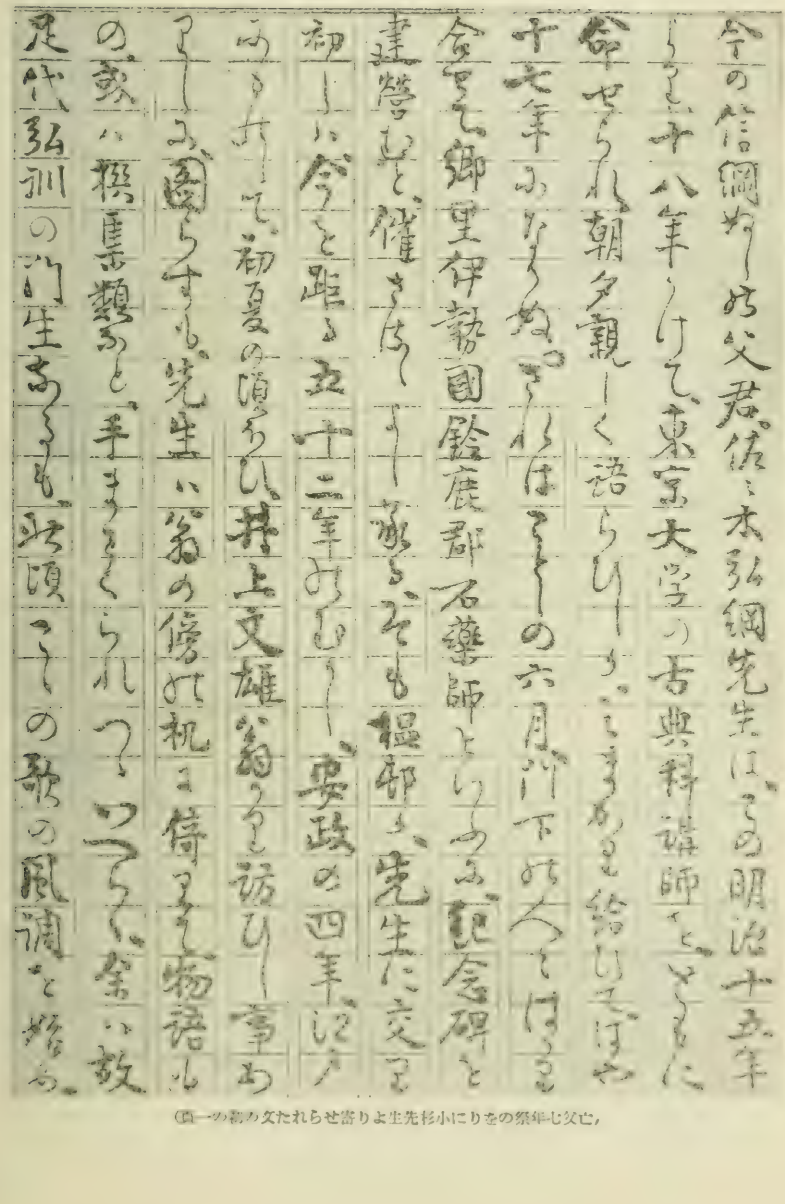
うらさびしい秋風の音づれと共に、翁の訃を聞いて悲嘆に堪へず、この一篇を綴つて、聊か翁の面目を世に傳へようとするのである。（心の花第十卷十號）

小杉榲邨先生

○（明治四十二年五月廿六日、牛込廿騎町）

五月廿六日　小杉榲邨

不在中十七日付の御書昨今歸宅拜見、尤不在の由は取あへず申上候由に候へども、御病氣との御事、一時御困却の所近々御はこびよろしく御座候よし、御同慶、何分御大切に御保養いのり上候。近來非常の御勉強、斯道の爲には至極、後進のみならず、わが徒のごとき空しく老境に入りし輩も大に御庇陰を蒙り居候次第、よく〳〵御注意肝達


今の信綱ぬしの父君佐々木弘綱先生はいにしへの明治十五年
よりし十八年にかけて東京大学の古典科講師とせられしに
命せられ朝夕親しく語らひしがいとまあるも給ひてはや
十七年のなかばなりぬべきにてやはてしの六月門下なる人々とはかりて
今も郷里伊勢国鈴鹿郡石薬師といふ所に記念碑を
建営むと催されてすなはちこれぞも榲邨先生に文字
初しは今を距る五十二年のむかし安政の四年にや
ありけして初夏の頃なりし井上文雄翁のもとを訪ひし事あ
りしが園らすも先生は翁の傍に机を据ゑて物語せ
の或は撰集類をも手まさくられつつ中にて案は敬
足代弘訓の門生なるも此頃にての歌の風調をも嫌ふ

亡父七年祭のをりに小杉先生より寄せられた文の初の一頁(四)

に御全快祈上候。この程不得止緊急私用事件にて奈良地方へ出張候ひしが、昨日歸宅致候。其内參上御伺可致候。さて茶室構造と申もの、御承知の如く其時代足利幕府東山將軍以下豐臣德川初期より段々建設に相成候。近來わが輩刊行させし茶道寶鑑と申もの（初篇三册、二篇に茶わん茶入香合等也）に數寄屋の圖式、京都始所々の圖取を示し、また右室内使用の物品の寸尺雛形、また石燈籠など、茶室附屬のもの、青山清吉（神田區みとしろ町二丁目一番）販賣致し居候。これより古き物ははなれ〴〵なり。又菓子にも新舊製造あり。これは未だ刊行させず候へども、年來小生かきあつめたるもの、圖入にて近々刊行さする見込ながら未果意候。取あへず此由御返事申上候。重々御注意御補養願候也。

佐々木先生

（茶室の構造に就いて御たづねしたをり、博士よりの返信である。前半は、過賞まことにおもはゆい心地がせらるるが、博士が、後進に對して激勵して下さつた盛意を感謝して茲に掲げたのである。）

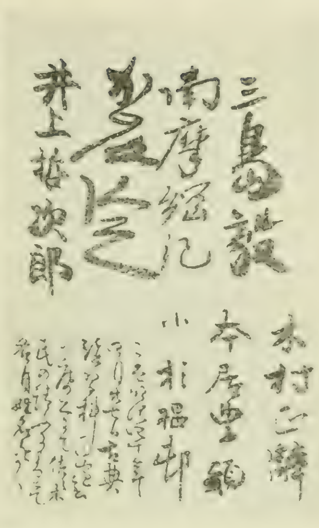
濱千鳥

小杉博士は、古典科時代の先生として、市が谷見附の傍に、目白に、牛込に屢お伺ひし、趣味ふかいお話や、ゆたかな藏書を見せていただき、萬葉緯の完本の善寫本を借用したり、歌論の書の最初のものたる類聚證を見るを得て、學界に紹介したりしたことであつた。

先生は筆蹟にすぐれ、かつ筆まめであられたので、自ら書寫された本が多く、中にも、濱千鳥と名づけて、故人の書簡を見るごとに寫しとめられた數册があつた。その中には、文學資料として貴いものがあつた。自分が古人の

書簡に注意するやうになつたのは、この濱千鳥に負ふところ少なからぬのである。先生はまた、學者歌人の筆蹟を多く蒐めてをられて、訪ふ毎に、四季各時に應じて掛け替へられてあつた。自分が古人の筆蹟を集めるやうになつたのは、先生及び萩野、和田(英松)兩博士の感化である。

なほ、先生の歿後、その藏書はここかしこに散りはしたが、それ〴〵所を得て、多くの學者を益してゐる。自分は遺族の方に請うて、先生遺愛の眞淵翁書の田安宗鍈日捷書の屏風を



得て愛藏してをる。それは小著「賀茂眞淵と本居宣長」の卷頭に寫眞版として掲げてある。

(この圖版は、小杉先生の添へ書のごとく、明治四十年春、加藤弘之先生を主賓に古典科の謝恩會を開いたをり、諸先生に署名を請うたものである。)

福羽美靜子

○

(某年六月廿七日)

一昨日御來臨給り多謝之至候。例の失禮のみ恥入候。杉下氏同伴にて一入相悅候。同氏は心がけよろしき人にて實にたのもしき君にて候。どうか又再選擧にて代議士として上京有之度候。實益實理に心深き代議士の揃ふ時とも相成候はゞ、國家此上なき欽び也。其の時を相待候。明治の教育に會ひ候人、追々上り候ことに相成候ははとおもひの外、膽力小なり。いかなる事歟。いづれもあまりに樂に教を受け候故、氣骨なき人となり候歟と歎息致候事なり。扨貴君よりは新版品々惠贈に預り多謝之至候。おもしろき事に候。貴君は業を引立候事と相成り候へは、此上申迄も無之も、爲國家文運之進捗の爲御盡力有之度候。いつかも申候如く、父翁弘綱君とはおのれ修業中より御交り深く、御骨折相察する事なり。おのれも藩の學校のみにては得足り不申、廿歳斗に都會へ出候へども、書籍ある家少く、近江八幡なる伴蒿蹊の家と西川吉輔とに有之本共見申度、行通ひ候湖上の船中にて弘綱翁に一見、互にかたりあひ、夫より東京となり候時迄、色々御交際致し、專ら文運の事申入候事なり。方今貴君の事、父翁嘸々御欽びと相察候。孝道の至なり。此上東京地之引立に限らず、田舍人迄引立候而眞實の文人を作り、氣骨も風韻も備り、且膽力あるを作り候樣盡力有之度と不入老之言論申進候。不惡御考可被下候。いづれ其内拜顏萬々可申述候。一應之鳴謝迄如此候。亂筆乞貴免候。匆々謹言。

六月廿七日　美靜

佐々木信綱君

尙々近來のすりもの少々進上候。御令室樣へも御見可被下候。猶昌綱君も追々心易致し度候。折もあらば御こし可被下候。早々。

（文中「杉下氏」とあるは、飛驒の代議士杉下太郎左衞門氏で、名を豊といひ、父の歌の門人であつた「近來のすりもの」

とあるは、折々の考や歎文を、一二枚の木版摺にして常に人々に頒たれたのであつた。）

矢走舟

安政五年六月、當時三十一歳のわが父は、琵琶湖畔の大津から八幡にゆく、いはゆる矢走舟に乘つた。傍にをる年齢二十四五の乘合の人に話しかけると、その人は、八幡に本を見かた〴〵師匠の代理に講義にゆくのであるといふ。父は、それは奇遇である、自分も同じく講義にゆく、自分は足代弘訓翁の門人佐々木弘綱であるがといふと、彼方も、それはゆくりなくも同船したことである、自分は野之口隆正先生の門下福羽美靜であると名のり合つたことであつた。

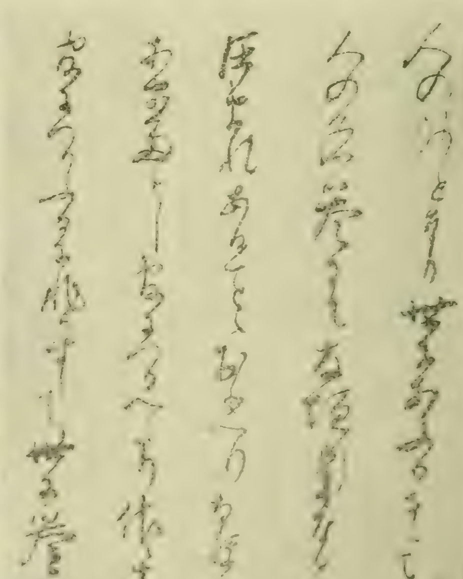
講筵が終つた後、近く江戸に出ようとする福羽氏の志を聞いた父は、その年の春を江戸に迎へたことゝとて、江戸の學者に紹介狀を書いたりした。爾來親しく交はつてをつた。

福羽翁は、維新前後京都に在つて、明治天皇即位の御儀に奉仕し、高御座のもとに水戸烈公の獻上した地球儀をすゑなどもされたといふ。しかして、順次官途を進んで、元老院議官となり、功に依つて子爵を授けられた。

明治の初年、伊勢に在る父に、懇ろに上京を促されたが、父は、「和歌の浦に吾だに一人殘らずば朽ち果てなまし玉拾ふ舟」といふやうな考で上らなかつた。後、明治十五年の春、自分を伴つて花見にとて上京したが、福羽子や小中村博士の言はるゝまゝに、自分の教育の爲めにとて東京に留まり住むこととなつた。それで番町なる子の邸には、父と共に度々招かれたことであつた。

父の病中に屢見舞に訪はれ、葬儀には祭文を讀まれたが、その一節に、

人の生るゝものは、何の道なりとも、世の爲に盡くすことありて、世に仰がるゝ事、人の道にはありけり。君の世に仰がれしことゝ淵源あり。君若きより足代翁の敎へ子となり、また天の下の物しり人を訪ひて、すこぶる學德を養ひ、世に信ぜられて此の東京に移れり。淵源ありて人の師となり、世に仰がるゝ事、これ人の名譽にて、友垣なるおのれらも、譽ある事と思へり。猶おのれは、あまた年官に仕へたりし、佐々木の君は官に仕ふるに非ずして、世に譽を得たり。官にありて譽を得るは、人あるひは易しといはむ。官にのぼらずして名譽を高くするは、難き所なるべし。其の難きを經て、德ます／＼高し。また君とおのれと、身のおきどころかはりたれら、學の道につきて、いと睦まじかりき。官途の友垣ならずして、かゝる高德の友垣ある、おのれ之を譽とす。



この祭文は、眞に知己の言として、亡父の靈も天がけり喜んだことゝおもふ。

後に、邸を佃町の、今は無いが當時銀世界といつた梅屋敷の傍に移されてからも、自分は折々訪問したことであつた。細長い地面で、前に邸宅があり、庭があつて更に奥に住宅があつた。柴折戸のもとに木の札に、……これよ

り奥は家狭し長尻の人心せよかし」といふ歌が書いてあつた。應接室には、北齋の畫譜が置いてあり、其の横に、此のおもしろい畫を見て待つやうにとの歌が書いてあつた。翁は、お逢ひするごとに、隆正の學風を傳へて世界の大勢と國學とを結びつけて語られた。その言葉には、今も胸に殘つてゐるものが尠くない。(圖版は祭之の一軸)

橋本雅邦翁

くるしみてこそ

ある月明の夜、小石川戸崎町に大橋乙羽君を訪うた。座に先客があつて、酒盃を擧げてをられる。橋本雅邦翁であつた。

大塚楠緒子夫人が翁に畫を學んでをつたので、その話からはじまつて、酒も話もはずんだ。乙羽君は、何か平常伺はなかつた話かお詞かを、今夜は一つ聞かせていただきたいが、というた。翁は盃をおいて暫く考へてをられた。

別にお話するほどのことは何もありませぬが、ただ私は若い時から生計に苦しみ、畫にも苦しみました。苦しんで漸く今日に來たのでした、と靜にいはれた。その靜かな言葉が、深く自分の胸にしみた。乙羽さんもぢつとうつむいて聽いてをつた。

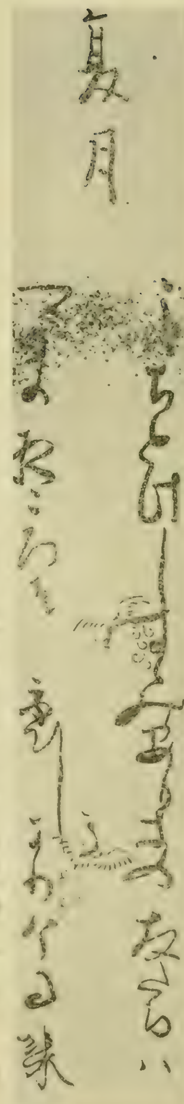
(圖版は、日本美術院の展覽會の事務所にて、大橋乙羽君の撮影に係る一



美術院展覽會にて

（右より菱田春草君・橫山大觀君・印東昌綱君・佐々木雪子・大塚楠緒子君・西鄕孤月君・下村觀山君・一人おきて小堀鞆音君、立てるは右山田源一郎君。左は著者。）

小出粲翁



（うちとけし涼みありきの友だちは月の夜頃ぞ戀しかりける　翁）

梔園のあるじ

戊申四月十五日、梔園のあるじ小出粲翁が、七十六歳で遠逝せられた。

翁は石見濱田藩で、父は松田三郎兵衛、母は山口氏。二十歳にして小出氏を嗣いだ。祖父母の代から江戸詰で、父は廣敷用人、狂歌堂眞顔の弟子で、江戸座俳諧の附合を好んだ。母はかつて間部家に仕へたが、同家には景樹の弟子の菅沼斐雄、僧亞元などが出入したので、奥方のお相手に翁の母も歌を詠んだ。此の父母の遺傳が、翁の歌を胚胎したのであらう。

翁は天保四年八月、藩侯の八丁堀の別邸で生れ、子供の時は大層癇癪持であつたが、彫刻や小細工が器用で、繪も好き、十歳位から講談の寄席によく行つた。一體が病身なので、かつ四男であるから、武士にするよりも畫工にしようといふ父の考で、荒木寛快の弟子になり、三年ばかり學んで師から畫才があるといはれたが、人からあんな

畫をかけ、こんな畫を描けといはれるのが厭で止めて仕舞うた。十六歳の時、四季物語や徒然草を讀んでから、佛道を信ずるやうになり、机の上に數珠を置いて毎日百萬遍を誦した。で、いつそ遁世をしようとの考で、十六七の頃、千住の先まで往つたことがあつたが、家の人に引戻された。その頃から歌文が好きで、湖月抄などを頻に讀んだが、二十歳の時、瀨戶久敬(村田春海の門下片岡寛光の弟子)の門に學んだ。それから程子學に志したが、江戶大地震の前年大小姓に出て、ついで近習に召され、後に濱田に行き、長州騷動や維新の前後には、病中の藩侯に仕へて種々力を盡し、維新後主家の家令となり、明治十年、三條西季知卿の推薦で御歌所に出で、爾來三十年間、御歌所の歌人として異彩を放つて居たのであつた。

その歌人としての長所は、洒落輕妙といふ點にあつた。其の歌を作るや、毫も苦心焦慮せず、隨つて歌數も多かつた。

翁の歌は、古くは曾禰好忠、源俊頼、近くは大隈言道、井上文雄などに、類似の點がある。中にも、その性質が天才肌で、江戶つ子風で、氣骨があり、酒を嗜んだ點などは、文雄に酷似してをる。

かつてその愛讀の書を問うたに、程子の書、老莊諸子、擊壤集、和泉式部續集、夫木集、萬葉集中の東歌、桂園一枝等、と答へられた。その歌の淵源する所も、之を以てほゞ知られるのである。

また、古來の歌人の中で好める人を問うたに、古今時代では躬恒、新古今時代では西行と答へられた。なるほど貫之の實法なる詠み口よりも、躬恒の氣のきいた詠みざまを好かれたのは尤もと思ふ。西行の幽寂な趣は、その歌には見えぬが、天成の歌人なる點を私淑して居られたのであらう。最後の病床で、十五日は西行の忌日であるから、其の日に終をとりたいと云うて居られたとのことであつたが、十五日の夜世を去られたのも因緣がある。

翁が歌人としてすぐれてをつた點は、桂園の歌風の盛んなりし時に當り、しかも御歌所にありながら、自己の信ずる歌風を詠み出られた點と、その家集を續々刊行された點とにある。家集は、くちなしの花三卷、同後編二卷、同續編二卷が出版された。續々編も既に脱稿して居たに、生前其の刊行を見られなかつたのは遺憾の至である。近世の歌人中、其の家集をかく打ち續いて出したことは、珍らしいといはねばならぬ。

翁はまた文章にも巧で、明治十四年高崎先生と木曾を旅行した折の「あさぎぬ」、二十四年に吉野から京都へ行啓の折御供を命ぜられ、皇后宮太夫からの命で書いた「みくるまのあと」、伊豆に遊んだ「いでゆの栞」、飛驒旅行の「飛驒の山ぶみ」等がある。詩をも作つて、くちなしの花後編には、壯年の作が掲げてある。歌人の詩として翁に及ぶ者は少なからう。

尤も嗜まれたのは酒で、酒の歌には、「人の世の迷はさめて天地のもとのまゝなる醉心地かな、」「…西も東もたゞ春の風」など、秀逸の作がある。庭を作る事も好きで、その水道端町の庭は、廣くはないが、林泉の趣に富んでゐた。筆跡も脱俗の風あり、碁も亦巧であつた。年老いながら心が若く、若い人と交はることが好で、石榑千亦君のごときは、屢翁と共に酒を飲んだといつてをられる。

今年の時ならぬ雪まじた雨に、江戸川の花は、色あせて寂しいながら、なほ今を盛である。其の近くに住まれ、言葉の花を以て歌壇を飾つた翁は、既に世になき人である。亡父の友人の一人で、余とも親交のあつた翁の逝去を悼んで、かつて聞いた閲歴により、この篇を草したのである。（明治四十一年四月記）

（圖版の短冊は、亡父母の追悼會のをりの兼題の詠である。毎月十一日の竹柏園の會すみて後、亡父は時たちともなつれだつて、五十稲荷の縁日の植木店を見たり、小川亭へ共に淨瑠璃をききにゆきなどされた。翁かつて、伊東祐命氏との軌條

の爲めに、御歌所よりの出張といふ名のもとに、京都の興風會の點者として京都に數年を送られたことがあつた。當時青に同情して亡父は絶えず音信した。その情誼を思うて、特に親しかつたのであつたとおもふ。）

國木田獨歩君

○（明治二十六年十一月二日、大分縣佐伯町より田村三治君に宛てたるもの。）

昨夜貴書到着、はじめて御病氣之由承知致し、大に驚き入候。然るに最早大分御快愈の樣子奉賀候。隨分御養生より、一日も早く御全快之程望ましく候。又祈り居候。議會も開けなんとして天下目醒しき時節に、病床にうめき居る事、至極殘念の事と御同情申上候。今筆に任せて何か書き並べ申す可く候間、御病床の無聊慰藉の友ともなされ度く、天外三百里、筆あれば何のその！

さて秋と申す心地よき時節も已に過ぎ逝き、冬枯の寒天地とは相成り候。吾等兄弟甚無事罷り在り候間、御安心被下度候。

何時の間にか紅葉も半ば散りはて黄ばみたる榛の林、風にがさつき、野山何となく蕭條たる景色と相成り申候。紅葉の時節が過ぎては最早郊外の散歩もこれまでに候。實は近來甚だ遠行ずきと相成り、（もとからすきの上に）日曜

日毎には大概缺かさず歩きちらす事、實に面白く候。十一月十八日は恰も土曜日、此日は校務三時迄なりしを生徒にことわり二時迄と致し、二時過歸宅致し、弟と共に直ちに出立仕り候。指して行く先き何處ぞやと問ひ給へ。御答へ申さん。尺間山と申す山にて候。抑も此山は、嘗て一度小生等登山いたしたる事ありて、其の模樣は大兄にも通知致したりと記憶す。此度は其の山頂に一泊の覺悟にて、かねて用意の三度分のむすび二人前を荷ひ、毛氈一枚用意仕候。

麗かに照る秋の光を少し斜に受け、愉々快々、言ふに言はれぬ心持を水素と致し、身體を一種の精神的輕氣球と仕り、浮く如く飛ぶ如く歩行致し候。さすがの輕氣球も山の麓にかゝりては、余り浮き〳〵と登る能はず、兩人とも毛氈やら兵糧やら寒さ用意の衣類やら大分の荷物擔ふ事ゆゑ、水素がす甚だ足らず、青息といき五色の息とやら申す近松翁直傳の息に、猶ほ二色を加へて、七色の虹兒を（日頃胸間に横はる所の）はき、休みては登り、登りては又休み、杉の薄暗き森、かし、はしばみの灌木の林など、山の腰をめぐる處を漸通り過ぎ、初めて四面の風景を見下す處に達し候。此時已に夕陽西に傾き、連山の頂火花を點じ、西の方、阿蘇の煙か將た雲か、悠々たる紫瞑の色、人をしてそゞろに一種のめらんこりを覺えしめ候。

こゝに一つのエピソートあり。吾等猶ほ此の處に達せずして森林の間を登りし時、或處に息ひ候。此の處は、此の以前登山の節の歸路、一個の樵夫と一少年とに出遇うたる處にて、其の老樵夫の如何にも衰へたる、之を導く少年の如何にも無邪氣らしき事は、小生の頭底固く印して失せず、其後も常に尺間山を思へば必ず聯感致す場所に候。吾等又こゝに息ひ、汗を拭き用意の蜜柑を食ひ、かれを語りこれを語り、耳を澄して鳥の聲を聞くなど、暫時休息致して又々歩み出し候。登りて凡そ十數分も經過したらんと思ふ時、收二、をや！　と申し候。何だと問へば帽子

かない！　と叫ぶ。どうした！　と小生あたりを見廻せどもなし。さアどうしようか。キット先きに息ひたる處に忘れたるなり。馬鹿の事してけると嘆息しても、帽子は獨で追駈け來る程の忠義なし。最早大分登りたる後ゆゑ、取り返しに降る勇氣甚だ少なし。然るに、抑も此帽子は在京の節水谷氏より戴きたる記念物なり。其後休みに熊本に旅行して水谷氏に出遇ひ、再び昔を語りて情趣を掬せん題目の一つは實に此帽子にてある也。其まゝ捨てる時は、何となく水谷君を山の中に捨て置く心地して、如何にするも捨つ可からず。收二遂に再び森の中に引き返し、漸く拾ひ還り申候。故に今猶ほ收二の頭上の友と相成り居候。

さて西に夕陽を眺め、頭上已に月の光を澄みたる空に戴き、いよ〳〵登りて遂に尺間山の絶頂に達し申し候。此時已に全く夜、月光霜の如く、空裡の寂漠天地を罩め候。

抑も尺間山といツぱ(已に報知したる如く)尺間神社と申す怪しげなる妖神祭りあり、絶頂に近き邊に巖石突として空をきり、社は其のてツぺん（熊本語）にありて、鎖をたよりて登り得る程の絶頂に候。

而も不思議にも、其の巖石樹木の間に二三軒の茅屋ありて、此社に祈願の信徒を宿すなり。吾等の宿りたるは則ち其の一つに候。勿論此二三軒も、決して軒を並べたるものにてはなく、其の間甚だ隔たり、互に巖石樹木を以て隈られ、相往來するさへ鎖の厄介になる次第ゆゑ、先づ各ゝ獨立の一軒屋に候事と御存知被下度候。

此一軒屋に到着致したる時の心地と申しては、とても都の生活のみし給ふ大兄の如き人々の想像萬分一だも致し得る者には御座なく候。申し、宿を借しますかと、障子を明け、頭差し入れて問ひしは小生なり。內を見れば室內朦朧として片隅に一個の爐あり。自在かぎに掛けあるものは大鍋、其の傍に坐する者は一個年增の女、一個十三四歲と見ゆる少女、其他に此の大寂寞の山頂の物すごき住家なるにも關はらず、誰れ一つ男の影なし。

若し此二人が荒くれ男の毛だらけと想像すれば、此あばら屋こそ疑もなく山賊の住家とこそ申す可けれ。幸にして大反對の婦女子、年若の二人なりしは、又一種異樣の風も有之候。

爐を擁して對面に少女と年増と坐し、此の方に牧二と小生と坐し、爐は焔々燃え上りて、四人の面を赤く照らす、若し室内を見廻せば、只だ是れ一間一軒の茅屋に過ぎず。天井なく、只だ大木の丸太を横ふるを見る。其の上に、はしごなど投げ上げてあり。室内ふすぼりて暗憺たる事は物すごき計りなり。西の一面に奇怪の神棚ありて、燈とぼり居たり。之れ家に祭れる尺間の妖神とこそ思はれ候。東の一面に食器など並べ置く棚あり。爐の一方に二枚屏風の中立てのもの立つを見たり。それもいたく煤け居たり。凡てこれ木賃宿の體。

年増の齢三十四五、一眼を眇し、つゝぽを着し、怪しきなまりにて語る。忽ち笑ひ忽ち眞面目となる。其キヤラクター容易に知る可からず。少女は臼杵の者の由、願ほどきの爲め一週間籠り居るとの事、哀れとや申す可き。吾等此怪しき屋根の下、此の面白き爐火に對し、此の二人の婦女と語り、用意のむすびを食して後、屋外に出づれば、月光晝の如く、今こそと巖の絶頂に登りて思ふまゝに此の明月に向ひ候。身は只だ天地茫々の際に漂ふが如く、思悠々として窮まる處を知らず。自然に對しては自然の無邊を思ひ、明光に向ひては美の無限を思ふ。此の際の消息は大兄の想像にまかすのみに候。此たびの登山も半は此明月を此巖頭千尺の高所に眺めたきが願にて之れありし也。只だ見る狹霧、霜の如く白く下界を罩め、山も野も谷も其の底に眠り、男も女も親も子も家族も社會も時代も歴史も、戀も恨も、慾も何もかも此の底に包まる。仰ぎ望めば、無限無邊無窮の大空悠々として擴がるを見る。星も、月も、太陽も、木星、金星、銀河、ありとあらゆる大塊此の間にみつ。光みち暗滿ち凡ての法則みつ。凡て眠りし此時、神獨り醒む。ウオーヅウオース吾を欺かずと覺え候。

此夜は茅屋に眠り、明くれば十九日日曜日、此の日は終日山より山へと跋涉仕り、終に淡居と稱する高山に登り、薄暮家に歸り候時は、月の光漸く宵の煙の香に沁みそめし頃にこれあり候。

尺間山行は先づ此位に筆を擱き、近頃小生日々の模樣少々申上ぐ可く候。小生餘り書を讀まず、觀察を事と致し居り候。實は書を讀む時間甚だ少なき故に候。時々讀むものは詩集ぐらゐのものに候。學校の用意の爲めに時間を要すること少からず、朝は七時に起き夜は大概十二時一時、或は一時半ぐらゐまでやり居候。冬は實に勉强の時節に候。人生幾何かある、天命の重きこと限あらず、實に一分時とても空漠に過す可きにあらずかし。人生は眞面目。一生は露の命。神は無窮の生存。小生の信念實に之れに候。天の美と神の眞と人情の想とを樂しまば、何ぞ樂なきを憂へん、來る可き年は來らん。生れし者は死なん。

一昨夜一詩を得候。

勿論これは一氣呵成、作後一字を更めず、而も小生自ら讀みて悚然として自らをのゝく、自畫自贊と言はば言へ、事實なるを如何せん。

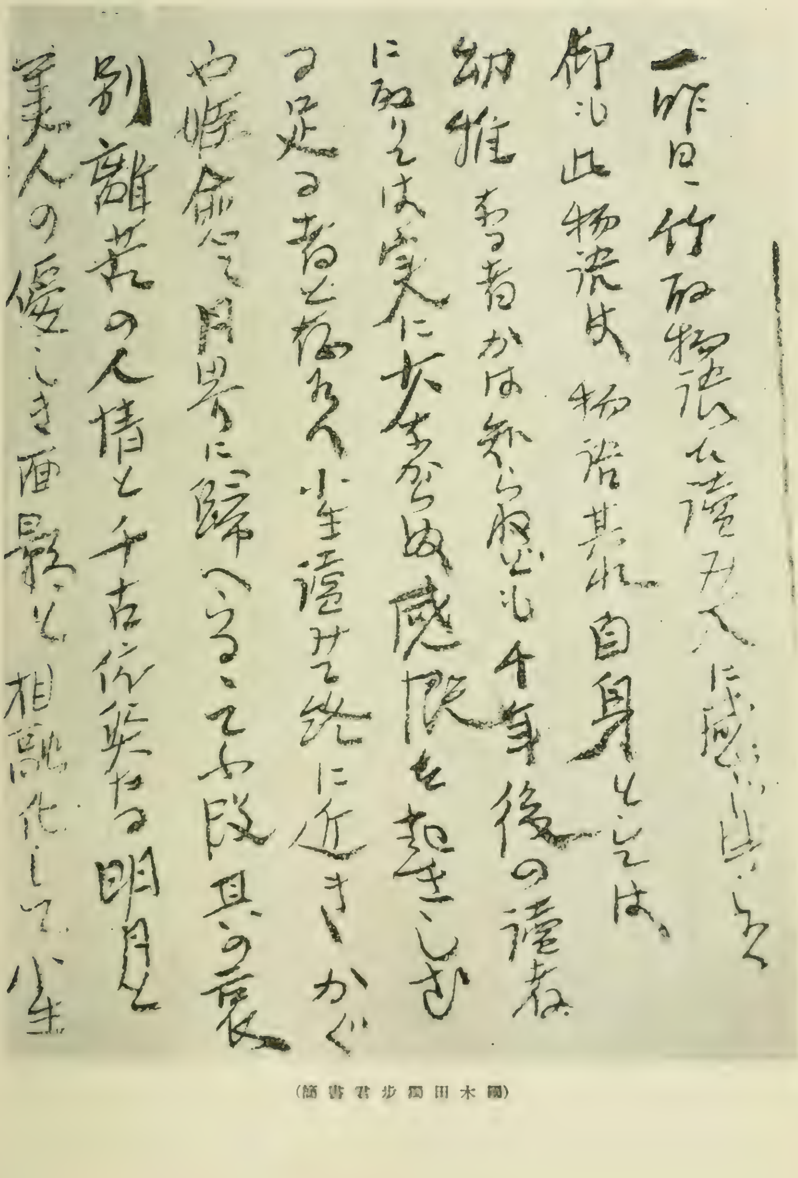
冬の夜の懷古

○過ぎにし人の跡とはん、
とはんとてわれ家でせり。
○古づかに月の光の、

をりすみて、
たま（靈魂）あくがるゝ心地する也。
○夜更けぬ、あめつち眠る、
いまのとき、
ふる人われと語るなり。
○過ぎし人、こん人、われは
いまのひと、
いまとかや、あさましき！

此の新體詩御熟讀被下度候。

一昨日、竹取物語を讀み大に感じ申し候。抑も此物語は、物語それ自身としては、幼稚なるものかは知らねども、千年後の讀者にとりては、實に少なからぬ感慨を起さしむるに足るものと存候。小生讀みて終に近き、かぐや姫愈ゝ月界に歸らるゝてふ段、其の哀別離苦の人情と、千古依然たる明月と、美人の優しき面影と相融化して、小生に現はるゝに至りては、幾度か卷を掩うて泣き申し候。いづれ熟讀後は再び御意を得んと思ひ候。兄久た病床つれづれの際一讀あれ。大に慰樂となり、發明となり、高妙なる詩趣は必ず大兄の疾あるを忘れしむる者あらん。


一昨日竹取物語を讀みて大に感心致し候
抑も此物語の作者は、物語其れ自身よりは、
幼稚なる者かは知らねど千年後の讀者
にありては實に不可思議の感慨を起こしむ
る足る者なるべく小生讀みて殆に近きかぐ
や姫の心で月界に歸へることを段其の哀
別離苦の人情と千古不變なる明月と
美人の優しき面影とを相融化して小生

（國木田獨歩君書簡）

愈々茲に筆擱かん。されど聞き給へ。あの聲を聞き給へ。之れ小學校生徒が小生門前を軍歌して行く也。又聞き給へ、其の聲は遠ざかりぬ。而して野に飛びかひ、背戸の城山にすむ鴉の鳴くを。見給へ、然り想像して見たまへ、窓より望めば東、木立村の山、秋火にみちていかにものどかなる様の春にも似たる哉。草々。

十一月二十七日午前十一時半　　哲　夫　拜

田　村　愛　兄
　　　机　下

竹取物語

自分は、國民の友や國民新聞に夙くから寄稿してゐた關係から、一月四月などに開かれる同社々員の會には招かれて出席した。その折蘇峰先生に紹介されたのが、獨歩と相知つたはじめである。逢ふごとに語つたのは、多くは新體詩のことであつた。

その後、矢野龍溪翁が雜誌を刊行されるに就いて、その事で數回逢ひ、ある時、中世の物語をも味讀してゐることを知つて、かつ驚きかつゆかしく思つたことであつた。

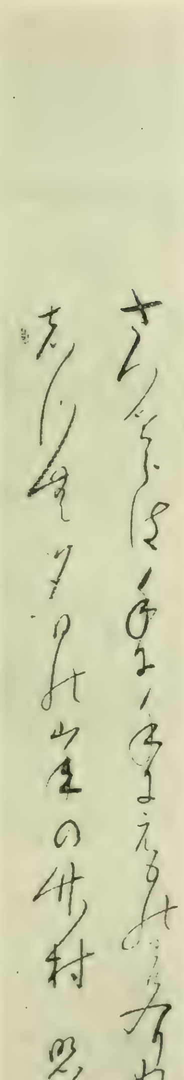
身體は太つた方ではなかつたが、氣魄のみちみちてゐる人であつた。

ここに掲げた書簡は、君の親友田村三治氏から割愛されたもの、數通のうちいづれにてもと示されたが、文中、

竹取物語のことがあつたので、そのかみ君と、竹取、おちくぼ、源氏などの物語について語つたことを思ひ出して、これを請ひ受けたのである。

この書簡は、二十三歳の時、大分縣佐伯の鶴谷館へ教頭として聘せられて間もない頃のものである。その文章に、その思想に、後年の獨歩のおもかげが見えて、獨歩文獻の尊いものである。

井關照子



（さつをらけ手に手にえものわけ入りぬしづむ夕日の峯の竹村　照子）

空ゆく雲

井關照子さんは、陸軍中佐井關正方氏の長女で、明治九年一月、生を東京に享け、己酉の四月世を去つた。

照子さんは女性らしい女性であつたが、その底に非常に強いものを持つてをつた。唯一の嗜好は、歌書を繙き、歌を工夫することであつた。

照子さんは、逗子に於いて德富淇水翁に就いて漢籍を學んだ頃、たしか明治廿五年に翁の紹介で入門した。始から歌才があつた。三十一年に刊行した「やまと錦」には二十首、三十四年に出版した「竹柏園集第一編」には二十五首、三十九年の「あけぼの」には五十九首、四十一年の「玉琴」には八十四首載つてある。それらは既に世に公になつてゐるのであるから、茲には病中の作に就いて述べる。

照子さんは體質のよい方であつたので、醫師も全快を期して、讀書や作歌を嚴禁し、ひたすら病を養へとの誡であつたが、世を去る際まで枕もとにおいてあつた手帳の中に、五十首ほどの歌が書きつけてあつた。

子ゆゑにはただ命こそ惜しまるれ生きてかひある身にもあらなく

得てしがな十年の命をさなくて親なきにます悲しびあらめや

天命とは思ふものから、亡き後の幼兒の上をおもへば、せめて今十年をと祈つた母の情、卒讀に堪へぬ。

神戸の女學院時代に、信仰の生活に入つたとのことであつたが、病床に就いてからも、折々牧師を迎へて、道を聞いて慰安とした。卽ち、

今よりは神の御ためにただ生きむ我が爲め生ける我とおもはず

天地にいのちのひびきこだまして吹きこそわたれ春の初風

春の日は二たび我にかへらずも胸にかがやく春とこしへに

かかる信仰に入つては、

　病みて聞く遠音うぐひす朝風の窓に入りくる梅が香ながら

　なやましき頭に涼し若葉風とみに心のよみがへるかと

と歌ひ出づる安心のもとに、病苦をも忘れてをつた。併し、やはり弱き人の子である。或る時に、

　破れたる胸にはうつる影もなし空ゆく雲のうき秋の色

の絶望の聲となつた。さる間にも猶、文藝の趣味を樂しんで、

　望てふ望は斷ちし身なりけりささやく水とわが世かたらむ

と歌つてゐる。

　うつくしき春かへりきぬ一とせをわれは病みふすこの一とせを

　一日だに心地よき日はあらざりきつらかりけるよ病める一とせ

いかに病の爲めになやみ苦しんだであらう。その苦しみの中にも春はめぐり來て、暖き風の庭の枯葉にそよぐを見ては、

　枯葉にも春あたたかき風吹きぬ我がいたづきのいえぬ日をのみ

病癒えなば幼き子の手を曳き、小草もともに摘まむ、歌も詠まむと、最後まで全快を期してをつたのである。

照子さんの歌の特徴は、その取材が多方面に渉つてゐることで、其の中にも子供に關する歌の多いことである。古來幾多の歌人中、最も多く兒童を詠じた大隈言道に比しても遜色はない。殊に彼は多く客觀的であるが、これは主觀的である。照子さんの歌の、

　弱き子を持ちてぞ思ふわが爲めにかくやは親も心いためし

のごときは、永久に人の胸に傳はるべき作である。

次に四季に就いて區別すれば、春の歌が多い。これは順境に人と爲り、また信仰をいだいてをつた故であらう。しかく親子の間の愛情、長閑な春の景色を歌つたものの多いに拘らず、其の調の雄々しかつたのは、底心の雄々しかつたに因るのであらう。また、作歌に對する力と才とは長く續く方で、年を假さば必ずや大成したであらうと思はれるに、惜しむべきである。

人世は短い。殊に照子さんの生涯は短かかつた。しかしその歌の幾首かは、とこしへの命を保つであらう。

野の人齋藤君

落葉子

佐々木先生を送る

み空に連なる江流を上り、
かの逝く水に思ひ寄せて、
見よ、九江の秋を過ぎ、
五老峯上、雲を偲び
夜、赤壁の月に夢みて

武昌夏口の曉に目覺めば、
東海扶桑の人、わが歌人の、
思、今更躍らざらむや。

夕、清嵐の雲を見ては、
胸は通はむ、太古の夢。
朝、大江の流を渡らは、
心到らむ、詩仙のあと。

黄鶴樓上、人空しう、
黄鶴去つて復還らずとも、
知らずや、東の國民に、
詩歌あり、戀あり、理想新た。

いま十月の天高うして、
限なき光、愁の色。
歌人、思しげき時、
あゝ君たどるか、江河の秋。

いざ行き給へ、歌人の君よ、
若き心のたどる處、
そこに歌あり、惠あらむ、
そこに愛あり、光あらむ。

野の花

野の人齋藤君と知るやうになつたのは、洋畫家松井昇氏の夫人が、自分のをしへ子の一人であつた緣で、同氏の家庭と親しくしたからであつた。野の人は、當時同じく大學の學生であつた内ヶ崎作三郎、小山鼎浦、島地雷夢、三澤糾の諸氏と共に、松井氏によく遊びにいつてをつたので、その緣故で自分も野の人と交はることとなつた。

自分が支那漫遊に上つた時には、野の人は送別の詩をおくられた。その後も屢歌の相談に來られ、また君の歌は、常にわが竹柏會の心の花に匂を添へたことであつた。

君は後に、橘絲重ぬしにピアノを學ばれたが、ある時君がピアノを買はれたと聞いて、神戸の島地君への書狀のはしに、野の人には好配遇が出來たと書いてやつたに、島地君は眞面目に祝辭をおくられたことは、當時同人の間の語りぐさとなつた。

これらの緣故で、君の追悼會の時に、自分も列席して、野の人の歌について一言を述べたことであつた。ここにそれを掲げておく。

自分は、故野の人齋藤信策君の友人の一人として、君の短い生涯を深く悲しむものである。

三十五年の秋の夜、洋畫家松井氏の宅に招かれた時、初めて當時大學生であつた君に逢つて、夜ふくるまで語つた。其の折の談話で記憶に殘つてゐるのは、君が旅行が好で、旅行には必ずハイネの集を携へてゆくとのこと、自分も旅を好むので、其の年の夏遊んだ富士山麓の湖水の幽邃な景、吉田の火祭の花やかでかつあはれな事などを語したに、君は是非行つて見たいと云うた。――其の後君は八湖めぐりをした――此の松井氏の會合が縁となつて、爾來數年君と親しく交はつた。思へばそれは九月の末の靜かな夜であつた。八年の後の九月の末の今夜、ここに君の追悼の講演會が開かれ、君の肖像の前に、君の事を語るのは、感慨に堪へぬ次第である。齋藤君の他の方面の事は、既に唯今諸氏の話があつたゆゑ、自分は君の和歌に就いて一言しようと思ふ。

君は元來趣味の廣かつた人で、繪畫音樂園藝等、いづれもその趣味を解し、かつ親しく嗜んで、水彩畫をかき、ピアノを彈じ、花園を作りなどした。殊に詩歌は最も深く嗜んだ。君は常に沈默がちで多く語らず、夢みるやうな風があり、しかも一度語り出づるや、その優しい語氣の底には力があり、燃えるやうな熱情が籠つてゐて、おのづから人をひきつけるところがあつた。其の強い意志の力でおさへては居たが、もと多感多情の性質で、生れながらの詩人といふ語は、君に對していとも適切に感ぜられるのである。

君は高等學校から大學時代にかけて、長詩を作り、和歌を詠じ、彼の愛讀の詩人なるハイネの集と共に、山家集をも精讀し、卒業後、帝國文學、時代思潮などに、文藝評論の筆をとるに至つて、暫時中止したが、病を得て大久保に移つて後、殊に此の一二年は、和歌に深く心をよせて、折々其の作を自分の許におこされた。

君が歌に對して、いかに考へてゐたかは、その兄君樗牛博士も、君も、とこしへに眠つてをられる龍華寺の麓、

富士見村なる藤井女史に贈つた書狀の一節に、

我はかつて、歌よみたる事なし。又、歌よまむと思ひし事なし。只折にふれて、心に湧きかへる思の、眼より涙の出づるそれの如く、自然に聲となりて、ほとばしり出づるものに候。

というたのでわかる。卽ち君が多感多情の性質を以て、人世に對して感ずる堪へ難い思を、作らず飾らず歌ひ出たのが、我が歌であるとの意で、虛飾を斥けた君の考は、ここに十分現はれて居る。

君の歌風は、新古今の幽艶な風の中に、沈痛の思を含めたもので、悲哀の情調が全篇を貫いてをる。これは一には愛讀したハイネまた西行などの影響であらう。哀絕の情を傳へて、讀む人の胸にしみとほるやうな、しかも其の間にたえず幻にあこがれてゐる。これ實に君の歌の特色である。

君には交友が少ない。しかし交はつた友には皆篤かつたが、中にも殊に親しかつた島地君と共に歌を詠んでゐた時、島地君が君の歌を評して、わが歌はなほ造り花である、君のは野の花であるといつたと聞いた。野の人の歌が野の花とはおのづから面白い話である。自分の思ふには、君の歌は、うらゝかな光に咲きほこつてゐる春の野の花ではなく、また冬枯の霜の中に交つてゐる菊の花でもなく、寧ろしめやかな秋霧のうちに、美しく咲き亂れてゐる秋の野の花であつた。

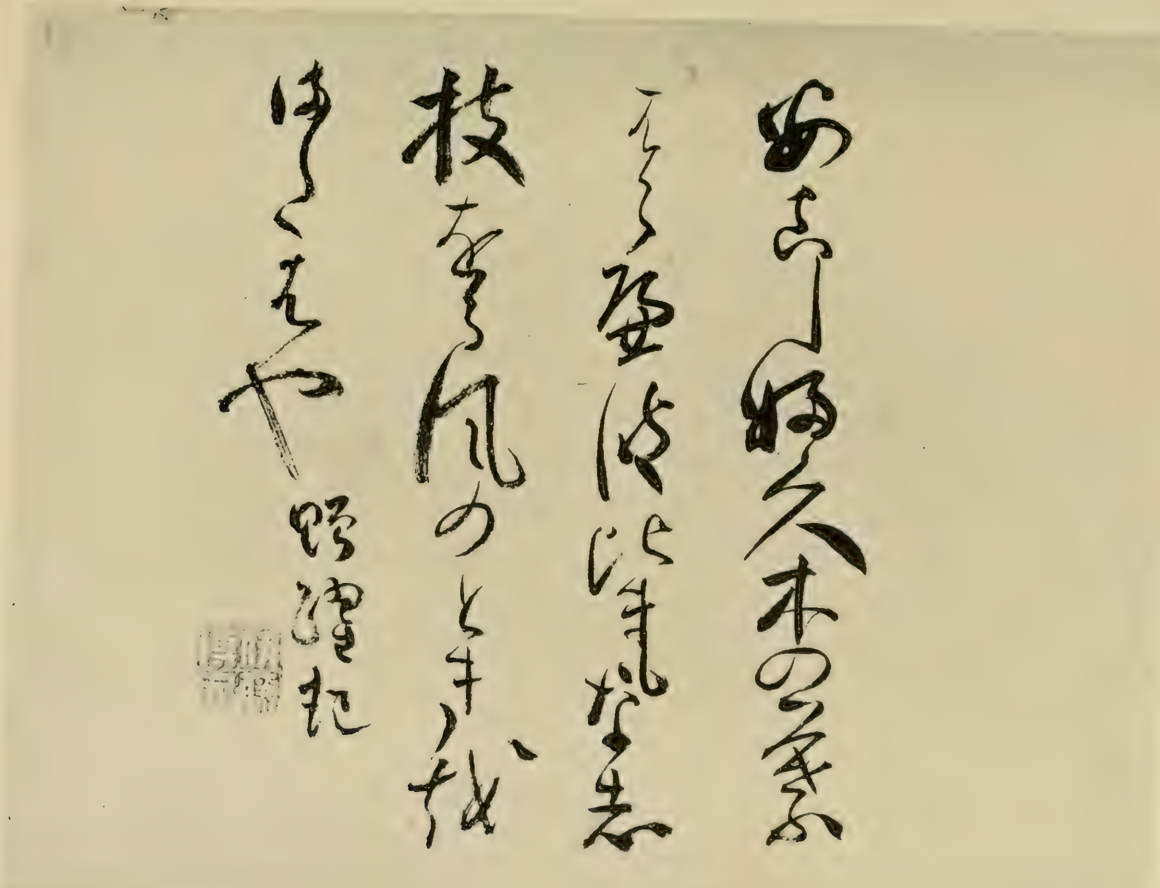
古語に、歌はよむ事のかたきにあらず、よくよむ事のかたきなりとあるに、景樹がつけ加へて、よくよむ事のかたきにあらず、よく知る事のかたき也というたが、眞に歌をよく知りよく解する事は難い。然るに和歌に對して趣味ふかく、また自ら嗜んだ君は、實に歌をよく解する人であつた。作家と批評家とはおのづから別であるが、和歌のごときは、ある程度までは、作家でなくては眞の批評は出來ぬと思ふ。卽ち、深くも廣くも、ある感情を或は縮

めたり、或は其の中心點、もしくはある一端をとらへて一字一句の用ゐざま、一事一物のとり合せにも意をこめてうたふ和歌にとつては、殊に作者の感情心持に對する同情といふものがなくては解することが難い。此の點に於いては君はまことに同情のある批評家であつた。是を自分が我が同人の歌集「あけぼの」に就いて君がせられた批評によつて知つた。各作家の歌をいづれも同情を以て評された君の文は、多くの批評と選を異にしてゐた。固より、同人の作に對して同情ある批評をせられたからといふのではない。君はたしかに歌を解する人であつた。

君が、その研究の半途にして遠逝されたのは、返す〲遺憾なことで、いろ〱の方面から惜まれた事であるが、わが短歌界の方面からも、深く哀惜に堪へぬのである。自分は曾て十數年前、親友中野逍遙君の大學を卒業せらるる間もなく遠逝せられたのを深く歎き悲しんだ。しかし逍遙君の世に遺された漢詩は、逍遙遺稿一卷に收められて、心ある人の胸には今日猶ひびきを傳へてゐる。思ふに將來永久に傳はる事と信ずる。齋藤君の歌集も、遺稿の一部として出版せらるるであらうが、君の歌亦人々の胸にその響を傳へて、永く世にのこる事と信ずる。終りに君が病中の作のうち數首を朗吟して、此の手向の言葉を終らうと思ふ。

むらさきにたそがれて行く海を見て鷗戀しと思ひけるかな
熱ゆゑに見る幻の亂れては夢もなやみて春くれむとす
我がたまに似し幻の夕雲はいづこ迷ひてなど消えもせぬ
目くれてはみ空かけりし我がたまも病めるむくろに又歸りくる

（野の人追悼會講演筆記）



伊藤春畝公和歌

伊藤春畝公

滄浪閣の半日

明治三十五年の夏の眞盛に、大磯の滄浪閣に滯在してをられる末松博士夫妻を訪うた。正午近くなつたところ、伊藤公夫人が出られて、主人が幸ひ在宅してゐてお目にかかるからとのことであつた。やがて公が出て來られた。暑いからこんな風で、といはれたやうに、羽織を着られず、帷衣に角帶をきちんと結んでをられる姿は、吾が國第一人の政治家といふよりは、親しみ深い家庭の主人公といふべき樣子であつた。

いはるるままに食堂に入ると、あたかも訪ねて來られた金子伯と、末松子とが左右に、自分が公の前の椅子であつた。自分は數日前に富士に登つたばかりであつたので、話題は富士山及びその詩歌が中心であつた。

食事は極めて簡單であつた。終りにスープ皿に盛つた茶飯が出たが、公は、これは自分の好物であるから、と云うて、かはりをすすめられなどした。

食後は、庭に近い椅子によつて、自分の爲に漢詩の妙味を談られ、森槐南氏の詩人としてすぐれてゐることや、和歌の題材に新事物をとり入れるについてのことなどを話された。かつて外遊中、油畫に、深山の鐵路を黑煙を吐いて驀進して來る汽車の轟きに驚いた猛獸が、汽車にをどりかからうとしてゐるのを描いたものを見たが、汽車たども用ゐやうによつては、畫になり詩になるなど、話は滾々として盡きなかつた。

ここに掲げた歌は、公が政治上の躍起組といへるに戲に書いて示された下書で、卷紙に書かれたのに末松夫人が

公の印を捺して、裝幀して贈られたものである。

依田學海居士

○（某年某月某日）

御返り言と申すほどにも候はねども、たゞ筆にまかせて。

仰うけたまはり候ひぬ。昨日の御物語ははや遠き昔の事と思ひなして候。されば神のありなしを知らずとも知るともこの世の事には何の益もなく候。ましてや風を捉へかげを追ふが如き論をなすとも、證據なければ誰かこれを行ずべき。孔子も、いまだ人に事ふること能はず、いづくにぞ鬼につかへむ、いまだ生を知らず、いづくにぞ死を知らんと申しけるをや。凡そ人智にはかぎりあり。人間の壽は長しといへども百年の生を保つはまれなり。かゝる人をして目にも見えず耳にもきこえぬ鬼神の有無を論ずるとも、いかで知ることを得べき。こゝをもて識者は鬼神の事を論ぜず、また鬼神を信ぜず。知らざれば信ずる心を起さず。信ぜずとも今日の事に於いて害なければなり。我が國の神世も、漢土西洋と同じく茫漠としてその事のさとりがたきは同じ。唯かくいひつたへしとのみいひてあらば、何のさまたげかあるべき。そをこれはかく、かれはかゝらんなどさま〴〵の私意をもてちうさくすとも、上にいへるごとく、人智をもて測りうべきにあらず。いたづらに穿鑿傅會の笑をのこすに過ぎず。古事記傳古史傳の



ごとき、いづれもしからざるは無し。村田春海は、そを言をきはめていひくたしたるは一わたりは聞えたれども、これもまた無益の辯といひつべし。よてわれはたゞ、鬼神の事上世の事は口を閉ぢて論ずべからず、また論ずるに及ばずといひてやまむのみ。和學者はやゝもすればは儒者の論をから心なりといひて口わろくいひ消つやうに聞えた

れども、から人も同じ心、やまと人も同じ心なり。萬國の人いづれか同じならざらむ。但人心はその面の如く同じきうちにいづれも異なるふしなきにあらねば、各その信ずるところを信ずべきのみとぞんじ候也。あなかしこ。

百　川

竹柏園の大人

御もと

上世事誰知僞眞。茫々漠々不須論。人間自有人間樂、何必苦辛言鬼神。

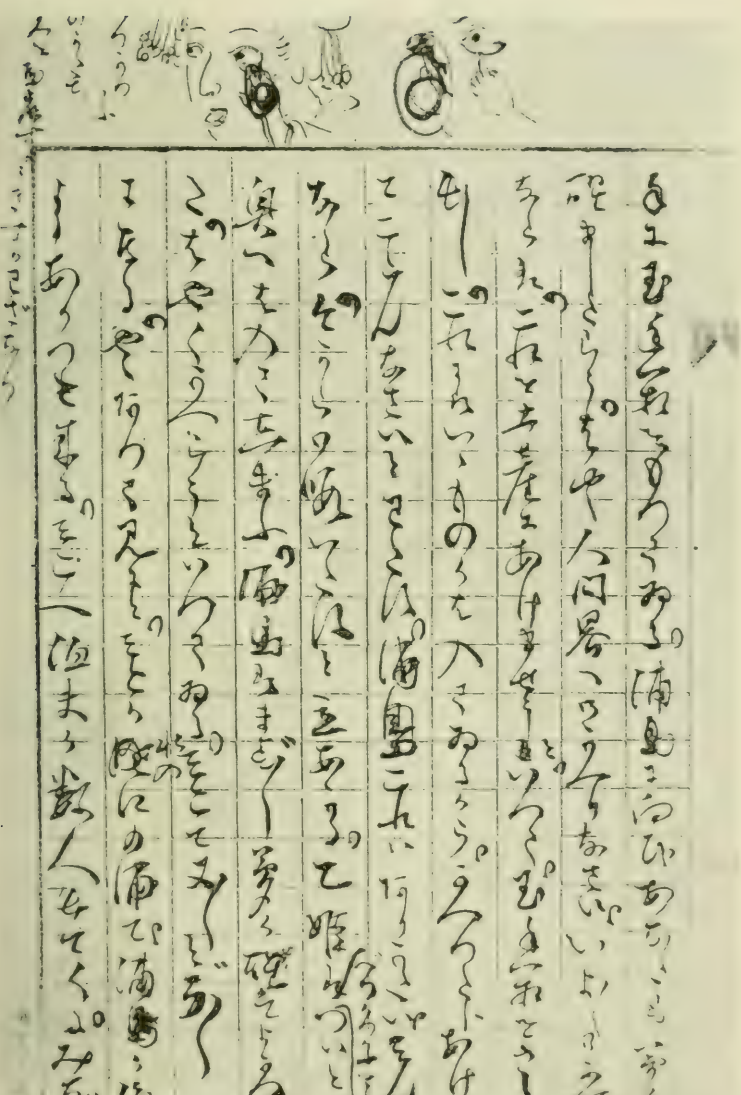
白髯を撫でつつ

依田學海先生は、舊臘七十七歳で世を去られた。先生の譚海と譚叢とは、先生の著書中最も廣く行はれた書で、恐らくは、今日文筆をとつてをられる諸氏は、誰しも同書の文章の妙を味ははぬ人はあるまいと思ふ。先生の學問文章に就いてはここに贅言を費す要は無く、また先生の趣味の廣かつた事、それらも略して、二十年此方の先生との交はりについてお話をしよう。

余が父に伴なはれて上京し、小川町に住んだのは明治十五年、先生が向島からわが隣家に移られたのは、二十年頃である。それで、亡父以來二世の知を辱うし、余は屢文章の批評を請うた。それと同時に、先生の令息美狹古君、今の澤氏夫人花枝子、畢井氏夫人柳枝子ぬしなどを教へたので、一層親しくして、時によると毎日朝に晩にお出でになる。庭下駄をはいた下女が、お客様ですからと、先生の迎へに來る事が屢あつた。

先生は座談が實に上手であつた。しかも談論風生といふやうに、力のある大きい聲で、美事な白い髯を折々撫でながら、あらゆるものを罵倒しつくさねばやまぬといつた風に、よく議論をなさる。近年は忙がしい爲に催さぬが、以前はよく知巳諸君を招いて小集を催した事があつた。末松青萍、大塚保治、同楠緒子、上田敏、小栗風葉、沼波瓊音などの諸君であつた。千葉掬香、正宗白鳥君なども一二度來られたことがあつた。先生はいつもお出でで談話の中心となつて、話をされる、議論をされる。いつであつたか、上田君がトルストイの話をされると、先生は大分醉つてをられて、トルトースイと云はれて、トルトースイといひ違へて、なんだ、露西亞のトルトースイぐらゐがと、頻りにトルトースイ、トルトースイと云はれて、夢中になつて、終に側にあつた机を引くりかへされたので、皆たまらず笑ひ出した事があつた。尾崎紅葉君と一緒にお招きした折、紅葉君が先生に、いつか拜見したあの一代記はどうか自分に貰ひたい、と云はれる。一代記とは何ですかと傍から問ふと、それは自分の一代記で、誕生から役人になり、官をやめ、死に至る生涯を自分が畫いて、上に草双紙風の平假字の文章が書いてある。葬儀の圖には、一生不遇學海先生之柩、其の次には、どうせ漢學は流行せぬから、子孫が藏書をめちや／＼に賣つたり、また燒いたりしてをる圖があるとの説明をせられた。さて先生曰く、尾崎君の文は實に天下の名文である、且つ自分の好な人であるから、一代記は自分が死んだら君に差上げよう、併し尾崎君は弱いから、どちらが前へ死ぬかわからぬでは無いかと云はれると、其の頃から紅葉君は少しづつ胃がわるかつたので、苦笑して居られた時の面影が今も思ひ浮べられる。紅葉君の歿後、あの時の言葉が讖をなしたと、先生は嘆息してをられたことであつた。

わが竹柏會では、毎年大會を催す。先生は何時も來賓として御出を願ふが、余が支那漫遊の送別會を兼ねて、小石川の酒井伯邸で催した折、先生は送別の文を作つて持參して下さつて、朗讀して下さつた。それはまことによか



（學海翁「玉手箱打こはし」の原稿）

つたが、次に某君の演說があつた。其の演說中、和歌と漢詩の比較談があつた。漢詩をわるく云はれたのでは無かつたが、先生は急に立腹せられて、プイと座を立たれた。演說が濟むと、先生はあの男は何處へ往つた、是非なぐつて池の中へ入れてやらねばならぬと云うて、廣い庭園の大きい池のまはりを廻りながら、あの男はどうした、と人每にたづねられる。小山鼎浦君や、故人になつた齋藤野の人が來てゐたが、頻りに心配をする。困つてゐた所へ、先生が最愛の令嬢なる柳枝さんが遲ればせに見えたので、やつと先生の監督役にお賴みして、それから大分御機嫌がなほつて、麥酒などを飲んでをられた。日露戰役後、華族會館で大會を催した時は、自分が健筆をふるふから、筆硯の用意をして置くやうにとの事で、あの樓上でハウプトマンに就いての鷗外博士の演說の濟んだ後、大勢の人人にとりまかれて盛んに書いて下さつた。これが先生の元氣の最も盛んな時で、其の翌年三井集會所で催した時は、いくらかお弱りで、老夫人と同行で出席せられた。

先生は文章を書かれるのがまことに早くて、我が家の二階を新築した其の小宴の折にも、短い時間に竹柏園記といふ一篇を書いて持つて來て下さつた。今日猶わが家の二階に、先生の其の額と、齋藤拙堂が亡父の爲めに書いてくれられた竹柏園といふ額が、向き合つて居る。

先生の筆蹟は、晩年益々圓熟をきはめて、實に美事であつた。小川町の通に小川亭といふ寄席があつた。ある時先生は、そこの主人の爲めに醉筆をふるつて鳥歌花舞云々といふ語を大字に認められた。それが額になつてゐたが實にみごとな出來であつた。小川亭はなくなつて、其の跡が今は天下堂といふのになつた。彼の額は如何なつたかと折々に思ひ出される。

先生は、折々のすさびに畫をもかかれた。氣力のある一種の畫で、畫家の畫や、文人畫や、俳人の畫とは趣を異

にして、おもしろい書風であつた。かつて沼波君の書畫帖に、學海先生居酒屋に天下の文章を論ずる圖」といふを書かれたのは、筆力剛健といふべき出來ばえであつた。

先生は國文にも趣味を持つて居られて、先生自身の書かれた國文も少くない。また源氏物語を殊に愛讀せられて、金瓶梅との比較論を屢伺つた。先生の源氏一篇の大觀論は、卓見の味ふべきものであつて、其の一端は心の花の五卷三號に「源氏物語に就いて」として載つてゐる。また鷗外逍遙二博士の浦島に對して、「玉手箱の打こわし」といふ一篇の戯文を物された。其の趣向は實に奇拔で、先生のかゝる文中恐らく第一であるまいかと思ふ。これは心の花の九卷一號に載つて居る。

先生は、西洋料理西洋酒の類を好まれて、入浴の歸りにはビーヤホールに寄られるのが例であつた。偶々珍らしい洋酒を先生のお出での折にさし上げると、翌日も御出でで、昨日のあれはあるかナと云うては、よく盃を手にせられた。酒が過ぎた故であらうか、晩年お弱りになつたのは、歎かはしいことであつた。それからも折々お出になつたが、二階の上り下りには、手をとつてお助け申すと、よく柳枝さんや、宅の孫がと其のやうな話をなされた。或る日の夕べ、薄くらがりにお出でになつた。餘程お弱りのやうで、二階へお上りはむつかしからうと、下の座敷へお通しすると、無言で自分の手をとつて、はら／＼と涙をおこぼしになる。さうしてぢつと自分の顏を見つめておいでになつた。自分も堪へがたくなつて、涙がにじみ出た。暫らくするとお宅から、先生がお見えにならぬが、もしやこちらではありませぬかと、老夫人が女中をつれて心配なさりながらみえたことがあつた。思へば先生は、別れを告げにお出で下さつたのであつた。

先生は非常に癇癪持で、誰とでもすぐ議論をなさるといふ風であつたが、一面また大層綿密で、維新前から三十

九年頃までの日記が數十卷あつて、薄葉に細かく、日日世上の出來事から、來客の話までが書いてある。また漫筆の類も數十册あるとの事。先生は、漢學が衰へ漢文を味はふ人の無いのが不平でたまらず、從つて世界中のあらゆるものを破壞するといふやうな論ばかり言つてをられた。で、自分の文章などは、誰も讀む者はない、わかる者もないから、死んだらきつと燒き捨てるのだと口くせのやうに云つてをられた。が、令息の美狹古君は、先生の綿密な方面を傳へて、篤實溫厚の方であるから、先生の詩文の草稿類は、よく整理し保存してをられるゆゑ、他日遺稿が出て、先生の文章を千載に傳へられるであらうと思ふ。

先生の事を語ると、二十年來の事がそれからそれへと思ひ出されて、盡くる期がないからこれで留める。今此の話をしてゐる二階で、先生が屢高い聲で、白い立派な鬚を撫でつつお話をなさつたのである。其の面影が浮び出て懷舊の情に堪へぬのである。（明治四十三年一月談）

藤岡東圃博士

○　（明治三十九年九月九日、相州大磯中村屋）

拜復。御丁寧なる御手紙難有拜見仕候。なほ先日種々御珍藏の書籍わざ〳〵御持參被下恐縮の至に御座候。早速拜見、流布本の入朱には殊に得る處多く覺え候。なほ住吉歌合に就いてわざ〳〵御申越被下、御芳志の程難有、小生

は同書は未だ閲覽不致、何卒一見致度存候。丁度小生は兩三日前大磯に參り滯在致居候が、兩三日のうちには歸京のつもりに候。歸京の上は早速參堂致度存候間、御留守にても拜見出來るやう御取計ひ置き被下候はゞ幸甚と存候。大磯も遊客概ね歸り去りて、町通りも何だか疲れ果たやうに見え、野分の跡のやうに淋しき有樣に御座候。心の痛みある者は一人で居るに堪へず、來てまた歸らんと存候。先は御禮旁重ねて御願迄如斯御坐候。早々不一。

九月九日　藤岡作太郎

佐々木信綱樣

御許

○（明治四十年二月八日、大磯）

拜啓。また／＼梅澤和軒に攻撃され、血氣の沙汰ながら何か答辯相認度と存候につき、同氏の「西行法師傳」參照致度、同書一兩日拜借願はれまじくや。右は小生歸京の上參堂御願申上べき筈ながら、歸宅後直に着手致度取急ぎ候につき葉書にて願上候。何卒歸る頃迄に東京の小宅宛にて郵便に附し置被下候はゞ難有仕合に候。十一日頃には歸宅のつもりに候。尙歸宅の上は御伺御禮可申上、其節は夜半のねざめ御返濟可申候。出來べくば若清水物語拜見致度候。願用のみ恐懼之樣に存候。頓首。

八日　大磯にて　藤岡作太郎



大學にて

（前列左二人目より藤岡東圃博士・芳賀矢一博士・著者・上田萬年博士・關根正直博士・保科孝一君）

○（明治四十一年十二月三日）

拜啓。昨日は色々拜見致し奉謝候。其節御聞可申上存じて失念致候が、塙檢校と同門で横田茂語といふ人あり。師の萩原宗固、めくらの塙に考證的學問をやれ、茂語に和歌をやれといふを人怪みしが、後に成程といへりといふ話のある、この横田といふ人はいかなる人にや。傳などもわかつて居る人にや。御教示を得度、當用のみ御尋申上候。

十二月三日　　敬具

藤岡作太郎

○（明治四十一年十二月五日）

拜復。御教示を願ひ候處早々懇に御示し被下難有、御蔭によりて歿年月等委しく相知れ奉謝候。萩野氏よりも偕翁と號すといふこと丈は承り候。彼此相待つて瞭然たるに至り候。短册は頂戴致し置候ても宜しくや、餘りに厚かましきやうながら御厚志にあまえ置候。先は御禮迄如斯御座候。

十二月五日

藤岡作太郎

培ふ人

歐化主義の反動として、國粹主義が我が國の社會に唱へられ、その結果として、吾が學問界に國文學の復興に生

じたのであるが、この機運を大成して、新しいまとまつた意味に於ける國文學を學問界に建設した功は、之を芳賀博士及び東圃藤岡博士の二氏に歸すべきであらう。

併しこの兩氏は、その學風に於いて互に特色を異にしてゐると思ふ。芳賀博士は、何處までも新たに學問の道を切りひらいた人と言ふ態度で、國文學上の主要なる問題を提供し、大體の解釋の方針を指示してゆくといふ方で、いはば荒削りに國文學といふ一つの彫像の形を造りあげるといふ人である。藤岡博士は之と異なつて、其の學風が精緻微細で部分々々を細かに仕上げていつて、件の荒けづりの像を美しく渾然たるものとなすといふ風である。例へて言はば、芳賀博士の方は種蒔く人、藤岡博士の方は之を培つておほしたててゆく人である。更にいはば、芳賀博士は國文學といふ一家の主人で、藤岡博士は女主人といふ位地である。


佐々木信綱様
藤岡作太郎

(藤岡東圃博士書簡)

殊に藤岡博士は、京都の風物に親しんで、其の間に自ら養成せられた美術上の鑑識、華麗な文藻等、他人の企て及びがたい特色を有してをられたに、今や君を失なつたことは、國文學界の爲めに最も大いなる損失である。加納諸平の長歌に、「一事なさば十年も千年、成さざらば千年何せむ」といふ句があるが、君は實に、十年も千年に當る不朽の事業を學界に成された。併し猶長らへてをら

れればをられるほど、それだけ多くの事業を成されたであらうに、返す〴〵も遺憾の事である。
翻つて和歌の方から考へても、文學史家として、君のごとく和歌に同情を持たれ理解を有せられた人は尠なかつた。君が國文學全史平安朝篇に於いて、和泉式部を稱擧せられた如き、特に西行を重んじて詳しく研究せられたごとき、いづれも之を示して居る。また國文學史講話に於ける萬葉集論、殊に家持の歌に關する見識のごときも、尋常を拔いて居る。

自分が君と識つたのは、去る明治三十八年の秋自分が大學に出てから後の事で、日は淺かつたが、屢往來して、語るところはいつも歌の上であつた。悅目抄論のごときも、君の指示によつて國文學界に起つたもので、自分が發表した彼の論文も、それに促されて研究をかさねたものである。君が異本山家集を得て出版せられた時は、自分のもとにも古寫本を藏して居たので、度々訪はれ、種々談り合うた。また君は學問上非常に所信が堅かつた。神樂催馬樂や古今六帖が、君の平安朝篇に論じて無かつた事に就いてなど、君と自分と見解を異にして居た爲め、數回互に論じ合うた事であつた。

去年十二月の初め、君を訪うて、いつよりも長座したが、其の折語つた定家歌集が、やがて出來たので、大磯に避寒して居られた君のもとに一部を送つて、定家の歌に就いては多少觀を異にするから、評をして欲しいといひ送つたに、一月七日、いづれ考を書いて送るからといふ返書が來た。併しその評もまう聞く事は出來ぬ。また十二月に語つた折、從來世に埋もれて居た秘府本萬葉集抄、爲兼の歌論の書等を寫して置いたと言うたに、使をやるから貸して貰ひたいといはれたが、其の使も最早永久に來ぬ。此の數日前にも、山家集の古本を見るを得たが、それにつけても、古書に就いて、國文學上の事實に就いて、また考に就いて、研究する所ある每に語り合つて稗益を得た

君を失つたことは、自分一個人にとつても又なき悲しびである。

君の葬送の當日君が書齋の前の庭に立つて、自分はひとり哀悼の情に沈んで居た。その庭前の梅はよわ／＼しい痩せた枝ながらに、清香を放つて居た。恰も君が生來の多病に堪へて、學問上に多くの功績を擧げられた貴き一生を語るものの如くであるのを思つて、自分は更に深い感慨に沈んだことであつた。（明治四十三年二月記）

山田美妙君

○（明治二十四年九月十七日）

さしかゝりたる事のみしげくて、心ならずも打絶まゐらせし事、申し譯も候はず。此ありさまにてはあすの十六夜の月も嘸かしと思はるゝにつけ、御いざなひいとゞ嬉しう被存候。あすは夜の九時より他にさりがたき事も候へど、それまではおのが儘のからだ、いづ方にも參るべく候。そのところは今うちつけに思ひあたらず、あすまで待たせたまはずや。夕ぐれ四時五時の頃より家を出で、しづかに月の出づるを待つも面白かるべく、なまじひに更けぬ方なか／＼に興ありげに被覺候。兎も角もあす四時より五時までの間、それがし、御許までまゐるべく、有然るべく前後御料らひ願ひ上げまゐらせ候。

九月十七日

美妙

なぎその大人

○　（同翌十八日）

人生畢竟數寄おほし。この曇天、この雨、觀月の催しかくては終に畫餠となり候。天事人力の關する所にあらず、誰を怨みんやうもなし。稍々賴みありげには見ゆれど、是こそまことの空だのめ、こよひ宵の程まで斯くてありなば、いさぎよく今宵のもよほしは斷念と事さだむべく候。未練ながら萬一の運をたのみ、それとても晴れずて給はで、翌夜は立待の月、これ亦觀るべきものに候へば、この方に過しおくるべきものにや、然るべく御含の程願ひまゐらせ候。

明日と事さだまらば、手筈萬々昨日聞えし如くこと定め、共心して待つべく候。かしこ。

美　妙

廿四年九月十八日

信綱の君

御許

○　（明治廿四年九月廿七日）

山田美妙君

拜啓。然れば明日江島鎌倉邊へまゐるべく御約束いたせし處、折あしきものにて、丁度停止中なりし國民新聞今日を以て解停になり、自然明日は用事もしげく、それ故まことに心ならねど明日のもよほしだけは御延引申上度候。加之この數日來の天氣もやうも日々不安心なる姿、かくて秋氣快晴の日の至るを待つも却て宜しかるべく存上候。

暦をくれば今は八專、雨の多きも故なきに非ず。とてもの事に月をこし、來月初旬の中の都合宜しき日を選みては如何。小生も只今鎌倉時代の小說起草中、是非ともこれを機として參りたくは存居候。右破約御わびかた〴〵此儀貴意を得たく、亂筆申上候。敬具。

九月廿七日　　美妙

那幾され大人

御許

人も學ばむ

言文一致體の創始者であり、國語辭典の上にも一新機軸を出した明治文學界の功勞者山田美妙齋の遺著、白拍子祇王が、立命館大學出版部から近く出版されたのを見て、古い記憶が新たによみがへり來る。

自分が初めて美妙君に逢つたのは、はやい時のことである。それは、明治二十一年、亡父が長歌改良論を發表した際、守舊派の人々からいたく攻擊されたに、美妙君はひとり贊成論を讀賣新聞に書いて、その後間もなく父を訪ねて、當時の小川町の家に來られたのであつた。

數日後、父の代りに駿河臺袋町の、水道橋へのおり口の左側なる坊城伯邸內の君の住居を訪うた。(尾崎紅葉君も、一時そこに同居してをられたといふ。)あやにくに不在であつたが、母堂がいろ〳〵話された。後、萬世橋に近い平永町に移られたのをたづねて、その書齋にとほされた。かの不知庵主人の「文學者となる法」の中にある挿繪に、美

妙君の書齋を描いたものとやうに聞いたが、いかにもよく似てをつたとおもふ。

都の花を主宰してをられた頃のことであつた。ある日「今、神田の末廣町に幸田といふ家を訪うた歸りであるが」というて、その「露團々」といふ小説がおもしろいから、載せようと思ふとの話をきいた。それは露伴博士の處女作であつたのである。

その頃一緒に、武藏の高尾山に遊んだ。途中淺川の村で萱艸の咲いてをるのを見て、自分は今樣を作り、その紀行文を、君の「いらつめ」におくつたやうに記憶してをる。君はその頃枕草紙や源氏物語を研究してをられたので、それに就いて話したこともあつた。

君の風丰は「眉目秀麗といふ語にふさはしかつた。祇王の卷頭に入れられた明治二十三年の寫眞を見ると、當時の面影が懷しく想ひ出される。

自分は、明治時代の交友の書簡、または筆跡をま

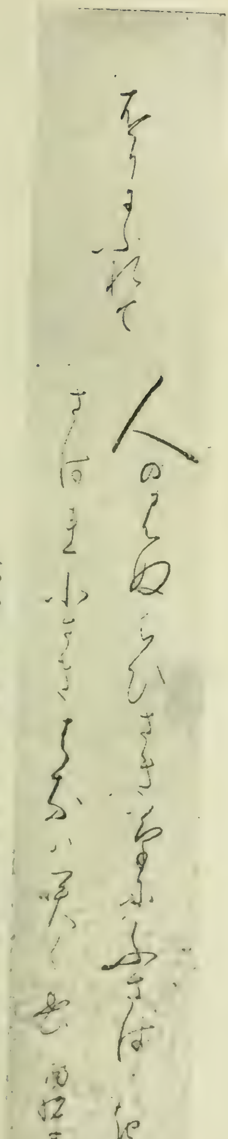
（美妙君・詩稿）



とめて一巻にしたいと志してゐたに、美妙君のが見あたらぬよしを鹽田良平氏に語つたところ、令息旭彦君から、明治三十八年の元旦の詩の草稿一葉を贈られた。その詩は、圖版に掲げたごとく、いそがず休まず、忍びて默すああ人も學ばん、とある。籠居して友人等とも全く交際を絶たれた君が、晩年かかる考を懐いてをられたことと深く感じたことであつた。

然るに近頃、古い箱に入つた書類を整理してをると、ゆくりなくも手紙が三通までも出て來て、喜んでをることである。（「白拍子祇王を讀みて」）

大塚楠緒子夫人



人の見ぬ小さき草にふさはしきさはれ小さき花は咲く春　楠緒子

○（某年七月十日）

降りつゞきにて物憂きことに候。雪子様御子様がた如何。先日はさま〴〵御心遣ひの中にて御覽くだされありがたく、御蔭様にて人にも見せらるるやうなものに相なり候事に候。大方は御仰のまゝに書きあらため候へど、神坂博士を廊下に出すことはどうも書き入るゝところなく、いろ〳〵考へ候へども、入れるにはよほど書きかふるやうなり候まゝ、このまゝにいたし候。鈴音の通辯のところも、巡査にてはどうもあとさきの文章の都合わるく、汽車の車掌にいたし候。まづあれは長き物に筆馴らしのつもりに候へば、一冊にしては出さじとぞんじ候。沼波様より出來ただけにても直ぐよこせとの仰ゆゑ、露と題してさし上てしまひ申候。あとは七八回になるべくと存候。書き終り候はゞざつとなりともまた御目を通させられ度願ひまゐらせ候。日和よく相なり候はゞ鎌倉へと存じ候へども、この容にてはいまだ支度も出來不申候。この品そまつながら中元の御しるしに。かしこ。

十日　　　　楠緒子

佐々木先生

（沼波瓊音君のすすめによつて、夫人が萬朝報に寄稿された小説「露」の草稿を、請はるるままに一讀して、考をいひ送つた返事である。「露」は後に單行本として刊行された。）

豐島が岡

早くも一年は來た。去年の今日は、大塚楠緒子ぬしの大磯で逝かれた日である。今日は自宅の授業の日に當つたので、朝早く墓參に出かけた。電車を音羽に下りる。初冬らしい曇り日が、何となくうらさびしい。櫻紅葉のかげ

に遊んでゐる鳩も寒さうな護國寺の前を通つて、小川を渡り、紙すきの小家についてだらだら坂をあがつて、左に折れると、赤土道の右側には、ポプラや公孫樹の小殖林がある。やがて墓地についた。茶屋に寄つて、手向の花をといふと、人の好ささうな老人が、折角であるが、榊と樒より無いと言ふ。年若く美しく世を終へた君の靈に手向けるのであるから、同じくは花をと思つて、近所で求めて來ては貰へまいかといふと、妻と見えるこれも親切さうな老女が、それならばといつて小さい庭に咲いた手造りの菊を切つてくれたので、それを手にして墓所へ行つた。

歩いてゆくと、去年の葬送の日の事が思ひ出される。墓域の前、去年の其の日、亡き人の遺子を抱いて乳母が立つてゐた草原には、今は新らしい墓が並んでゐる。

墓所の開き戸をあけて、墓標の前に立つ。記された文字の跡は未だ鮮かである。我々同人が手向にと植ゑた山茶花は、未だ蕾ながら活き〳〵として、まさに心づくしの花が開かうとしてゐる。菊を墓前に供へて、默然としてゐる。去年十一月四日の夕べ、大磯なる君の病床を見舞つた時、美しい頬に例のゑくぼをたたへて、苦しい中から種種話をされた面影が浮んで來て、涙が湧いて出る。

君は、その容に於いても、その心に於いても、又その才に於いても、花のごとく美しい人であつた。殊に文藝の方面に於いては、繪畫でも、音樂でも、詩歌でも、小說でも、戲曲でも、凡てに渉つて深い趣味と勝れた天才とを持つてゐた。中でも君の得意は小說にあつた。君は確かにその方面で更に一層の發展をしようとし、また自分も期してゐた。併し生前に於いて、勿論すでに女作家として世に認められてゐたが、君は丁度我が國最近の小說界の過渡時代に遭遇した人である。始めは紅葉を崇拜して、其の文體などに私淑してゐたが、後年は、夫君の親しい友人の夏目漱石氏の感化を受けた事が多かつた。婦人だけに、どうしても他人によつて影響され易かつたと思はれる。

併しその晩年、所謂自然派の盛んになつて來た機運に動かされては、君の心にも新たに自己の境地を開いて見ようとの考が起つた。これはその折々の君の言葉や、手紙によつて、自分の信ずるところである。思へば君になほ數年の齢を假して、君の才を一層發展させたかつた。君逝いて一年、わが文學界に於ける婦人の活動も漸う目覺しくなつて來た。君が生きて居られたらばと、事につけ折にふれて思ひ出でる。然るに君は最早此の墓の下の人である。君はまた家庭の人としても、温良貞淑な夫人であり、母であつた。友人としても眞心の厚い人であつた。日本婦人の美所を備へて、しかも新しい時勢、新しい機運に對して十分な理解力を有してゐた婦人と稱して最も適當な人であつた。その君は、最早ここに永久の眠についてゐるのである。

思ひ沈んで來ると、何となく自分の心と、君の靈とが天のいづこかで會つてゐるやうな心地がし、平生日々の忙しさに追はれて、思ひ浮べる暇もなくてゐる、死とか、人生とかいふ問題が、ひし／＼と心に迫つて來るのを覺える。我に返つて、墓所に別を告げて出た。向うに見えるのは、去年見おぼえの大公孫樹である。黄金色に色づいた梢には、雲間を洩れる朝日の光が漂よつてゐる。自分はなほも君の上を思ひつつ、去年葬送の歸さの同じ道を、とぼとぼとたどりゆくのであつた。

秋風に豊島が岡の公孫樹ちりて思ひ出おほき一年は來ぬ

ひと年は語らむ事の多かるを青踏うまれノラもうまれし

（明治四十四年十一月記）

森槐南博士

○（明治三十九年十月六日、麹町區永田町）

拜啓仕候。益々御勝常奉賀候。爾後掛違テ御疎濶ニ而已打過缺敬仕候。不悪乞御海恕。扨唐突ナガラ此程在輕井澤別莊之末松謙澄男ヨリ、同地霜葉今年ハ最早呈紅仕、本月中浣ハ見比ニ有之候ニ付、二三詩友同伴來游可仕旨申來、且其際是非ニ貴下御都合相伺御差支無之候ハヾ御同行申上候樣依賴有之、尤モ直接御案内狀モ差出可申筈ナレドモ、虚禮ヲ省略シ此儀小生ヨリ御傳言申上呉候樣トノ主旨ニ候。御都合如何有之候哉。生等ハ十三日（土曜）午前一番汽車ニテ相赴、翌日曜ヘ掛ケ緩々一游可仕ト略ボ同人間之内相談致置申候次第、先方書狀之趣ニ依レバ、貴下御承諾被成下候ヘバ可成同時ニ御出被下候樣致度トノ事ニ有之、想フニ準備之都合モ有之候儀故ト存候。自然御差支無之候ヘバ何卒被御繰合、同日御出掛相叶申候ハヾ大幸不過之候。尤モ期日之儀ハ仍餘日モ無之候譯ニハアラズ候故、御都合ニ依リテハ生等之日取相改メ申候テモ宜布、（先方ノ書状ニハ十二三日比トアリ）甚乍御手數御左右小生迄御答伏而奉願上候。先ハ前顯取急得貴意度如此候。艸々不莊。

十月初六日　　森　泰　二　郎

佐々木信綱大人

侍　史

追而　如御承知同地ハ氣候餔冷ヲ極メ申候趣、御出之節ハ充分防寒之御用意相願候旨、此又先方ヨリノ注意ニ有



森槐南博士と本田種竹君の詩

之候也。

輕井澤の淸遊

森槐南博士から、上に掲げた書狀をおくられたので、輕井澤の秋色を訪ねた。同行は、本田種竹、大久保湘南、永坂石埭、大江敬香の詩伯で、歌人は自分一人であつた。

汽車をおりて末松博士の泉源亭に小憩し、碓氷に登つて紅葉を賞し、歸つて各詩歌を賦した。

夜に入つては、末松夫人の斡旋で種々の興趣深き餘興があり、はじめて槐南博士の餘技の勸進帳を聽いたりした。體格ががつしりしてをられたので、聲量もゆたかであつた。翌日は、當時出來て間もない三笠ホテルに遊んだ。

このをり、君の母君なる春濤夫人國島せい刀自に、「一庭すゞめ」なる歌集のあることをはじめて聞いたが、歸來直ちに一本を贈られた。幕末の女歌人として珍らしく歌數が多く、

櫻田に事ありて後、又水戸の烈公も薨じ給ひぬと聞えける秋……

或は

……數々の國といふ國、大君の國と知らずや、赤夷汝が書くといふ、その文字の横さの道に、さそはむと帆を引く綱の……

など、慷慨の長歌の作もある。

「一庭すゞめ」を讀みつつ、博士の詩才學才は固より天稟なるべきも、先考及び母刀自の教養によることも多かつた

であらうと感ぜられた。

ここに圖版として掲げた書葉書は、末松夫人が紅葉を張られたのに、槐南、種竹二氏の題されたものである。

東久世竹亭伯

○（明治四十二年四月三日）

拜啓。國民歌集御惠投忝く、本日は雨中來客少く、終日机によりて通讀候が、國民の家庭に一本を備へて士女をして日夕讀ましむべき歌集とては、明倫歌集以外にあらざりしを、ここに此好書を得たるは、國民教育の上に益すくなからずと存じ候。讀み了りて感じたること多かりし中に、殊に、

先帝の

　この國は日の本なれば日かげより花鶯の春ぞみえゆく

の御製は、嘉永五年正月歌御會始によませたまへるにて、當時余は年若く近習にて御側近くさぶらひつゝ、かしこき御恩賴をかゞふりしことどもさまゞゝ思ひ浮べられたり。また條公の筑紫にての作は、四十五年前倶にさすらひし節のことども忍び出られて感慨すくなからず。また集中、そが歌を採録せる久坂通武、平野國臣、眞木保臣、武田正生、野村望東尼等の諸志士烈婦は、いづれも親しく面會して倶に國事を語りしことあり。今や大御國の御稜威

天の下にかがやきわたれる時に當り、余幸にながらへて此聖世にあへる喜ばしさにつけて、これら諸士の世にあらざること、おもへば條公のよまれたる、

たふれにし人こそあはれかくばかりなれるいさをは誰がいさをぞも

また加納諸平の、

君がため花と散りにしますらをに見せばやとおもふ御代の春かな

の二首、げにもと感深く候。おもひの儘を注して長文になりたれど、こもまた國民歌集をよみて感ぜし所に候。早々拜具。

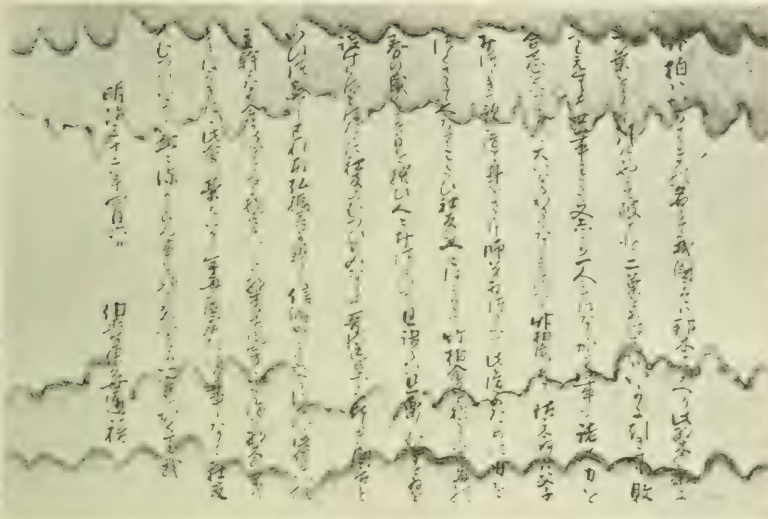
四月三日夜　　東久世通禧

佐々木大人

机下

高尾の觀楓

明治四十五年一月七日、木枯の風吹きすさぶ日、竹亭東久世伯の靈柩を增上寺に送りて、思ふ事多し。伯が、彼の七卿落の昔より晩年に至る公生涯の事蹟に就きて、また、伯が玲瓏玉のごとき人格を有し、詩歌に書畫に音樂に雜藝にくまなく達せられ、殆ど我が國舊時の教養を代表せられ、加ふるに泰西の學問にも通せられ居りし事などに就きては、今更に予が記す迄もなき所なり。予は唯久しく知遇を忝うしたる高誼につけて、一二の感想



（東久世竹亭伯文詞）

を述べむとす。

伯は我が父に歌を示されしかば、そをえにしにて予にも擬詠草を示され、我が家の歌會にも臨まれたりき。されば今より十數年前、毎年春季を卜して竹柏會の大會を催さむと思ひ立ちし折も、先づ伯に圖りしに、いたく賛せられ、その第一回の折は親しく祝辭を讀み給はりき。其の後も年々の會には殆ど缺かさず出席せられぬ。我が維新の活ける歷史ともいふべき此の老貴族の姿を會衆のうちに見出づることは、われら同人の喜なりき。

伯は其の歌風に於いては素より舊派の風を詠まれしも、新しき歌風に對する理解力、鑑賞力を缺かれざりき。そは、新しき歌集などを讀みつつ、言短きも適切なる批評を折々加へられたりき。予は私かに思ふ。伯の歌風に、實にわが堂上派の歌風のよき意味に於ける最後の典型にておはしきと。其の温雅なる點に於いて殊に然り。しかも伯は、歌才に於いて決して專門歌人に下られざりき。殊に壯年九州に於いて詠ぜられし幾首の名歌のごときは、長く歷史と共に傳ふるに足るべし。

最後に予が伯より聞きて心に殘れる一つの物語を記して此の

文を終へむとす。伯未だ十餘歳の少年におはせし頃、高尾の紅葉見に物せられし事ありき。一茶店に休はれしに、恰もその主人が新しき障子を水にひたして紙をはがしとれるを見、怪しみて何故ぞと問はれしに、主人の答ふるやう、今しも千種(有功)卿の立寄り給ひて、戯れに此の障子に一筆書きて行き給ひぬ。名たたる卿の御筆のあとなれば、斯くははがしとりて保存せまほしと思ひ侍るなりと。伯は胸の中に、まことに如何なる方面にせよ、人に拔け出でんこそあらまほしきわざなれ、我等がざれ書ならば唯主人の叱りをうくるのみならむを、卿なればこそ、假初の一筆も斯くはめでらるるなれ、いかで我も、君に仕へ國に盡くして人にあがめらるる人にならむと、いたく感奮せられきとぞ。こは伯が立志傳の第一頁を飾るべきものがたりといひつべし。

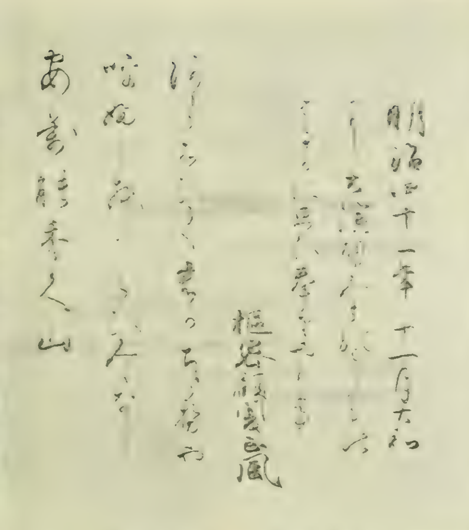
ここに蕪辭をつらねて、故伯を追懷しまつると云爾。(明治四十五年一月記)

高崎正風先生

明治歌壇の大いなる光

高崎正風先生が、若くして國事に盡瘁され、或は海外に赴かれ、或は榮職に在つて國家に盡くされた公生涯に就いては他に述べる人があらう。歌人としての先生に就いて見ると、先生の第一の功と申すべきは、御歌所長として能く御盡くしになつた事である。申すも畏けれど、わが明治天皇は帝王の歌聖と稱し奉るべく、御歌に堪能であら

せられる。固より陛下の偉大なる御人格の發露であらせられるが、歌道の御師として、能く補作し奉つた功また尠なからずと申すべきである。殊に近年、御製の中から國民道德の基礎にたるべきを選んで、或は國民讀本に掲げ、或は折に觸れては世に傳へ、以て國民をして、愈ゝ尊き大御心を普く知らしむるやうになつたのは、全く先生の功である。



（あらそひてそがやよばふらむ畝傍耳梨天の香具山）

高崎正風先生色紙

香川景樹は徳川時代一流の歌才ではあるが、其の桂園の流派が隆盛に赴いて、新派の和歌が勃興するまで、桂の下風が天の下を靡かしたのも、また先生の力多きによる。

先生には歌學上の著書の刊行されたるものは多くないが、嘗て新年の御講書始に進講せられた筆記、名古屋の歌會の席で述べられた歌論などが、刊行されてゐる。先生は景樹を尚び、隨つて景樹が尚んだ貫之を仰いで、その古今集の序文を歌道の根本とせられたのである。先生の家集は、やんごとなきあたりからの仰で、數十年間の作の中から秀逸を選んだのが既に脱稿してゐる。先生の道に志篤きや、後進予の如きにも其の稿を示し給うて意見を問ひ給うた。予は忌憚なく其の中の數十首に就いて申し述べたことがある。然るに、その刊行を見ないで世を去り給うたのは、痛歎の極みである。

先生は非常に情に篤かつた。先生は年若うして、京都で、景樹の子なる景恒に暫時の間歌を學ばれた。しかして

景恒の子の景敏が零落してをることを聞いて、景恒の未亡人と景敏とその弟とを永田町の邸内に置き、景敏に歌を教へられたが、後に御歌所へ出るやうになつた。然るに景敏君は不幸にして世を早うしたのはまことに惜しむべきであるが、先生が先師の遺族に對して盡くされた至情は、實に尊いものである。

明治の歌壇の最も大いなる光が消えたと云ふことは、我が歌界の大なる歎であるのみならず、予一個人にとつても、幼時親しく薫陶を忝うした身の、ひたすら哀悼の情に堪へぬことである。


（朝夕にはらふ箒の川風に夏こそたけれ蘆原の里）

石川啄木君

（明治三十八年一月、東京牛込砂土原町三丁目。盛岡市大澤川原小路金田一京助君宛。後にしるすごとく、啄木君の書翰が見當らなかつたに、金田一君より本書の資料として贈られたのである。）

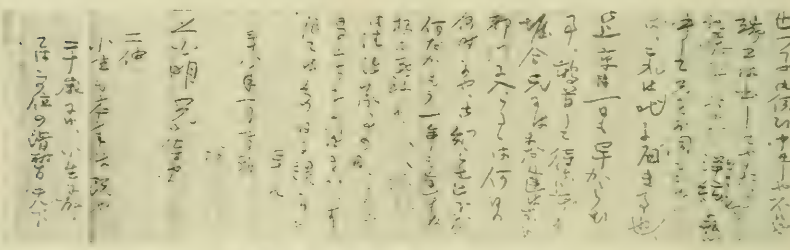
拜啓。御上京の日が日一日と近くは、軈て小生の御無沙汰が日一日と延ばされたる譯、何とも御申譯なき次第に有之候。舊年末にはトンダ御願ひ、早速御聞き上げ被下候ふ事、御芳情誠に〳〵鳴謝に不堪候。直ちに端書なりと差上

げし筈に候ひしが、或はこの歸便時間不調の場合故、遲達はせざりしやと心配仕居候。何はともあれ、御蔭にて安安と越年候事、一に兄の御高懷による儀と落淚致候。

偖而、明け渡りぬるこの春、故里の雪は紅か紫か、千里何所も同風の新光に、誰人の心の琴も同じ調に喜びの節傳へたる事と存じ候。羨しき御家は、兄歸られて殊にやはらぎの春御淸福の程奉熱禱候。

京の春は、旅順の陷落に沸る許の騷ぎ、花電車と云ふものに、小生は初めて乘つて見候。お正月にツントすまし込む奴は、まだ悟り切れぬ連中なるべく、などと悟つた風な眞似をして、散々急はしく祝ひ廻り候。加留多戰の徹夜なども、明けてのお白粉顏が存分をかしみのあるもの、但そのまま宿にかへつて來て婢に笑はるるなどに至つては少しをかしみが過ぎる也。一昨五日は新詩社の新年會、めづらしくも上田敏、馬場孤蝶、蒲原有明、石井柏亭などの面々も出席、女子大學よりは、「戀衣」の山川登美子增田まさ子のお二方見え候ひき。早天より終日氣焰の共進會と云つた樣な痛快のあつまりにて、又、文壇への謀反も二つ三つ共議に上り申候。合計にて二十七八名も有之候。蒲原有明と云ふ男、餘程喰へぬ樣な奴に候へど、又、案外お手のものに候。話して見ては林外などより厭氣のない奴、小生には少々好からぬたくらみも有之候。呵々。席上にて公開したる女詩人達よりのお年玉、贈らるる人の歌に因んだものにて、平野萬里君へは、「み膝に置かむ、戀しくばつけ」にて美しい手包一つ。川上櫻翠君へは、「み手を知りしは夢かあらぬか」にてうす紅色の手袋。脊梧君へは、「……夜殿に出る數ともなり、羅綾の袂玉の手に死なむ」にて淡紅色の木綿にて縫ひ上げたる長い袂一つ。鐵幹氏へは、「ひする十六我れ二十八」など判じ物的にやりたるに付滿座拍手致候。これに奮慨して男の方の平出露花、川上櫻翠、大井脊梧らの數君、急案急製、やがて女詩人方へ、矢張り公開の御年玉をやる事と相成り候處、奇想天外、とみ子女史へ「……たま〳〵燭は百にも增さむ」

にて燭臺へ蠟燭十本許りを一束に立てて火を點じたるを出したるなど、就中一座を驚かし申候。夜に入りて大方は散會、殘つたる主人夫妻と山川增田の二女史、蒼梧、萬里、茅野蕭々と小生と八人にて徹宵吟會を催し、皆々多少作有之候ひしが、小生は十六行の一詩と外に未完の詩一章を得申候。但二時頃より、終日舌戰の勞ありたるためか、蕭々先づたふれ、主人たふれ、蒼梧たふれ、隣室の秀樣泣き出したるに晶子女史も座を立たれて、殘れるは四人、それも曉に一時間許りは息ひ申候。昨朝は女詩人達のお手料理、あつさりしたるはお歌に似合はぬを却つて趣味ある事に舌を鼓し候。宿にかへれるは午前十時、几上にありたる急信二三に返書認めて午後二時より就床、暮に二時間許り起きて晩餐をとり、ただちに



(金田一君宛の啄木君書翰)

また華胥の國に遊びて、今朝は八時漸く目さまし申候。この寢坊には我乍ら驚き申候。

明星一號に、既に御讀被遊候や、綱島氏の一文と泣菫氏の詩、上田氏の譯詩「春の夜」それから平野萬里が小曲三章、これは三嘆也。小生は十一月號にて少し變つたものを御目にかけたく存じ候。矢張詩也。本月の明星は評壇に活動致す筈に候

小生先月の何となき不健康、それは脚氣の前徴なりし事今に至りて解り申候。病も暇多き時はよろしく候へど、目下の身にとりては歸鄕すべくあまりに世の中が活々致し居る事故、チト困り候。

青森にお出で遊ばされし由、御詩緖の情鳴、弟樣への御涙には、我もここにてもらひ泣致し候。

せつ子御伺ひ申せしや否や、端書は出して

やりたる筈に記憶致し居候が、洋絃（ヴァイオリン）に熱中して兄をお伺もせぬとならば、これは叱るべき事也。御上京一日も早からむ事、鶴首して待ち上げ候。堀合兄にはまだ逢はず候。都門に入らるゝは何日の何時にや、御知らせ被下度、何だかもう一年も逢はぬ様な氣致し候。久し振りにて御清話承る日、この二三日のうちたるべきか、すべてはその日に讓り申候。

三十八年一月七日朝　啄木生

花明兄

御侍史

二伸、

小生も本年は既や二十歳に候。小生に取りてはこの位の滑稽天下に無之候。

夜更けたる千駄木の通

文壇には、すぐれた才能を持ちながら生涯不遇に終り、しかも歿後に其の名の高くあがる人々がある。言道と、啄木との二人は、歌風は無論違ふが、境遇に於いてよく相似てをる。

言道は、その家集の序に、一首でも採るべきがあれば幸であると謙遜してゐるが、今日では、人麿、赤人等藤原奈良朝以來明治以前にかけて、若し新たに三十六人の歌人を選ぶとすれば、必ずその撰に入るべき人で、啄木また明治以後の三十六人を選ぶとすれば、必ずその一人なるべき人である。

○

何故かうかとなさけなくなり、
弱い心を何度も叱り、
金かりに行く。

○

待てど、待てど、
来る筈の人の来ぬ日なりき、
机の位置を此処に変へしは。

○

~~二三行なれど、~~
古新聞！
おやこゝにおれの歌の事を
~~自分の歌の事を~~賞めて書いてあり
~~古新聞かな。~~二三行なれど。

○

引越しの朝の足もとに落ちてゐぬ、
女の写真！
忘れゐし写真！

石川啄木君歌稿

啄木君と初めて會つたのは、森鷗外博士の歌會で、夜更けて共に千駄木の通を話しながら歸つたことであつた。終りに逢つたのは、本郷三丁目の電車の中で、吊革につかまつてゐながら、傍の老人を、これは父であると紹介された時のことである。

曾て北海道に旅して、湯の川溫泉に行く途上の砂丘を、啄木氏がピストルをうづめた地であると、說明をきいたことであつたが、もはや啄木君による新名所が出來てゐるのである。

墓地は、函館のうちで景勝の地なる立待崎のうち、ことに景勝の地點に建てられてある。しかも墓石は大理石にその書翰を彫つた實に立派なものである。生前の啄木君とは、あまりにへだたり過ぎてゐるやうにふと感じたことであつた。

ここに啄木君が心の花に寄せられた歌を掲げておく。

浪淘沙　　石川啄木

投げやりし爆彈(ばくだん)の爆ぜぬごとくにもかひなきことを言ひ出でしかな
めぐりあひて我がうち出づるいちじろきその日死なむと誓ひは立てき
ストーヴの火消ゆるも知らでありし夜は君の淚もあたたかなりき
戀ふるてふことに生命(いのち)をかへがたき丈夫(ますらを)こそは悲しかりけれ
ただ言(こと)をはつかに語り別れたる別れを思ふ悲しき日かな
かり／＼とペン走る音屋根裏の壁にしみゆく夜ぞ更けたんな

猫の目は暗にぞ光るぞを思ひ君とむかひて灯を明くしぬ

つかれたる牛の涎はたら／＼と千萬年もつきざる如し

相似ても遂に合はざる水と油それに釘する愚かさもすや

あらかじめ我の大人になる時を期せしと如く君言ふものか

相見れば筧の水のとく／＼と盡きぬ言葉にかまけてをれや

みちのくの白雲の山に人知れず咲くとふ花によそへて悲し

こと／＼と羽目板を蹴る眞夜中の馬の灯を見るまなざしもよし

せきあげて泣くことも知らずいつしかに大人になりぬ悲しと思ふ

ふら／＼と赤きごむ玉小春日の空にとぶ如き思なるかな

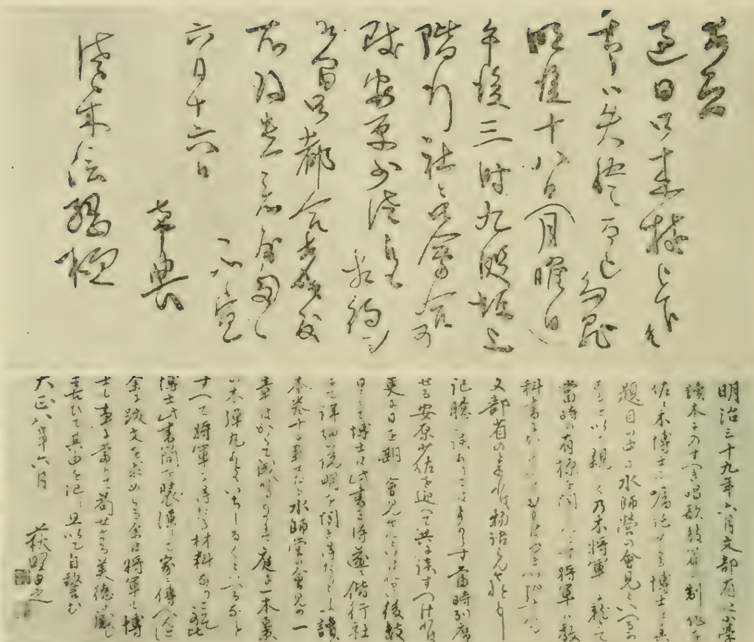
愚なることをしいでて面染めしその幼さもいとしかりけり

さりげなき言葉言葉のいとぐちの手繰りがたなきことをのたまふ

浪淘沙長くもこゑをふるはせて歌ふがごとくさすらひて來ぬ（北海回顧）

故もなく涙しながる何方にかいのちあやふく君病む如し

以上は、明治四十一年十二月の心の花に載せたものである。これより前、同年七月號に原稿を送つてくれられたが「少しはゞかることがあるから」とて、ペンネームで掲げたことであつた。即ち「緑の旗」といふ題目、工藤甫といふ名で、五十八首掲げてある。その時の手紙は保存してあつたが、あやにくに今見あたらぬ。



（乃木將軍書簡と萩野博士添文）

乃木希典將軍

○（明治卅九年六月十六日）

拜啓。過日御來枝被下候節は、失禮而已多罪。明後十八日（月曜日）午後三時、九段坂上階行社に御會合可致、安原少佐へも相約し候間、御都合相成度、右得貴意度、匆々不宣。

六月十六日　　希典

佐々木信綱樣

乃木將軍の印象

明治天皇の御大喪儀を送り奉りて、歸りし夜半の思も深く、明くれば九月十四日、新聞の來るを遲しと手にとりて、昨夜の悲しくはた神々しき御有樣など、再び思ひおこしつつありしに、眼はふと乃木大

將夫妻白刄の文字に觸れて、いたく打驚きぬ。はじめは訛傳ならずやと思ひしが、數種の新聞の報ずるところに、悲しくも疑ふべからざる事實なりき。

武士道の精華を傳へし崇高なる人格、世界を驚かし赫々の功績、わが國家の寶なりし將軍と、その貞淑なる夫人とは、自ら失せ給ひけるか。

おもへば、曾て文部省より小學讀本の中に編入すべき唱歌數篇の作歌を委囑せられし事ありき。其のうちに、水師營の會見といふ題目ありしかば、固より世にきこえたる事實なれども、いやが上にも正確なるを期し、又、いやが上にも明らかなる印象を得たきことを期して、森軍醫總監の紹介を得て、將軍を赤坂の邸に訪ひしことありき。刺を通じて應接間に入れば、將軍は直ちに出で來られ、その談話の間にも、謹嚴にして且つ率直謹嚴なる將軍の人格は、わが心に深く印せらるるをおぼえぬ。會見當時のことに就いては改めて委しく語るべしとのことにて、その日は、專ら和歌に關する物語などして歸りぬ。

數日にして、將軍より、偕行社にて會ふべき由、日時を定めていひおこせられつれば、行きぬ。その日將軍は、旅順降服當時の副官を伴ひ來られ、つぶさに會見當時の樣を語られぬ。即ちその日聞き得しところによりてものせし歌詞が、現行尋常小學讀本卷十に收めたるものなり。固より小學生の料として、長さ、文字などの上にも制限せられつれば、予が特に將軍の直話によりて得たる感銘、また知り得たる事實を十分に歌ひ出だすを得ざりしが、篇中「庭に一本棗の木」ありし光景を歌へるは、實に將軍よりはじめて聞き得し所なりしなり。

その後、間もなく末松子の境山の邸に觀月の宴のありし時、相會せしに、蟲の音繁き庭園の木蔭に、少し景れる月光を仰ぎつつ、旅順の荒あとに咲ける撫子をあはれと愛でられし將軍の歌がたりは、今も耳底に殘れり。

最近に親しく詞を交はししは、過ぎし七月十日、明治天皇陛下、東京帝國大學に行幸の時なりき。天覽所の天覽をへて、便殿にいこはせ給へる時、將軍は人々と共に室內に入り來られ、予が說明し奉りし中山侯爵家の類聚古集の前に立ちて、暫し言葉をかはされたりき。

畏くも當時親しく御稜威に接しまつり、天顏の美はしきを拜し奉りし陛下の、思ひもかけぬ御大喪儀を送りまつりしその日さへあるに、又新たに御あとを追ひて、將軍が自ら刄に伏し給へりとの悲報を耳にす　感慨何ぞ堪ふべけむ。ああ精忠無二なるわが將軍よ、武士道の名譽を一身にあつめて、國家の至寶たりしわが旅順の名將軍よ、髣髴たる溫容耳にあれども、すでに世にいまさぬこそ悲しききはみなれ。

本居豐穎先生

○　(明治四十四年八月三日)

拜啓。兎角天候不同、愈御清健奉賀候。過日御談の金鈴遺響の序文別紙に認め試候間、一應懸御目候。尙改作候ても不苦候間、無御隔意賢慮御示諭被下度候。また、大平の女にすが子といふは無之樣にて、大平の子は、

建　正　母　中村氏須磨子

清　島　〃　同　前

女子みち　母　須賀氏坂子
女子くま　〃　同
女子伊豆　〃　同
女子藤　母　宮崎氏都豆子
　内遠ノ配
女子小百合　母　同
安松　〃　同
永平　〃　同

右之通り、此中にて、みち、くま、いづなどすがといひし事ある歟。又は妻須賀氏なるが故、坂子を誤りたる歟。不審に御座候。金鈴遺響寫は追て返上可仕候。老生儀來七八日比より一寸旅行可仕、廿日過には歸宅之積に御坐候　頓首

八月三日　豊穎

佐々木賢臺

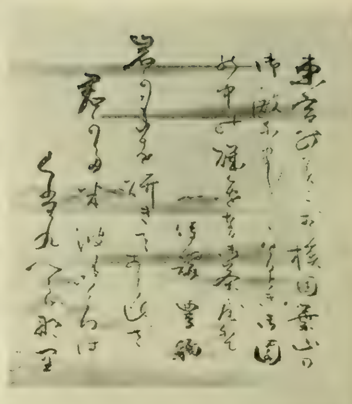
（金鈴遺響は、亡父二十年祭の記念にとて、明治四十五年に出版すべく、先生に序文を請ひ、かつ文中の解説の爲め、大平翁の女に就いておたづねしたのであつた。）

波もこころは

古典科で教を受けた本居先生には、自分がまだ幼くして伊勢松坂にあつた頃、宣長翁の山室山の祭典に東京から

わざ／＼來られた折はじめてお目にかゝつたのであつた。東京に出づるや、直ちに御徒士町の家にお伺ひし、後江戸川端に、青山に、居を移されてもいつもおたづねした。

續日本歌學全書編纂の際には、本居翁の自撰歌を借覽するを得て收載し、またその收藏の書翰帖を借りては、未知の文藝資料を多く得たことであつた。先生は神田神社の宮司を多年つとめられた。先生の祝詞をよまれる聲は、神もうけ給ふとおもはれるよき聲であつた。



後、大正天皇の皇太子殿下であらせられた頃、侍講として御講義をせられた。ここに掲げた色紙は、當時の作を書いて贈られたものである。

木村正辭博士

○（明治四十三年六月四日、下谷區入谷町、葉書。）

拜啓。愈御多祥奉賀候。然者元暦萬葉展覽の事、來ル六日ヨリ十日マデノ內、午後一時ヨリ參上可仕、右ノ內ニテ御都合ノ日御示シ被下度、且水野家邸ノ所在御教示可被下候。又同刻御出車願上候。外に一名書記用ノ者同道いた

し度、此段御告知被下置候樣、是又願上置候。敬具。六月四日。

不朽の功績

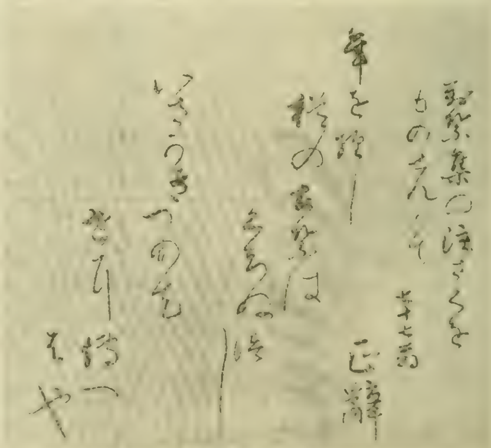
文學博士[illegible]木村正辭先生、世を去り給へり。先生は明治國學界の諸老先生中にても、最も學界に功勞多き碩學にておはしき。先生が、明治初年に語彙の編輯を政府に建議せられし事、師範學校の創設に力を盡くされし事、憲法史料を編し、また民法の制定に與かられし事、帝國大學をはじめ余多の學校に教へて、人才を養成せられし事など、總じて明治文明の建設に直接貢獻せられし教育法制等の方面の功勞に就いては、他に說く人あらむ。予として先生の爲めに特に說かざるべからざるは、萬葉學者としての方面なり。先生は萬葉學に於いては契沖、眞淵、雅澄等の諸家と相並ぶべき大家にておはしき。先生は、岡本保孝の門に出で、早くより萬葉研究に志され、古書を蒐輯してその校勘の事にいそしまれ、慶應の頃には、已に萬葉集書目を著されたり。後に增加せられし書目提要は、萬葉學上必須の書として、今に於いてなほ學者の恩澤を蒙る所たり。先生の萬葉研究は、言ふまでもなく德川時代諸學者の後を承けて、訓詁註釋の方面を專らとせられしかど、特に況齋の學を傳へて、音韻の方面に詳しく、その深邃精緻の學風の中に、しば／＼卓見の閃きを認めしむるものありき。隨つて、江戸時代


（書齋に於ける木村先生）

の諸學者が苦心開拓せし萬葉學は、明治に入り、先生に依りて補正せられしもの多く、或る意味に於いてほぼ大成せられし觀あり。先生が生前公けにせられし萬葉集美夫君志は、わづかに一二の卷のみにて、先生が生涯の研究のわづかに一端を洩らされしものなるが、しかも、萬葉學上、代匠記、古義と相並ぶべき名著たり。しかして、代匠記また、先生の手によりて世に公にせられたり。

予大學古典科に學びし以來、先生の指導感化を蒙りしこと多く、先生がまことに權威ある學者におはせし事を感銘せり。殊に、先生が學問上に於ける公平無私なる襟懷に至りては、多く得易からず、予が年來萬葉の研究に心を潜めたる事に就いても、先生はいたく之を喜びとせられ、その蒐輯せられし貴重なる資料を始め、苦心研究の結果に成りし草稿類をも、實に前後二回まで全部取出でて示されたるが如き、予が感激に堪へずとする所なり。元暦校本萬葉集は、先生が唯一の影寫本を有し給へりし所なるを、予がその原本を水野家に發見するや、先生はいたく喜ばれて、予と共に水野家に至りて、親しくそを閲覽せられき。かかる際に他の發見を喜ばざらむとするがごとき俗情と狹量とは、もとより先生に於いては、寸毫も之を有せられざりしところなり。

美夫君志第二帙の成るや、人々相謀りて、先生の爲めに賀宴を開きしが、當時人々に頒たれし國寄後集の選びについては、先生の囑によりて、予之に與かりたりき。その頃より漸う病に親しみ給へりしが、予が年來の宿志の一



（木村先生の筆蹟）

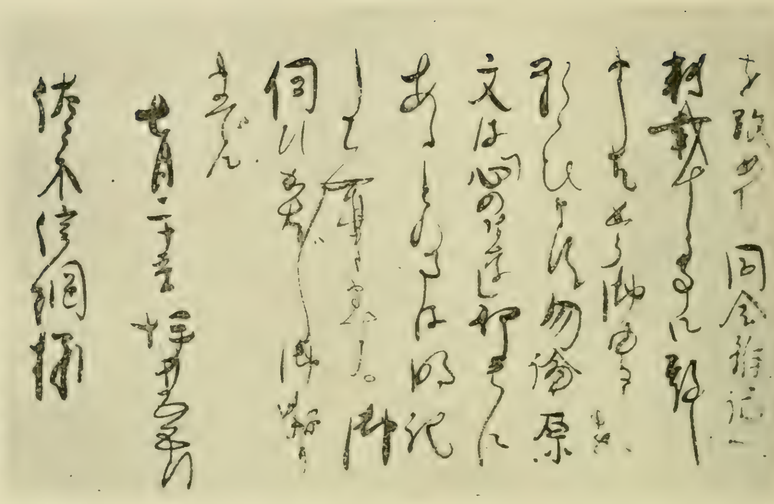
つとして公にせまほしく思へる改訂萬葉集の序は、先生を煩はすべく、草稿を携へ行きて序詞をこひしに、先生に病中なれど快く諾ひて筆を執り給ひき。書未だ成らずして、先生に見せまつらむすべ、とこしへにあらずなりぬ。先生が逝去は、ひとり學界の爲のみならず、予一身にとりても哀惜の情に堪へざる所なり。

先生は生前その書齋の床に、常に尊信せられし本居翁の像と、岡本翁の像と、岡本翁の訓誡の文の幅とを掛けて、絶えて他を掛くることをし給はざりき。この一事は、小なりといへども、また先生の樸實重厚なる爲人の一端を示せるを覺ゆ。先生は眞に學者らしき學者にておはしき。今や高き齡の間に多くの朽ちせぬ功績を學界に遺しつつ、我が萬葉學史上の歷史的一大學者として身まかり給ひぬ。先生が幾多の著述は、國文學史上の一古典とはなりぬ。先生のごとき學者と世を同じうし、あまつさへ教を忝うしつる幸を思ふにつけても、あはれ數ならずとも、先生の志を承けて、萬葉の學問に些かたりとも寄與する所なからでやはと、我ながらうち勵まるるになむ。

坪井正五郎博士

○（明治廿九年七月廿三日、本郷西片町）

暑氣がはげしうございますが、御障りもあらせられませんか御伺ひ致します。「心の花」へ何か御送り致さうと思ひ居りながら、まだ適當な考が出ませんので、御無沙汰致し居ります。曾て御揭載になりました「未開人種の歌心」



（坪井正五郎博士書簡）

人類學會々員にも示したき點がございますので、此度、此處彼處字句を改めて同會雜誌へ轉載する事に致しましたから、御ゆるしを願ひます。勿論原文は、「心の花」何號にありとの事は明記して置きます。御伺ひかたがた御斷りまでに。

七月二十三日　　　坪井正五郎

佐佐木信綱様

「未開人種の歌心」

坪井博士のはやく著はされた看板考は、博士の考古學の友人なる根岸武香君から贈られて、面白く讀んだことであつたが、ついで同君を介して、上代人の生活を知るべく博士にお會ひして、話を伺つたことがあつた。

書簡中の「未開人種の歌心」は、明治卅八年竹柏會の大會に於いての講演の速記が、心の花十卷第二號に載せてある、そのことである。

まことに名調子で、長時間にわたつて興味深く話され、未開

各國に於ける歌を、一々説明せられた。中にも、亞弗利加のウガンダ地方の舟唄を朗讀された。

ウンソロングバ　カンピテピテ　クンヤンジヤ
ウンソロングバ　ヲルイライタ　クンヤンジヤ
ウンソロングバ　カンピテピテ　クンヤンジヤ
ウンソロングバ　カンピテピテ　クンヤンジヤ
ウンソロングバ

調おもしろく朗讀されたので、人々皆ききほれたことであつた。

後、大學の山上集會所でしば〳〵博士の巧みな面白い談話を聞いたことであつた。坂井久良岐君の、から橋を渡れば坪井正五郎といふ川柳があるが、今自分は坪井博士の邸のあつた附近に住み、朝夕に其の前わたりをするにつけても、博士がはやく露國で客死せられたことを惜しく思ふことである。

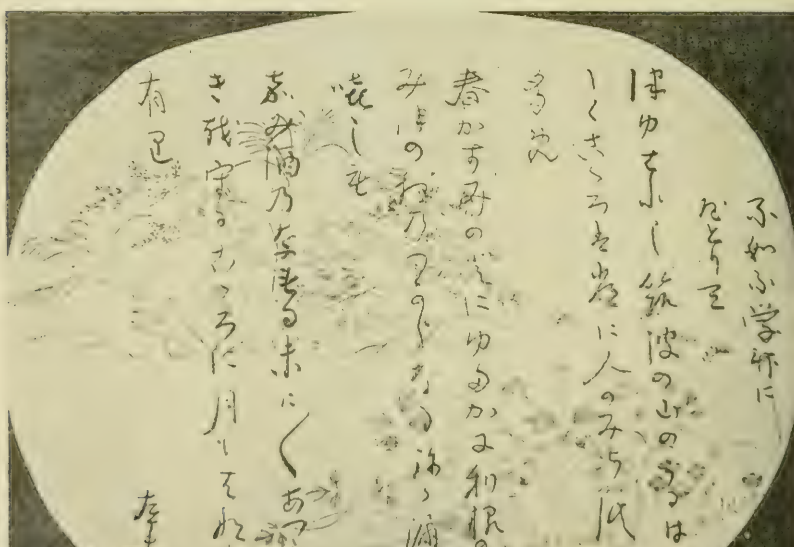
伊藤左千夫君

（圖版の三首の歌は左千夫君は千葉縣成東附近の人であり、同縣香取郡神崎町の寺田憲君と親しかつたので、寺田君の不如不學齋に宿つた折のを裝幀したものである。）

名古屋の一夜

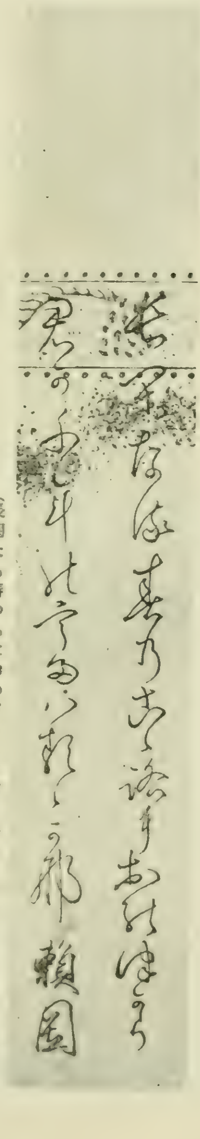
犬山城にのぼり、木曾川で今宵はじめて催すといふ鵜飼を見て、夜遲く名古屋に歸り、東京の新聞を見ると、伊藤左千夫君の訃報が載つて居る。驚きと悼みにみちた胸には、ふと數年前、建業の雨花臺にのぼり、秦淮に遊んだ歸途、菊池君から落合君の逝去を聞いて、かつ驚きかつ悼んだ事が思ひあはされて、いろ／＼思ひ續けた。

日露の戰役から歸られた鷗外博士は、明治四十年の三月、その觀潮樓に於いて毎月歌會を催された。根岸派の伊藤君と新詩社の與謝野寛君と、自分とを中心とし、故石川啄木、吉井勇、太田正雄、平野萬里氏等が來會して、四十二年の夏まで繼續したことであつた。その歌會の夜は、いつも夜が更けて、人通りの絶えた千駄木から本郷の通を、伊藤君や與謝野君と並んで話しつつ歸つて來た。伊藤君のあのしつかりした體格、重みのある中に愛嬌のあつた聲音、それと、今日のぼつた天守閣の眺め、鵜飼の



かがり、おぼろげになつた南京の景、萩の舍主人の風姿などが、かはるがはる見え聞えるやうで、旅の一夜を眠らずして夏の夜はしら〴〵と明けそめた。

井上頼圀博士



（長閑なる春の心におのづから君が千年のうたはるゝかた　頼圀）

○　（明治四十四年八月十三日）

拜復胃病にて三日間絶食、非常之痛に付今朝缺敬御海容願上候。曾我部の關市令は、板本にて往々書林に見受申候。神社協會雜誌羽倉翁略傳御轉載之儀差支無く、此段申上候。亂筆御ゆるし願候也。

八月十三日　頼圀

佐々木大人

玉臺下

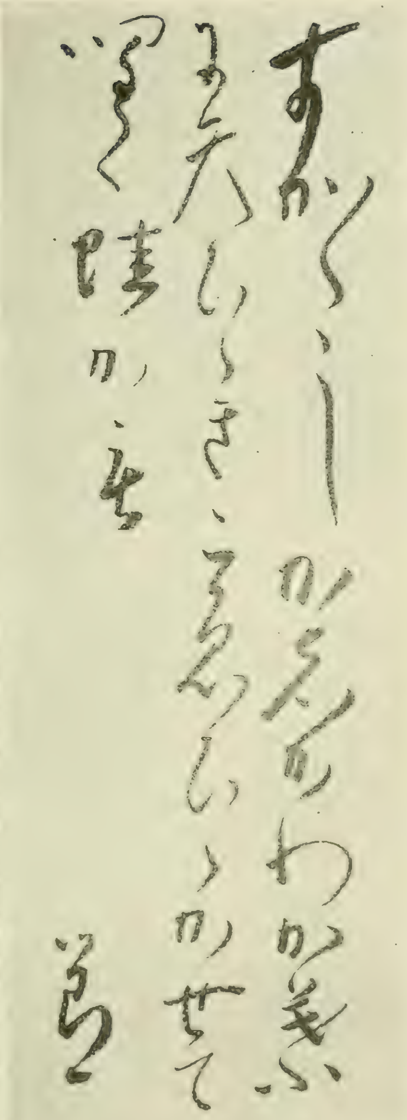
明治時代の藏書家

明治時代の學者には、藏書家が多かつた。今日のやうな圖書館の設備の乏しかつた時代では、學者は何うしても多くの書物を架藏しなくてはならなかつた。それと同時に、古書に對する趣味が深くなければ、容易にあつまらなかつたのである。

小中村、木村、小杉先生、黑川眞賴博士等皆藏書家であつたが、就中井上賴圀翁の藏書は其の數が多く、自分は屢訪うて多くの益を得たことである。萬葉集古義のごときは、木版本も版行されない前、翁所藏の寫本を借覽して、自分の萬葉集研究に最も大きい刺戟を與へられたものである。その他、自分の日本歌學史は、大學に於ける講義を本としたものであるが、其の材料の中なる鈴木雅之の歌學正言、歌學新語等、他になくして、先生の藏書中に見るを得たものがあるのである。

また當時、わが竹柏會の毎月十一日の歌會では、斯界の老大家に請うて講話をお賴みした。翁も數回來て下さつた。翁は座談が巧みで、また酒をも好み嗜まれたので、かの酒好きの安藤野鴈の事を話された時は、野鴈が一杯の酒を、なめるやうにして愛し飲むさまを、手振を加へて話された樣子など、今も見えるやうである。

長塚節君



（すがノヽし我が若妻に人ひとり[illegible]ひとたが、晴の朝かも　節）

鯉　幟

長塚君の名を初めて聞いたのは、竹柏會の同人なる千葉縣の寺田憲君よりであつた。兩君は、緣戚の間である。節君は水戸中學校を終へて神經衰弱にかかり、療養のため、當時在京の憲君の實父の家に、數年間憲君と同居してをり、憲君は歌の話を毎日のやうにきかされて遂に歌を詠みはじめて、後にわが會の同人になつたとのことであつた。當時節君は、新小說、中學世界などに毎月投稿してをつた。節君の二十歲の頃、自分が新小說の歌の選をしてをつたに、鯉幟といふ課題で、節君の歌を一等に選んだ。節君は非常に喜んで、その賞金で、世界地圖等を買つたとのことである。その歌は、

　生れしは男の子なるらむあやめ草ふ
　　ける軒端にのぼりたてたり

といふのであつた。この入選以來、節君は一層作歌に熱心するやうになつたといふ。

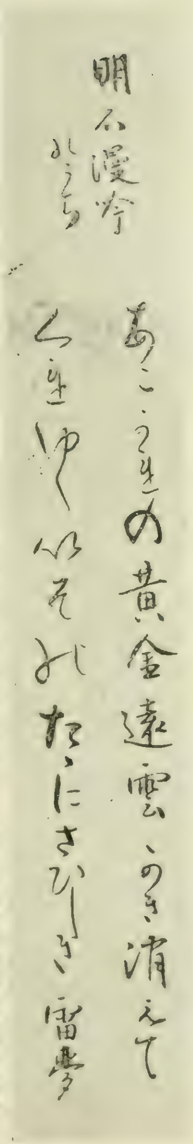
　君の歿後間もなく、福岡に、大隈言道の遺跡を訪ねた際、君の病を治療された久保猪之吉博士と逢つて、博士から病中の君の話を聞き、また書かれたものを見せてもらつたりした。しかして、かの一鍼の如く、鋭い心を持つた君が、早く



失はしめた病を且つにくみ、且つ歎じたことであつたが、又、その病のゆゑにあのやうな歌が生れたのではなからうかとも思うたことであつた。

（圖版は、明治三十八年六月、茨城縣結城郡岡田村にありし節君より、千葉縣滑川町なる竹柏會同人高橋刀畔氏に寄せた葉書で、自ら水彩繪具を以てゑがき、下に歌を記したもの。
炭燒トイフコトヲシツヽ詠メル歌ノウチ、炭ガマノ灰掻キ篩フ垣ノ外ノ竹ノ林ノナルコユリノ花　スミガマノ夜見ニ行ケバ垣ノ外ニ迫レルガゴト蛙キコエ來）

島地雷夢君



（あこがれの黄金遠雲かき消えてくれゆく旅のたゞにさびしき　雷夢）

追悼會にて

今は十數年前の夏、大磯に暑を避けてゐた時、同じ地にあつた高山樗牛君と逢つて、屢文學談を交へたことであつた。その時樗牛君に、將來最も囑望すべき若い人の名をきいた時、當時大學の學生であつた島地雷夢君が、頭腦もよく、文章もすぐれてをるといふ事を聞いた。これが、雷夢君について聞いた最初である。

然るにその後、東京に於いて、畫家松井氏の家に招かれた際、同じく客となつて晩餐をともにした年若い大學生の中に、偶然にも島地君があつた。これが島地君と親しく逢ひ、また親しく語つた始であつた。しかして同じ時に會した人々は、いづれも島地君の親友で、當時の大學生なる齋藤、內ケ崎、小山、三澤の諸氏であつた。其の後も松井氏の家へ招かれた折ごとに君に會つた。

これが縁となつて、君は齋藤君と共に度々自分の家を訪はれ、歌語りを交はした。君も亦しばしば歌を詠んで示された。その後、君の妹君なるあつ子さんが竹柏會に入られて、君との因縁がいよいよ深くなつた。（あつ子さんは、後に大等師の夫人となられた。）

君が神戸に靜養せられるやうになつてからも、度々手紙に接した。ことに須磨にある社友朝場重三氏と親しくされるやうになつたので、折にふれては共に歌をかいた寄せ書の端書などをおこされた。自分は、この病める才人のとく恢復せられむことを祈つてやまなかつた。

然るに一昨年であつたか、大學に講義に行く途上、思ひもかけず、から橋のほとりで君の自分を訪はるるに逢つたので、大學までの道々物語をしつつ行つて別れた。その時は君も大分健かになられたやうに見うけて、心ひそかに君の爲めに喜んだことであつた。

君の訃を聞いて、かつ驚きかつ悼んだことであつたが、それから早も一年を過ぎて、今や今日の此の追悼會を催さるることとなつた。回想すれば、實に、その才とその學とを十分に發揮するにいたらず、秀でた穗にしてみのらで世を早くせられた君の上が惜しまれて、感慨にたへぬ。かつて君を推奬した楞牛君も、楞牛君の弟で君の親友であつた齋藤野の人も、また君も、今やともに白玉樓中と人となつたことを思うては、天の才人に觸することの甚しきを嘆かざるを得ない。

井上世外侯

世外侯と元暦校本萬葉集

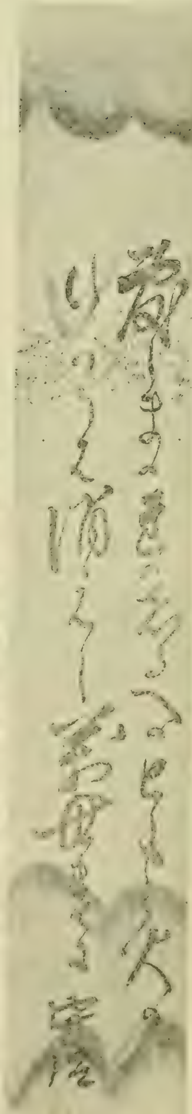
内田山に井上侯を訪問してもらひたいと、原田嘉朝翁の話があつたので、朝早く訪問した。うるはしい格天井の間に侯は待つてをられた。

侯のいはるゝには、水野家の元暦校本萬葉集を、古河家の藏書にしたいと思ふのであるが、自分に古筆には趣味があるから、元暦萬葉の古筆としての價値はわかるが、學問上貴いわけを聞かして欲しいとのことであつた。それで、萬葉集それ自身の學問上の貴さと、元暦校本の萬葉學上の價値とを委しく述べたに、よく了解された様子であつたが、やがて件の元暦校本萬葉集十四帖は、古河家の所藏に歸したのであつた。

後數回招かれて内田山にいつたが、侯はいつも所藏書畫の臺帳を示されて、道具方がをるのであるから、學問のためになるものがあつたらば、どれでも出さすから、少しも遠慮なくと言はれたので、有名な古筆手鑑の藻汐草をはじめ、多くの古筆類を觀ることを得たのである。

自分は學問上の必要から、名門諸家に所藏の典籍のたぐひの一見を請うたことは尠くないが、井上侯ほど快く見せられた所はかつてなかつた。

三浦守治博士



しきしまの道のしるべの燈火の光は消えじ萬代までに　守治、（亡父の追悼會の歌）

移岳集の歌人

三浦守治君は世を去られぬ。君のありしことはわが竹柏會のために深きよろこびなりしを、今やこの異彩を放てる歌人なりし君は、我等を捨てて天がけりましぬ。

君がわが竹柏會に入られしは、今より十八年の昔なりき。初めてもたらされし詠草の中に、

天雲をさしつらぬきて眞白なる富士が嶺たてりきさらぎの空に

といふがごとき、當時已にあざやかなる特色をそなへたる作ありき。その後和歌に於ける君の勉勵は、まことに驚くべきものありき。しかして歌は、君の爲めには固より行餘のわざなりしかど、君の性格としてあくまでも眞面目に之を學ばれ、その專門以外に於ける唯一の慰安として、熱心に硏究せられき。嘗て君の言はれつるに、「歌によりて得る心の轉換が、わが學問に如何ばかりの益あるかは、殆どはかり知りがたし。余若し歌を學はざりせば、わが

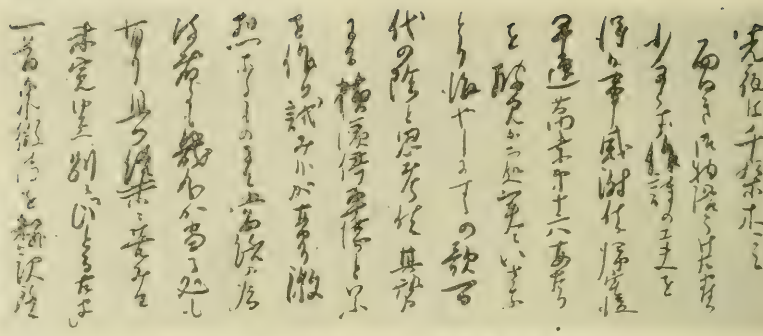
學者的生命は早く竭渇しつるやも知りがたし」との言ありき。しかして、歌の道に對する君が斯くの如き熱心と眞面目とは凡ての方面に現はれぬ。君は、君よりもはるかに年若き予を、斯道に於いてはあくまで、師として尊ばれ、詠草の添削について疑義ある時などには、反覆して質問せられ、十分會得せられし時には、明瞭に、よく了解せり、と言はるるを常としき。また數年前までは、研究會にも屢出席せられしが、衆人の評を十分に聽かれし後、その心に協へりし歌ある時は、唯一言、「佳」と言はるるを常としぬ。その熱心のこもりたる強き聲音は、今も我等の爲めに消えせぬ印象とはなれり。

君晩年やや健康をそこなひ、大學の名譽教授となられしが、その後も日々教室にゆきて、年若き助手とともに研究をつづけられ、しかもそれとともに、歌も絶えずいそしみ詠まれ、その結果として、かの歌集移岳集は成れりしなり。

君は齢六十歳にして、未だ前途に富まれき。殊に歌人としては、清高梅花にもたとへつべき君の歌風は、思ふに年と共に益清香を放つべきものなりき。移岳集の歌人を失ひつるは、ひとりわが會のみならず、歌壇の大いなる損失として、遺憾極まりなし。

「我を知る人は君のみ」との古人の言葉をたとへにひかむもいかがなれど、生前歌人としての君を最もよく知れりしは、我等同人なりき。

予今輯同人に代り、つもれる雪をふみわけて君が墓に詣で、眞白なる梅の一枝を手向け、今ここに同人相つどうて君の靈を祭る。君は、思ふに喜んで之を享け給ふべし。（大正六年二月）



（上田博士書簡）

上田敏博士

○（明治三十九年十月二十三日、本郷西片町）

先夜は千朶木にて面白き御物語うけたまはり、少からず作詩の工夫を得候事感謝仕候。歸宅後早速萬葉第十六あたりを披見候處、實に、いさなとり海や死にするの歌、百代の珍と思考仕候。其勢にて、橫濱停車場といふを作り試み候が、あまり激烈なるものにて、當路の爲政者にも幾分か當る處も有り、且つ結末に苦みて未完ゆゑ、別に「ひとるたま」一首象徵詩を飜譯致候。晦澁の文字にて面白からず候へども、且つ締切にも相遲れ候へども、若し御都合よろしくば御揭載願上候。先日來度々御見舞を戴きし悅子病氣も殆ど快癒いたし候間、乍憚御休神被下度、なほ數週にて退院と存候。先は御禮迄、匆々不一。

十月二十三日　　上田敏

竹柏園詞宗

侍史

（「ひとるたま」は、心の花百號記念のためにとて、マーテルリンクの詩を譯されたものである。）

○（明治四十五年四月十六日、京都市岡崎入江）

拜啓。昨夕無事歸洛仕候。大會の清興を思ひつづけながら、東海道を何の退屈なく打過ぎ候。滯京中種々御款待に蒙り候上に、御多忙中早朝の御見送りを辱うし、何とも御禮の申上げやう無之候。且は奥樣よりるり子への御心づかひの品物、早速うち開き、頭にかざして悅びゐ候。篤く御禮申上候。舊都の櫻まだ色深く、白樺の展覽會ありて、有島、山本、齋藤諸氏の訪問をうけ、けさほどより面白くうちくらし居候。暇をうかがひ、亂筆ながら御禮まで、如斯御座候。匆々。

四月十六日　　上田敏

佐々木詞宗

侍史

（こは、竹柏會大會に講演を請うたため、わざ〳〵上京せられた歸洛後の書簡である。）

永遠の旅人

柳村上田敏博士の長逝をゆくりなく聞いたことは、自分が近來の驚きであり、はた悲しびである。そのわが國の英文學のために、文藝界のために、多大なる損失であつたことは言ふまでもない。博士が年久しくわが國の文學界に寄與された功績については、之を語るべき人が他にあらう。博士は實に趣味ゆたかな才人であつた。その典雅な話

ぶりは、幾時間聞いてゐても、聞く人をして飽かしめぬものがあつた。

自分が始めて君の名を知つたのは、君が大學生の頃、讀賣新聞に、當時同じく大學生であつた神博士と、音樂會の評を寄せられたのを見た時であつた。しかして、始めて逢つたのも上野の樂堂に於いてであつた。自分の家を始めて訪問されたのは夏の夕方で、小花淸泉君と二人で來られた。暫らく話して、共にうちつれて、橘糸重さんを訪うた事であつた。

千駄木山房の會ではよく同席したが、いつも泰西の新しい文藝に關する話をされて、會合中の談る人であつた。

竹柏園の歌會で、イブセンの海の夫人について語られたのは、思ふにわが國に於いて海の夫人を最も早く紹介されたものであらう。また大會の折に講演をお賴みしたに、京都からふりはへて上京され、「舊思想新思想」といふ題目で講演をせられたが、その豐麗な修辭、ことに「永遠の旅人である人間は、生命の波に乘つて冒險の航海に出るその船の舵となるものは誠である」といふ結語は、今も同人が屢語り出でる事である。

心の花に掲げた松村夫人の飜譯については、いつも賞揚してをられた。「キヤナテンブラスバオンドの改宗」の譯が本になつた時、一文を草しておくられたことであつたが、今より後、夫人の譯に對して眞の理解ある評を、再び聞くことが出來なくなつた。

さる四月上京の折、うつくしい瑠璃子孃を伴うて來訪された。些か衰弱せられたやうに見えたので、健康を問ふと、京都で、さる廣い家に獨り住をしてゐたので、物のけになやまされた爲めであらう、と言つてほほゑんでをられたが、其のほほゑみに何處か寂しげなあとが見えるやうであつたので、心配をして居た。然るに、その後數日に催した日本橋倶樂部の大會の時は出席せられて、いつもの快活な樣子で、弘田博士や、葛原齒さん、峰ゆり子さん

などと語りあうて居られた。松本初子さんをも紹介した。大竹ろく子さんは、故田口卯吉博士との關係から舊知であられたので、その日來て居られないのを頗る遺憾とされた樣子であつた。

自分と君と逢つたのは、この日が終であつた。

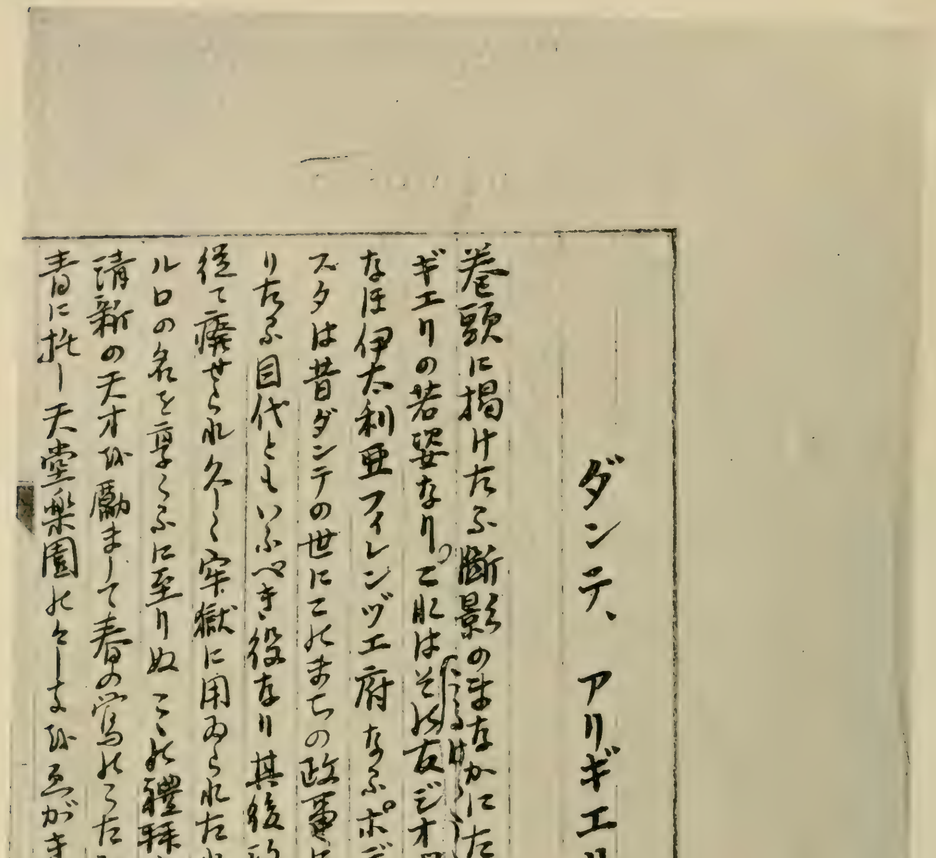
君の訃を弔うて夜ふけての歸さ、桑木博士、與謝野寛君、長田秀雄君と三光町を出て、電車道に向つた。雨もよひの空ながら、月の光がかすかに洩れて、默しつつうちつれて行く吾等の影をしづかに照らした。

曇つた顏

上田さんが大學の制服を着て、自分の舊居の小川町を訪はれたのは已に二十餘年の前であつた。それからこの四月、竹柏會の大會に來會せられたまで、久しい間の交りであるから、今日になつて追懷して見ると、さまざまの事が胸にうかぶ。今そのうちから一つをとり出して記して見よう。

上田さんはいつも快活な人であつた。その才氣潑剌たる談話は、いつも人を魅する力があつた。殊におもしろかつたのは、君が外遊から歸られて後、吾が竹柏會の小集會で語られた漫遊談であつた。

君の談話は、歐米諸國の風景人情等に對する、極めて趣味深き觀察に富んでゐ、普通の旅行家の話をきくとは異なつて、自分等の詩情をそそるものが多かつた。就中、鋼鐵の如く底光りのする色をもつてゐる黑潮の流を過ぎてから、太平洋の青海波の模樣のやうな浪の美しさや、太白星の波に沈む時の壯觀を語り、大西洋の浪と太平洋のとを比較して、太平洋の浪は大きくゆるく打つに、大西洋のは稍小さく鋭いことを說き、更に人情風俗を加へて景色を



ダンテ、アリギエリ

上田敏

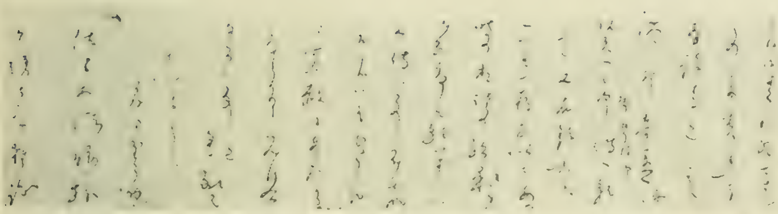
巻頭に掲げたる断影のまなかにたてるはダンテ、アリギエリの若姿なりこれはその友ジオットの筆に成りて今なほ伊太利亜フィレンツェ府なるポデスタの舘にあり。ポデスタは昔ダンテの世にこれまちの政事に與りて司法の権を握りたる官代ともいふべき役なり 其後政体改りてこれ官宅と従て廃せられ久しく牢獄に用ゐられたればおのづからバルジェルロの名を享くるに至りぬ これ禮拝堂の古壁にジオットい清新の天才は勵まして春の營みたるに試むる如き情を丹青に托し天堂楽園のさまをゑがきたり いと高き処に

上田敏博士原稿（明治二十八年）

見た場合に轉じて、紐育はマジソンの大辻、世界の富を集めた繁華な場所に立つて、伊太利の移民が彈くあはれなバレルオルガンの細い聲が、近代文明の弊害を呪ふ切實の音樂のやうに聞かれたこと、巴里のシャンゼリゼエの大通の端麗高雅なさま、朝夕の色の變化が著しいノオトルダム寺の建築、其の他、風車、朱い屋根、清い流に名ある和蘭、夢のやうなナポリあたりの景色など、親しくその地に行つてみる心地がして、頗る興味ふかく聞いた。

話が終つたあとで、此度の旅行で最も深く感じられたことは何であつたか、と問うた。その時君は考へて居られたが、暫くして、その快活なおもわを稍曇らして、頗る感慨にたへぬごとく語り出された。それは、自分が倫敦のミュウゼアムを訪うて、維新前彼の地にものしたわが國人の一行がかの國で寫した幾葉の寫眞を見た時、ふとその中の一葉に、自分の亡父の立つてをるのを見いだした。その頃は、父は未だ上田家の人とならなかつた時で、乙骨氏であつた。自分が十五歳の時に世を去つて、おぼろげに頭にのこつてゐる父の、しかも若い時の面影が、さすがにそれといちじるしく、海外萬里の客となつてゆくりなく亡父の寫眞に接した此の時の感じ、これこそは自分の最も感じたことであつた。と述べられた。談り終つた君は、やがてまたもとの晴々しい面持にかへつて、なほさま／＼の談話を交された。

二十餘年の交りの間、しば／＼相語つて、君の曇つた面を見たのは、この時だけであつた。しかもその時の物語と、その時の印象とは、今も自分の心に新たである。



（夏目漱石書簡）

夏目漱石君

○　（大正三年十二月三日、牛込區早稻田南町）

拜復、鈴木君へ御問合せの段御手數奉謝候。然るに鈴木氏は一二日前拙宅まで被參種々談合被致候。私は其節私の責任を以て大塚君の返事を同君迄申入候。是は先方にて內意を聞きたる上出來る丈圓滿の解決を告げたき旨の希望にもとづきたるものと御承知被下度候。小生は念の爲め貴下を大塚家の代理人と見傚して可然やと質問致候處、同氏には不然と答へ候。故に小生は同氏に對して此間の返事を洩す必要も義務もなきは無論に候へども、話したりとて事實上差支なきものと思ひ左樣取計ひ申候。同氏は然らばすぐ是より黑岩氏方に行き、相談の上何かの方法もあらば講じて見るべしとて歸られ候。黑岩氏は栃木縣那須あたりに居らるゝ由故、夫より直ちに行くとするも相談に多少の時間はかかるべきかと存候。小生は同君に佐々木氏迄何とか挨拶されたし、小生はもし日曜迄にたよりなければ延期と思ひ砂土原町へは出向かずと申候。先方も其覺悟にて拙宅を辭され候。右の事情ゆゑ日曜迄にはどちらにしても鈴木君から貴所へは何とか返事ある事と存候。もし日曜迄にあなた樣へ何とも回答なき折は、こちらは直接大塚家と交涉時日取極めたくと存候。以上はすぐ貴所ならびに保治君へも御報可仕筈の所、如何なる譯にや

怠りても差支なしといふ心持有之(其意味は小生も解意せねばよく判然せず)そのため貴書を拜讀する迄は其儘に打棄置候。保治君へも御序あらば御傳へ願ひ上候。又右鈴木氏へ小生一存を以てあの時の相談の結果を御列席も願はずに御傳候事不都合に候はゞ、ひらに御容赦にあづかり度と存候。先は右御返事迄。匆々頓首。

十二月三日　　夏目金之助

佐々木信綱様

御贈被下候雜誌二部、ありがたく頂戴致候。

明暗

夏目さんの名は、「坊ちやん」が世に喧傳される以前より、大塚楠緒子さんから聞いて知つてゐた。後、しば〳〵お會ひするやうになつたのも、大塚家の家事に就いての故からであつた。

その事には、初め大塚さんの數人の友人が與つてゐたが、最後には、大塚博士の友人としての夏目さんと、楠緒子夫人の歌の師としての自分とだけが殘ることになつて、自然訪問し合ふ機會が多くなつたのであつた。

自分が夏目さんを訪うたのは、所謂訪問日以外の日で、ほかには誰も來ず、用談の濟んだ後は、ゆつくりと、隨筆風の話を多く聞くことが出來た。その時分は「硝子戸の中」の構想を練つてをられた頃であつたと見えて、その時の話が作中にいくつも載つてゐる。吾が家に來られた時も、晝過から夜までをられたことがあり、古筆の[illegible]その摸本を見て興がられ、中でも高野切が最もよいと、しきりにながめ入つてをられた。

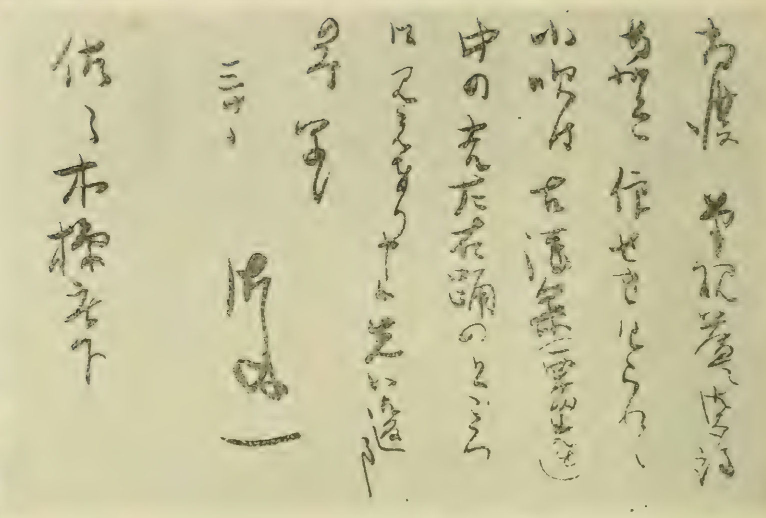
自分も歌をつくつたことがあると語られもした。(後に氏の短册を二三葉見たことがある)

その學位を請けられなかつた時の話も出た。(その時學位をうけたのは、有賀長雄氏、幸田露伴氏、佐佐木信綱氏と、自分と、外に夏目さんとであつた)夏目さんもそれについて多少の關心は持つてをられたとみえて、當日のことや、其の後の博士會のことなどを問はれたので、問はれるままに話しもしたことであつた。(さきに掲げた外山博士と入浴のことも、此の時の話である。)

ある時、牛込砂土原町なる大塚さんの舊家を二人して訪うたことがあつたが、自動車をおりて狹い道を歩き〳〵夏目さんは度々時計を出して見られるので、どうしたわけかと思つてゐるうち、ふと立とまられたから、何事かと自分も立とまると、ポケットから散薬の包をとり出して、仰向いてそのまま服された。驚いて問ふと、時間を嚴格に守らなければならないので、途上でも水なしで服みつけてゐるといはれた。

「明暗」が新聞に出てゐた頃、自分が湯河原の天野屋に行つたところ、宿の主人が寄書帖を持つて來たのを見ると、夏目さんの句があつた。聞くと、中村是公さんのもとに客となつて滯在されたとのことであつた。

天野屋の樓上から浴場へおりて行く途中の、鏡のある場所の樣子が、「明暗」の中に實によく寫されてをるので、何時か會つた折に其のことを話さうと思つてをるうち、その機なく、世を去られたのであつた。



（佐々政一博士書簡）

佐々政一博士

○（大正三年十一月三十日、小石川大塚窪町）

拜復。筆硯益〻御多福奉賀候。仰せきけられ候小唄は、古謠集（栗田先生）中の吉左右踊のところに見えをり申候。先は御返事のみ。早々。

三十日　佐々政一

佐々木様

座下

吉左右踊

佐々君にはじめて逢つた時、君が、帝國文學の附錄に出された歌謠の變遷に關する論文について、自分も古歌謠に就いて研究してゐるので、長い間話をした記憶がある。

文藝雑誌での和歌の懸賞募集は、春陽堂の「新小說」（第一期）が嚆矢であるかとおもふが、佐々君が主宰された金港堂の「文藝界」

では、かなり規模の大きな懸賞をして、數人の選者に委囑したことがあつた。その爲め度々君の訪問をうけたことも
であつた。

上に掲げた手紙は、君がある雜誌に書かれた文中に、引用された歌謠の出所について自分が問うた返事で、その小唄に、

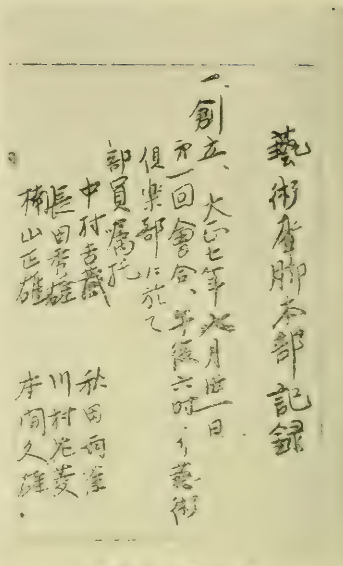
室たつ鳥か日本へ行かば言傳しよも文副へて

といふのである。吉左右踊といふのは、古歌謠集に、「文祿年中豐臣家朝鮮征伐の時、金宗法印父子、肥前唐津に在陣せり。然るに朝鮮に在る處の日本の諸將、速かに勝軍の事、唐津より告げ來れり。仍て下民是を祝して、高山城下に群參し、踊歌せしを濫觴とす。俗に、吉左右の告げ來るといふを以て名とするもの也」とある。

君とは、無名會でよく話した。無名會の會員の中では、佐々君、保科孝一君、杉敏介君と、自分とが同甲であるが、君のはやく世を去られたのは、まことにいたましい。

因に云ふ。無名會は、明治三十年頃、或は教育家として、或は著述家として、國語國文に從事してゐた、大學の本科、古典科、國學院の卒業生、大八洲學會の人々のおもな人が、飯田町なる富士見樓に、懇親の爲めに集まつて會をしたことがある。當時會合した一部の人と、國史漢文の有志とによつて、無名會といふ少數の會が成り立ち、三十六七年後の今日、なほ繼續してをる。初めは三十餘人の會員も、今日では十七八人になつたが、毎年數回の會合がある。

島村抱月君



（島村抱月君筆蹟）

藝術座開幕前

島村抱月君の思ひ出のうち、一番深く印象に殘つて居るのは、君が外遊を終へて歸朝された祝宴が紅葉館で催されたをり、盃の數も追々にめぐつて、たしか自分の隣席であつた小杉天外君が、「早稲田よいとこ目白をうけて、魔風戀風そよ〳〵と」と聲高に唄うてをられたに、抱月君は自分の前に來て、きはめて眞面目に、テームス河畔の古書肆の話をしてをられたことである。

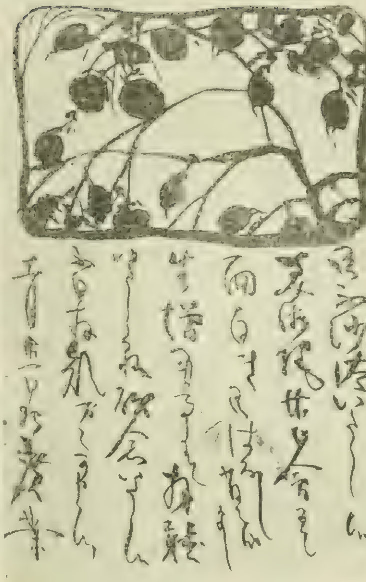
藝術座の第一回の上演のをり、開幕前、幕外に立つて挨拶をされた。その態度は、いかにも眞摯な、力のこもつたものであつて、長く忘られない。

（圖版として掲げた藝術座脚本部記錄（一册）は、本間久雄君の所藏に係るものである。）

寺崎廣業

○（明治三十七年十一月廿一日、上野新坂下）

御無沙汰いたし候。美術院廿日會にて、面白き御はなし有之候よし、生憎用事にて拜聽いたしかね、殘念いたし候。不日拜顏万々可申上候。十一月廿一日夜。廣業。



（廣業君繪はがき）

（文中美術院云々とあるは、下谷谷中の日本美術院で、毎月廿日に講演會が催された。自分も依頼をうけて、「源氏物語と繪畫」といふ講演をしたのである。次に述べる廿日會とは別であるが、ちなみはあつたのである。）

從軍畫家の談

明治三十年代、下谷の伊豫紋に、毎月二十日の夜に、美術家と文藝の士とのあつまる會があつて、會の日に因つて二十日會というてをつた。美術家で毎月必ず出るのは、寺崎廣業、村田丹陵、山田敬中等の諸君で、新年の會などには、橋本雅邦翁、岡倉天心居士も見えたことがあつた。ただ話と酒とを樂しむ會であつたので、相當長い年月

續いた。

廣業君はいつも醉ふ。醉ふと躍る人であつた。また、大きな盃を壁にあてて、含んだ酒をそこに吹きかけて、壁に月をゑがくわざなどが得意であつた。

廣業君が日露戰役に從軍して歸られたをり、竹柏會の小集會のために來訪を請うて、觀戰談をきくことを得た。畫伯の語るところ、彩管を用ゐずして既に畫圖を成し、悽慘なる新戰場もさながら繪卷物となるのであつた。上陸のをりの模樣を語られては、

海上無事、二十三日（明治三十七年四月）、午前十一時頃、或る灣内へ入つて行きましたが、これは世の中に祕密にしてある根據地でした。朝より降り初めた春雨の濛々たる中に、何十隻の武裝した軍艦や水雷艇が、薄墨でぼかしたやうに濃淡よく列んで、黑煙をはいてゐるさまは、誠に壯快なもので、恰も雄大なる思想のある畫家の筆になれる一幅の墨畫を見るやうな心地が致しました。此の日は、東郷司令長官と奥司令官とが互に訪問されて、何か御申合せがあつたやうでありました。名譽ある兩司令官が、雨をおかして小蒸汽にて互に往復せらるゝさまなどは、餘程趣味がありまして、私どもの好い材料になりました



（廣業君筆「登岸の春色」）

また夕陽の美しさと其の日の情景を述べては、

其の時恰も夕陽が將に金州灣に入らうとする時でございまして、こちらの佐佐木先生がいつかの南清漫遊の御話にもございました通り、支那の夕陽はまことに美事でございます。其の日は殊に一點の雲もなく、紫の濃いやうな色の遠山と島々とがほのかに見えて、空は一面に赤みの勝つた薄紫色のやうな色で美しくいろどられ、さうして、鏡のごとき金州灣上に反射するから、海の色も爲めに紫色にかはり、水平上を少しく離れて、さながら吾が國旗を揭げたやうに深紅色の夕陽が輝いてゐる。それと同時に、和尚山の赤黑い山の頂上には、今出たばかりの滿月が夕陽と相對して、黃金色の光を放つてゐる。或將校が、オイどうだ、此景色は嬉しいぢやあないか。實に日本は仕合せな國だ。日月の守護を受けて目出度くこの砲臺を占領したというてもよい。奧大將の心事、余等の心の中を察して呉れ、是非此の光景を繪に畫いて呉れ、とのことでありました。



（廣業君筆 寄贈）

また夜營の苦痛を語つては、

博文館の田山花袋君と、私と私の書生とで、一枚の毛布をかぶつて寢ようとしますと、外から非常に大きな聲で怒鳴つて來た者があります。部屋に寢てゐる者は悉く起きて早く外へ出ろと、出しぬけに言はれて驚きました。

よく譯を聽いて見ますと、負傷者中病院まで收容の出來ない分だけ、一軒でも人家のある處を探して收容する爲だとの事でありましたから、早速に飛び出して、門の側に唐黍の殼が積んであつたのを、此處を人に占領されない中に寢ようぢやないかと、すぐ三人が體をくつつけまして、毛布一枚を敷いて、帽子を枕にして寢ましたが、南山には篝火を焚いてをりました。其の火のもとでは、或は食事をしてをる人もあらう、或は跡片附をしてをる人もあらう、また屍骸をあつめて燒いてゐる荼毘の火もその中に混つてをつたでありませう。

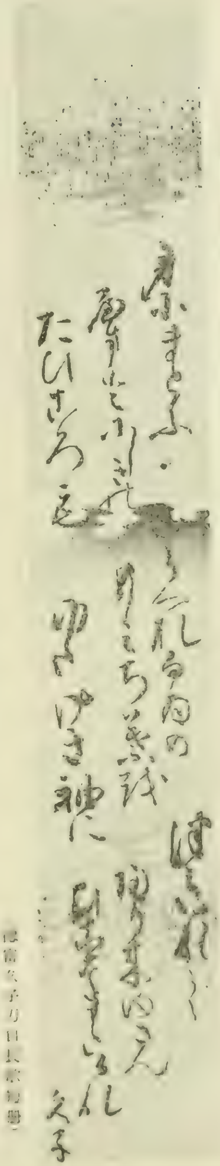
また露軍の遺棄した戰死體を目撃しては、

實に死屍累々山をなしてをりました。其の中に未だ生きてゐるのもをりました。其の有樣は、實に酸鼻の極でございました。私はその時に、畫の上に、配合上おもしろいと思ひましたのは、南山の麓に菖蒲が澤山に咲いてをつたことであります。菖蒲といふものは水の中に咲くものと思つてをりましたが、あの邊は、水のない野に咲いてをります。其の間々には、菫や蒲公英なども咲き殘つてをりまして、其の美しい花の咲いた野邊に、慘憺たる屍骸がごろごろ倒れてゐるのでありました。

と、腥慘の中に自然の美を見いだして談られたことであつた。

（この談話は、心の花第八卷の六、七、八、三號に渉つて、南山の激戰、戰後の金州及び青泥窪、觀戰雜話と題して速記を連載してある。なほ、一六一頁の圖版は、梨杏などの花さき亂れたもとに、軍馬のつながれてあるさま。畫中最も高くぬけ出てをるは楊樹であるとのこと。）

徳富久子刀自



徳富久子刀自長歌短冊

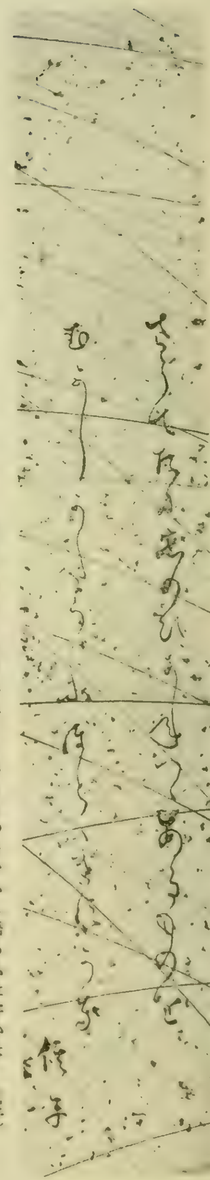
身にまとふやまと錦の旅ごろも、からくれなゐのもみぢ葉を、ゆたけき袖につみいれて、歸り來をさむ日こそ待たるれ

反歌

君しゆかばこまもろこしのはてまでもやまと言葉の花ぞにほはむ

久子

（この長歌及び反歌は、自分が明治三十六年の秋、南清の旅に出で立つをりの送別の作である。洪水翁の夫人にして蘇峰先生の母堂なる久子刀自は、眞に良妻賢母であつた。しかして基督教の熱心な信者であり、歌にも志が深くて、自分のもとに詠草をたづさへ來られた。當時萬朝報の黒岩涙香氏と、國民新聞の蘇峰先生とは、論議を戰はされてをつたが、涙香氏の母堂信子刀自と、久子刀自とは、同じ信者どちとて極めて親しく、久子刀自が同伴して來られて、信子刀自も、吾が竹柏園の門に入られたことであつた。ここには久子刀自が八十の賀のをりに編まれた歌集の序を、次に揭げておく。）



（さらでだにしのびかねつゝあるものをむかし語らふ杜宇かた　信子）

田越川のほとり

田越川の清き流、海にそそぐところ、富士の嶺みゆる櫻山の麓、千年の翠ふかき老松一もと道をおほへる老龍庵のうちに、靜かに老を養はるる妹背あり。徳富洪水翁と、久子刀自となり。偕老のちぎりまさしく、共に高き齢を保ちて、子としては猪一郎健次郎の二文豪をはじめ、ここかしこにとつがれし女子あり。うまご曾孫いとさはにして、まことに人の世のさきはひを極めらる。

久子刀自は夙くより神の敎に入りて、靜かに天命を樂しむ境に到られ、また折にふれたるおもひを言葉の花によせて、わが竹柏園の門立ちならさるることここに年あり。かつや刀自は、故藤島正健君の叔母君にして、わが雪子の大叔母君におはし、洪水翁は、雪子が漢籍の師におはす。ことし刀自が八十の齢を重ねられし賀宴に、年頃よみ出でられし歌どもを選びて、すり卷に物せられむとするにのぞみ、ゆかり淺からぬ身の喜ばしさに堪へず、一言をしるしてはしがきとす（丁未四月）

和田垣謙三博士

○（大正六年十月十一日、小石川小日向臺町）

月餘りに清しの御句餘りに面白く感ぜしあまり、英譯相試み候。原文如玉、譯文泥土、恐縮の至に候へ共、若し御咎めなくば、玉句、短册に御認め被下間敷哉。匆々敬具。

十月十一日　和田垣謙三

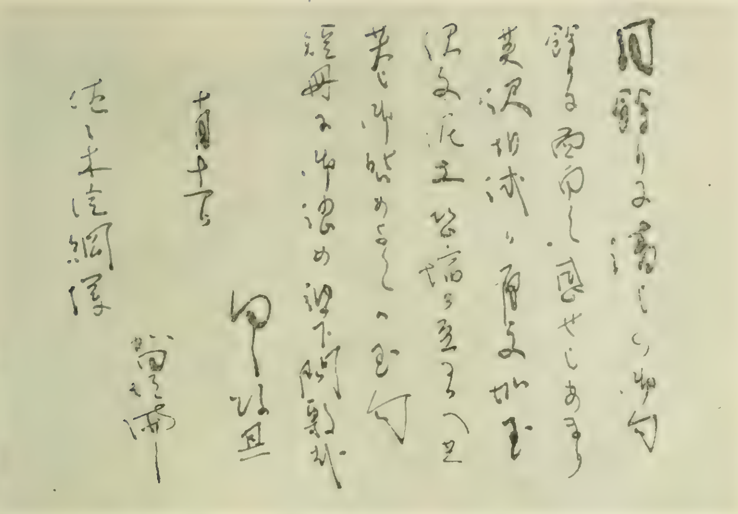
佐々木信綱様

○（同年十月十九日）

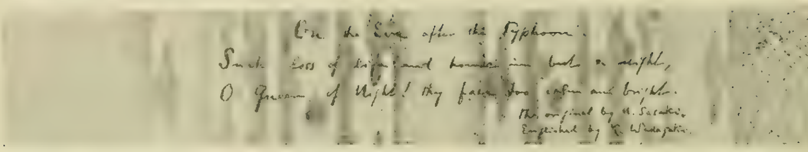
御短册并新月、難有拜受仕候。新月中の二三句英譯を試度もの有之、其中御覽に入れ度存候也。英語短册本日御届申候。御病臥の由、一日も早く御全快祈申候。匆々敬具。

十月十九日　和田垣謙三

佐々木博士殿



（和田垣博士書簡）



（和田垣博士英譯和歌短册）

和歌の英譯

自分が、牛込の弓場に弓を習ひにいつた時、傍の人と皮肉まじりのおもしろい話をしてゐる身體の大きい人があつた。それが和田垣博士であつて、博士を知つた初めである。

この二通の手紙は、自分が當時萬朝報の歌の選をしてをつたが、毎回、選歌の終りに、自詠一首をそへる例であつた。その歌のうちで、暴風の後の月を詠んだ一首を、博士が紙上で見られて、おくられたものである。

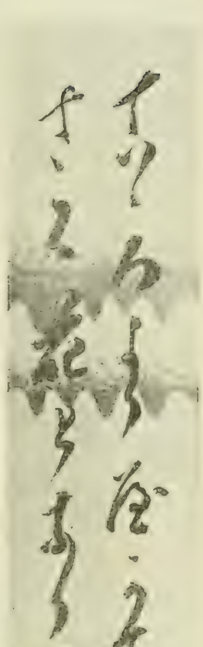
第一は、自分の歌の英譯をしたので、原歌を短册にかくやうにとのもの。第二は、書いて送つた自分の短册に添へて、英譯の執筆を請うたに就いておくられたものである。此の英譯の歌の短册は、自分の編纂した「鏡草」の中にも掲げておいた。

宗演老師

○（大正四年一月八日、鎌倉）

謹啓。

過日三溪ニテ新年早々不圖拜眉ヲ得、歡喜無量ニ奉存候。久振ニテ御謦咳ニ接セシハ、恰モ芝蘭ノ



（心よりやがて心に傳ふれば咲く花となり鳴く鳥となる　演）

室ニ入リタル心地ニテ、其ヨリ以來多忙中ニモ折々歌心萌シ、別紙ノ通リ腰折ノモノ二三首相浮ビ申候間、乍憚御是正被下度、御願申上候。草々敬白。

一月八日　　　宗　演

佐々木先生

座右

（宗演老師に初めて逢つて語りあうたのは、横濱三溪園のうちなる寒月庵であつた。その夜詠まれて短冊に書かれたのが圖版の歌である。次に老師の遺稿の序を掲げておく。）

楞伽窟歌集序

松山の向うの海から吹き越えてくる風が、山の上の松に調べる音の絶間には、溪川のせせらぎが聞える。靜かに更けてゆく、寒月庵の秋の一夜、宗演老師は、初めて會つた自分の爲に、同じく圓覺寺に住した近世の高僧で、かつ香川景樹と交はつた誠拙禪師の逸話などを語られた。自分には、夢窓國師、元政上人、行誡和尚などの歌に就いて語つ

た。老師はまた、夙くから漢詩をのみ作つてをつた、和歌はわづかに一二首を試みたのみである、どうか、やまと言葉で思ふこころを思ふやうに述べたいものである、などといはれた。

この數年前の一夜が機緣となつて、その後老師は、或はここかしこの巡錫の途上から、或は東慶寺に於けるしづかな起臥の折々の便りに、詠草を寄せられた。老師の歌風が一家の風格をそなへて、漸次に獨特の境を詠みひらいてゆかれる前途は、自分の樂しんで望み見たところであつた。

さるを、老師は世をはやくせられて、この十一月一日は、三回の忌辰に當るので、心の花に揭げた詠草、及び釋敬俊ぬしがあつめられた松の雫の中から選んで、この一卷を公けにするにつけても、寒月庵のものがたりが思ひ出されて感慨にたへぬ。自分は去年からこの鎌倉の村莊にくることが多い。かの誠拙が景樹に歌を問ひ、景樹が誠拙に禪を學んだやうに、老師世にいまさばの感が、一しほ切なものがある。

雲に問へば雲はもだせり風に問へばかぜ流れ去るいかにせましや

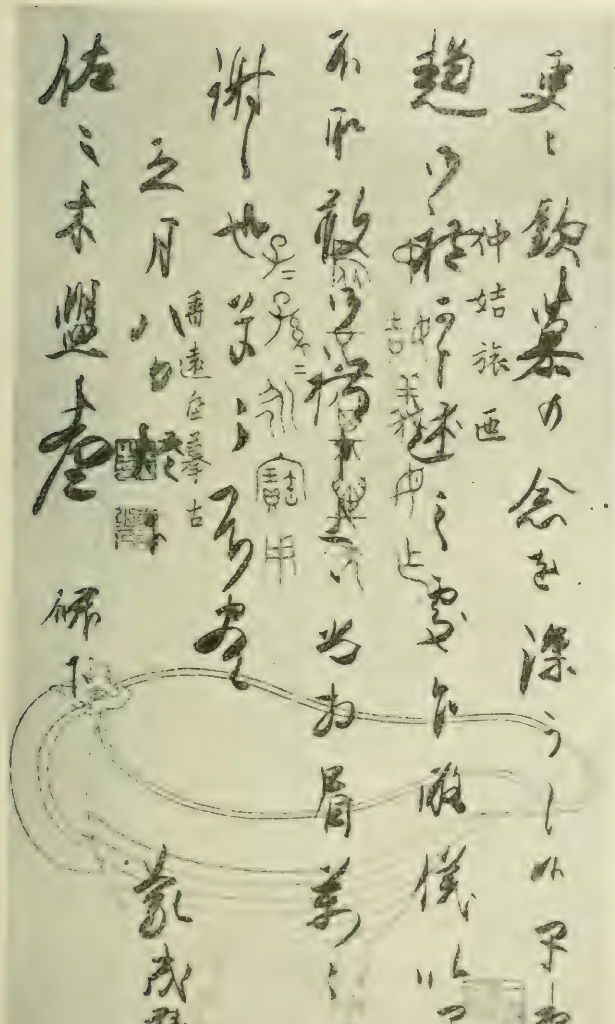
（大正十年十月　鎌倉大町の別莊にて）

田中義成博士

○

（明治四十四年八月三十日、四谷愛住町）

蕭啓、過刻は失禮申上候。歸宅後早々玉翰拜披仕候處、名古屋にての盜難御見舞下され、殊に玉詠を賜り難有奉存候。永く記念として秘藏仕るべく候。小生は常々疎漏の故にや、旅中にて盜難遺失の事往々有之、餘程ボンヤリしたる處ありしと見え、先年は汽車中にて一文殘らず掏り取られ、汽車切符さへ取られ候て進退極りし事有之候ひき。



（田中義成博士書簡）

紀州湯淺灣の勝景を探りし時などは、財嚢を海中に落とし候ひき。よく〱金に緣なき性分と相見え、一向頓着も仕らず、今後もまた或は御見舞をいたゞく事あらむ。財を喪ふも玉詠を得る方、小生に取りては幸榮に存候。先は御禮まで。草々不盡。

辛亥八月盡　義成　再拜

佐々木大人

研下

○（明治四十五年三月八日）

貴翰敬誦。

尊履益御健勝奉賀候。陳者、考妣御年忌之由にて、御供養のため金鈴遺響御印行被遊候趣にて、一部恵賜不勝感謝候。殊に鈴屋大人の御父母の御筆跡は初めて拜觀致し、更に欽慕の念を深うし候。早速拜趨御禮可申述之處、乍略儀以愚札不取敢御禮申上候。尚拜眉萬々可奉謝候也。草々不盡。

三月八日燈下　義成　再拜

佐々木盟臺　研下

○（大正元年九月九日）

欽啓、秋雨蕭條、筆硯益御清適奉賀候、陳者此般御上梓相成候梁塵秘抄一部恵賜を辱うし、毎度ながら御芳志難有候、殊に史學上有益なる一好資料を添候段不勝感謝候、尚拜芝萬々御禮可申上候へども、不取敢乍略儀書中を以て御禮申上候也　草々不盡。

大正元年九月八日　　義　虔

佐々木詞伯　研北

○　（大正三年五月一日）

肅啓、新緑滿野。文履益御清適奉賀候。陳者尊著類聚古集解說、恵賜不堪感謝候。毎度御厚情忝存候、殊に玉詠再三捧吟詩興忽發候、恨むらくは賡歌すること能はざるのみ、不取敢御禮耳申上候、尚拜眉萬々可申謝候　草々不悉。

四月三十日　　義成　再拜

佐々木大人　謹呈

中世歌學の古書

田中義成博士には、自分が東京帝國大學文學部に於いて、和歌の歴史的研究に就いて、多年講義をつづけてゐた際、中世歌學の古書などに就いて、史料編纂所にしば〳〵訪うて、その著者に就いて、あるは書寫の時代等に就いて、指示を請うたことであつたが、其のをり〳〵、いつも懇ろに話された。百代草の解説中にある八雲御抄についての返信のごときは、其の一つである。

博士は筆蹟に巧みで、かつ尺牘の文また懇ろであつた。

末松謙澄子

○（明治三十六年四月十一日、房州行船中）

生子よりも宜布申出候。

明日の間に合ふ事と存じ、房州行汽船甲板上より拜啓仕候。今日は天氣合快晴とは難申候も、波は穩に、四方の眺も春霞と申す有樣にて却而面白く、御兼題の愚吟の趣も實況の心地被致申候。此天氣合に候へば、明日の御會は定而御盛會と奉存候。欣賀の外無御座候。拙生共缺席の段幾重にも御寛恕奉願候。愚吟、百千鳥さへづる頃に花ならぬの頃は春と御改被下候樣奉願候。是は「百千鳥さへづる春」とつゞけたる古歌もある事御承知の通り、且つ春と花とは字の連用も趣あらん歟。又頃よりも春の方、此處は所謂調がよき樣に被相考候故に御座候。御取合御議定被下度候。此義得貴意度、亂筆如此。頓首。

四月十一日　　謙澄生

信綱大人

座下

この文認候後小雨となり候。遺憾々々。

又追記、大分晴模様ニ相成候。明日ハ晴ノ望アリ。觀音崎ヲ過グル頃記。

（此の書簡は明治三十六年四月竹柏會大會前日ので、當日の兼題は「春海」であつた。出詠の歌の一字に就いて、船中なほ洗煉してかくいひおこせられたのである。）

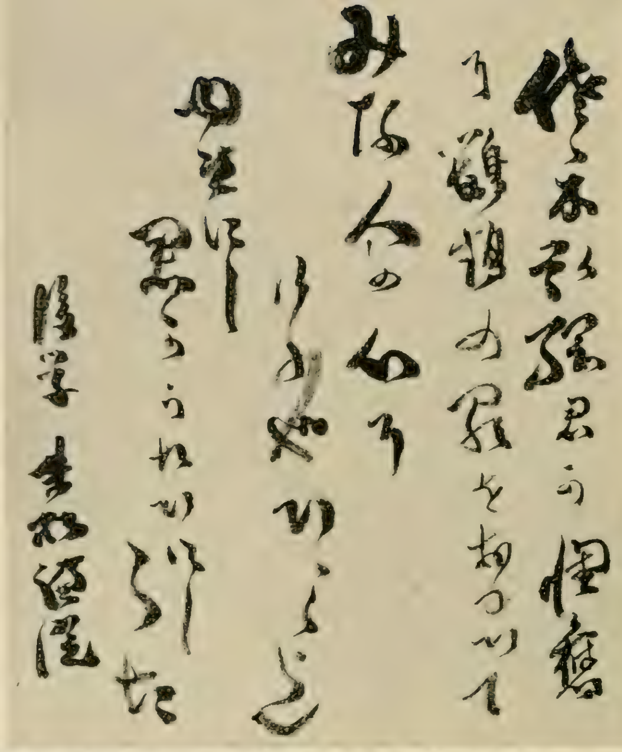
源氏物語の英譯

末松博士は、英國劍橋大學に在るをり、源氏物語を英譯され、歸朝されてからは、演劇改良會を興したり、日本文章論、國歌新論等を著はしたりなど、明治中期の文化方面に盡くされたことが尠くない。

生子夫人がわが會の同人であつたので、博士は、心の花にも寄稿された。國風家懇親會で講演をせられたりした。その歌論に關して服部躬治君と數回論戰されたことや、この書簡の船中で度々書かれたことによつても知られるごとく、すべてに非常に熱心であつた。

博士はまた、古筆をも愛好して蒐集された。百代草の中に採錄してある、日本書紀古鈔本及び和名鈔の古鈔本の斷簡は、博士の舊藏である。

の末歌歌舎子の声は亡父十年祭のありの時に、亡父が書斎といへる題で詠んだ「言の葉をかへす鳥こそあはれなれ吾がうたふ聲きゝ知らぬ世に」といふを思はれてゞある





明治三十四年四月竹柏會大會第三回來賓及び同人。後列左より末松博士・（手にせらるるは常日配用せる竹柏會自
著者・武島羽衣君・三浦守治博士・大塚保治博士・尾崎紅葉君・前列左より印東昌綱君・上田敏博士

自分は多年知遇を辱うし、芝公園なる邸にも、城山町の邸にも屡訪ひ、小川町及び西片町にも屡訪問をうけた。博士は多年馬車に乘つてをられた。小川町の家は、家の前まで馬車が來なかつたので、材木屋の角から下りて、時としてはシルクハットを手にしつつ、門口から聲高に、多賀良亭につきあひませんかとうながされては、淡路町なる西洋料理店によく同行して、語りあつたことであつた。

外山隆子

若き日はいとみじかけれ少女らよ今日を樂しめ今をよろこべ

この歌は、大正六年一月の「心の花」に、「竹柏園百人一首」といふを附錄とした中に載せた外山隆子さんの歌である。

この歌にはあつい涙がこもつてゐる。隆子さんは、外山正一博士の愛孃であるが、幼稚園のころ、遊動圓木から落ちて胸を打たれたのがもとで、身體が弱く、終に嫁がずして早く逝かれた。最も歌を好まれ、文才もゆたかであつた。その病中の筆のすさびに成つた「口譯宇治拾遺物語」は、自分がすすめて、廣文堂から版に上せたのであつた。ここに上田萬年博士と、自分との序をかかげて記念とする。

口譯宇治拾遺物語の序

顧ふに今からは既に三十年の昔である。我等が大學に在つて先師外山先生から社會學の講義を聽いたが、其の折フォークロアを初めとして、妖怪奇異譚又は迷信等の發生並に傳播に關する各民族間の面白い事實を知り、是等が時としては偉大なる文學上の資料となり、時としては一般民俗上牢乎たる信仰となることどもを知つたのである。それ故、かかる研究は單にディレタントの仕事たるに止まらず、眞に國民を理解し其の社會の内部の生命を觀察しようとする人々が、須臾も忘れてはならない所であると信じた。

我等は往年十二月支那漫遊の途次、揚子江の上流にある湖北省の武昌に行つた。これは漢口と江を隔てた南岸にある。其處の蛇山といふところに有名な黄鶴樓がある。其處を見物に行くと、一の道教の寺があつて、老若男女の參詣者が引きも切らず、或は延命息災を祈り、或は病氣平癒を禱る。何の事はない、淺草の觀音樣か成田の不動樣のやうである。それに面白いのは、其の境内に幾多の賣卜者が店を開いてゐて、見物人や參詣人を呼び入れて吉凶判斷をしてやらうと勸める事である。これも淺草にもあれば成田にもある。まことに面白い對照だと感ずると同時に、東洋人中には、神佛に祈るかたはら卜者にたよるといふ者が尠くないとつくづく思つた。

支那は儒教の國、日本は東西文明融和の國などといはれてをるが、裏面にはかうした面白い習慣が社會の中に活きて居る。此の裏面を知る事が文學の研究の賜物で、其處に多數國民の趣味も信仰も認められる。富豪の邸宅よりも、九尺二間の貧乏人の家庭を見る上に多數國民の生活が知られ易いのである。

此の書は、先師外山先生の令孃たか子女史の書きなほされたものである。女史は佐佐木信綱先生竹柏園門下の一

異彩で、夙に和歌に秀でまた文筆に長ぜられて居る。先師の趣味を其の血に受けて、傳説等の研究にも御志が深いといふ。此の書を見れば、我が國中古の風俗習慣等で、眞面目な歴史などでは知りがたい事が手に取るごとくよくわかる。それを今日の人々に容易にわかるやうにせられたのは、まことによい思ひ付と思ふ。此の書が出來たにつけて何か書き添へよとのことで、漫に三十年前の事など思ひ出て一言を記す事とする。

大正七年九月　　上田萬年識

宇治拾遺物語は、わが國の古典のうちでも、最も面白い讀物である。面白いといふ意味にも固より種々あるが、宇治拾遺物語の面白みは、つまり御話の面白みである。その中には、當時の社會に實際あつた事件や、人々の逸事や内外の傳説などが、輕いかつ巧みな筆で書いてある。この意味で、貴族の感情や精神をうつした源氏物語に對して、宇治拾遺物語は、別な意味に於いて、面白みの最もふかい文學である。

この書は、宇治拾遺物語のうちの御伽噺ともいふべきものを選び出して、現代語に譯したものである。譯文はよく原文の意味をとらへ、かつ味はひを失はないで、巧みに出來てゐるから、近頃の面白い讀物として、世の一般の家庭に推奨し得る。

著者外山たか子君は、故文學博士外山正一先生の令嬢で、數年前からわが竹柏園の社友となつて、自分に就いて學んでゐられる。不幸にして病がちであるが、文學の天分がゆたかで、かつ精進の志がふかく、一年の半を床上にありながら、なほ常に讀書につとめて居られる。この書も、君の才と君の努力との結晶である。君がよくかよわい身に打ちかつて、かくの如き好著を公けにされたことは、自分として喜びに堪へぬ。

外山先生は、自分が大學に在學したころの學長で、その當時は種々御世話になつた。其の後も、新體詩のことで故落合君などとともに、御話を承つたことであつた。先生が世をはやくし給うてから、まう十數年になる。今、その幼くて父君に別れられた令孃たが子ぬしのこの著を手にして、自分は頗る感慨に堪へないものがある。先生が世に在したらば、その愛孃のものされたこの書を見て、いかに喜ばれることであらうと思ふ。

大正七年九月　佐佐木信綱

大隈重信侯

佐賀のがに

明治四十一年四月、高田早苗博士の紹介で、竹柏會大會の講演をお賴みしに、早稻田の邸に大隈侯を訪うた。廣い應接間に、他の客が幾人か來てをつた。侯は、家内や僕が鈴木重嶺さんに歌を見てもらつてをつたがとて、鈴木翁の懷舊談から、佐賀では古川松根が歌人であつたことなどを語られ、園藝談に轉じて、花卉と歌との話が續いたことであつた。

大會の當日、侯の親戚なる松浦家で不幸のあつたことを新聞紙上で知つて、いかがと思うてをつたが、約束の時間に來られて、「文學觀」と題して講演された。日本文學に於ける女性の功を述べては、

殆ど千年以前に源氏物語といふ大著述、日本文學として世界に誇るに足るべき大作が女性の手に依つて出來た。世界のいづれの文明國でも、千年前に女性に依つて斯くの如き大作の著はされたことは無いのである。近世に至つてエリオツトといふやうな人が現はれて、立派な小說を書くやうになつたが、是は漸く近世のことで、希臘も羅馬も、或は中古時代の佛蘭西、日耳曼、西班牙、伊太利にも無いのである。

と稱へられ、歌の將來に就いては、

どうしても時代の精神に基づいて歌其のものを進步改良させて行かなければならぬ。或は歌其のものの形式から改良しなければならぬかも知らぬ。

時代の精神に伴つて、今日の言葉になるだけ近づかしむるといふことを努めなければ、將來私は甚だ此の歌が危いかとも思ひます。

と歌の將來に就いて述べられ、更に、

戰爭の文學といふものは、實に強い大切なものである。もし戰爭なかりせば文學は起らなかつたであらうといふ詞があるくらゐである。人間の業で戰爭ほど規模の大なる、且つ花々しい潔い、是ほど大なる人間の業は他に無いのである。死生の巷に立つて戰ふといふ大なるものである。日本にも戰爭の文學といふものは昔からあつて、餘程勢強い言葉も混つてゐる。

と戰爭文學に關する見解などを述べられたことであつた。

後、原田嘉朝翁に伴はれて、早稻田の邸に數人で晩餐に招かれた。食卓の話は多方面にわたつて、實ににぎはしくおもしろかつた。

自分は萬葉集卷十六なる、蟹の爲めに痛を述べた歌のことを語り、さういふ蟹の食べ方が佐賀地方にあると聞いてをることを述べたところ、侯はいかにも左樣であると肯かれ、あちらではガニといふがとて、その製法について滔々と語られた。しかして、いづれその時期になつたらば、あちらで製したのを贈らうと言はれ、やがて約のごとく贈られたことであつた。

○ 山縣含雪公

（明治四十二年四月八日）

拜啓。今回貴著國民歌集の寄贈を辱し、一讀するに、三千年間我が君民の境遇に依り、各其心血を吐露せしものなれば、世の花鳥風月をのみ吟詠したる集の比にあらず、眞に國家に裨益ある緗囊と云ふべし。若し隴蜀之望を言へば、當時の大勢を知るべき注釋を加へなば、一層讀者の感動を深くするならむ。茲に一言謝辭を表し候。時下御自重專祈之至に候。草々不宣。

四月八日　　椿山莊主朋

頓首

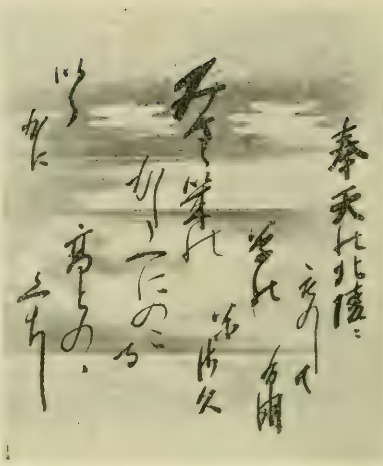
佐々木賢兄

侍史

（この書簡は、自分が國民歌集を編纂したをりに、おくられたのである。）

山縣公と元暦校本萬葉集

山縣公は、維新の頃すでに人口に膾炙した名歌をよまれて、武人の歌人なることは世に周知の事である。また常磐會を興されて、賀古鶴所、森林太郎二君が幹事となり、百數十回繼續した事は、常磐會詠草に詳しいから、省略する。

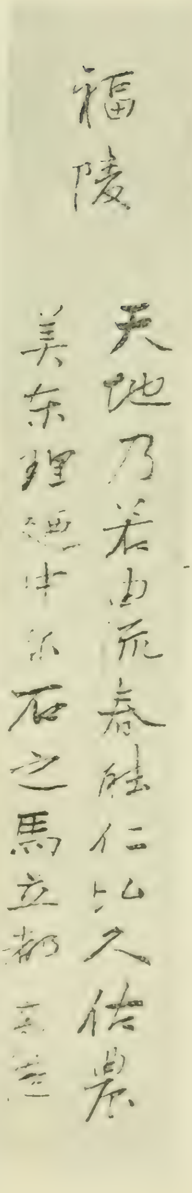


（山縣有朋公色紙）

自分は常磐會に、選者の一人として多年出席してをつたので、公からお聞きしたものがたりで心に殘るものが多いが、ここには萬葉集に關して記すこととする。椿山莊に、新々亭に、夏季は古稀庵の會に列席したが、個人として何事かをお賴みするやうなことは無かつた。が、唯一度お賴みした事がある。それは、大正六年七月、自分が帝國學士院から恩賜賞を賜はつた數日後、椿山莊の歌會席上で、問はるるままに、當日數々の貴重な古典籍を諸家から借り得て陳列したことを語つた。公はその陳列された萬葉の古寫本は、皆版になつてをるか否かと問はれたので、平安朝五種の古寫本のうちの四種まで印刷されてあるが、唯一つ古河家の元暦萬葉のみは未刊であると答へると、それも印行されたらよからうといはれる。井上侯の亡き今日では、お賴みしにくいからといふと、さらば古河家にいうてもよいが、といはれる。自分は喜んで是非お賴みしたいと願つた。

その事あつて後、數箇月にして、元暦校本萬葉集十四册本の復製刊行は成つたのである。

森鷗外博士



（福陵　天地のわかゆる春のにひ草の緑のなかに石の馬たつ　高湛）

○

（明治二十九年三月十八日、駒込千駄木）

つぼすみれ只今着いたし申候。丁度まきの三に間にあひ好都合に御座候。御請まで匆々。十八日　林太郎

（めさまし草に出したわが歌稿つぼすみれに就いての葉書である。）

○

（明治三十一年一月十六日）

先日は御面倒なる御調奉謝候。「矢口渡」評に入用にて願上げしわけに御坐候。友人之說に云々と出置申候。今日寸暇故御禮申上候。匆々。

十六日　　森　生

佐々木大人

梧下

（御面倒な御調云々は、博士が、「藝文」に矢口渡合評をされる資料に就いて問合せられたのである。）

○　（明治三十六年十月二十日）

拜啓。先日は參上失禮仕候。追々御出發切迫御多用と奉存候。其中へ心ナキヿニ候へども新體詩人岩野泡鳴ト云フ人（下谷區花園町十四番地）白百合ト云フ雜誌發刊、其初號に思草序轉載御許被下度申出候。校正後の摺葉右岩野へ御遣被下候はゞ幸甚。乍末筆夫人によろしく御傳願上候。頓首。

二十日夜　　森

佐々木大人

みもとに

○　（明治三十七年四月七日、廣島）

拜啓。只今御菓子二種到着イタシ候。意外ノ賜恐入候。心ノ華ハ小生へ御送被下候モノ屆カネド、賀古へ屆キ候モノ拜見仕候。雪子樣小品、尺幅ノ間聲アリ色アリ感服ノ外無之候。新聞雜誌ハ軍ニ屆キテヨリ先ヅ手ニ觸ルル者披讀スト云フ惡風アルラシク、往々紛失致シ候。一寸御禮マデ。早々。

四月七日午後　於廣嶋　　森

佐々木大人

（尺幅の間云々は過稱敢へて當らずと雖も、雪子が「心の花」にかかげた小文を云はれたのである。）

○　（明治三十八年五月二十八日）

校正之上早速御示シノ處へ遣可申候。今日乃木將軍に逢候而水師營云々之件委細話置候ニ付、小生ノ名刺御持參被下候ハヾ何時ニテモ御出向被下候而宜シク候。

二十八日　　林太郎

佐々木大人

御許

（水師營云々、一二九頁參照）

〇　（大正五年某月六日）

御尋之趣駈出シ史家ノ手ニ餘リ候ヘ共、明和ノ大膳大夫ハ毛利大膳大夫重就ニヤ。其嫡子岩之丞ノ室ニ田安宰相宗武ノ女ガマキリ居候。毛利家ハ本邸日比谷門外、中ヤシキ外櫻田ニ候。田安家ヨリ紀伊家ヘハ婚嫁度々可有之ト奉存候。猶存付候ハヾ更ニ可申上候。

六日　　　森

佐々木大人

御もとに

（眞淵の書簡のうちにある「毛利大膳大夫」につきておたづねしたに、答へられたのである。）

〇　（大正五年九月二十五日）

拜啓。花亭書牘是非借閲仕度奉存候。書生差出可申候ニ付御出シ置被下度候。〇太田孟昌ガ何人カワカラズ、全齋ト同人カ―ト記シ候處チガヒ候。

全齋　名方、字叔龜　稱八郎
- 昌　長男字孟昌。　昌太郎
- 武群　次男家督　信助、後又太郎

右之通ニ候由、近日正誤可仕候。晉圖ノ冖富士川ノ話ニ聞キナガラ未見候。貴物ニ候哉。〇三村君ト往復得ハ仕少何卒貴君ヨリ御挨拶被下度奉願候。

二十五日　　森林太郎

竹柏園大人

侍史

（花亭書狀云々は、當時日々新聞に北條花亭について書いて居られた折、自分が花亭書狀を得た旨通知した返事である。三村君は三村竹清君。）

〇

（大正五年某月二十五日）

色々忝奉存候。璣舜問答は裝潢匠の許より歸り次第さし出可申候。今朝開華に參りしに何も無之、歸途根津にまはり裏道を歩き、弘綱大人短冊一枚發見持參候。責めてもの事に候。

廿五日　　森林太郎

竹柏園大人

弘綱大人歌は淵龜にて、眞跡無疑と奉存候。

（璣舜問答に就いては、博士より借覽して、賀茂眞淵と本居宣長の中に揭げておいたことであつた。）

〇　（大正十一年四月二十日）

帝諡考中誤謬色々御指示被下忝奉存候。猶御心付次第御報被下度願上候。

四月二十日　　森林太郎

〇　（大正十一年五月三日、奈良）

追尊天皇ノ事御教示忝奉存候。

一日此地ニ參リ七日スギマデ留候。

五月三日　　奈良森林太郎

森博士と南都秘笈

七月十一日（大正十一年）の夜はふけて、森博士の邸を辭した自分は、千駄木の通から本郷の通を通つて、まさやかな月の光を浴みつつ歸つて來た。電車の往來も絶えた深夜の大通は、何の影も何の音もなく、殆ど深山を行くが如き感がした。

自分が小川町に住んでゐた時分も、西片町へ來てからも、森博士の邸を訪うて、かなり遲くなつて歸つたことはある。それはいつも、博士の該博な學問上の話や、文藝の問題に亘つて快談されるので、耳に殘る音を味はひなが

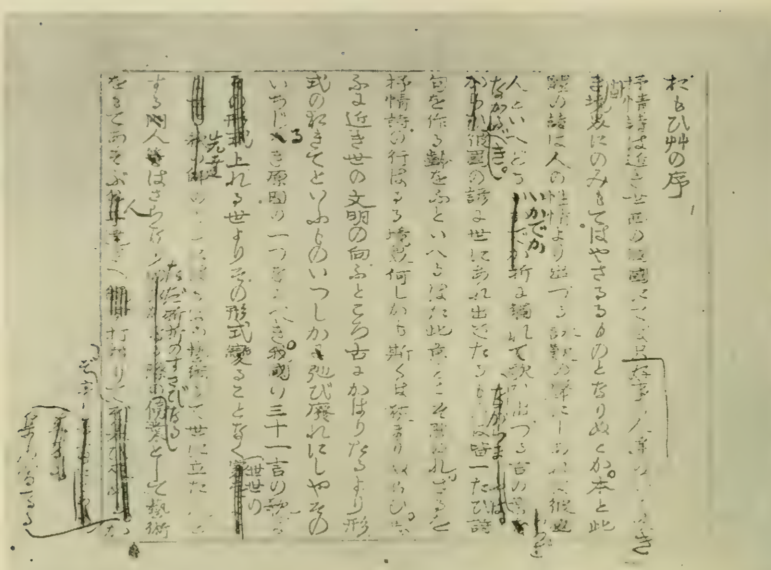
ら歸ることであつた。しかるに今夜は、明日葬るべき棺前に數時間侍して居たので、この月の光に對して、萬感こも〴〵起つて止むことを知らない。家に歸つても、目はさえて眠をなしがたい。即ち筆をとつて思ひ出のまに〳〵しるしつけることとした。

博士の學問及び藝術は、實に多方面であつた。單に詩歌の方面から見ても、創作に評論に鑑賞に、いづれも强い力を持つて居られた。明治大正間の文壇の耆宿で、博士ほど詩歌に理解と同情とを持つてゐた人は無いと云うてもよい。

博士は若くして、同じく千住に住んでをつた感詠一貫の著者佐藤元萇翁に就いて歌を、同鄕の先輩福羽美靜翁に就いて國文を學ばれたので、初期の作品には國文脈のものも少からずあり、短歌をも亦かなり嗜まれた。しがらみ草紙には、近世の諸歌人の傳記逸話等を紹介し、また桂園門下の歌論に就いて批評を試みられたのは、大西祝博士の歌論歌話と共に、明治の歌學史上に特筆すべき事がらである。

日露戰役中には專ら長詩短歌に筆を染められて、歸來、戰爭文學として注意すべきうた日記一卷を刊行され、また「觀潮樓歌會が企てられた。それは根岸派の伊藤左千夫君、新詩社の與謝野寬君と、竹柏會の自分とを中心として、石川啄木、吉井勇、平野萬里諸氏があつまつて、歌を作り歌を評する會である。この會は、後に博士が專ら小說に親しまれるやうになつて絕えたのである。

譯詩歌謠の方面に於いても、みちのくの眞野のかや原遠けどもの萬葉の古歌によつて、國民の友に譯詩おもかげをS.S.S.の名によつて發表された。(うち三篇は同人の作であるが、他は皆博士の筆に成つたと云ふ。)これは泰西の新詩の移植の嚆矢をなすものであらう。文藝委員會の囑によつて譯されたフアウストは、あの短月日であの長篇を譯



了せられたのは、精力絶倫の博士ならではと思はれる。玉匣兩浦島は、極めて古典的の味はひのゆたかなもので市村座で演出したのをも見たが、恐らくはこれは、歌劇實演の始ではあるまいか。

數十年といふほど長い間、先輩として提撕をうけてゐた自分（博士は沖澹な態度で、いつも友人として取扱つては下さつたが）にとつては、思ひ出の數々はさまざまであるが、ここには、最近に博士の好意によつて成つた南都祕笈の第一集について記さう。

博士が帝室博物館總長になられてから、正倉院の拜觀も特志の人に對してゆるやかになつたやうであつた。自分も一昨々年の秋拜觀して、新たに武田君の發見された奈良朝の短歌韓藍花の撮影をゆるされ、梓弓の弭の寸法をはかることを願つたりしたが、古文書中、特に國語學國文學の資料として尊重すべきもの、それに聖武天皇宸翰の雜集一卷、光明皇后御筆の樂毅論、杜家立成、及び慶雲四年書寫の詩序等の撮影印行を允許されたので、一

昨年御開封の際に、吉田、田中、橋本、武田、久松、倉田の諸氏と同行して撮影し、古文書の類は南京遺文と名づけ、他の巻物類と共に南都秘笈第一集として刊行することを得た。ついで昨年の御曝涼の際には、古文書中さらに各方面より見て趣味の深きもの、及び正倉院構内にある聖語藏御物のうち、最古の經卷なる隋經、また老子道德經、蒙求の撮影を爲し、これにかの古葉略類聚鈔を併せて南都秘笈第二集として刊行する豫定になつてゐる。これらの貴重なる御物の撮影に就いても、博士は學問上有益なる事業として好意を與へられたのであるが、未だその第二集をお目に掛けることが出來ないうちに世を去られたのは、實に遺憾のきはみであつた。

正倉院に於ける博士の風姿は、今も目に殘つて居る。事務室に卓を控へて、端然と椅子に倚られ、食事も其處にて取られ、容易に席を立たれない。卓の上には或は獨乙の書を繙きて新思想の研究に耽られ、また拜觀者の人名を見ては並んで居られる久保田館長に渡して居られた。またよく拜觀者のうちの知人の方々と、それぞれの專門に關する談話を交換して居られた。事務所の北側で寫眞をとつてゐたのであるが、二年間に博士が撮影をする處に出て來られたのは、或るよく晴れた日の晝食後に、たゞ一度だけであつたさうである。

自分は今年も正倉院の拜觀を願ひたいと思つてゐるが、奈良の古都に赴いて、正倉院の前の白砂を踏む日が來ても、まう博士の溫容に接することは出來ないのである。

森博士と心の花

心の花に寄せられた森博士の作品、其の他の目錄をかかげるに就いて、思ひ出を書き添へて置く。

心の花刊行前、明治二十九年十月に、「いさゝ川」といふ雑誌を出したが、その第一號に、

そぞろ言　　　鍾禮舍主人

といふ題のもとに、韻語の句讀に就いて論ぜられた。森博士には種々の號があるが、當時國文のものに親しんでをられたので、萬葉にある鍾禮の文字を用ゐられたのであらう。めさまし草の三人冗語の中にも、鍾禮舍と署名してある。

心の花の五巻までにはなくて、六巻の一號にある。

鷺の巣(長詩)	六巻	一號	四一頁

は譯詩で、「ゆめみるひと」とある。

マアテルリンクの脚本(講演)	六	六	一

は、明治三十六年四月、大會を日本橋倶樂部で催したをりの講演の筆記である。

小犬(長詩)	七	一	三八
膠山絹海帖序	八	一	一
第二軍の歌(長詩)	八	二	二三
寫眞(長詩)	八	三	四一

第二軍の歌と寫眞の二篇は、出征中寄せられたもの。

營口で得た二書の解題	八	六	八一

は、田山花袋君が營口で書肆をあさつて獲た西洋小説ハインツ・タヲオテの「死骸マリイ」と、「アナトオル・フランス

の「鋒鏑」との二部の解題で、支那の大きな紙へ書いて寄せられたのであつた。

ゆ　め(短歌)	八	八	四三
太子河の邊より(短歌と漢詩)	八	九	三一
陣中手束(短歌と漢詩俳句等)	九	一	六四
	九	四	三一
犬の聲(長詩一、短歌一)	九	二	二九
戰地との贈答(短歌三)	九	二	六八
長歌一篇	九	三	六〇
戰地より(文章と短歌七)	九	五	六三
(短歌二)	九	六	五七
(短歌七)	九	九	四三
長詩二及び歌二	九	七	七一
森鷗外博士筆蹟(寫眞版)(短歌)	九	七	七一

以上のうち、二號六八頁には、一月廿一日博士の誕生日の祝に、留守中の千朶山房に招かれた人々から戰地に送つた歌がある。その作者は、上田敏君、千葉鑛藏君、大久保榮君、小金井喜美子夫人及び自分である。上田君の短歌は戰地でも珍らしいと思はれたであらう。なほ九卷十卷には、令息於菟君の譯文七篇が、山君の名で載つてをり、九卷一號には、依田學海翁が森坪内二博士の浦島に對して書かれた「玉手箱の打ちこわし」といふ文も載つてをる。

敵　襲(長詩)	十	二	一四
せめては草(長詩)	十	三	九
ゲルハルト・ハウプトマン(講演)	十	五	一

ハウプトマンは華族會館に於ける明治三十九年四月大會の講演の筆記である。桑木嚴翼博士の森博士追懐談（心の花所載）にいふ。「竹柏會の大會に招かれて、博士の講演を聽聞した。その時の講題は、ハウプトマンの戯曲といふやうなことで、當時未ださほど一般に詳しく知れわたつてゐなかつた種々の著作に就き、逐一解説せられたのであつたが、かなり大きな題目を陳述されたことで、中々長時間にわたり、然も西洋の固有名詞などが多く出て來るので、多數の聽衆にはいささか聽きとり難い事が多いやうに見えた。然し其等の事には一切おかまひなしに、軍服姿のキチンとした態度で、何等のヤマもなく滑稽も交へず、平板な調子で、併し極めて明晰な辯舌で、傳記から著作梗概を十分に講じて、爲すべきことを爲し了へたといふ態度で頗る滿足氣に講演を終られたのであつたが、私は其を見て、これこそ眞の學者的態度であらう、此位心根を据ゑることが出來なければなるまいと、當時未だ餘り多く講演の經驗もなかつた自分のことを反省してみたのであつた。」

當日の大會記事（白岩艶子夫人執筆）に、

森大人の演説はじまれり。思ひ出盡きぬ去年は、いくさの彈丸の雨にぬれしまゝなる戎服とや、カアキイ色したる洋姿雄々しげにいます大人の、壇上に立ちて今しも語りいで給ふ興味深き物語、人皆聞きもらさじと靜まりて音もせず。

とある。カアキイ色の軍服姿で諄々と說かれた此の日の講演は、毎年の講演の中でも最も感銘の深いものであつたと、樺山常子夫人のごときは、今でも折々言ひ出される。又此の日、今は京大の教授なる深田君がたしかまだ學生で、森先生のお話を是非聽かしてほしいからと、同人なる松井夫人の紹介で來られたことなども思ひ出される。なほ此ハウプトマンは、後に單行の書として刊行された。

この二小説は、ともに「腰辨當」といふ變名で出された。出征から歸られて後、執筆された小説の中で、最も早いものであらう。

妄語は「妄人」といふ號で、手宮彫文集説は眞面目なのであるから「森林太郎」とある。



奉天に於ける森林太郎博士

請願（ハンス・ハインツ・エウエルス）　十七　一

ねんねん旅籠は、後に某座で上場した。大發見は諷刺の作、牛鍋はすぐれた短篇である。

鷗外博士と筆蹟（寫眞版）　十七　一

の肖像は、出征中に某軍醫正の撮影にかかるもので、自分に贈られた時、傍に「清國留都にありし時予は此の如き廟の裡に起臥したりき」と記された。留都は奉天の古名で、座右に積まれた書の中には、出征に際して、自分が贈つた歌學全書本の萬葉集をおいてあるのが寫つて居るといはれた。これに就いては思ひ出がたりがある。餞別に何をかお贈りしたいがと話したところ、暫らく考へてをられて、萬葉集の活版本の素本（すほん）を、とのことであつた。さて言はれるには、戰地で讀むには、小説の類はよくない。いつも一氣呵成に讀んでしまふ習ひなので、用事の起つた際にこまる。かつ二度三度繰返して讀むといふやうな小説はまづ無い。それに反して、歌の集は一首一首で完結してゐるから、いつでも讀み止めてよい。また萬葉のごときは、何回繰返して讀んでもよいからとのことであつた。

筆蹟は前に掲げた「營口で得た二書の解題」の初めの部分が縮寫してある。

譯本フアウストに就いて　十七　五　一

は、文藝委員會の囑によつて譯されたフアウストに就いて委しく記されしもの。初校の校正刷の時、博士のお賴みを受けて、自分が殆ど毎夜のやうに千駄木にいつて、夜の更けるまで讀んでは、わきがたいふし、或はいかがと思ふふしをいふと、博士は原書を手にして説明されたり、自分の注意によつて朱筆を執られたりした折のことが思ひ出される。卷のはじめに漢文で數行を記して贈られた譯本フアウストも、今は長い記念となつた。

北遊記　十八　八　七二
　　　　十八　九

歷史其儘と歷史離れ　十九　一　九

歷史其まゝと歷史離れは、博士の歷史的小說の態度に就いて述べられた、注意すべき文である。

松村夫人に　十九　八　七一

松村みね子夫人の譯された「キャプテンブラスバオントの改宗」の序詞で、上田敏博士と共に、博士も、松村夫人の譯に就いては、推奬の詞をしば〳〵洩らされたことである。

短　册（寫眞版）　二十　一　一

博士はいつも眞書(しんしょ)でかかれて、細くはあるが力のあるうるはしい筆蹟であるにかかはらず、他の爲めに揮毫するといふことを好まれなかつた。殊に短册に書くことは、絕對に謝絕されたやうである。常磐會歌會は、明治卅九年六月に第一回が開かれて、本年二月百八十五回を最後として長くつづいた歌會であるが、博士は第一回から最終の會まで、幹事として必ず出席された。（缺席されたのは僅に四五回ぐらゐであらう）席上よく選者たちが筆をとることがあつて、博士も卷物や色紙には時に書かれたが、短册に筆をとられたのは、前後を通じてたゞ一回であつた。それほどであるから、博士の短册は恐らくは十枚とは無いであらう。因にいふ、この數年來、短册の蒐集家が都會にも地方にも多いが、さる人々の中で最も得がたいとされるのは、田安宗武卿ので、これは田安家に唯一枚傳はつてをつたのを、自分が撮影を請うて、心の花廿二卷十一號に寫眞版として揭げた。次に田安家に聘された賀茂眞淵翁ので、翁は歌を小さいものには書かないといふ主義から、自分の知つてをる範圍では春滿時代のが唯一枚、（これは同じく心の花廿二卷十一號に揭げた）眞淵とあるのが恐らくは十數枚あるのみである。こんなことをかきつづけると、宗武卿や賀茂翁のと並べられるのは困ると、博士は苦笑されるかと思ふから筆をおく。

高瀬舟と寒山拾得　　二十　　一　　八九

近業解題と書き添へてある。博士の傑作「高瀬舟」がいかにして生れたかといふことを知るべき徴據である。

告亡友三浦氏文　　二十　　四　　四〇

三浦守治博士の葬儀の日、式場で讀まれたもの、蒼古な漢文である。竹柏會の古い同人であつた三浦博士も、その舊友中「最親善」でわが會とゆかりの深かつた森博士も世を去られた。噫。

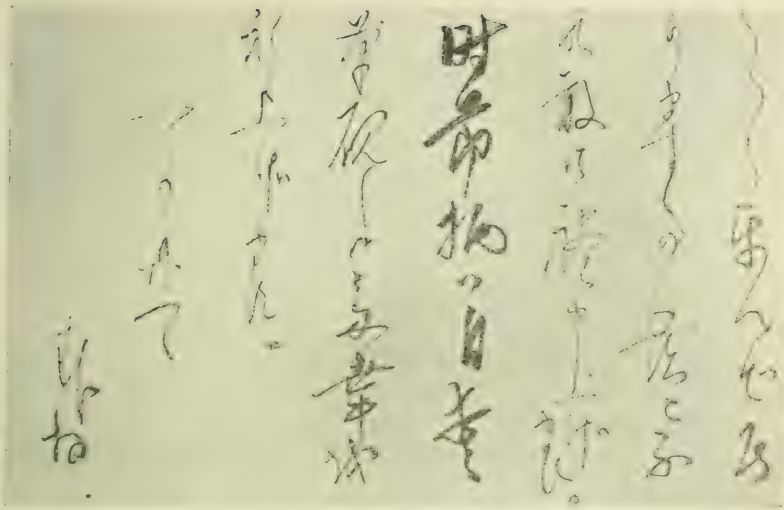
博士は小倉に赴かるるやうになつた當時、日本紀の隱語に傚つてやや不平の意を洩らされた隱流といふ號を用ゐられたこともあり、前に述べたやうに日露戰役から歸られた後、腰辨當などと記されたこともあり、種々の號があつたから、或は心の花に掲げてここに洩れたのも、聊かはあらうかと思ふ。

有島武郎君

○　（大正十一年一月三十一日、麹町區下六番町）

佐々木信綱様

爾後打絶而御無沙汰申上て居ります段不悪おゆるしを願ひます。此頃は妹が御指導にあづかつて居りますさうで難有う存じます。彼女に御言傳の事も伺つて居りましたが、此度御芳書と共に「常盤樹」を御恵投下さいまして厚く



（有島君書簡）

存じます。其中ゆる〳〵拜見したく樂んで居ります。玆に不取敢御禮申上けます。時節柄御自愛筆硯の御多幸を祈上げます。

一月卅一日　　　　　　　　武　郎　拜

鎌倉にて

ここに掲げた書狀は、自分が、歌集常磐木を贈つたをりのである。文中、「妹」とあるのは、有島生馬畫伯の夫人信子さんのことで、信子さんの母君原田照子夫人も、竹柏會の古い同人の一人であつた。

この手紙より後のことであつたかと思ふが、安子夫人の病中の詠草を依賴のままに筆を加へたことであつた。その作を左に抄出する。

舟出する海士に幸あれ紫の園より生る日はいま出で來
秋は來ぬ山の木の實に野の花に夕べの雲のさびしき色に
あはれなり賴に添けたる秋の花枯れても散らず妄執の如
寐ながらに栗喰みをれば野を分けて秋の風ゆく何處にゆくや
ひめごとを星はかたれど夜はただしじまに人を守り答へす

入りてまた出でて人まつ門のべのあかしやの花ちるがかなしさ

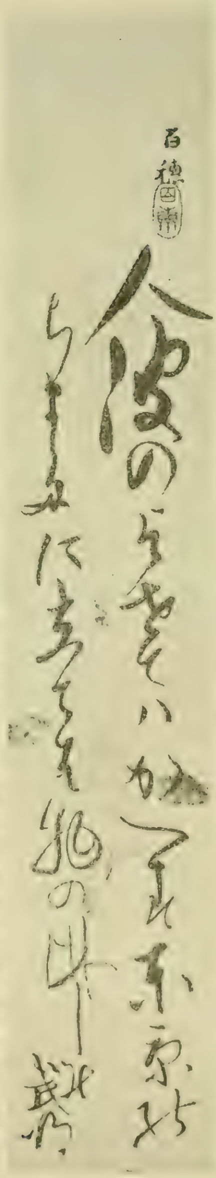
病室の朝の障子に鳥の影のさす日はせめて人のまたるる

わが胸にをさなき子等は日毎來てとく癒えませと涙していふ

白百合に似たる子なればその胸に露やおくらむ母やみてより

わつと泣くをさなき聲をわが子かと夢よりさめてふと見まはしぬ

沙漠ゆく人の如くにわが心けふもかわきてさすらへるかな



（人波のよせてはかへす東京のちまたに立てば物の淋しも　武郎）

女とは實にも魑魅のなれる果われらとましき日もまじるかな

蟻のひく餌ともならじおぼつかな饐えもはてたる我のこころは

病む胸の血しほのながれ今日もまた思ひにみだるよわきわれかな

武郎君もまた、歌をよくせられた。ここに君の歌を拔抄する。

人波のよせてはかへす東京のちまたに立てば物の淋しも

山を出でし木樵が負へる大鋸にやはら日あたる春は來しかも

おのが紡む眞白き絲の中にして蠶の如くにも我は死なまし

草の花數はあれども鈴蟲の宿となるてふ露草の花

信濃尻の野尻の湖し遠見れば刄のごとし秋さびしかな（赤倉にて）

しみじみと伏拜みけり病室のまどより見たる七尺の春

ふしくれし槲の大木の片枝のみ生き殘りたる戀ざめ心

なほ作の歿後、書齋より發見されたといふ短册十數葉の中から拔抄する。

世の常のわが戀ならばかくばかりおぞましき火に身はや燒くべき

修禪する人の如くに世にそむき靜かに戀の門にのぞまむ

雲に入るみさごのごとき一筋の戀とし知れば心は足りぬ

蟬一つ樹をば離れて地に落ちぬ風なき秋の靜かなるかな

命たつ笞しあらば手にとりて世の見る前に我を打たまし

我兒等よみ空を仰げ今宵より汝を見守る星出づらむぞ

島田沼南君

田園歌人魚貫の歌

井伊家の家令に、堀正令といふ亡父の門人があつた。その堀君が、島田氏が開國始末を著はされる資料にと數種の本を借りに來た。それが島田氏の名を知つたはじめであつた。

明治三十六年十月、島田氏と親しい弘田長博士より、竹柏會大會の講演のことを氏にお賴みしたからとのことで、ある夜、番町の邸を訪うた。通された座敷に短册掛があつて、「秋の野をめぐり／＼ていでぬればもと來し道のちまたなりけり」といふ神山魚貫の歌の短册がかけてある。しかし文字は魚貫でないのでいぶかしさに問ふと、いつぞやのあなたの文の田園歌人魚貫といふ中で、歌がおもしろかつたので、心やすい高津柏樹さんに賴んで書いてもらつたのである、との答であつた。

それは竹柏會の同人大橋文之君が、毎日新聞社に入社したが、その頃、編輯長木下尙江君の囑によつて、自分が「田園歌人魚貫」と題して數回にわたつて魚貫の歌を紹介したのであつた。その中から島田氏が選ばれたのであつた。「まだこんなに書いてもらつたのがあります」といつて示された魚貫の歌は、

野外雪

竹なれば境のまがきをれふして野邊よりつゞく庭のしら雪

山家

苔つたふ岩間の淸水せきためて一人すむには足れる庵かな

無境庵にかりねしてよめる

しら樫の古葉ちる音におどろけば已が宿なりうたたねの夢

月前述懷

わが心そらに見えなばあさましく曇りにけりと月やわらはむ

ある夜盜人來りて吾が培ひつる菊の花を根ごめにとりもていにつ

盜まずば取らせじものと思はれしわが心こそまづ憂かりけれ

神無月の末つ方より病にふしけるに、十二月になりて少し心地さわやぐやうなれば、人に助けられて無境庵にのぼり見れば、いみじう荒れて庭の木葉積み置きたらむやうにぞふり埋む

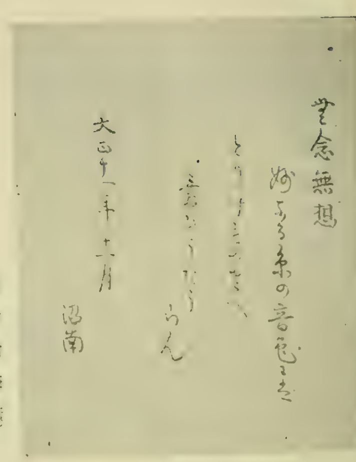
しばしだにすまねば荒るるいほりかなあらずなりなばいかがなりなむ

○

泪こそよそには見せね子故には物を思はぬ日ぞなかりける

以上の魚貫の歌を選ばれたのを見ると、彼の歌集苔清水の中から自分の紹介した中で最もすぐれた歌どもである。「盜まずば」の歌のごときは殊に感じた歌である。島田氏が歌の鑑賞の力のなみ〳〵ならぬを感じつつ歸らうとすると、其一が書いた竹取物語の繪屏風がたててあつて、竹取翁が幼きかぐや姫を抱きかかへてゐる圖であつた。さらに主人の心のゆかしさを感じたことであつた。(因にこの時の講演は「國歌に對する私見」といふ題で、心の花六卷十一號に揭げてある。)

ここに圖版に揭げたのは、氏の歿せらるる前年、杵屋榮藏子の懇望によつて筆を執られたものである。其の全文を揭げる。



（沼南君筆蹟）

獅子王の銘

我國樂界の新人榮藏ぬし、頃日、一挺の名器を得て、其名を獅子王と呼び、是が銘を予に求む。情切にして辭するに由なし。蕪言をしるす所以なり。

獅子王一たび聲を發すれば、魔群畏怖して影を消すといふなる。夫れ樂藝の境界に私なし。心正しければ其音清く、思よこしまなればその調亂る。されば君、此の名器を抱きて、其名を辱しめざらまく欲せば、すべからく天地神明をうやまひかしこみ、研修煉磨朝夕に怠ることあるべからず。

無念無想妙なる絲の音色にはとりけものさへ舞ひうたふらむ

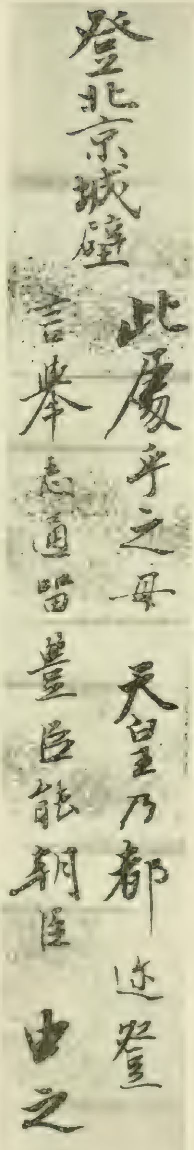
大正十一年十一月　　沼　南

なほ島田氏は、その永眠の前日、信子夫人を枕頭に呼ばれて、自分は政界に生活すること數十年であるが、自らかへりみて心にやましいと思ふ事や、良心に恥づる行をしたことは曾てなかつた、といはれたといふ。この詞を聞かれて、尾崎行雄氏の靈前に手向けられた色紙がある。

嶋田君の逝去をいたみて　　行　雄

かへりみて疚しき事のなき人は一人ゆきてもさびしかりけり

萩野由之博士



（ここをしもすめらみことの都にとことあげしつる豐臣のあそ　由之）

○　（明治三十七年十一月八日、駒込蓬萊町）

湖月抄跋語のうつしは返上仕候

御報書拜見仕候。仰の如く御會には今度は出席叶はずとも、遠からぬ内貴約を果し可申候。南都官遊について歌候はゞとの事、枯れ果候詩腸には迚も出來申間敷とは存候へども、自然山川の英靈の助も候はゞ、御筆側を煩し度と存候。蘆庵の懐紙御手に入候よし拜見も願度候へども、出發前は暇も無し、いづれ歸京の後と樂みを餘し置可申候。又伊勢より本居翁校正の湖月抄出候よし、珍重の物と推し申候。定めて高價のものなるべしと存候へども、名賢の手澤必御求置被遊候樣御勸申度候。生も先般不圖本居翁の手澤の枝折一枚手に入申候。櫻の木にて笏の形に製した

るに、自筆の歌記してあり、窃に自ら珍藏仕居候。これは世に二三はあるものゝよし承り候へども、生は始めて觀、始めて得申候。其中淸覽に入れ可申候。先は御挨拶まで。草々頓首。

十一月八日　　萩野由之

佐々木信綱樣

研北

○（某年五月十一日）

類聚古集解說、御惠贈被下辱奉存候。御示しの台記いかにも見林自筆らしく拜見申候。御求置可然歟と存候。但、見林の此やうの筆蹟は和田英松君所藏にて候。同君のと御引合被成候はゞ尤もたしかに可有之存候。急用にて他出の前匆々御答申上候。頓首。

五月十一日　　由之

佐々木兄

几下

○（明治四十四年十一月五日葉書）

拜啓。先日はうつくしき青森の林檎澤山御惠贈、ことに御歌まで辱う奉存候。不在中にて御挨拶も申上得ず、失禮仕候。

駒込のしらが老爺もみちのくのあから少女にあへる御代かな

これでもお禮の詞になり申すべきや。かしこ。天長節後二日。

墨蹟の鑑識家として

日本文學全書編者三人のうち、落合君ははやく世を去られ、小中村君、萩野博士も遠逝せられた。

博士は古典科の先輩であり、西片町に近い東片町に住はれたので、屢往復して提撕を受けた。博士が國史學の泰斗であつたことは、今さらいふまでもないが、博士は江戸時代以降の和漢學の名家の墨蹟の鑑識家としても第一の人であつた。隨つて多く蒐藏してをられて、その藏弆を影印せられたものに、先哲書影があり、其の襲藏を永久に傳へられてゐる。

自分が古人の筆蹟を蒐集するやうになつたのも、博士と和田英松博士の感化が尠くない。それで萩野博士に鑑定を請ひもし、その藏弆のあるものを讓られたこともある。百代草の中に掲げた孟子抄の古鈔本、方梅厓の詩、元曆萬葉(四行)のごときはそれである。

博士はまた、漢文及び詩にも達してをられた。和歌もをり〳〵に詠ぜられて秀逸の作がある。國史學者中、詩歌ともにすぐれられた一人である。

富岡鐵齋翁

○（大正十三年五月二十二日。京都室町中立賣）

拜啓。即今時候至て不順ニ覺え候。

學士先生無御故障愈以御精勵之趣、洵ニ欽慶之至也。降而老僕宛似土塊、座食嬾惰無可取、實可辱矣。



（宇治川畔に於ける鐵齋翁）

帝室御物金澤萬葉摹本御惠贈之義、不相變御懇情之厚、重々感謝仕候。不取敢拜掌之御禮申進候。何れ其中に重而申上度、他日相期候。頓首。

猶復。來月者御入洛之由、拙廬改築功畢候。御來訪奉待、澁茶ニテモ可供也。又老婆毎々御面倒之儀、高庇腰折病御療治ニ預り相娯居候。私よりも厚御禮申上候。其中ニ又々申上度候。

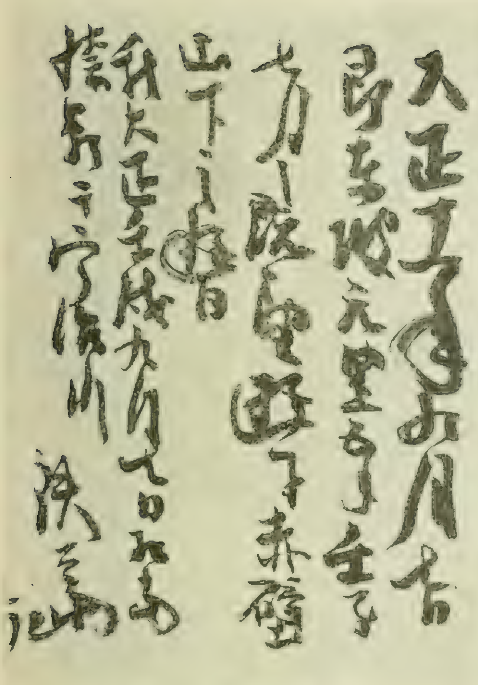
五月廿二日　　富岡百鍊

竹柏園先生

無量壽佛堂のある日

富岡鐵齋先生は、若くして蓮月尼の提撕を受け、後大鳥神社の宮司となられたので、本居派平田派の國學をもきはめ、和歌をもよくせられた。

自分は、晩年の先生に親炙して京都に赴くごとに訪問し、多くの感化を受けたことである。曼陀羅窟の奥、物さびた庭には、御所からいただかれたといふ櫻と楓、故桃華君が西湖から持ち歸られた梅をはじめ、藤、椿、青桐のたぐひが生ひ榮えてをる。



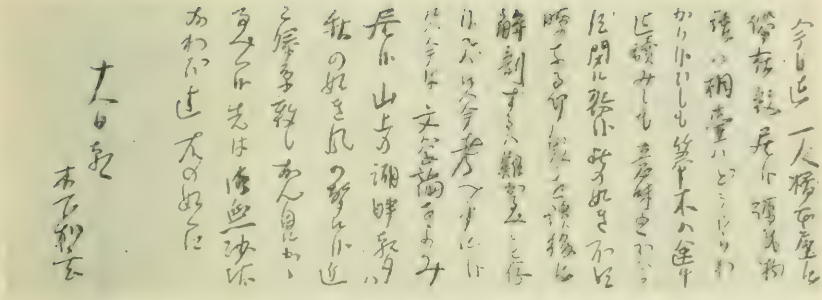
（鐵齋の筆蹟）

その庭に面した畫室に先生は居られるのである。畫室の隣は佛間で、間を區ぎる襖は、冷泉爲恭の畫稿ではられてある。圖は一枚の端に一行阿闍梨、他の一枚の端に、善无畏三藏と書いてあり、上の欄間に、西園寺老公の筆なる無量壽佛堂の額がかけられてある。その畫室で、ある日のこと、自分のおもほてりした小話をここに記すこととする。それは、縣門の人々の話のあつたをり、「千蔭は畫が上手やつた、何というても本式に立派な畫家の

門に入つて畫を習うたのやから」といはれた。自分は、千蔭の書はほんの小品しか見てをらず、誰に師事したといふことは知らなかつたので、もしや先生の記憶の違ひではあるまいかと、ふと思つて「素人畫なのではありますまいか」といぶかしげにいつたところ、先生は微笑しつつ、他に話を轉ぜられた。その翌日は夜行で歸京するので、午後訪問したに、先生は庭におりて書庫の方に行かれた。そこには、故久邇大將宮が、日露戰役記念に旅順から御持ち歸りになつて一本を給はつたといふ月桂樹、當時は一尺ぐらゐであつたのが、屋上にとどく位に高く繁つてゐる、その書庫の戸をあけられる音がしたと思ふと、やがて持つて來られた本を示された。寒葉齋畫譜とある。あけると、建凉岱の畫集で、門人橘千蔭、豊島琳玉卿等の同校とあつた。自分は思はずおもてが赤くなつたが、先生はそんな事には頓着なく、次の間から千蔭の盆踊の畫を出して來られて「よう描いたる。盆踊の畫を頼まれた時は、これをお手本にするのや」といつて、いつものやうにやさしい笑をたたへてをられた

今一つ、おもておこしをしたことを述べる。ある時畫室に入ると、先生は三十六冊もある夫木和歌抄を傍において、しきりに何冊かをひろげてをられる。「何々といふ歌をさがしてゐるのやが」といはれる。自分は「活版本ならば索引が出來てをりますが、しかし」といつてさがすと、幸にすぐわかつた。その時先生は「さすがに先生や」というてほほゑんでをられた。

先生からおくられた書簡は、東鑑風の漢文で、行間が密接した力づよい書體、文字の大また小、さながら先生の繪を見るがごとくである。ここには、宇治川河畔における赤壁の古を偲ぶ宴に出られたをりの寫眞を掲げることとした。二〇八頁なるは、寫眞の裏面に書かれた文字、その包紙に「裁東坡巾着白衣者鐵齋也」とある。



木下利玄君

○（明治四十二年八月十八日、相州元箱根橋本屋）

その後は御無沙汰失禮致候。小生は八月三日函嶺蘆の湯に参り十日程滞在、至て涼しく、二子山の麓を霧の走る朝などはフランネルか袷がほしき位に候ひき。蘆の湯には友人有之候ひし爲、毎日二子山、笛塚、五郎十郎塚などへ散歩し、殆ど讀書致さず過ぐし候。十一日小田原に下り候。その朝濃霧にて叢の八千草濡色清く、睫に露の玉を宿し候。小田原に三泊、十四日函嶺の舊道を上りて湖畔元箱根に参り、今日迄一人橋本屋に滞在致居候。源氏物語は桐壺はどうやらわかり候ひしも、箒木は途中迄讀みしも意味よくわからず閉口致候。此の如き不明瞭なる印象を讀後に解剖するは難かるべしと存候へば、只今考へ中に候。只今は文學論をよみ居候。山上の湖畔朝夕は秋の如き風の聲に候。近々歸京致しおん目にかかるべく候。先は御無沙汰御わびまで。右の如くに。

十八日朝　　　　木下利玄

佐佐木信綱様　侍史

純眞な態度でひたぶるに和歌の一路を歩みつづけてをる人が、現時何人あるであらうかと考へる時、木下君の死は、大正歌壇にとつて實に惜しむべく悲しむべきことである。まして、幼くから君を知つてをつた自分にとつてはいふまでもない。おのがじし己が個性を發揮するを旨とする爲、その特殊の性情と境遇とでその作歌に種々の姿はあるが、同じき竹柏會といふもとに集まつて親しくしてをる同人にとつて、殊に歎かはしい極みである。

ただわづかに君の第三の集にしてしかも最後の集なる歌集一路が、去年の夏以來君の精緻な藝術的良心によつて、版を組みかへること幾回、君の意にそうた集が心の花叢書の一として刊行されたことは、いとせめて吾人にとつて心の慰めである。

大正十四年二月十九日、雪もよひの午後二時から三時まで、君の家の菩提寺なる高輪泉岳寺に於て、君の告別式が執り行はれた。いたましい未亡人、親戚たちの立つてをられるうしろに自分も立つてをつた。君の棺の横にをる數人の僧侶も、誰もしはぶきさへもせぬ。唯をり／＼附近の小學校からの物音が聞えてくるのみである。何といふ悲しい沈默の一時間であつたであらう。告別の人々は打つゞいて來た。文壇歌壇の士をはじめ、同人の人々も多かつた。一路の出版について數回鎌倉にいつてくれた國文社の小林氏も。

式が終つて本堂から下りると、雪が降つて來た。身も心も凍つたやうになつたので、石榑茂さんと共に、歸途小川町のレストランへよつた。歌集の事に就いてすべてを託された茂さんの話をストーブの傍できいてゐると、細心な君の面影がまざ／＼と浮んで來る。

外に出ると、雪ははげしく亂れ散つてゐる。遺族の人々は、鎌倉への車中、いかにさびしくこの夕べの雪を見てをられるであらうと思ひつつ家に歸つた。

靜かな夜の想ひは、ひたすら木下君の上を移つてゆく。

今より三十年に近い以前のこと、ある日わが家を音づれた人があつた。自分の書齋は二階にもあつたが、玄關の横にもあつた。いつものならひで取次のおそい時は自分が出る。すると、中年の篤實さうな人が、先生にお目にかゝりたいといふ。自分が佐佐木であるからといつて書齋に通すと、歌に就いていろいろの事をこまかに問うて歸つて行つた。



木下利玄君の幼時

後數日、學習院の制服を着た幼い人を伴うて來た。實は自分の若い主人が歌を習ひたいといはれるので、先日はお尋ねしたわけでといひわけをいふ。この木下丘次郎といふ人は、數年前に世を去つたが、木下家の一族で、君が幼くて伯父君の後を嗣ぐべく上京した時、備中足守から隨行して來て、君の養育に教育に、身もたな知らず盡した人であつた。

これより先に長三洲先生の息なる壽吉君、川田剛先生の息なる順君が竹柏園の同人となつてをられたので、自分は歌道の名門といふべき長嘯子の後裔なる君の來られたのを喜んで、歌の道にひたすら精進せられることをすすめたことであつた。

いふまでもなく長嘯子は、江戸期の初期に新しい歌を詠みひらいた人で、其の爲めに、その家集擧白集をさして、

破戒偷言集、邪魔俗風集などと當時の守舊派から謗られもした。雅學自集といふ書も出た。後世の小澤蘆庵のごときも、長嘯子を誤解してをつたほどであつた。自分は、早くから長嘯子の歌を賞揚してをつたので、折にふれては利玄君に、祖先の名をあらはす歌人になるやうにすすめたことであつた。この自分の言葉は、利玄君をして利玄君たらしめたに力あるものと思うてゐる。

その頃君は、四谷谷町の家に住んでをつた。學習院の成績がよくて、ある年の正月、皇后陛下のお裳裾持の役を勤仕することになつた。丘次郎氏の喜はたとへん方なく、自分にも其喜びをわかたれて、谷町の家に招かれたことがあつた。（こゝにかかげた寫眞がその折のである。）

柏木の廣い屋敷に移られた秋、庭に栗の木があるからとて、栗ひろひに招かれて、子供を伴うていつた。幼き子等は庭で喜んで遊んでをる。自分は、明るくはないが靜かな書齋で、木下君が國から取よせられた長嘯子の古い畫像や、有名な豐公にささげた連署狀などを見せてもらつたことであつた。其の頃は長君も柏木に住んでをられたので、ある日長君を訪うた歸途木下君を訪うて、夜をふかして、暗い畑中の道を君に送られて柏木驛に來た記憶がある。いつも微笑をたたへた物いひぶりであつたが、暗い夜道の故か、いろいろの事を語られた。

大學は國文科に在學されたので、火曜日の講義の後を、一所に池のそばをめぐりつつ語つたことも屢あつた。學科の中では獨逸語が不得意であつたと見えて、困つたといふ話を聞いたこともあつた。

長い間の君の旅行は、君の生涯の爲めにも、また歌の道の爲めにも意義の深いものがあつた。途上からおこせられた葉書が少くない。君はよく葉書を用ゐたが、短い文にいつも心ふかく書いてあつた。この旅行時代のある夏のことと思ふ。自分はどうしてか、夜ふけて、夏ながら月の薄らつめたい東京驛前の廣場に電車を待つてゐた。ふと

君に逢つた。どうしました、旅からいつ歸つて來ましたと問うたところ、亡くなつたお子さんの悲しいかたみを抱つて來られたやうに答へられた。其の時の沈痛な君のおもわは、今思ひ出してもいたましく自分の目にうかぶ。君はお子さんには實に不幸であつた。三人の幼い人がつぎ／＼に世を去られたのであつた。

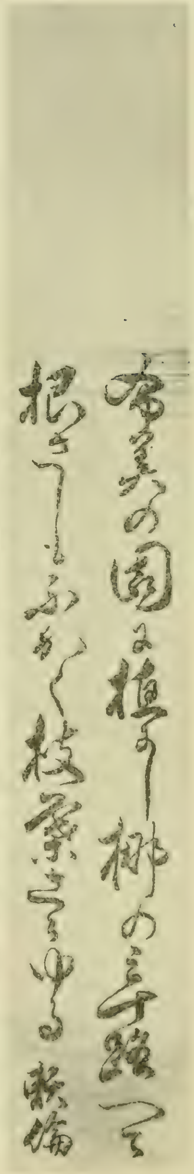
數日前、君のとこしへの別に鎌倉にいつた。冬枯の木立のさびしい名越の谷戸の奥なる君の家の門に立つと、老木の梅は多くの花をつけてゐるが、心のなしか花の色もさびしげである。悲しい讀經の後、君の棺は門を出ようとする。近親の女の人の背におはれた唯一人の遺れがたみなる幼い利福君が、無心にながめてをられる姿をみると、自分は堪へられなくなつた。夫人の上に、わ子の上に幸あれと、心のうちに祈つたことであつた。

いつしか夜は更けた。思ひ出は盡きないが、鎌倉でよんだ數首を書き添へて、筆をおく事とする。

鎌倉の谷戸(やと)の靜處(しづど)にこもらひて歌おもひつる君しあらなく
うた人君とこしへと思へうつそみの短かかりつる命かなしも
虔(つつ)ましく我を守りて一すぢの路をぞただに君は歩みし
門の邊の梅はも咲けり澄み心深くまもらひうたひし人なし
くもり空ゆふ山かげの道はくらし君の柩のしづかにゆくも
名越の谷戸のおくがに魂ごもり歌おもふらしも目には見えなく

（大正十四年二月十九日夜）

徳川頼倫侯



（文の園に植にし梛の三十ち經て根さしも深く枝葉榮ゆる。　頼倫、亡父の三十年祭に手向けられた歌。）

紅葉館の雅會

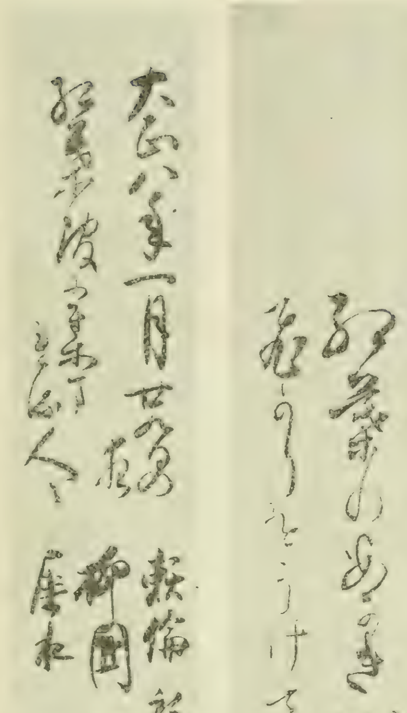
頼倫侯は、日本圖書館協會の會長として、また南葵文庫を創設して、典籍の爲めに盡されるところが多かつた。南葵文庫には、小中村博士、坂田諸任氏の藏書等が全部入つてをつて、國文學の善本があつた。後、勝海舟伯、島田篁村博士、依田學海翁の藏書が寄託されたので、それらの人々と親しかつた亡父の手澤本一千部を、自分も寄託したことであつた。（後南葵文庫が閉ざされるので引取つたが。）

大正八年一月廿九日、舊和歌山藩士なる下村宏博士は、侯を主賓とし、自分を陪賓として紅葉館に一夕の雅宴を

開かれた。その折、席上で書かれた僕の短册に、

もみぢ葉のあかき心のともしびの光をうけてつどふ歌人

いま一葉の、人々の名を書いた短册には、賴倫、邦輔(岡崎翁)潛(永井博士)兵治(三上博士)次郎(田中氏)御園(御



田國男君)八十八峰(米山梅吉君)ひろし(下村君)弟彥(間島君)犀水(加藤正治博士)英一(牧野博士)とある。主客共に談論風發、夜の更くるを忘れたことであつた。

大町桂月君

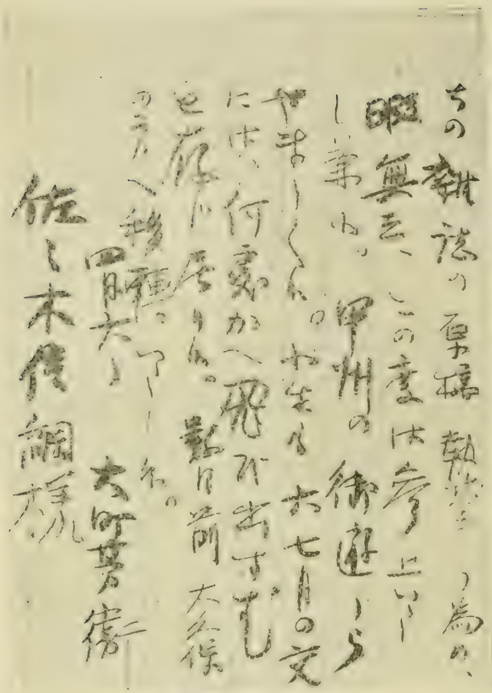
○　（明治三十六年四月六日）

人の心は絲遊と共にうき立ち候へども、文筆いそがしき貧書生の身、一室にのみ冬籠いたし居り候。十二日は折角の御案内難有御禮申上候。然るに毎月十日前後一週間位は、受持の雜誌の原稿執筆の爲め、暇無之この度は參上いたし兼ね候。甲州の御遊うらやましく候。小生も六七月の交には、何處かへ飛び出さむと存じ居り候。數日前大久保の方へ移轉いたし候。

四月六日　　　　大町芳衛

佐々木信綱樣

（十二日の御案内とは第四回竹柏會大會のことである。）


ちの雜誌の原稿執筆の爲め、暇無之、この度は參上いたしかね候。甲州の御遊うらやましく候。小生も六七月の交には、何處かへ飛び出さむと存じ居り候。數日前大久保の方へ移轉いたし候。
四月六日　大町芳衛
佐々木信綱樣

（桂月君書簡）

與謝野氏等と新詩會を興すべく會合した時、吶辯ともいふべき辯舌ながら、種々主張を述べてをられたのが桂月君であつた。

大洗の月夜

最も深い思出は、共に水戸に遊んだをりのことである。弘文亭から更に西山なる義公の遺蹟を訪うた。一度焼けたが往時のままに建てたといふ山かげの舊居に昔を偲んで、小蒸汽船で奈珂川を下つて、大洗の金波樓に宿つた。月光、金波銀波に碎け散る良夜を賞しながら、夜更くるまで盃を擧げた。君は酒豪、自分は數盃を傾けたのみであるが、君が詩を賦するに從つて、自分は歌を詠じたことであつた。

新井洸君

微明の歌人

新井君の逝逝を歎いてゐた折から、大和なる前川佐美雄君から、次の手紙をおくられた。

「昨夜おそく新井さん御逝去の電報を手にしました。夢ではないかと思ひましたが、まうかうなつてはかなはぬことであります。木下さんにつづいて新井さんがなくなられました。さみしい氣がして涙も出ません。悲しいこと

であります。

新井さんは生前苦勞をしてゐられるだけ、木下さんよりも更においたはしく思ひます。耳を被はずしては聞かれえぬやうなことも聞いてをります。

余古尓那里天毛迺乎於母敞婆可陀佐支能
宇須良可左牟吉与登奈利尼家里　浩

（横になりて物を思へば肩さきのうすらに寒き夜と成りにけり　浩）

今後の「心の花」は、ます／＼同人の一致を必要とします。若い連中が大いに努力すること、勉強することを申合せてをります。かういふやうなことを先生に申上げるのは失禮でありますが、新井さんの訃に接して思はず筆をとつてしまひました。御許し下さいませ。（十月二十四日）

新井君の知己である前川君のこの手紙については、いろ／＼に考へさせられた。木下さんは四十、新井さんは四十三で世を早く去られたのである。一年のうちに二人までも竹柏會の歌人を失うたことは、何といふなさけないことであらう。殊にこれから大成しようといふ四十代で世を去られたのは、何といふ殘り惜しいことであらう。二人ともに中學時代から同人となつて、（木下さんは十三歳、新井さんは十四歳で入門したのであつた。）多年交をかへず竹柏會及び心の花の光であつたに、實に痛歎の外はない。今はただ、ひとり竹柏會のため心の花の爲でなく、日本

の歌の爲に、若い人々の努力を希望し、その健康が切に祈られる。

新井君に就いて書き度いと思うてゐたところ、石榑千亦君がその書かれた一篇を示された。新井君の性格に就いて、自分の書きたいと思うてゐたことは、既に盡くされてゐる

竹柏會の同人には、すぐれた歌人、不朽の歌人が少くないと信ずる。しかもいかなる故か、所謂專門歌人、もしくは歌壇の指導者といふべき人が乏しい。

石榑君、川田君、角君、齋藤君のごとき、いづれも自己の職務を持つてをられる。故三浦博士のごときもさうである。木下君は專門歌人といつてよい。しかし歌壇の爲めに指導してゆくといふ風なたちの人でない。新井君こそは歌人としての天分を持ち、指導者といふがはに立ち得られる人であると思うて、自分は幾度君に直言したか知れぬ。片山廣子夫人も、君にむかつて大いに慫慂せられたことを聞いてゐる。しかも新井君は、石榑君の書かれた江戸子の長所短所を兼ね備へてゐて、地方人のねばりづよい力を持つてをられなかつた。

木下君は生前歌人として世に認められてゐたが、三浦博士や新井君は一部分の人にしか知られて居らぬやうである。しかし現世に知られるとか知られぬとかいふことは、實質の光の上に何らかゝはることでない。宗武や元義や言道は、生前歌人として流俗に知られてゐなかつたのである。新井君の先輩であつた故佐藤秀信君の家集のうちには、當時にあつて新らしい傾向を含んでゐたが、惜しいことには未成品であつた。新井君の家集微明は三浦博士の移岳集と相双んで、(その方面は全く別であるが)後世に明治大正の和歌史を編する人が、必ず其の何頁かをさくべき人である。しか思ふ時、新井君の短い生涯、文壇的に見て不遇な生涯も報いられる時があることを信ずるのである。

新井君のおもひ出を書けばくさ〴〵ある。うらわかい君が、父君につれられて來て初めて歌を示された時のこと、



明治三十五年四月、竹柏會[illegible]川口から行徳に赴いた折の寫眞、後列左より、中澤弘光畫伯、小花清泉君、三浦守治博士、木下利玄君（學習院
[illegible]石榑千亦君、印東昌綱君、[illegible]止君（帝國大學制服）村岡典嗣君（早稲田大學制服）釣棹を持ちて立てるは著者　前列左より、新井洸君（手にも
てるは、自製の小旗に白にて竹柏會を出したもので、舟中俄にとり出して當日の興を添へたことであつた。）佐々木雪子、橘糸重ぬし、寶月晴子ぬし。

紅葉山人のもとに同作した時のこと、——それらはいつか書いて見たい。

終に臨んで、有働君が新井君に與へられた多年の厚誼は、故人の靈も感謝してをることと思ふ。また大村八代子ぬしが、新井君の前の病氣の時、今回の病氣の時の心づくしも書き添へておきたい。

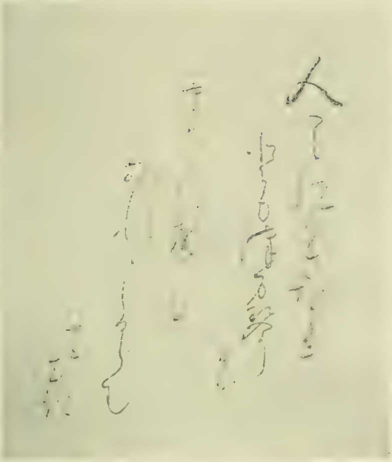
跡見花蹊刀自

日々にみがけ

花蹊刀自が、明治から大正にかけて、五十年の長い間、女子教育の爲めにつくされた功と、遠く海外にまで分布してをる跡見女學校の數千人の卒業生から、「お師匠樣」といふ親しみ深い詞で、まことの親のやうに慕はれてをられた德とは、他に述べる人があらう。本日の追悼會に李子校長から、故人が歌の師としてお學びしたのであるからとのことであつたので、ここに立つて、手向の言葉を一言述べる次第である。

花蹊刀自の父君跡見重敬翁は、和漢の學にたけてをられたが、晩年鈴木重嶺翁に歌を學ばれた。自分も幼い頃、鈴木翁の歌會で同席をした事であつた。それで刀自も、父君と共に翁に就かれ、後大和田建樹氏に就いて歌をよんでをられた。然るに大正十年の七月、竹柏園を訪はれて、自分は暫く歌を詠まなかつたが、明治天皇の御製を拜讀して深く感じました、自分の思を後の世に遺すに、歌は最もよいものと思ふから、再び學びたいとのことで、其の

以後木曜日の朝には誰よりも早く來られた。雨にも風にも必ず來られる。大雨の日は俥できつたが、いつもは女中をつれて歩いて來られた。八十二の七月から昨年八十六の夏まで、その間、大震災の後半年は休まれて、滿三年半であるが、實によく來られた。刀自ほどの高齢で、猶かつ物を學ばう、道をきはめようとの心、その勇猛心は、若い者よりも寧ろまさつてをる。話をしてをればやさしい老刀自であるが、その內にこもつてをる勇猛心こそは、刀自をして刀自たらしめたのであると深く感じた。いつも詠草を出されて、今日のは一生懸命に作つて來ましたが、といはれる。自分は、よい歌はよいといひ、さうでないのはよくないといふ。するとにこ／＼と笑ひながら、此次にはよい歌を詠んできます、それでは、といつていつも歸られる。物を學ぶに深い力をこめ、八十何歳と思はれぬ若々しい力のこもつたその態度に感じた事であつた。歌は人間の情のまことから生れ出るもの、しかしてその人の個性をはつきりとあらはすものである。刀自のおだやかであつて、しかも底力のこもつた心から生れ出た歌は、よく刀自の面影を傳へてをる。


人ごとにかきたらせこもつゝ袖の
まことの露は誰か知るらむ　八十三花蹊

始めて持つて來られた詠草の中に、

　月きよし我が胸きよしこの夕べ山ほとゝぎす一聲もがな

といふのがあつた。自分は「月清し我が胸清し」といふ句がよい。此の句は、心の濁つた人はいへぬ句である。かういふ風に自分の心を僞らずに詠まれるとよい。自分が歌を導いた釋宗演老師が初めてよまれた歌に、「一心よりやがて心に傳ふればさく花となり鳴く

鳥となる」（二六八頁參照）といふのがあつた。いかにも老師らしい歌である。すべてかういふ風に自分のあらはれた歌をよまれるやうにといふた處、喜んで歸られたことを記憶してをる。それで、刀自の詠草の中には、生徒をおもふ、卒業生をおもふ、今の世の人の心がよい風に赴くやうに、といふやうな心持をあらはされた歌が少くない。

　日々にみがけ日々にみがきてやまざらば心の玉は世にかがやかむ

　同じくはいぶせくつもる人の世の塵をも洗へ夕立の雨

　　おのれこん世もまた教育家と生れ出ん事を願ひて

　又も來て教の道の花ざくらやまとごころの春になさばや

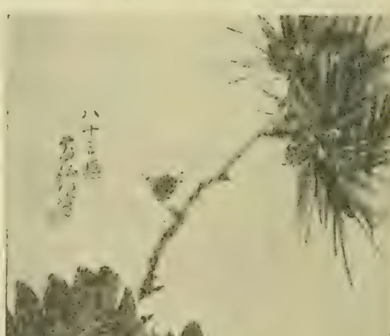
この詞書の歌は、偶然にも、幕末の歌人大隈言道の歌集の中に、「思來世」といふ題で、「品高き事も願はず來ん世には又吾身にぞなりて來なまし」といふ歌と相通うてをる。言道は歌人であつたから、來世にも歌人と生れ出でんことを願ひ、刀自は教育家であるから、來世もまた教育家たらむ事を願うたのである。さういふ刀自の胸には、昨年の跡見女學校五十周年の記念祝典が、いかばかりの喜であつたであらう。その折の歌に、

　うるはしき花さけかしと撫子をなでておふして五十路へにけり

撫子をなでておふしてといふやうな慈愛の情は、非情の筆とか机とかいふものにも及んでをる。

　八十年を手にとらぬ日はあらざりきいとも親しき友ぞ此の筆

　ぬる間をも惜しと思ひて寄り添ひし机も老いぬ我も老いにけり


（花蹊刀自の畫）

また皇后陛下の御機嫌奉伺に、折々宮中へ參殿せられた。ある時、

御養蠶所に御伴つかうまつりて

畏こきや大御手づから桑こかひつくりをしつゝる玉まゆぞこれ

其の他、日光御用邸へ參上の折、皇后陛下が庭園に御おり立になつて、刀自を御撮影になつた。その寫眞を御下賜の折の有がたさをのべた歌もある。

また刀自は、佛道に對して篤い信仰をもたれた。樓上の遺墨陳列室に、自ら書寫せられた法華經があつたが、詠草の中にも佛教に關する歌が少くない。中にも、大正十二年八月廿七日の明方、大宇宙に一ぱいになつた御佛の姿を拜して後の作に、

天地に充ち足らひたる御佛の御聲を聞かぬ人や何なる

といふのがある。かの更級日記の著者が、佛の來迎の姿を、まのあたり見たといふ文詞も思ひ出されて、信仰の尊さが思はれる。

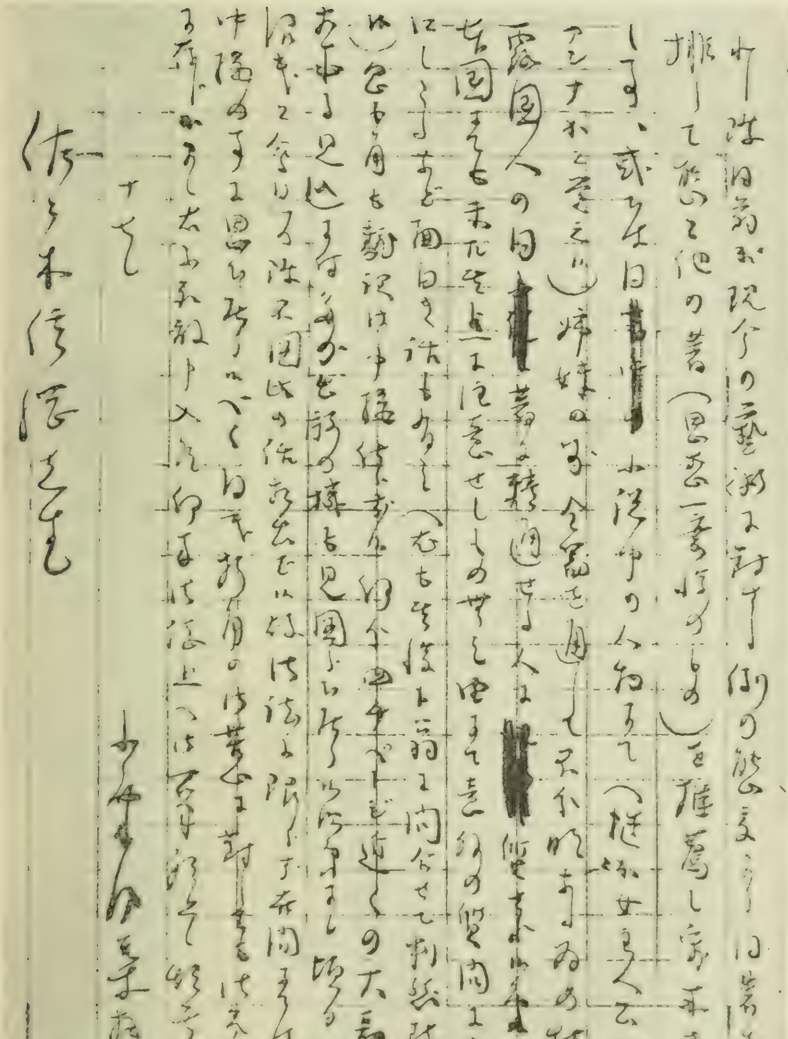
これらは、刀自の作の中の一端で、くはしくは今自分のもとに預かつてある詠草を、三回忌までに出版になるとのこと、それで讀まれたいと思ふ。

（追記。以上は日本青年會館に於いて催された刀自の追悼會の折の講演筆記であるが、預かつてある詠草云々は、昭和三年一月、閑院宮妃殿下の「世にたかく薫とゞめて散りにける花の雫のなつかしきかな」の御歌により「花の雫」と題して刊行された。その中に自分の選んだ數百首が收められてゐる。）

小栗風葉君

○（明治三十年三月十七日、牛込細工町）

拜啓。如何御暮らし被爲遊候哉。月に梅に春も追々景色調ひ候折から、御吟懷さこそと存上候。小生舊冬來歸省罷在り、先月末漸く上京、其後一度御伺ひ申度存じながらも失禮致し居り候。毎號心の花御惠送に預り難有、少し許間の方書き溜め候はゞ、今春の惡文御詫までに何か一篇御笑覽に供し度存じ居り候。次に新年號（？）女流作品御批評中、瀬沼夏葉氏の「アンナ・カレニーナ」中絶云々の記事有之候由、右は決して中絶には無之、實は紅葉先生御死去の砌、小生御委託相受け、瀬沼氏も其後引續き飜譯に從事致され居り候。何分大部の物に有之、且つ細心精緻一字一句も苟くもせざる底の御苦心にて、直接トルストイ翁の意見を問合せ説明を求めなどして譯し居られ候有様故、自然時日も相懸り候次第にて、餘事には候へど、同著飜譯の義を、最初トルストイ翁に申遣はされし際、同翁が、現今の藝術に對する例の態度より同著を排して、態々他の著（思想一變後のもの）を推薦し寄來されし事、或ひは同小説中の人物にて（慥か女主人公のアンナかと覺え候）姉妹の別、全篇を通じて不分明なる爲め、特に露國人の同著に精通せる人に質され候處、本國にても未だ其點に注意せしもの無之由にて、意外の質問に閉口したるなど面白き話も有之（尤も其後ト翁に問合せて判然致され候）兎も角も飜譯は中絶仕らず候。何分四千ページ近くの大部に相



（小栗風葉君書簡）

成る見込に付、多少出版の機も見圖らひ居り候次第にて、頃日瀨沼氏に會見の際、不圖此の話相出で候故、御誌に限らず、世間にては皆中絕の事に思ひ居り候べく、同氏折角御苦心に對しても御氣の毒に存じ候まゝ、右不取敢申入候。何卒御誌上へ御一筆願上候。頓首。

十七日　　　　　　　　　　　　小栗風葉拜

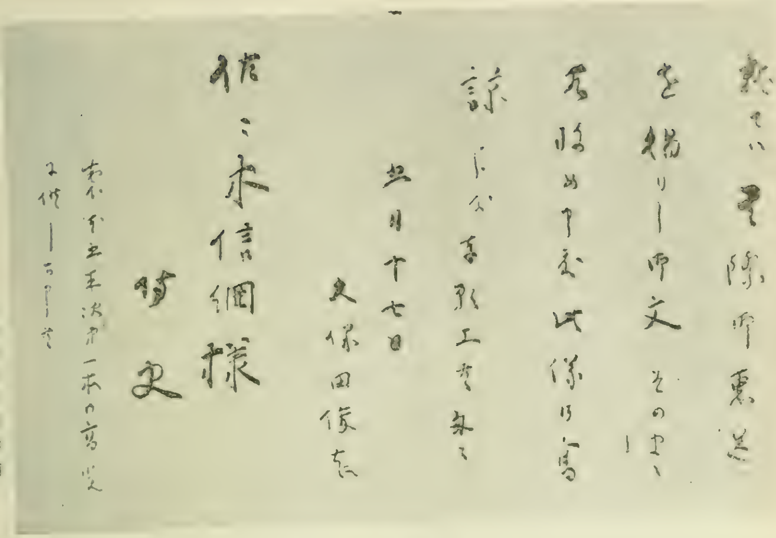
佐々木信綱先生

飜譯の苦心

小栗風葉君は、さきに揭げた紅葉山人の書簡にもあるごとく、その紹介によつて、わが竹柏園の同人の一人となつたのである。尾州半田の酒造家の子息とて、造り酒屋の若檀那といつた風の人柄であつた。

さういふ緣で、心の花第九卷第一號に、「息災延命」といふ文章、第十卷第一號に「機械」同じく第十一號に「母の血」といふ小說を寄稿せられた。

この書簡は、瀨沼夏葉夫人の「アンナ・カレーニナ」に就いて述べられてゐるが、その飜譯の苦心が、げにもと窺はれる。後、夏葉夫人の來訪をうけて、露國の文學に就いてのものがたりを聞き、風葉君に就いても語りあつたことであつた。


（島木赤彦君書簡）

島木赤彦君

○（大正十二年五月十七日、代々木山谷）

拜呈、益御清昌奉賀上候。陳れは先年アララギ特別號として萬葉集檜嬬手發行候處、今回右を古今書院より萬葉叢書の一として出し候樣取計ひ申候。就ては、其際御惠送を賜りし御文、そのまゝ相收め申度、此儀御高諒被下度奉願上候。匆々。

五月十七日　久保田俊彦

佐々木信綱樣

侍史

製本出來次第、一本御高覽に供し可申候。

歌壇のために

私は「歌壇人の一人として今日島木君の追悼會に列なり、島木君の靈に敬意を表したくてまゐつたところ、階段のところで齋藤茂吉博士から、何か話をするやうにとのお賴みを受けました。急に思ひ浮べ急に述べるといふやうなことに慣れてをりませぬので、ただ一言述べたいと思ひます。古人の歌に、

　世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くもなりにけるかな

とあるやうに、昨年木下利玄君を失ひ、今年島木君を失ひましたことは、歌壇のためにまことに歎かはしいことであります。

先般下村宏君が歌壇の人々を招いて小集を催したいとのことで、その招待の人名を見ましたところ、最初に島木君の名がありましたので、自分は久々に島木君にお逢ひしてお話を承り、又お話をしたいと思うてゐましたに、その會より前に幽明境を異にせられたことは、まことに殘り多く思ひます。そのお話を承りたい、また致したいと思ひました事は、島木君の著なる「萬葉集の鑑賞及び其批評」に就いてであります。かの書は自分が近く讀んで深い感動をうけた書の一つであります。元來明治より大正になつて、萬葉集の研究は進み、種々の著述は刊行されましたが、長く世にのこり傳はるであらうと思ふ書は少いやうに思はれます。しかして彼の書は、萬葉研究史の上から見て長く世にのこり傳はる書であると信じます。しかも彼の書のはしがきに、「自分の人麿、赤人、家持、憶良觀には異議ある人が多いかと思ふ。とやうに書いてあつたと思ひます。學問に從事してをる者は、時として各がじし意見を異にすることがあります。自分は島木君の擧げられた人麿の歌に就いて、また憶良觀等に就いて、同じ考

を持つことの出來ない點があります。しかしそれは、おのがじしの考の相違でありますから、それらに就いてお話をしたいと思うてゐたのでありました。

私は歌壇に在ることが久しいために、正岡子規君、伊藤左千夫君の葬儀にもつらなりました。いふまでもなく、いづれもあらましかはと思ふ人々でありますが、正岡君は創業の人として各方面に十分に己が爲さむとしたことを立派に爲しつくされたかのやうに思はれます。伊藤君もその作物の上より見て、十分その全部が出てゐるやうに思はれます。勿論、一日は一日世にをられたら、それだけのものを、猶より多く殘されたにはちがひありませんが。然るに島木君に於いては、天が若し齡をかしたならば、なほ一層殘さるゝものが多くあつたであらうと思はれます

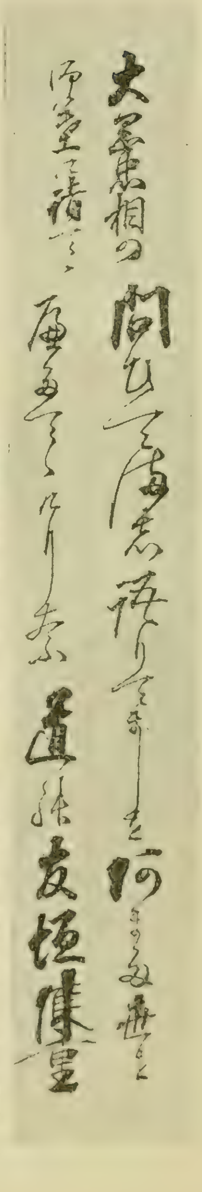
賀茂眞淵の著書は、その大部分は六十歲より七十三歲までの間に爲されたのであります。學者の晩年は貴いものであります。島木君が、かの「萬葉集の鑑賞及び其批評」の後編をも書かれずに世を去られたことは、返す返すも惜しいことで、あらましかはと思ふ情が痛切であります。ここに島木君の靈に向つて、謹んで哀悼の意を表しますると共に、忌憚なき言葉を述べましたことを許されむことを望みます。（追悼會談話筆記）

穂積陳重男

○（大正二年十月九日、牛込拂方町）

貴著の惠贈を辱うし、有難く存候。一時に顯れんよりは永久に傳へられ、當世に知られんよりは後世に尊ばれんこ

とを希ふは學者の本望とする所に候へば、戸田茂睡は必ず貴臺を以て隔世の知己とし、地下に感謝瞑目することと存候。貴著拜受後、毎晩兩人の嫁をして代る〴〵朗讀せしめ、家族打寄りて聽聞致し、愈昨夜を以て終了いたし候。



（大岡忠相の御墓に詣でて　問ひてまし語りてましをあまた世をへだてゝけり言葉の友垣　陳重）

盛興湧くが如く漏刻の移るを覺えざりし程に有之、茂睡の歌論の如きは、貴說の如く現時ならば格別のことも有之まじく候へ共、元祿の當時にありては非凡の卓見と申すべきものと存候。此の精神は獨り歌學者にのみ必要なりとは存ぜられず候。家族一同と共に厚く御禮申上候。草々拜復。

十月九日　陳重

佐々木信綱大人　机下

追伸。拙著二部別封を以て進呈仕候。

○（大正四年三月十日）

貴翰拜誦、一家の出來事に對し御懇篤なる祝辭を賜はりいつも乍ら御芳情の程感佩之至に御座候。加ふるに貴著の

寵錫を辱うし、誠にあり難く厚く御禮申上候。歌史は一面より觀れば國民の心理史に有之、又風俗史とも觀るべく、小生等社會學研究者に取りては大なる興味を有するは勿論の事に候間、貴著により必ず新知識を得ることも尠なからざるべきを期し、繙讀の時を樂しみ居り候。既に今朝拜受開封の上、直ちに朝餐卓上にて梁塵秘抄の一節を通讀し、傍に置きて箸を採り候間に、妹に奪ひ去られ候樣の次第に候間、荊妻、妹、娘等も共に餘惠に浴し候事と存候。不取敢寸楮拜陳仕度、艸々拜復。

三月十日　陳重

佐々木大人　机下

追申。御婦人の書畫に非常に珍貴なるものに候に、あまり小さく寫り居候は、老眼に取りてはうらみに候。

○　（大正八年七月四日）

拜誦。大戰も漸くをさまり、これよりは文運隆盛の世の中に、世界的學問戰を爲すべき時代の初期に於いて、本邦文獻の寶典たる元暦萬葉集の公刊を觀るに至りたるは、平和克復に對する歡喜として慶賀すべき事と存候。多年御盡力の事業の一部を完成せられ、嘸かし御滿足の事と奉察候。同書解説并に心の花一部御惠贈下され、早速拜讀、解説に殊に面白く、小生に取りては全部新知識に御座候。不取敢祝意兼謝意拜陳仕度、艸々不悉。

七月四日　陳重

竹柏園大人　机下

（一は戸田茂睡論、二は梁塵秘抄、三は元暦校本萬葉集解説をものした折、一本を贈呈したのに對しての書簡である。）

學者中の學者

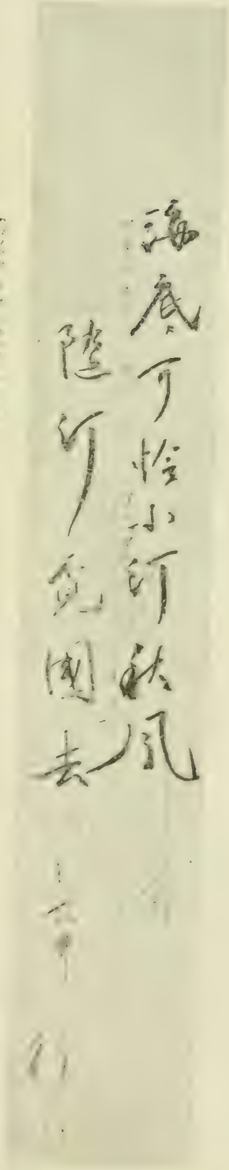
穗積博士は、實に懇篤な、學者中の學者であつた。明治三十八年、自分が東京帝國大學の講師として出た時、教員室ではじめてお會ひしたのであつた。ある時博士は、祝詞について問はれた。自分は、祝詞は歌謠の一種であるとおもふといふ持論を述べると、印度にも法律を律語にしたものがあると言はれたことを覺えてゐる。

博士は、法窓夜話を初め、著書の成るごとに惠贈せられた。自分も、小著の成つたものを贈呈するごとに、上に掲げたごとき懇なる書簡を寄せられ、また博士が貞永式目を蒐めてをられたので、自分はあたかも萬葉集に關する古書を索めてゐる時とて、目に觸れるごとにお知らせしたが、博士は、その度ごとにいつも懇切な書狀を送られ、ある時のごときは、あまりによい本を教へてもらつたので、手紙では氣がすまぬといはれて、わざ／＼訪はれたこともあつた。

亡父の三十年祭の記念講演會を、大學の講堂を借りて開いた時、講演を他の學者にもお願ひしたが、現代の學者として先生にお願ひしたところ、自分は簡單な話にも必ず腹案を練るため、今は時間が無いから引受けられぬが、しかしその會には必ず出席する。また何かの場合には、お話をしようと約され、講演會の當日は、夫妻揃つていちはやく出席せられたことであつた。

後に三女が少壯の國文學徒と結婚するので、臨席せられて新夫婦のために、訓誡の辭をいただきたいとお願ひしたところ、快く承諾せられて、當日、學者の妻たるものの心得を、古今東西の例を引き、諄々としてお話し下さつた。お話を承りつつ、熱き涙の頰を傳はるを禁め得なかつたことであつた。

長井金風君



海底可拾小汀秋風
隨汀覔圓去

長井行

○

（明治三十七年十二月）

拜啓。昨日は參上萬謝仕候。制度の變とは申ながら、風氣の移る所、今日師弟の情誼見るべからざる中、獨り故俗の生存する、之を貴會の中に見、昨年大會の時より、溫公の所謂三代禮樂存此中の感有之、小生不少傾倒の念に不堪候。先師敬宇先生在世中は、尙昔の塾舍風にてかかる樣なりしも、今は大學に「セミナリー」を開く人有之候へ共、尙相互が規則に繫がれたるのみにして、かかる情誼は露見るべからずと存候。歌道の鼓吹は固より歷世の御家法なり、

一辭を賛する餘地無し。名教の爲め尙この美風の愛護保存願はしき限りに有之候。小生出發、事によれば正月早々に相成るやも知れず、何れ其中拜趨萬申上度く、先は昨日の御禮のみ如此に御座候、恐々。

長井行

○　（明治三十八年一月三日、横濱）

臘月三十日家を出でしに、船便都合悪しく、去りて鎌倉に一泊。昨日歸濱の所、尙船入港無く、晩間東京に歸り候處、元旦御出被下候由、家人より承り陳謝致候。今日再び歸濱、明後日はいよ〳〵出港の由に候。此の行萬里小犬を携へ候とて、船中は兎も角只今は厄介千萬、尤も鎌倉にては學校の同僚なる福岡君（子爵の令嗣）居り、同好のこととて大いに暢懐致候。往復の間、所在の小驛にて兵員の送迎を見、市中の提灯國旗のこちたくも感じ候へども、かかる處にては蒼然涙下るほどの事に候。或る寒村の畑の中に、低き小き手製の日章旗をたてありしを見、かかるきはにも戰勝の意味了解され、かかる茅屋の子弟の力にて大捷を得候事と、感激不少候。皇室の盛意にて避寒等の御旅行なきはさる事ながら、却りて御啓行を御すすめまゐらせたくなど考へ候も、愚忠の不得已也。三日の夜横濱にて。

（右の書信は、「南溟第一信」と題して「心の花」第九卷二號にかかげたもの。なほこの第二信があつて、船便を得ずして星嘉坡直航の目的外れて香港に來り、ここを假本營として、安南交趾までの間を探究の都合で居ります。安南の海防及び昔時の朱崖瞻耳として最も吾人の注意を惹く所の海南島、この島は兵略上政治上から云つても絶大の關係ある處――、奈翁三世もこの島に着目し、彼のチエンブレン氏の父君なども此に派遣を命ぜられたことがあるとのことでございます云々

と冒頭にある旅信で、香港の情勢など、こま〴〵と書かれてある。）

○　（明治四十三年二月、目白臺、岡部子爵邸）

久しく芝屏に遠ひまゐらせ、彌々菀思を深うしまつる。敬しく惟んみるに、竹柏園大人閣下、鼎祉迎庥升祺集吉、仰いで以て宏猷を企つ、曷ぞ忭頌に勝へむ。弟去る四十年故有りて中道歸國してより、或は知己に別れまつり、或は事の志と違ふものありて、中心激するところあり。深く自ら韜晦し、嘗く藏書を典卸して郊外に躬耕してより亦已に三年、失ふところ多くして得るところは一もあること無し。昨冬感悟する所有りて「屯園說」を作り、以て自ら警しむ。爾來天壽の恃み難く、人生の幾くも存らざるを覺り、少しく舊稿を收拾して、平生學術の幾分を纏め、徐ろに身後の計をなさんと致し居り候。しかるところ、船を刻むで劍を求め、網を結ぶの時は魚の有る時にあらず、久しく心して蒐輯したるの藏書は、已に一空して人手に歸し去り、而かも迂拙の性、その宗とするところは實事求是の攷證にして、固より名を高等批評に假りて、空談據る無きの說を立つるの才に乏しければ、書籍を離れては何等の力をも出だすこと能はず、幸に荊妻の少しく樂律に通じて日本女子大學に教授するを以て、朝夕糊口の料に窮せざるを藉りて、苦しき中より必要の資料を買ひ求め、曾つて久しく腹中に稿を藏せる、

說文土俗攷

醫心方異字攷

等を成就せんと致し居り候も、偏へに身後の子雲を待つの微志にして、是の甚是の情、藹然として自ら擒れなべきの

至りに候。學問を遺したりとて、百年の後果して知りて今日の苦心を諒とすべきもの有るべきや否や。我が生我が業果敢無しといふも限りなり。この頃承り候へば、慶應義塾大學部の文學科完成につき、森鷗外先生顧問指導せらるゝ趣、一昨年同塾の評議員なる某代議士、曾つて小弟の爲鎌田氏に相談致し、同塾へ周旋せんとの事なりしも、當時小生は專ら退耕の志なりし故、辭してその配慮を斷りたり。是れ一つは小生已に藏書を賣却し盡したる後なりしにも依れども、又一つには小生の宿志として、寧ろ小生の宗教として「如何なる場合にも、一身の出處進退の故を以て他人の世話にはならじ」との信條に依れる次第にして、當時小生は、如何にして學術上に樹立すべきやといふよりは、寧ろ如何にして衣食すべきやは、差し迫りたる問題なりしを以て、かゝる場合に他人の力を假る事は、得て情實の生じ易きものなれば、口腹の故を以て他人の恩義を受くる事の、如何にも父母の遺體を汚すが如き心地して、此くは辭したる次第なりし也。

然るに、此くの如く一旦某氏の配慮を辭したる後、今に至り再びその人の周旋を願ふも面伏にして、且は當時と事情の異る莫きにあらざれば、此に一鳴號して、更に大人の仁懷に依賴しまつらんとするものは、大人の御心添を以て鷗外先生に御推擧を請ひ奉らむとする次第に御座候。小生の專攻致し候は、當時は支那の社會組織たりしも、歷史的に尋繹する必要より史學に入り、史學の經學よりせざるべからざるを見て、經學に轉じ、經學の基礎の言語文字の學（支那の術語にては小學といふ。大學小學の小學にあらず。）に志し、即ち古代言語の學（字形音韻名物の學）を以て經學を闡明するの主義にして、事物の考證を主とするの微志に有之候。此の學風は日本にては僅々皆川淇園、（少しく異れど）吉田篁墩、狩谷棭齋に於いてその痕跡を見るのみにして、日本には渡來せず、支那にては閻若璩、顧炎武以來以て王念孫父子に至るまで、數十百家有之候。中には純然西洋風の研究主義を乘りたる人も有之候。小生

の追尋せんとするは、卽ち此れに外ならず候。

小生の史學經學に於ける立場は大要如此として、さて文藝の事は固より小生の任にあらざれども、詩のごときも、性靈學術二派の大別を以てすれば、小生は學術を以てするものにして、性靈一派とは全然嗜好を異に致し居り候。日本人は文政以後、學術全然萎靡して、名を性靈に藉るもののみと相成り候。今人は森槐南氏を除くの外は、油腔滑調唯わかり易きを主としたる月並流にして、寧齋は晩年全く之れに反したりしも早く歿し、槐南氏は近き六七年漸くその窠臼を脫して學術を崇尙するに至り候も、其の徒は一人も之を學ぶもの無之候。これ、之を學ぶの力無ければに候。

小生の不敏豈よく何事を爲し得んや。只その學問に於いては未だ邦人の着手せざるところに着手し、去る明治二十三年以來、二十年間屢彼我の間に來往し、また彼此の事物に對して多少硏究したるところ有之、これにより多少自我作古の利心をふるひ起したる儀に有之候。何卒大人の御口添を以て一たびこの儀御推擧の榮を得ざるべきや。慶應義塾には小生些かの知己も無之、右の某代議士の外、過般死亡したる歌舞伎座社長大河內氏は、小生去る二十四五年以來の親交なるも、近年打絕え面會せず居り候ところ、今やこれも易簀、他に知交は無之（面識の人有れども親交にあらず）此に大人を煩はすの捷徑なるを思ひ、此くは不躾ながら鄙情を訴へまゐらせたる次第に有之候。萬萬御推察被成下度、この愚書失禮ながら鷗外先生御同矚被下候へば尙更幸甚と奉存候。尤も一應御面晤被下候後は、小生より別に鷗外先生に鄙書差上候とも、又は參上御賴み申上げ度く、伐柯伐柯其則不遠、伐柯の勞、之れを大人に請ひまつり度く、隆情を感荷し、曷ぞ銘篆に勝へむ。肅此敬懇立盼、玉音顧請、綏祺　不一。

第　行

竹柏園大人侍曹

日本書紀訓點糾謬

といふものを書き居り候。又萬葉點の誤謬をも指摘致し度く、（木村翁の辨證の辨證）存じ居り候。他日電矚を汚し高教を請ひまつるべく存じ居り候。

（この書簡を携へて、自分は直ちに森博士を訪うた。博士も金風君に逢はれたのであつたが、君の望にそふことが出來なかつたのを頗る遺憾としてをられた。しかしてそは、君の爲といはむよりは、寧ろ慶應義塾大學の爲めに遺憾であつた。）

不遇の學者

長井金風君とは、君が二六新報社に關係してをられ、自分も夙く同新報に歌を寄せてゐたので相知るに至つた。屢小川町の家を訪はれ、學問に就いて語つた。心の花にも數回寄稿せられた。

劇曲考（六卷十號）、新年無恙（七卷一號）、戰爭と文學（八卷一號）新年旗（九卷一號）、金風閑談（十一卷十二號）、養花談（十二卷二號）朱鷺（十六卷四號）等があり、短歌もしばしば寄せられた。

「國がらにやあらむ」といへる古語のごとく、秋田縣には和漢の學者にすぐれた人が多く出た。長井君も其の一人である。しかし、君はすぐれた學才を懷きながら、世に知られなかつた不遇の人で、特に晩年目を病まれたのは、まことにいたましい極であつた。從つて自分におくられた文中にある苦心の著作はつひに世にあらはれず、自分の所藏してをるのでは、萬葉新採百首を註された萬葉評釋と、歌集枯葉集、梧葉和歌集、とが刊行された。枯葉集は、和歌百話の中にも紹介したことであるが、萬葉以前の古風を詠じた、注意すべき歌集である。

長井金風君

芳賀矢一博士

〇（明治四十五年七月十一日）

昨日に滯なく相濟芽出度奉存候。嘸御つかれの御事と存候。かねて御熱望の萬葉集定本もいよ〳〵文藝委員會にて着手と決定いたし候矢先、萬葉古寫本の　天覽に入候事、國文學の光榮慶福言語に絕し候。尊大人御靈もさぞかし御滿悅の御事と存候。小生も以御蔭大に面目を施し候次第に御坐候。不取敢御禮旁御欵迄、草々。

七月十一日　　　　　　やいち

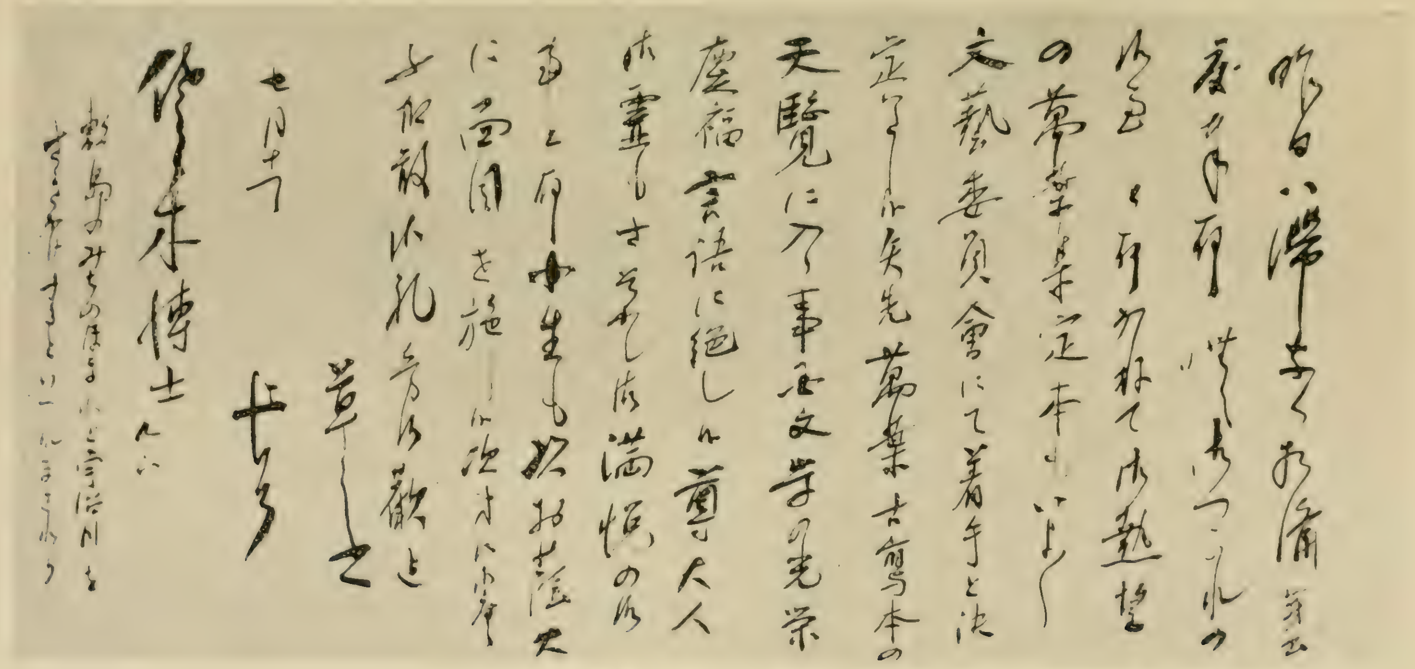
佐々木博士

几下

敷島のみちのほまれと宇治川をさきがけするといづれまされる

（明治四十五年七月、東京帝國大學卒業式に、明治天皇の臨幸あらせられた際、博士と自分とが、萬葉集の古寫本に就いて、御前に於いて御說明申し上げた。翌日、博士よりのよろこびの書狀である。）

（一）（大正四年九月三日、大磯小學校前）



芳賀矢一博士書簡

三十日歸京、二日又當地へまゐり候。
御はがき拜見。
うま酒にゑひふす姿あかずをせさゝきのをぢに見られつるかな
おどろかす人なき夢ぞ閑かなる枕にひゞく汽車は物かは
この名歌より、人は、物かはの食人とぞいひける。
三日　やいち
（大磯なる博士の別墅は汽車の線路に近く、車中よりその二階の室を見ることが出來た、たまたま自分が箱根におもむいた折、その二階に博士が長々と寢てをられる姿を車中より見いでて、たはむれの歌二首を送つた返信の葉書で、「物かはの食人」などの短き句にも、博士の機智がしのばれる。）

新國學の樹立者

芳賀矢一博士

大正天皇斂葬前一日なる二月六日の曉に、奉悼歌歌詞の作者である芳賀博士が世を去られた。平素忠君の念に篤かつた博士は、大御はふりの御さき仕へまつると、世を去られたかのやうにも感ぜられる。
芳賀博士の國文學界に於ける不朽の功績、玉のやうに麗しい人格、いかなる人にも懇切であつたことなどは、今更ことごとしく述べるまでもないが、わが「心の花」にも多年高誼を寄せられたを思うて、ここに一言を本誌に揭げたいと筆を執つたのである。
近世の國學は長流契沖によつて起つたが、國家の學ともいふべき國學を樹立したのは、春滿である。その國學を、

偏見と獨斷から離して科學的となし、新しい國學を興されたのは芳賀博士である。明治大正の國文學は、博士によつて新しい光を放つたのである。

博士に就いては、思ひ出づることが數々ある。今上陛下が東宮におはせし際、御進講の榮を荷はれるやうになつたと聞いたので、喜んで直ちに訪問したところ、特に謹嚴な態度で、實に光榮の至である、最後の御奉公として、力の限り御進講申さうと思ふ、講案はかういふ風にしたいと思うてゐるなどと語られた事であつた。近年に眼の力が弱られ、殊に内助の功の多かつた夫人が先立たれたので、ういすきいを唯一の嗜好とし、時として晩酌をせられたが、また嗜んでをられたことであつた。或日訪問すると不在で、三女なる石本夫人がをられて、その話に、火曜日の御進講に就いては非常に愼んで、月曜には一滴も酒を口にせず、種々の參考書を人に讀ませて聞き、その夜は沐浴して、翌朝出られるとのことを聞いて、深く感じたことであつた。

博士が大學に於ける講義は、非常に啓發的であつたとのことである。かつて藤岡博士が助教授であつた折、或る學生が、藤岡先生の講義をきいて居ると、あまりによく調べてこられて緻密に說かれるので、自分たちが研究する餘地がないやうに感ぜられて悲觀する。ところが芳賀先生の講義を聽くと、大まかではあるが、實に暗示に富んでゐて、將來研究してゆくべき多くのヒントを與へられるので、大いに力づけられる。二人の先生は、軍艦の艦長と副長の樣である、などと語るのを聞いたことがあつた。

交友に對し、また門下生に對しては實に親切で、その情誼の厚かつた實例は、あまりに多きに過ぐるほどである。藤岡博士の葬儀の折に讀まれた弔詞の如きは、その至情人々をして泣かしめたことであつた。さるは藤岡博士が、京都帝國大學設立の際、教授の內命を受けられたが、著書の參考書を見たい爲めに東京を去りがたいと辭退された

ので、芳賀博士は、藤岡博士を東大の教授たらしめむと盡力せられたが、其の時いたらず、終に助教授として世を去られたのを、衷心歎かれた文意であつた。しかして、そを讀まれる博士の聲は折々とだえて、涙をぬぐうてをられたのであつた。

自分は學問上の交りが深かつたのみならず、今はそれ〴〵うるはしい家庭の主婦となつてをられる長女から四女までが、わが竹柏會の同人であつたので、さういふ方からも親しかつた。

この數日、日毎に博士の邸を訪ひ、今日の夕べ、夕日の光つめたき音羽の墓地に、永訣して歸つて來たところ、博士のうへがさま〴〵思ひうかべられ、今この筆を執つてゐる紙の上にも涙がはふれ落ちるので、ここに筆をさしおく。（昭和二年二月十二日）

追記一。靈前にそなへた數首の歌の中に、

ういすきい飲みつつ君が越えまさむ黄泉つ比良坂雪ふかしとも

これは、二女なる穂積夫人が、朝鮮から、亡き父君にと、もて來られたういすきいの壜を、柩のうちに納められたと聞いたので、詠んだのであつた。まことにゐやなき詠みざまではあるが、古への旅人卿以上に酒を愛してをられた故人は、必ずや許して下さるであらうとおもふ。

追記二　博士がわが心の花の爲に寄稿せられた文章の題目と、その卷數號數を次に掲げておく。

卷數	號數	題目
第九卷	一、二、	品詞の用方より見たる萬葉集歌と古今集歌との比較
十三卷	一	能狂言の滑稽

龜原の夕日

龜原の木立のひまに夕日しづみ悲しくも君をはふりつるはや

これは、芳賀博士を音羽護國寺なる墓地に埋葬した日、遺族及び多くの知己門下の人々のかげに立つて、まむかひの雜司が谷龜原の冬木立の間に沈みはてた夕日を眺めつつ、心のうちに湧きおこつた感懐をさながらのべたのである。

廬山にあつて廬山を見ずといふ如く、多年親しく博士に接してをつた爲に、却つて、その傑出した點を感じつつも、明確に考へるといふやうなことはなかつたが、今その遠逝にあうて、のこされた學問上の功績を思へば、博士が明治の中葉以後に、新國學を樹立せられたことは、まさに江戸時代に於いて、荷田春滿が國學を建設したのと、その功、相通うてをるものがある。

かくの如き博士は、またその人格の上に於いても、現代稀に見る所であつて、よく後進を導き、情誼に厚かつた。博士の輪廓は、その名著國民性十論の中の論旨を、そのまま具體化した如き感がある。

我が國民性の第一の特質たる「忠君愛國」に就いては、殊にその念が深かつた。忠君の一二の例としては、博士の著國文學史概論の結末に次の如く書いてある。

「終に臨みて先帝に咫尺し奉りし余が榮譽を記念せしめよ。時は明治四十五年七月十一日、東京帝國大學卒業式に臨幸あらせられし際、余は親しく御前に於いて、元暦校本萬葉集、藍紙本萬葉集に就いての御説明を申上ぐるの榮譽を擔へり。余は元暦萬葉がかつて靈元上皇の御覽に入りたることを奏上し、また塙保己一が其の數卷を複刻

せる事等を言上せしに、一々御會釋を給ひ、玉體を屈めて其の書をみそなはししかしこさ。還幸の後數日、御不豫の報傳はり、萬民深憂天地に祈りしかひもあらせられず、崩御ましましし月の三十日にて、御前講演の後僅かに三週日、當時龍顏麗しかりしかば、爭でかかる事あるべしとは思ひかけんや。其の日御特勞殊に多かりしと後に承れるも、恐懼身の措く所を知らず、此の日の大學行幸の最終の御臨幸となりしぞ悲しき。」

後宮内省御用掛を拜命して、今上陛下の東宮におはしまし時、國文の御進講を申上げるやうになられたに就いては非常に感激し、精勵してをられたことであつた。こたび大正天皇の奉悼歌の歌詞を作られた事も、いかに光榮と喜ばれた事であらう。しかしてその作歌が、博士の文學的勞作の最後のものであり、御大葬の前日の晩、世を去られたのも、御さきを仕へて大御供をせられたかとも感ぜられる。また、愛國に就いては、ある年の大學國文科の卒業生の會の折、この夏は輕井澤にいつて、新玉鉾百首といふをつくり、國體に關する自分の思想をのべて見たいと思ふといはれて、すでに出來た數首を語られたこともあつた。その中の一首に「王ぼこの道かためずは自動車のうごくまに〳〵崩れゆくべし」といふのがある。次に「家名を重んずる」ことに就いては、博士の父君眞咲翁は、井手曙覽の門人で、かの志濃夫廼舍歌集には、その眞咲に與へた作が入つてをるが、博士はそを家の誇として、よく話してをられたことであつた。(博士の最期の枕もとには、曙覽の半切六葉を貼つた屏風がすゑられてあつた。)次に「實際的」といふ國民性の一特質に就いては、博士の學風は、ある意味に於いて實際的ともいふべきであつた。微に入り細を分つといふ學究的の學風でなく、その大學に於ける講義も、當時の聽講者の語つたのを聞くところによると、大局をとらへて人々に暗示を與へるといふ、活用を主とする學風であり、その殘された功績も、國家的功勞の多い國定教科書の編纂をはじめ、日本家庭百科事彙の如きがあり、又その著作される場合にも、非常に達筆で

あつた。かつて大磯にをられた頃訪うたに、折から「月雪花」を書いて居られたので、古歌に就いて問をうけ、記憶のままに述べたことであつたが、間もなく出版された。さういふ點から見ても、實際的であつたといへよう。また十論中に、「樂天洒落」といふ事があるが、これは實によく博士にあてはまつてゐる。その世を去られた六日の朝から、葬儀の了つた十二日の夜まで、日々坂下町の家にいつてをつて、人々とともに博士を忍びつつ語りあつたことであつたが、もし博士の逸話を集めたらば、大部な逸話集が出來るであらう。

煙草に就いてのべると、夙くサビタのパイプを人々が用ゐてゐた頃のこと、博士は、自分は線香の香がきらひであるから、死んだならば、線香のかはりに煙草をたいてくれ、墓標はサビタの木で造つてくれといつて笑つてをられた。酒に就いての逸話は、無數というてもよからう。無名會の席上でも、新年會にはここかしこでの酒がまはつてゐるので、よくあふむけに寢てをられた。ある時の國文談話會には醉うて來られて、卓による、すぐ眠つてしまひ、折々眼をさまして、此處はどこである、どうしてここにゐるのだと、傍の人に度々聞いてをられた。ある時は、某家の招宴に出られたが、醉うて居られて入口で會費を拂ふといはれる。今日は御招待ですからと云うても、會に出て來たのだから拂はねばと云はれたとのこと。去年一月廿四日、故郷の越前から蟹が來たから馳走をするとの事で招かれていつた。上田、三上、松井、藤村、岡倉氏等であつた。下の室に居る間は話をして居られたが、階上にのぼると、廣間には、先立たれた夫人の大きな寫眞の額がかかげてある。人々は、それを仰ぎ見つつ、内助の功の多かつた夫人在世の時の話などをして居る間に、博士は例の寢てしまはれた。やがて出た蟹のもてなしも終り、暫しばらく人々が話して居る間、全く眠つて居られるので、せん方なく寢て居られる博士に時儀をして歸つて來たさうな次第であつた。

しかもその樂天洒落は眞にその偉人の天眞の發露であつたから、すべての人に許されて居た。それは博士のやうな德のある人でなければ、到底出來難いことであつた。かの徒然草にある芋がしらを好んだなにがし僧都が酒をたしなんだならば、博士のやうであつたらうと思はれる。また「溫和寛恕」であつた。その玉の如き圓滿な人格には、敵といふものが少しも無く、よく人を愛し人を助けられた。かつてある人が、自分の引きうけた仕事の上でかなり博士に迷惑をかけたので、あの男はこまつたものであるというて居られたが、後その人をその出身校のよい位置に推されたことであつた。

最後に、博士が情誼に厚く、他の喜をも自らの喜とせられた實例をいろ／＼知つてをるが、自分が橋本、武田、久松の諸氏と共に多年盡瘁した校本萬葉集の事業に就いても、その再刊本が出來上つた時、心から喜んでくれられ、その話された言葉は、自分の深く銘記してをるところである。またあきらに私事にわたるが、自分の娘の結婚披露の小宴はてて、二階の階段を下りようとされる際、立つてゐる自分の手をかたく握つて、いはれた心からの喜の詞に、自分は喜の涙があふれたことであつた。

博士は近頃大分節酒してをられたので、健康も舊に復し、眼の力もよいと聞いて喜んでをつたに、數日のなやみで世を去られたのは實に遺憾の至である。今にしてますます博士が學者としてまた人として尊くすぐれてをられたことを思ひ、ここにこの追悼の筆を執つた事である。

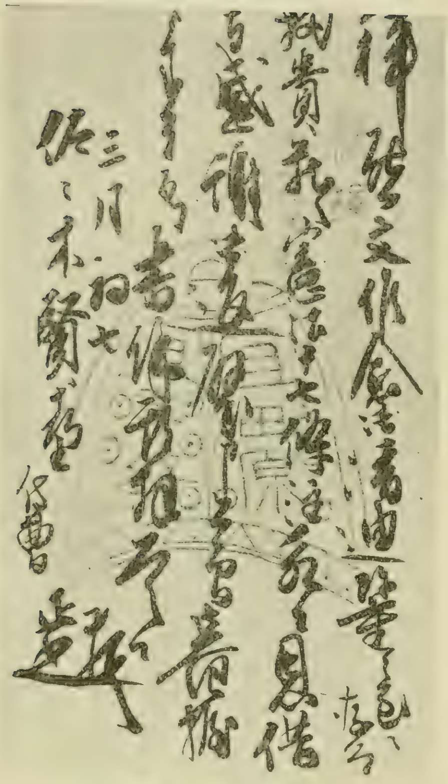
岡田正之博士

○（某年三月七日）

拝啓。文候愈御清迪珍重之至ニ存上候。扨貴藏之憲法十七條注永々恩借奉感謝候。御返璧申上候間御落掌被成下度候。書餘期拝芝候。　頓首。

三月初七　　正之

佐佐木賢臺　　侍曹



（岡田正之博士筆蹟）

萬葉集題號說

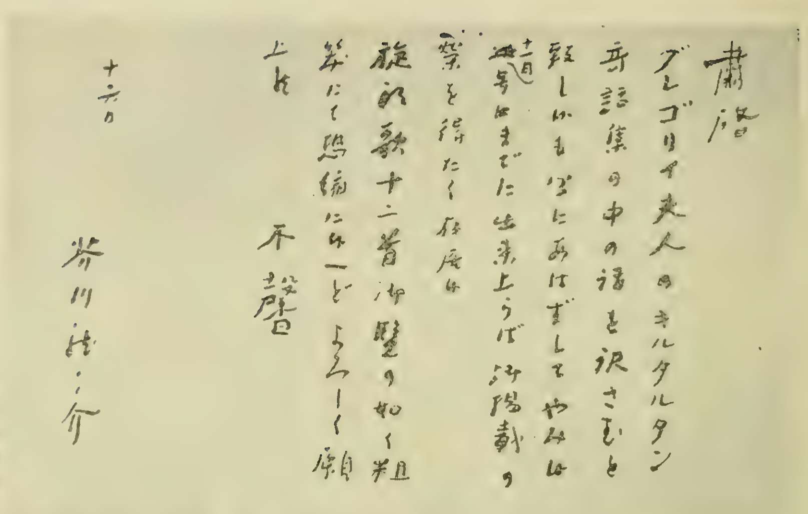
岡田博士は、謹嚴にしてしかも温情に富んだ學者であつた。古典科の出身として、國漢の別はあつたが、同窓の先輩であり、無名會

に列なつては、席を隣にして、懷風藻や本朝文粹の話などを屢聽く事を得た。折々に訪問して、文章の是正を請うたこともあつた。君もまた、假字交り文を書かれた折には示された。最後に病床を訪うた時も、床上に起き直られて、萬葉卷九なる大神大夫が長門守に任ぜられた折の歌のことに就いて語られ、林泰輔博士の遺稿の序文を病床で書いたからといふて示され、數年前からお賴みしてある南都祕笈の一なる蒙求の解題を、全快したらば必ず書くであらうと云はれたりして、話は學問の上のことのみで、不治の病をいだいてをられる人のやうでない元氣さであつた。博士の永眠は、日本漢文學史の爲めに、惜しむべききはみである。博士の業蹟はやがてまとめられるであらうが、その中には、心の花に寄せられた萬葉集題號說のごときも、光を放つことであらうとおもふ。（丁卯七月）

芥川龍之介君

○　（大正三年四月四日、新宿）

粛啓。過日は御繁忙中參堂長座仕り、御迷惑さこそと恐縮に存じ候。歌十二首、拙く候へども、心の花に御掲載被下候はば難有く存ず可く候。歌も人につきて學びたる事無之、語格は元より假名づかひさへも誤れる事多かるべく、玉斧を乞ふを得ば幸甚に候。今朝の雪、寒威春衫を壓し、火閣を擁さずば書もよみ難き程に候。匆々頓首。



粛啓

グレゴリイ夫人のキルタルタン

奇語集の中の話を訳さむと

致しゝも間にあはずしてやみ候

十一月號はまだ出来上らば御掲載の

栄を得たく存居候

旋頭歌十二首御覧の如く粗

笨にて恐縮に候へどもよろしく願

上候　不[illegible]

十六日　芥川龍之介

（芥川君書簡）

芥川龍之介

四月四日

佐佐木先生　梧下

（文中にある歌十二首は、心の花十八卷五號に掲げてある。次に掲げるものがそれである。）

紫天鵞絨　　柳川隆之介

やはらかく深紫の天鵞絨をなづる心地か春の暮れゆく

いそいそと燕もまへり暖かく郵便馬車をぬらす春雨

ほの赤く岐阜提灯もともりけり「二つ巴」の春のゆふぐれ（明治座三月狂言）

戯奴(ジョウカア)の紅き上衣に埃の香かすかにしみて春はくれにけり

なやましく春はくれゆく踊子の金紗の裾に春はくれゆく

春漏の水のひびきかあるはまた舞姫のうつ遠き皷か（京都旅情）

片戀のわが世さみしくヒヤシンスうすむらさきににほひそめけり

戀すればうら若ければかばかりに薔薇の香にもなみだおつらむ

麥畑の萌黄天鵞絨芥子の花五月の空にそよ風のふく

五月來ぬわすれな草もわが戀も今しほのかににほひづらむか

刈麥のにほひに雲もうす黄なる野薔薇のかげの夏の日の戀
うかれ女のうすき戀よりかきつばたうす紫に匂ひそめけむ

○　（大正三年九月十六日、新宿）

粛啓。グレゴリー夫人のキルタルタン奇話集の中の話を譯さんと致し候も、間にあはずしてやみ候、十一月號までに出來上らば、御掲載の榮を得たく存居候。

旋頭歌十二首、御覽の如く粗笨にて恐縮に候へどよろしく願上候。不一。

十六日　　芥川龍之介

佐佐木先生　梧下

○　（文中の旋頭歌十二首は、心の花十八巻十號に載せてある、そを左に掲げる）

若人（旋頭歌）　柳川龍之介

うら若き都人こそ悲しかりけれ、失ひし夢をもとむと市(まち)を歩める
マロニエの花もひそかに咲けるならじか、夢いまだ多かりし日を思ひ出でよと
たはれ女のうつつなげにも青みたる眼か、かはたれの空にうまるる二日の月か
しのびかに黒髪の子の泣く音きこゆる、初戀のありとも見えぬうすら明りに
さばかりにおもはゆげにもいらへ給ふな、緋の房の長き團扇にかくれ給ふな

なつかしき人形町の二日月はも、若人の涙をさそふ二日月はも

いとせめて泣くべく人を戀ひもこそすれ、黄蠟の涙おとすと燃ゆる如くに

湯沸器（サモワル）の湯氣もほのかにもの思ふらし、我が友の西鶴めきし戀がたりより（Kに）

ほほけたる花ふり落とす大川楊、水にしも戀やすらしき大川楊

香油よりつめたき雨にひたもぬれつつ、たそがれの銀座通をゆくは誰が子ぞ

戀すてふ戲すなる若き道化は、かりそめの涙おとすを常とするかも

何時となく戀ものうくなりにけらしな、移香の憂しやつめたくなりまさるごと

（なほ心の花第十八卷七號に「薔薇」（十二首）同卷九號に「空中戀」（十二首）を載せてある。）

○　（大正十三年五月二十六日、市外田端）

冠省朶雲拜誦仕り候。御注意ありがたく存候。匆忙たる行文の間、今後も誤謬は免かれ難かる可く存候間、何とぞ御氣づきの節は高教を賜り度願上候。右とりあへず（今日旅よりかへり候次第）御禮まで。白。

五月二十六日　芥川龍之介

佐々木先生

大川の水

芥川龍之介君のゆくりなき死は、たゞ／＼可惜しくいたましいきはみである。しかも、君の人格及び文章の美しかつたごとく、その死因もその死も、また實に美しかつた。せめてはこれをよろこびと思ひたい。

自分が君を知り、ことに君の文章を知つたのは、かなり古いことである。君の錦糸堀中學時代の同窓で、ペンネームを松原幸太郎というた原善一郎君が、同窓の友人に、かういふ文章のすぐれた人があると話されて、はじめて君の文章を見ることを得た。その頃からの知り合ひであつた。「大川の水」一篇は、大正三年四月の「心の花」に寄せられたもので、當時は君も、ペンネームを、柳川隆之介とつけてをられた。やがて君の全集が出る時には、載るべきものと思ふ。

君は筆跡またうるはしく、手紙の折にはいつも卷紙に墨で書いておこされた。君の記念にもと、來信のしまつてある行李をさがしたところ、漸く一通を見出だし得た。それは君が某雜誌に寄せられた小品の中に、ある劍のことが見えてゐたが、その劍の名がいかゞと思ふ點があつたので、單行本に入れて出される時には、それを改められるやうにと、注意して手紙を送つた。それに對する返書である。

この間、松村みね子夫人が見えて、八月の改造にある君の「西方の人」といふ文章がすぐれてをるからと話されたので、直ちに讀み了つた事であつた。その二日後の朝、新聞を見て、かつ驚きかつ歎じたことであつた。あの天分のゆたかな、氣品の高い文章に、再び接することが出來なくなつたかと思ふと、まことに淋しい氣がする。惜しい人を死なしたものである。

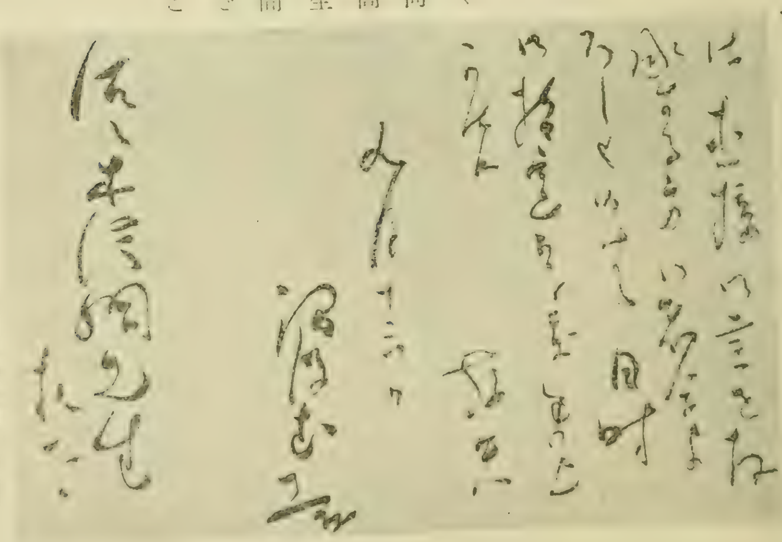
沼波瓊音君

○（某年二月十日）

拜呈。芭蕉の臨終につき、特に御叮嚀なる御評被下候段あつく御禮申上候。先生には毎々小生の小さな仕事に對し深厚の御同情をたまはり候段、身にしみ難有存居候。參堂一夜ゆるり御高說承り度きと存じつゝ、たゞ追つかけられて驅け行くのみの生活、志を遂げず候。昨今は註釋等は書け候へども、創作の時間になると頓と筆動かず、甚だ悲觀いたし居候。頭の中ばかりでいろんなものを作り居りて、さて筆の動かぬ時ほど懊惱することは無御座候。

二月十日　　沼波武夫

佐々木信綱先生



（沼波瓊音君書簡）

○　（某月九月十三日）

拜呈。一友人より俊頼と俊成時代に於ける歌人等の反目爭覇の事情を詳しく知りたきが、いかなる書を讀みたらはよろしきかと問合せ來り候。小生頓とあてつき不申候。御ひまの折大體御示教被下候はゞ仕合に存候。或は直接御言を拜承する方御都合よろしく候はゞ、日時御指定被下度、參上可仕候。敬具。

九月十三日　　　沼波武夫拜

佐々木信綱先生

机下

歐洲大亂につきつく〲思ひ候は、日本文壇の精神的獨立の機の至りつゝあることに候。今日のやうに自國を輕侮して居ては、兵力でいくらどこと勝つても、心は屬邦に候。この際日本の藝術の發展を熱望する、日本を知つてる人、と、西歐藝術をウンと知り拔いた人と提携すること急務、また一方出版者以外の者の手によつて日本藝術發展の獎勵をなすこと急務と存候。こゝに所謂日本藝術とは、狹い意味の保守には無之候。月明の夜更くるまでこの事を思ひ、眠りをなさゞることも有之候。拜眉の折。

情熱に富んだ學者

昭和二年七月は、沼波武夫君と、岡田正之博士と、國漢學の二學者を幽界に伴ひ去つた。

沼波君は、教職を捨てゝ伊賀から上京せられ、萬朝報社に入られた頃よりの知己である。殊に、君の彌生町時代には、峰ゆり子夫人から度々消息を聞いた事であつた。峰夫人も、數年前、君と同じく若いさかりに世を去られ、今また君もなくなられた。現今の國文學界に、君の如く情熱に富んだ學者は恐らく無いであらう。「國語と國文學」の芳賀博士追悼號に、芳賀博士より沼波君あての手紙の返事が載つて居る。それによると、博士は沼波君の手紙を涙を以て讀んだとやうに書いて居られるが、沼波君にして、また芳賀博士にして、げにもと思はれる。

君に就いて思ひ出の一二を記すと、自分が編纂した梁塵秘抄を贈つた時、君は、その歌謠の面白さに感激して、昨夜は夜を徹して讀んだ、かの雜藝時代を中心として創作をつゞり試みたい、といふ長文の手紙を送られたことであつた。また自分が小川町にをつた頃には、よく人々を招いた事があるが、ある時、依田學海翁と同席せられた君は、後、自分を介して書畫帖へ執筆を請はれた。翁はやがて、「學海居士居酒屋に天下の文章を論ずる圖」と題して痛快な繪をかゝれた。それを君に屆けたところ、あの血色のよい面わに笑を浮べて、いたく喜ばれたやうな思ひ出もある。近年の君は、國士として、雜誌に執筆せられ、また祖國愛の著作を種々公にせられた。日本の爲めに、日本文學の爲めに、まことに惜しむべき熱血の學者を失つて、痛嘆に耐へない。

古泉千樫君

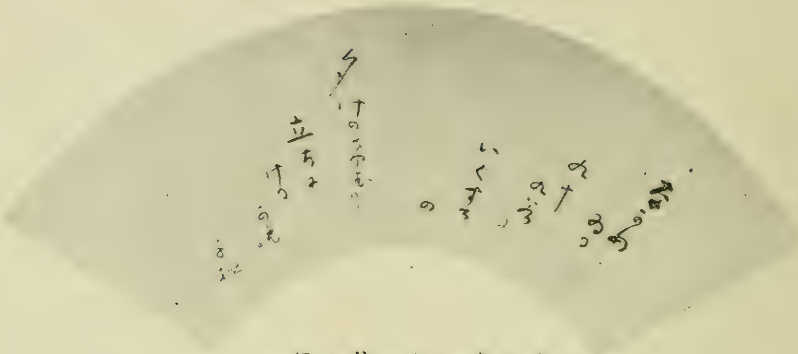
旭川の夜

夜ふけて旭川の驛をおりた。初秋ながらうすら寒い夜風が吹いてゐる驛の前には、宿引の男が提灯を持つてをつて、聲々に客を呼び、古びた幌馬車が客を待つて並んでゐるのも、北海道らしいと思はれる。宿について、東京の新聞を持つて來たのをひろげて見ると、古泉千樫君の世を去られたことが出てゐる。胸をうたれたそこに燈したその折思ひつづけた二三を、ここに記すこととする。

自分は不思議にも、旅中屢知友の死を聞く。かつて支那旅行中、南京で、落合直文君の逝去を聞いて、かつ驚きかつ歎いたことであつた。また、犬山から名古屋に歸つた夜、伊藤左千夫君の逝去を耳にしたことであつた。古泉君は、安房にをられる頃から、心の花に投稿せられた。上京して後、長い間水難救濟會の役員をしてをられた。それは心の花の緣故で、石榑千亦君の世話によつてであつた。從つて歌人としての君よりも、水難救濟會の役員として、折々君に逢うたことであつた。救濟會といへば、君と同僚であつた新井洸君も、世を早くせられた。不幸短命な君また新井君をいたましく思ふ。

去年の秋頃は君の病もよかつたとおぼしく、自分が名古屋に赴いた折、君は同地にをられたが、翌朝の汽車で歸

古泉千樫君



ながめ
ゐる
九十九
谷に
いく筋
の夕
けの煙
立ち
にける
かも

京するとのことで、その傳言を、かの地の人から聞いたことであつた。

地の底ふかく根を張つてをる大木は、短い時日で成長することは少い。さういふ意味に於いて、また明治大正の和歌史の上からいつて、木下君、新井君、島木君、古泉君と歌壇のすぐれた人々が、うちつゞいて世を去られたのは、歎くべきことである。

附言　明治四十一年二月の「心の花」（第十二巻二號）に、千樫君が書いてをる「最近十年間における歌界の概觀」といふ文の冒頭に、

我が心の花は此二月を以て滿十年に達する。予は心の花初號よりの讀者である。心の花が滿十年に達し、しかも益〻盛大になりゆくは、斯道の爲に喜ぶべき事で、吾々讀者の一人として又大いに愉快を覺えるのである。

と言つて居る。これは、君が二十二歳の春、上京以前のものである。

君の年譜によるに、十三歳から漢學の塾へ通つて詩作を習つて居たといふその頃からの讀者であつたのである。一巻から三巻までは歌が載つてゐないが、第四巻（明治卅四年）四號に、「魚」の競點中に「安房吉卓幾太郎」として、

時を得ばたぎつ早瀨も昇るべき魚はひそめり青淵の中に

とあるのが最初のもので、九號、十號、十六號の撰歌中に選ばれてゐる。第五巻（明治三十五年）には、一號、四號、六號の撰歌中に、また三月、四月の同人詠草に載つてゐる。

第六卷一號、三號、四號、六號、七號、八號、十二號の各撰歌中に投稿してゐる。この頃の投書家の中には、吉植庄亮、氏家直琴(信)君などがある。又、同人詠草にも、殆ど毎月載つてゐる。七卷より十一卷までには、かなり多く載つてゐる。十二卷二月に、前に云つた「最近十年間に於ける歌界の概觀」といふ文が載り、四月の大會には出席してゐる。この年の四五月頃、郷里を去つて上京したのである。十號に「やまぬ流」を出だし、十一號に「玉琴をよみて」の評論を書いてゐる。十三卷四月號には、「三時」と題する二十一首を出詠してゐる。後、十七卷(大正六年)三號に「青藜會講演」の一文を掲げてゐるが、これは歌に關してでなく、石榑君の紹介で青藜會の演説を聞いたことが記されてゐる。

九條武子夫人

○(某年一月四日、京都)

只今妙なもの御送り申上候。節分の夜、枕に敷きてよき夢を祈るものに候とか。家によりそれ〴〵畫のふりたれど候へども、御覽に入れ候ものは、昔より當家慣例のものとて、御所よりをさめられ候。師の君さまにもよき夢みさせ給ひて、數ある御弟子たちが一夜にして歌人となるやう御祈り下されたう、こよひの間に合はずば、舊月今夜とおぼえさせたまひて。いたづらに墨もて汚し候まゝ、あるひは寶も消えむかと、心あやしくなりそめ候。御ゆるし給はりたく。けさより雪氣の風たちまひ、この御さむさはこゝのみならずと存じ、御上御案じ申上候。御大切に。奧樣へよろしく。そのうちあとの詠草ねがひ上候。かしこ。



九條武子夫人畫贊（本文二百六十頁參照）

四日　　　武子

師の君みもとに

（圖版の寶船に「幸のせて眞玉白玉かゞやける春の浦邊のわれにくる船」の歌を書いて送られた折の書簡である。）

九條夫人の印象

雲中雲を見ずといふ。九條夫人は、木曜日ごとにはいつも詠草をもつて來られるので、筆を執らうとして却つてたゆたひがちになる。

尾崎行雄氏に招かれて、紅葉館に赴いた。席上には尾崎氏と九條夫人とがをられた。それは秋も半を過ぎた淺夜で、大木の影を月が畫がいてをる廣庭の芝生には、蟲の音が流れるやうであつた。夫人は幼い時から父君明如上人の教をうけて、歌を詠んでをられた。しかして故白樺の舍主人の點を請うてをられた。さる關係があるので、今後同人の一人となつて歌を見てもらひたいが、別に歌の名をつけてほしいと云はれた。自分は、かの菅原孝標の女の日記にある齋宮の裳着の使の話をして、「秋の夜」とつけた。爾來夫人の作は、秋の夜といふ名のもとに「心の花」のにほひを添へたことであつた。

夫人が京都から東京に移り住まれることとなつたので、我が會の同人が、夫人を中心とした會を日本橋倶樂部で催したことがあつた。その會で自分は、夫人の歌が「金鈴」以後一轉機すべき時が來た。恐らくは宗教的なる「心の歌」といふ方面に進まれるではなからうか、又さうありたいものである、といふ話をして歌の道に一層精進せら

れんことを望んだ。その後、夫人及び數人の同志によつて、藻浪會といふ會がおこされ、毎月うちつどうて研鑽してをられた。自分の希望は實現して、夫人の作には、心の底に掘り下げてゆく深みが加はり、かつ、そのするどい人生觀から生れた歌、宗教味を帶びた歌などは、「金鈴」時代と面目を一新するやうになつた。で、「金鈴」の第二集を出すやう、夫人に話してをつた折から、彼の大震災で、その住んでをられた築地の本願寺別院が、青山の大谷家へ火に追はれて逃がられた折、その草稿一切を失つてしまはれたのは、まことに遺憾なことであつた。

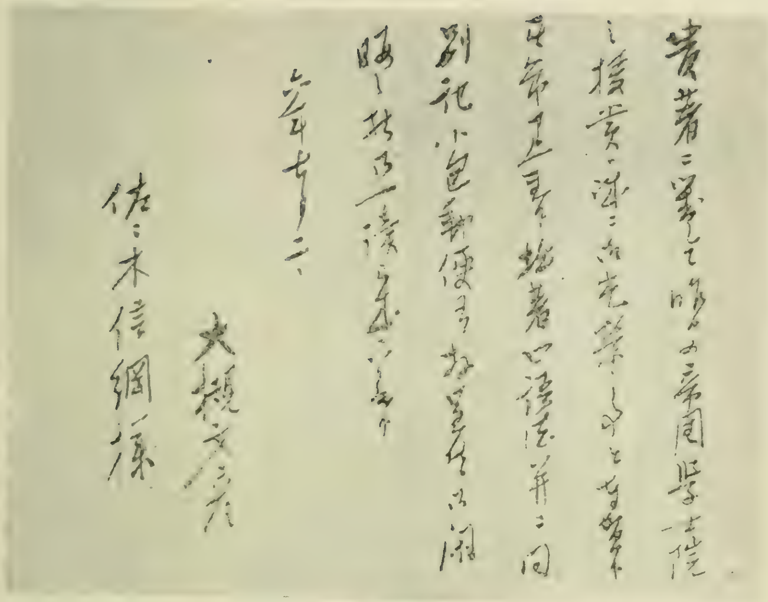
夫人には、社交的の花やかな方面があると同時に、外に社會事業の爲めに獻身的につくされ、内に主婦としてのつつましやかな方面もある。ことに震災後は、自分の着るものはすべて自分で縫つてをられるとのことであつた。去年の夏も夫君の用務が繁い爲め、避暑に出られぬので、夫人も在京せられた。その暑中の筆ずさみが、かの「洛北の秋」であつた。同じく京都の人、同じく法の道の人、同じく歌の道を歩んでをられるなどの緣で、はやくから蓮月尼を慕つてをられた。それで、西賀茂の神光院に行かれた思ひ出や、又かつて、自分の紹介で富岡鐵齋翁を訪うて聞かれた、雨降りにいつも尼を訪うた庄屋の話、尼が遊女をかくまうた話などが、彼の一篇の戯曲を生んだのであつた。去年の秋、生母圓明院が上京せられたので、富田駒之助氏は、その新築の際に、圓明院と夫人と自分ら夫妻を招かれた。樓上で珍襲の書畫の展觀があつて、庭園の一隅なる茶室で茶事があつた。あらゆる事物に對していつも興味深い、才氣のほとばしつたものがたりをせられる夫人も、この日のみは、いささか受太刀の氣味で、松風の音もしづかな茶席にあることも忘れて、圓明院も自分も、思はず聲高に笑ひ出すことが屢であつた。さるは富田氏は大谷家に因み深く、光明師や尊由師や夫人の幼時に、和漢の學を敎へられたので、自分らのかつて聞き知らぬ夫人の幼時のおもしろい逸話のくさぐさを、次から次へと語り出られたからであつた。

一昨年の冬、京都に在つて病を養つてをられる夫人を西大谷の山莊に訪うた。尊由師の嵐山の圖のかゝつてをる部屋に通される。すぐ出て來られた夫人は、縫つた着物を羽織つてをられる。上代のうちきにしては今樣であり、着物に就いて知ることの乏しい自分は、不思議に思つて尋ねると、それは同人の渡邊とめ子夫人から夫人へ見舞の丹前であつた。「京都は寒からうといふので、親切に贈つて下さつたのを着てゐましたの、お友だちは嬉しいものです。」といはれる詞に、夫人の心のうつくしさが見えるやうに思つたことであつた。

今年の二月、京都へ行つて歸らうとする日の朝はやくであつた。博物館に行かうとする途上、夫人が西大谷にゐられることを思ひ出して電車を下りた。山莊の長門は閉ざされてあるので、廟の横なる入口から刺を通じた。參詣人や旅人がやすんで接待の茶を飲む爲に設けられた茶所の床几によつて待つてをると、側面の折戸をあけて侍女をつれて出て來られた。傍らの床几に腰かけていろいろ話される。朝のこととておまゐりの善男善女もまだ影が見えず、心のひきしまるやうな朝の薄ら冷えに、市街の雜音が、小高い廟の前の石だたみに、こだまするやうに響いてくる。ここかしこに古書を探つて旅づかれのした自分は、いつもの古びた羽織袴姿で、傍らには麗人、其の側には侍女がしとやかに立つてをる。自分はふと、元曲などにある進士の試驗に洛陽に上つた老讀書生が、なにがしの寺院でゆくりなく佳人と物語をしてをるやうな幻想が湧いて、夫人にそのよしを語ると、どうか歌に詠んでいただきたいと言はれた。爾來連作に詠み試みたいと思ひつつ未だ果さずに居る。――夫人の印象を書かうとして横にそれた話のみであるが、記者が數回の來訪に對して、わづかに之を以てその責を果すこととする。（夫人在世中の、乙丑八月某誌のために）

大槻文彦博士

○（大正六年七月二日、下谷區根岸）



（大槻文彦博士書簡）

貴著に對して昨日の帝國學士院之授賞は、誠に御光榮之事と奉賀候。其節申上置候拙著口語法竝に同別記、小包郵便にて拜呈仕候。御閑暇之折御一讀被成下度候。

六年七月二日　　大槻文彦

佐々木信綱様

この書簡は、大正六年七月一日、帝國學士院より恩賜賞を授與せられたが、當日式後晝餐の饗宴のあつたをり語られた著書に添へられたのである。）

○（大正七年五月十四日）

御所藏の珍幅梅關南船唐船圖、盤溪題詩一覽仕候。盤溪

天保五年甲午頃の眞筆相違無之候。

七年五月十四日

佐々木信綱様

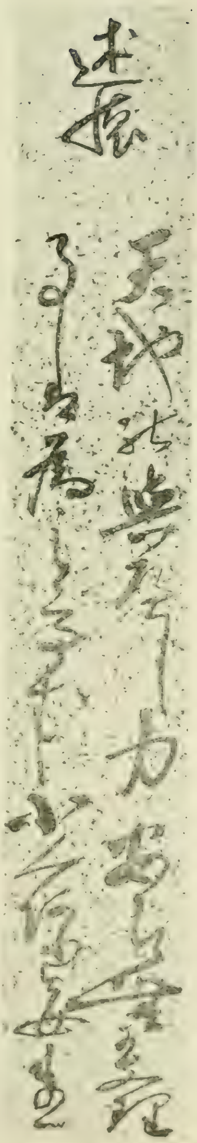
寸陰も惜しい

大槻文彦

座右に備へて常時お世話になつてゐる辭書は、大槻博士の言海である。自分が博士にはじめてお目にかゝつたのは、古典科在學中から言海のために助手をしてをつた學友大久保初男君の紹介によつてである。爾後、度々お會ひしたが、いつも學問の上の話のみであつた。

ことに印象の深いのは、木村正辭先生の逝去されたをり、お手傳に行つてゐて、靈柩の中に納める銅版の先生の略歴の文を數人で綴つて、それを博士に御相談したをりのことである。博士は文中の二三字に就いて意見を述べられたが、そのあとでふと、「自分は舊友の木村さんであるから今日は來たが、近來は一切かういふ所に出ぬことにしてゐる。自分は時間が非常に惜しい。寸陰も惜しい。惜しむやうにしてをる。それは言海の修正を一日も早く成し遂げたい爲めである」としみ〲と言つてをられたことである。しかし、大言海はすでに三巻まで出た。その公刊を見ずに逝かれた博士の靈も、今は地下に安んじてをられることとおもふ。

大矢透博士



（透懐　天地の與へし力あらむかぎり事は倦してむ小くありとも　透）

○

（明治四十四年五月十八日、麻布狸穴）

昨日は初而參館種々御高説拜聽奉拜謝候。陳者其節申上候東大寺要録影寫之分造御目候、實々御參考相成度、餘は後日拜芝に讓候。匆々頓首。

五月十八日

透

佐々木先生

研北

（この書状にそへて、東大寺要録古鈔本の影寫を贈られたことであつた。）

大矢本萬葉集

大矢博士は、上代の假字の研究者として、實に熱心な、かつすぐれた學者であつた。自分がかつて萬葉集の假字に就いて、麻布飯倉の寓居を訪うたをり、萬葉集の古寫本を示された。しかして話されるには、これはかつて京都に旅したをり、細川書店で求めたものである。古寫本のこととて、もとめたくは思つたが、旅中ではあり、思ひ斷つてもとめずに店頭を出たのであつたが、かゝる古寫本は二度手に入ることが出來るかどうかと思つて、數丁きてから、後戻りをしてもとめたものである、と言つてをられた。

その本は、後に校本萬葉集の事業のため、大學に借り、橋本進吉君の研究に依つて、流布本卷七の錯簡の理由が發見された等、學問上貴いもので、大矢本萬葉集と呼んでをる。

後、博士が古經の研究の爲め居を奈良に移されんとするに臨んで、自分の請を容れてその大矢本を讓られ、今は竹柏園の萬葉藏に藏してゐる。

なほ、博士が奈良の橋井善次郎氏のもとを訪はれた時、その所藏にかかる嘉禎四年九月書寫の和歌色葉集中卷の零本一軸を發見された。色葉集の寫本中最も年代の古いものであるので、校本萬葉集の諸本輯影にも掲げたことである。(今は上野精一君の所藏となつてをる。)

大矢透博士

間島弟彦君

歌人としての間島君

明敏なる頭腦をもたれし實業家としての君に就きては、別にこれを傳ふるに人あるべし。ここには歌人としての間島弟彦君に就きて、いささか述べむとす。

明治の中葉までの歌壇は、もはら桂園派の占むる所たりしがそが中に重きをなしし一人に、明治九年に露國彼得帝銅像の圖を描かせ、これに長歌の贊を試み、殊に歌の起原に就きて從來何人も道破せざりし新説を提供せし間島冬道翁ありき。君は翁の子として遺傳的に和歌を嗜まれき。ある年の夏の夜、三溪園に共に客となりて、芝生のかがり火のもとに歌がたりをなししに、何事にも一の識見をもたるゝ君は、歌は舊風の重んずべき由を切論せられたりき。後みづから悟る所ありとして新月會に

(間島弟彦君畫及び贊)



入り、更に一水會をおこして、新興の歌風にいそしまれき。君は天分ゆたかにして、すべての道に秀でられ、美術の鑑識に長け、造庭の術に巧に、筆蹟のうるはしさは專門家を凌げりともいひつべく、晩年は後素の道にも親しまれき。歌に於いても、かつて、「旅の歌」一卷を印刷して知友に頒たれしことあり。その後の作をあつめて印行せられむことを慫慂せしかど、他事には膽大なりし君の、歌には極めて小心にして、苦吟詠作に努め、いまだ集を成すを肯んぜられざりき。唯一人子にして將來大成せらるべかりし秀才の令息道彥君の、不幸病を得て世を早くせられし後は、或は鎌倉小町なる白水莊の山齋を樂しみ、或は輕井澤なる臥雲山房の閑寂を喜び、歌風一轉して、自然を凝視し、深くその奧邃に透るに至れり。

君、談論風發、諷刺人を刺す言を出ださる。予は君にさる方面を開拓する人生詩人たらむことを屢語りたりき。しかも多年の病魔と戰ひて、近くは歌を詠ぜらるることも少かりき。この一月十四日、松村みね子夫人への返書に、

病苦とあらそひにつつ寂かなる心もとむと夕日にむかふ

眞清水のふく音（おと）かそけき山の家の戸を守（も）りてあらむ小さき鶇（あかはら）

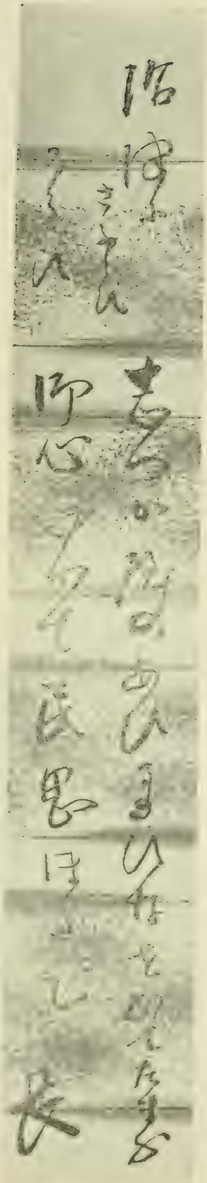
しみじみともろさを思ふうつそみにかそけき命堪へがてぬかも

の歌あり。仰臥して書かれしこの三首、つひに最後の作となれりしならむか。

君は客を喜びて小集を催されしこと多く、予も數回招かれてその席に列なりぬ。かつて大森時代には、原田照子夫人と卓を共にせしことあり。大阪時代には、京都四條の納涼の床に古鄉時待君と席を同じうせしことあり、築地の家の雅宴には、九條武子夫人と座をつらねしことありき。また君は白水莊の庭園なる李の花を愛し、折しも谷戸のあなたに病み居たる木下利玄君の、また李青といふ號あるにつけて、花の枝に歌を添へて贈られし事もありき。

しかしてこれらの人、いづれも故人となりぬ。今し幽界にありて、歌がたりなど共にせらるらむ。人世傷心のこと多し。筆をおきて、そぞろに君の風貌を憶ふ。（圖版の歌は 縄かけ一隅にそと置け破れ窓ちてはひできし時もありしか

弘田長博士



（沼津にさぶらひける頃 賤が屋のあひるの雛をめでたまふ御心やがて 民思ほさむ 長）

身もたな知らに

明治三十四年、皇孫殿下の御生誕あらせられ給ふや、弘田博士は拜診御用を仰付けられ、翌年、宮內省御用掛を拜命せられた。（醫科大學教授にして、宮中に召されたのは、博士が始めてであるといふ。）しかして、側近に奉仕し、大磯に、箱根に、沼津に、殿下の御避暑御避寒に供奉せられた。

殿下には極めて御健やかにあらせられた。隨つて側近の人々にも時間の餘裕があつたので、修養の爲め古歌集の講義をといふ御養育主任河村純義伯の話によつて、自分が、大磯に箱根にまた沼津に赴いてその事に當つたのであつた。當時講義をきかれた人々のうち、弘田博士、樺山常子夫人、小原頼之君等は、和歌の道にも長く精進せられるやうになつた。

弘田博士は土佐の人で、その氣象きはめて男性的、熱情的で、殿下に奉仕しては、身もたな知らに仕へ奉つた。圖版に掲げたのは、當時の作であるが、なほ數首を擧ぐれば、

牛臥の海岸を御供して歩きける時山の上に百合の咲けるを見て

御ともにしあらずば高き岩の上のさ百合の花も折りとらましを

九月二十五日　還御の日

口にまして肥え勇みます御けしきをさぶらひ馴れて見るが嬉しさ

箱根に御ともしける時

箱根路の岩が根百合も時を得て我日の御子の御手に觸れにけり

兩殿下御遊歩の御供しける時

はらからの日の大皇子のうちつれて馬みそなはす御顔雄々しも

九月四日箱根の御旅館に伺候の道すがら稲田村里のさまなど打ながめて

賤のをの面に笑あり小山田の稲穂八千花いま盛なり

沼津御旅館より夜更けてまかりける路の松原に月さえて富士あから見えければ

　まかり路の礒の松原月さえて富士眞白なり賤が屋の上に

また大正五年立太子式の禮を行はせ給うた時の詠草の中に、

　皇太子殿下の御幼年の頃の御事を思ひ出でまつりて

ヒー來るヒー來れりと宣ひし日の皇子は今日日嗣の皇子に

木馬めし遊びましつる日の皇子の御うつしゑかざり御酒奉る

博士は自分の話によつて、曙覽、言道、望東尼の作を愛誦され、隨つてその筆蹟を蒐められたが、福井にも福岡にも醫學上の門弟があつて、便宜が多く、よく蒐まつた。就中、酒を愛した曙覽が屢遊んだ福井の割烹店風月亭の主人が、數年間の酒債のかはりに、家にのこすべく短册を書いてほしいと請うて、曙覽の好みの丁字引の短册千枚を持參したに、これには曙覽も驚いたが、力めて六百枚を書いて與へたといふ。その六百枚が、一時衰へた風月亭から賣りに出したのを全部買はれた。しかもその六百枚は、愛誦の歌二十枚ほどを留めて、あとを人々に頒つべく自分に囑されたので、同人にわかち、また當時は價が極めて廉であつたので、心の花の競點の賞にわけなどしたことであつた。曙覽の短册が今日流布してゐる中には、この六百枚のわかれが、かなりあるやうである。

また博士は、福岡の平岡浩太郎氏と懇意であつたので、言道、望東尼の筆跡も多く蒐まつた。殊に、言道の歌論として歌學史上不朽の二書「ひとりごち」「ことぞのちり」は、博士をとほして捜索を乞ひ、それに梅野滿雄君の盡力も添つて、終に發見するに至つたものである。

また、土佐人鹿持雅澄の筆跡をも熱心に蒐められた。ある年、谷家より祖先の遺書全部を山内家に獻じたのを、博士の紹介によつて、麹町なる同侯邸に就いて見ることを得た。その時はじめて、谷眞潮が萬葉白文研究をはじめたこ

とを知り得、雅澄が眞淵の學統なることをも明らかにし、大正四年十月、史學會に於いて、自分は「土佐に於ける萬葉學の源流」といふ講演に發表した。今日では國文學界の常識ともなつてをる土佐萬葉學の傳統も、當時に於いては珍らしい發見なることを、博士も自分も共に喜んだことであつた。

小山内薫君

○　（明治三十七年八月、鎌倉）

潮浴みとにもあらず、暑さ凌ぎとにもあらず、唯何となう訪ねたき人ありてたづね來し宿の、はからずも、順君の母君身まかり給ひし屋敷の隣なりし、先づ思出の種なるに、ここは一月遲れの盆會にて、きのふけふ夕暮のそぞろ歩きに、迎火、送火、「かたみ子や母が來るとて手をたゝく」など。

鎌倉さみだれ橋

小山内　薫

（文中の順君は川田君で、君の母君は、鎌倉材木座で明治三十三年に世を去られたのである。）

ゲーチー座前の廣場

千朶木山房の奥の室で、主人鷗外氏と話をしてゐるところへ上田敏氏が訪はれて、今、宮下町へ行つて、小山内君に逢つて來ました云々と言はれる。これが小山内君の姓名を聞いた初めと思ふ。

當時文科大學の學生であつた川田順君が、武林無想庵、小山内君などと一緒に雜誌を出されることとなつて、手紙をもらひ、小山内君に逢ふと、才人といふべき型の若人であつた。その折、夙く心の花へ歌を投稿したとやうの話をきいたことであつた。後、三木竹二君が觀劇會を催されるのでゆくと、いつも小山内君と八千代さんに逢つた。

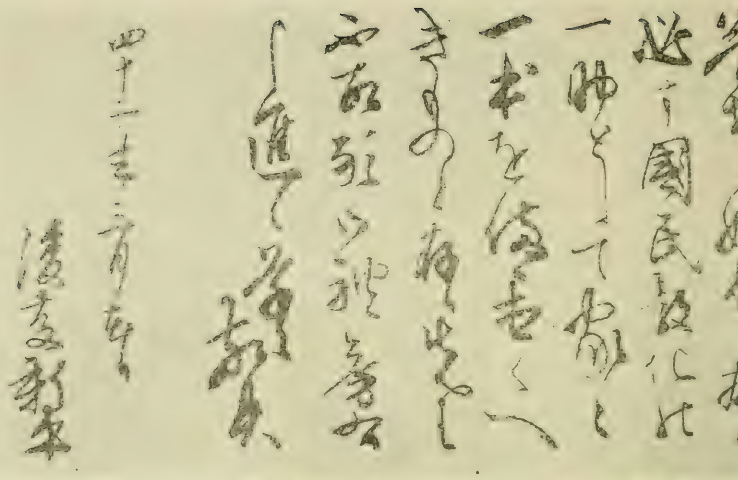
自由劇場に第一回から見に行つて、君の熱心に動かされたことであつた。

英國の旗役者が、横濱のゲーチー座で初めてサロメを演出すると聞いたのでいつた。午後八時の開場であつたが、少し時間が早かつたので、前の廣場で立つて待つてゐた。月のよい夜であつた。ふと聲をかける人がある。見れば小山内君であつた。月影が片頰にさした君の面ざしが忘られがたい。

後藤棲霞伯

○　（明治四十二年三月三十一日）

拜啓。御惠投の國民歌集、深甚の興味を以て一讀致候。和歌と申せば花鳥風月男女情愛に盡るが如く誤解致居候ものも不少候處、此書によりて大和民族の偉大崇高なる精神に接するを得、一吟一誦、忠愛の念報効の情油然として



（後藤伯書状）

生ずるを禁ずる能はざらしめ候段、まことに名教に稗益ある好書と存候。必ず國民教化の一助として家々一本を備置くべきものと存候。先は不取敢御禮旁右申進候。草々敬具。

四十二年三月盡日　　後藤新平

佐々木仁兄大人　侍曹

大國民唱歌

棲霞後藤新平伯は、若くして上京の際、父君の詠み與へられた歌を掛物として、常に自ら警めてをられた。父君は、堀籠精水に歌を學ばれたので、保田光則の撰になる訓誡和歌集を傳へ持つてをられた。伯はこれを愛誦され、旅中もその抄本を常に携へてをられたといふことであるが、明治四十年に、その全本を刊行され、自分にも贈られたことであつた。

かつて臺灣民政長官たりし頃、德富蘇峯翁を介して、大國民唱歌の制作を思ひ立たれて、添削を委囑されたことがあるが、その趣旨を書かれた文に、

第一、本島民の事大思想を撲滅する事。

第二、我が國體は世界無比にして他の文明を輸入して同化し、輸入文明の爲に同化せられざる事。

第三、侵略討伐の歴史に名譽を全うしたる事。

第四、敢へて人を侵さず、人に掠められざる自衞を主として、各國競爭上止むを得ざるに在つて開戰したるものにて、日本人は戰爭を好むに非ず、勇を誇るに非ず、仁者極まりて生ずる勇なる事。

第五、世界無比の博愛主義、慈善主義を持する君民の、帝國主義發動の時運に際し、皆版圖を有するに到れば、世界無双の成功を見るは當然たるべき事。

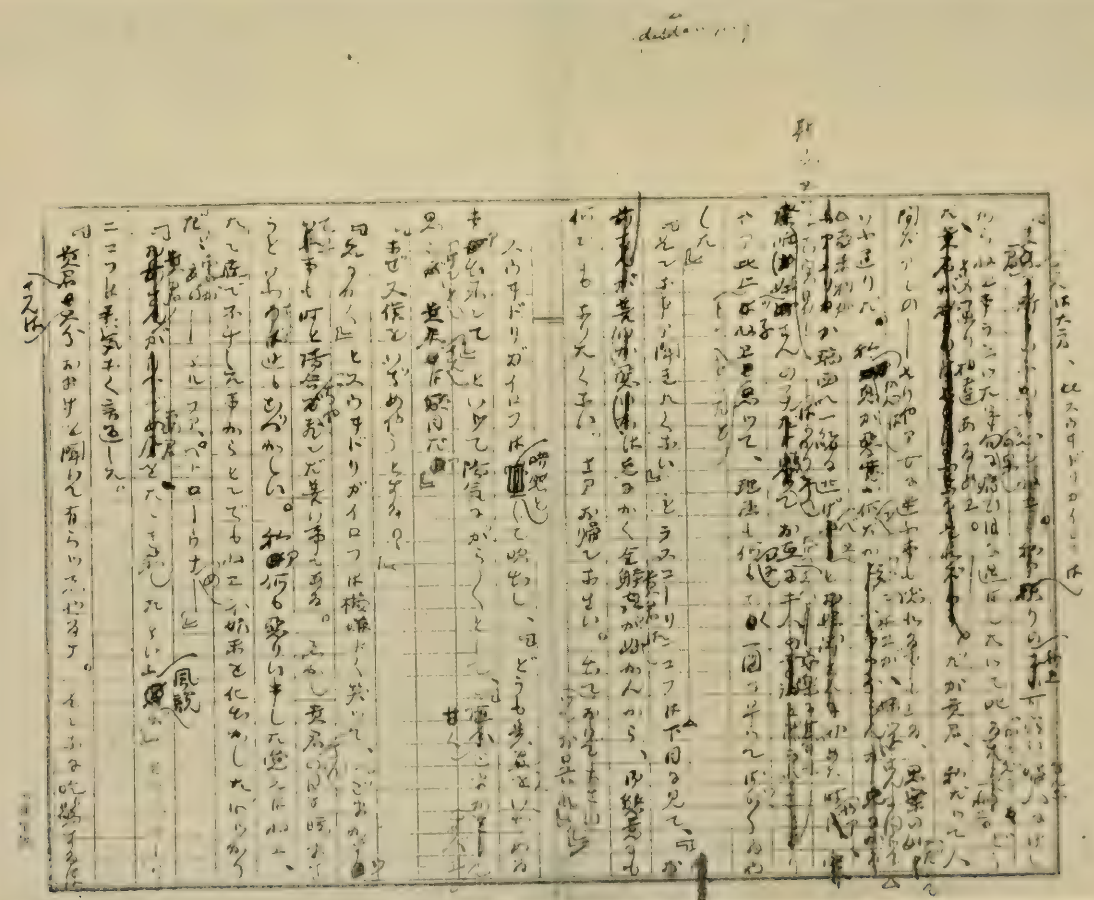
第六、我が人道主義は、日章旗と同じく、世界の民に對し、太陽照恩におとらぬ功徳を敷くべきものたる事。

第七、國大に民多きゆゑに大國民にあらず、人道主義を唱へ、人道主義を行ひ得るもの、眞の大國民たる旨等を知らしめ、大人と小人との別の如く、軀幹大なる人必ずしも大人ならざるを覺らしめんとの意なり。

とある。以てその志を見ることが出來る。

その作歌作曲成つて後、レコードに吹込んで臺灣の各學校に配附された唱歌のレコードとしては、最も早きに屬するものであらう。

なほ大國民唱歌は、二篇あつて、共に漢譯を添へ、表紙は中澤弘光畫伯の筆で日本服及び臺灣服を着た二人の兒童が、日章旗のもとに地球儀を指ざしをる圖をゑがき、かつ世界の兒童が櫻花の蔭に遊戲せる圖二葉が挿入してある。



内田魯庵君「罪と罰」原稿

內田魯庵君

桑原安萬呂

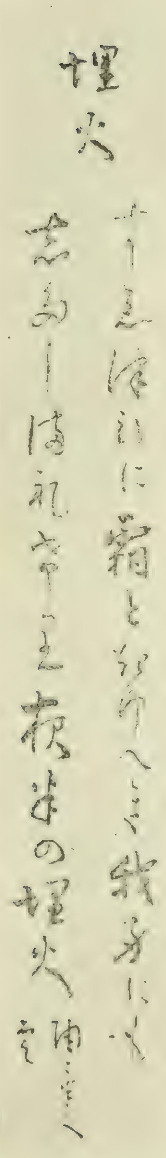
魯庵君は、不知庵主人といつた頃から知つてをつた。その名譯「罪と罰」は當時數回よみ返したことであつた。この十數年來、流行會でしば／＼席を同じくして、趣味ゆたかな君の談話を喜び聽いたことであつた。大震災の後訪問された折には、湮滅に歸した文獻について雜誌に執筆される由であつたので、自分は聞き知る限りを語つて、共に惜み且ついたんだことであつた。

ある年の一月、自分が架藏してをる奈良朝の桑原安萬呂の「三元慶啓、萬福惟新」云々といふ寫經試字の一葉を葉書につくつて年賀狀として出したのに、それについて最もはやく手紙をおこされたのは君であつた。

君の著書はいつも惠贈を辱うしてをつた。自分も、上記の安萬呂のを初めに揭げた百代草を贈つたに、中央公論誌上に、懇切な批評を書かれたことであつた。

圖版に揭げたのは「罪と罰」の原稿の一葉で、毛筆を以て書かれてをり、朱筆を以て刪修が施されてゐる。令息巖君がこの書のために特に寄贈せられたものである。

前田慧雲博士



○

（昭和某年六月十三日）

拜答。先日御話し申上候書名は、

風灣華響

江州福堂村覺成寺超然

虞淵と號す

赤松老人は此頃德山へ歸省中之由、本月廿四五日迄滯在との事に候。右拜答まで、草布。

六月十三日　慧雲

佐々木大人

風灣葦響

前田博士とは、大學の講義が同じ日の同じ時間であつたので、職員室で語り合ふ機會も多く、また同じ西片町に住まつてをつた爲め、往來もし、示された歌を見たこともあつた。圖版に掲げた短册には「埋火、するつひに霜ときゆべき我が身にもしたしまれけり夜半の埋火、陶々半人　雲」とある。

上に掲げた書簡は、自分が佛教者に逢ふごとに、桑門の中に、未だ世に知られぬ歌人もしくは歌學者がありはせぬかと、必ず質問するのである。それは、一般の歌人の家集、歌論の書のたぐひは大半渉獵したので、殊に世外人に心の深い歌を遺した人がありはせぬかと、常に留意してをる故であつた。前田博士にも同じ問を出したに、超然のことを話され、後この書簡を贈られたのであつた。

（因にいふ、この**風灣葦響**は、歌に關する隨筆であるが、近く活版に附せられた。）

原田嘉朝翁

思ひいる矢

原田嘉朝翁は伊勢松阪の人、わが父も松阪に住まつてをつたので親交があり、明治二十年九月、翁の再度の上京

の際には、小出粲なるおほ家のうしろに往きはれたのである。しかして、歌を父に聞はれ、父亡き後は日ならずに亦まれた。天稟のゆたかな才には、歌の上にもほとばしつて、才氣に富んだ作が多かつたが、しかも不屈不撓の熱中の思を詠み出でられたのにすぐれたのが多い。ここに十首を擧げる。

心つくし力つくしてひたすらにおもひ立ちつる道にいたらむ

かきくらし降りしくみ雪踏みわけてまことの道をとふ人や誰

かかる時にあふはた嬉しますらをの力のあらむかぎり盡さむ

富士の嶺の高嶺のみ雪いよよ白く猶高かれと降りつもるらむ

すぐれたる高きこゝろは老い行けど若木の梅としき花と咲け

玉くしげ二つは成しぬかしの質のこの一事も成さでやまめや

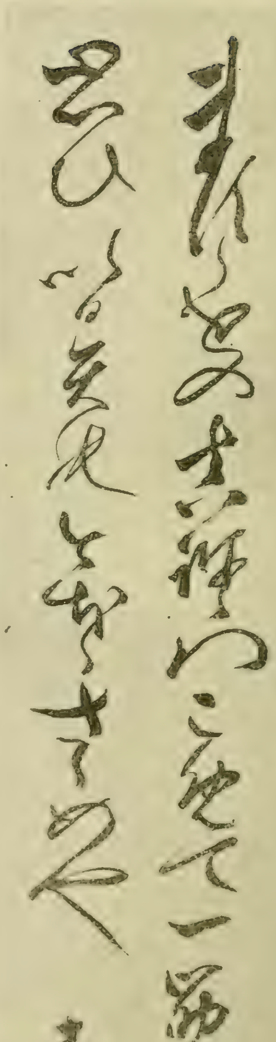
難波津のなにはの事のよしあしも唯神のみぞしろしめすらむ

おもふこと皆なさしめよ神佛罪もしあらばかしこみてうけむ

うつし世の春はみじかし幾千年いく千の人におくりものせむ

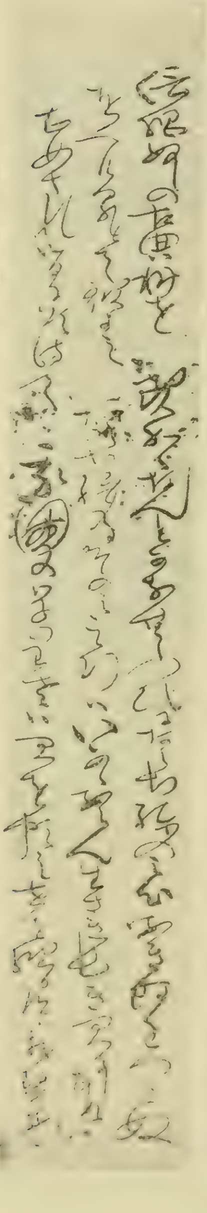
わが袖のよしせばくとも外國の民くさまでもおほしてしがな

その國家社會に對する大いなる理想を實現するためにとて、原田積善會を起された。翁は、大いなる理想家であり、且つ實行家であつた。その五百年後、一千年後、二千年後の日本國の爲めに樹てられた事業のごときには、屢々その計畫を聞いたことであつた。



（ますらをの眞心こめて一筋に思ひいる矢のとほらざらめや　嘉朝）

翁には、自分が古典科在學中から親炙したのであつた。しかも、自分は自分の志した道にひたすら進んだ爲め、

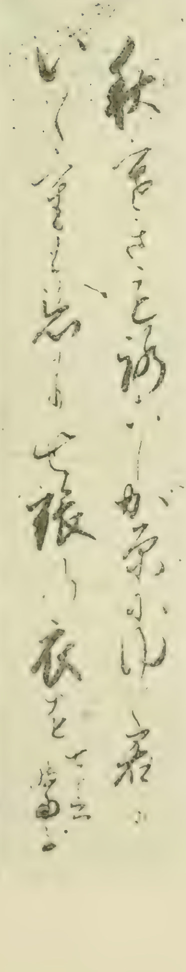


（信綱ぬしの古典科ををへけるとてよみて示されけるに答へ侍り）

みがかれんとかなんつひにたらちねのみ心安き時近づきぬ
たらちねのその眞心はいかゞあらむ生さき長き君にしあれば
我が國の學のわざは君に讓み世を經る道はわれ棄せん

翁の歌にある「世をふる道」の栞をば請はずに、吾が父の歩んだ道を同じやうに歩みつづけて來たのであるが、今にして思へば、自分の心の底には、亡き父の庭訓と、翁の思想のうちのある一部とが宿つてをりはせずやとおもはれて、深く感謝してをることである。

圖版に掲げたのは、翁の精神のこもつた作で、その歿後、松阪樹敬寺の境内に建てられた歌碑に刻まれた歌であるが、曾て書いて贈られたのであつた。(この樹敬寺には、本居宣長翁、同春庭翁をはじめ、本居家一家の墓がある。)なほ、翁の妹刀自時雨子ぬしは、實に賢母であつた。歌をも好み詠まれた。自分の支那行を送られた短冊を、ここに掲げておく。



(秋寒きもろこしが原にゆく君よいく重も着ませ旅の衣を　七十六時雨子)

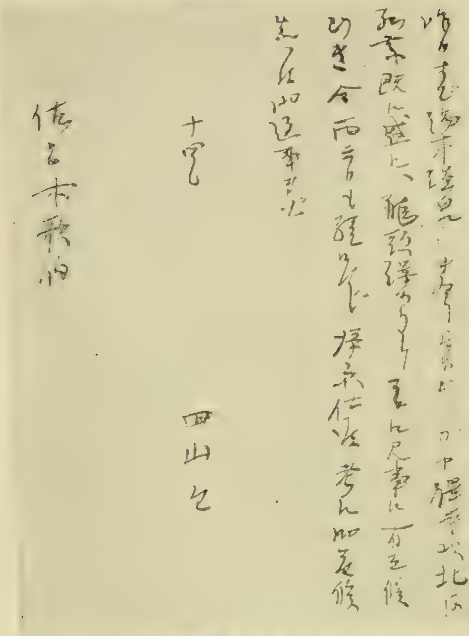
田山花袋君

○（明治三十七年十月十四日、日光山中照尊院）

拝啓。昨日博文館より御手紙を送り來り、嬉しく拝見仕候。さま〴〵の危地に臨みしにも不拘、無恙歸京仕候ことまことに天祐と存候。めづらしき話も無之候へども、其中機會を得て御面晤御話申上度存居候。昨日まで湯本温泉にまゐり居候ひしが、中禪寺以北は紅葉既に盛に、龍頭瀑あたり、ことに見事に有之候ひき。今雨三日も經候はゞ歸京仕度考に御座候。先は御返事まで。

十四日　　田山生

佐々木歌伯



（田山花袋君書狀）

紅葉會の同人

明治時代の文學者の中には、和歌に對して全く趣味のない人もあつたが、中には自ら詠じた人もあつた。目山君はその自ら詠じた人の一人で、松波遊山翁の門人松浦辰男氏の紅葉會の同人であつた。紅葉會には、自分も二三度出席して話をしたことがあつた。

隨つて目山君に、桂園門下の歌書をも藏してゐたので、續日本歌學全書を刊行した際、當時何處を尋ねても得られなかつた浦の汐貝の續編を、君の書架から借りて載せたことであつた。

ここに揭げた手紙は、明治三十七年九月、征露の第二軍に從つて滿洲諸戰場を經て歸國して程なき頃のであるを、さまざまの危地に臨みといふのは、卽ち從軍中のことである。これは自分が鵠沼から出した手紙の返事であつた。

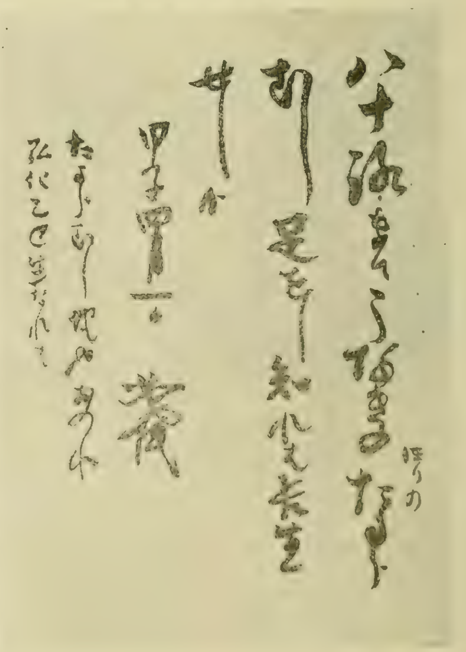
大槻如電翁

○（明治四十五年七月二日、京都御幸町仙鶴亭）

今度西京へまゐり、某家にて杉田玄白先生より信友大人へ贈られたる和歌の短冊を發見す。六日に歸京すべければ、其時くはしく御物語可仕候。御通知まで。

七月二日　　大槻如電

（圖版にかかげたるは「八十路までうなぎのぼりのたるら蟲足るをし知れば長生せしか、甲子四月一日、如電、たるらむし、蛇なり。おのれ弘化乙巳生なれば」にて、吾が家を訪問せられた際芳名薄に書かれたものである）



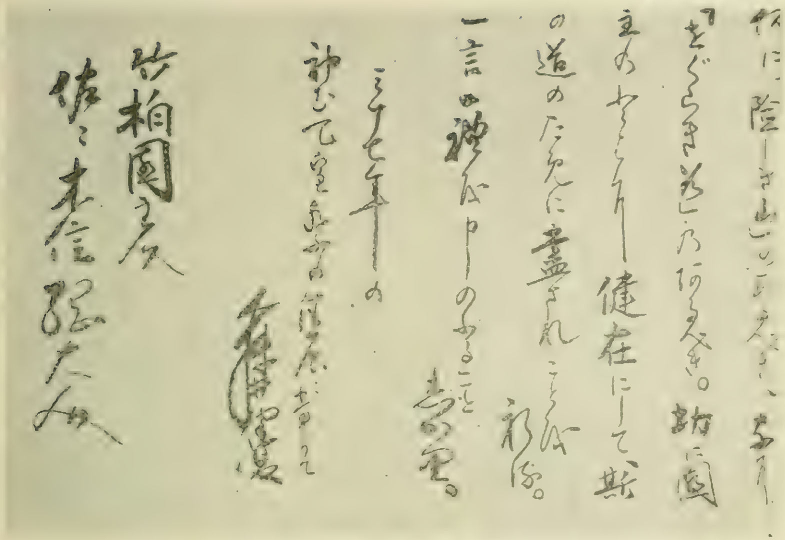
（大槻如電翁歌）

玄白先生の短册

如電翁は、はじめ修次郎、修次、分、後に修二といはれた。弘化二年中秋後二日江戸木挽町に生れ、昭和六年一月八十七歳で日暮里に歿せられた。

翁は江戸子風の學者であつて、弟君の文彦博士とは性格が異つてをられた。しかし、博學の點は博士の兄君たるに恥ぢなかつた。はじめ淺草新堀端に住まれ、後、日暮里に移られた。多くの善本を藏してをられた。自分の茂睡研究のをりには、種彦舊藏の「紫の一本」を看るを得たのは、翁の書架に於いてであつた。梁塵秘抄について研究してゐた折には、天文本の梁塵秘抄に淺草文庫の印記あるものを贈られて、架藏してゐる。

西片町にも度々來訪せられたが、この手紙は、自分の短册蒐輯の趣味から、名家短册帖を印行したをり、翁に珍らしい短册をお尋ねしたに就いて、後、旅中から玄白先生の短册を發見したと、わざ〳〵葉書を寄せられたのである。



（藤井健次郎博士書簡）

藤井健次郎博士

○（明治三十七年四月三日、牛込區東榎町）

名もいちじるき竹柏園に生ひたちし「心の花」、當代名家の錦心繡腸を織りなして、百花一時に妍をきほひたらん如き「心の花」、四時落ちおせず萬古姿をかへずして、とはに匂はむ「心廼花」一枝、わざ／＼御惠みくだされし辱なさよ。一讀再讀、之を玩味せば、僕の枯腸も爲めに潤はるべく、僕の塵心も爲めに洗はれむ。御厚志の程謹みて拜す。

今の世詩を屬し、歌を詠む人さはなり。されど多くは形の末に泥むものにあらざれば、想の奇に走る者なり。げに君の言の如く、「人々の思想と趣味とにはくさ／＼の別ありて、そをいづれ劣れり、いづれ優れりと、誰かかりそめに定め得べきなれど、しかも徒らに形式に泥む舊派と、故らに奇想を衒ふ

新派とは、共に僕の趣味に適せざるを奈何にせん。僕ひそかに以て遺憾としき。然るに僕君が作を「二六」の紙上に見、後「思草」に讀むに及びて、眞に殆ど記憶の外に湮滅せんとせる故舊に再會せるの感をなしき、君の詩はその想や清新、その形や圓熟、よく新舊兩派の弊をすてゝ、その衷を折し、別に一派をなしたるもの、僕君が詩才に服す。君が詩に關する評論は世上自ら定評あらん。僕之を知らず。ただ僕は君が詩によりて僕自らの胸裡の祕密を調と律とを以而讀むことを得、心中自ら清爽の感あり。僕以て足れりとす。

序に僕に「思草」の中僕の最も愛讀する二首を數ふるの無禮を許したまへや。

いつよりか天のうき橋中たえて
　人と神との遠ざかりけむ

人かはり時うつろひてすでに千年
　かすめる塔よなにをゆめみる

「いづれの道にも行路難はあれど「勇みにいさみて進む前には、なに「險しき山」のあるべき、なに「をぐらき谷」のあるべき」切に園主のとはに健在にして、斯の道のために盡されむことを祈る 一言御祝を申しのぶることしかり。

三十七年の
神武天皇祭の佳辰に當りて

藤井健次郎

竹柏園主人
佐々木信綱大人

村岡君は如何の御様子に御座候哉。同君よりは其後一向御通信有之候得共、當方よりは一向に御無沙汰致居候まゝ、御序も候はゞ何卒よろしく御鳳聲被成下度願上候

知己の音

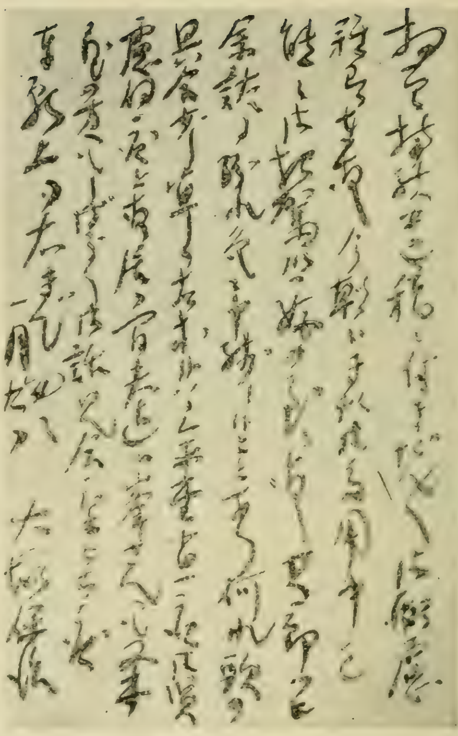
藤井博士が東京にをられた頃、早稻田の人々の會でをりをり會つては語り合つたが、ことに愉快な話ぶりで聞く人をひきつける力がゆたかであつた。

筆蹟も巧みであつた。上に掲げたのは、心の花を贈つたに對する禮の葉書である。あへて書翰とはいはれもへど、知己の音として殘しおいた一つである。文中村岡君とあるは、東京大學で我村岡典嗣君で、早稻田で博士の教を受けたのであつた。

大塚保治博士

○ （明治四十四年一月九日、駒込西片町）

拜呈。楠緒遺稿に付き、段々御配慮難有奉存候。今朝にて御多用中ながら種々御注意被下候事に存候。其節ッ上條候



（大塚博士書状）

に紛れ色々申残し候ことあり、何れ頭の具合少し宜しく相成候はゞ、參堂尚一應御賢慮伺ひ度と存居候間、夫迄は峯さんへも又本屋の方へもしばらく御話見合置被下度奉願上候。右まで　匆々。

一月九日　　大塚保治

（楠緒子夫人の遺稿を出版する計畫につきての書簡である）

明年の講義の準備

大塚博士とは、君が大塚家に養子に來られてから相知つたのであるが、夫人楠緒子さんは、その母刀自伸子ぬしと一緒に入門せられたのであつた。

君は、眞に教授といひ、學者といふべき人で、夏の休暇には、外國から書籍を取り寄せなどして、明年明後年の講義の準備をするといつた風であつた。平生も、女子大學の外何處へも出られず、從つて君が大學の美學の講義は、聽講生であふれてゐたといふ。

講演も雜誌の寄稿も殆どされなかつた。從つて竹柏會の大會でされた日本服の美的價値、帝國文學會でされた

「日本の建築に就いて」の講演は、ともに當時名高いものであつた。日露戰爭前だけは、時局に關する講演會を開きなど活動され、その講演は雜誌太陽に載つてゐる。また、心の花にイプセンの劇の梗概を載せられたことがある。これはイブセン研究の文獻として現はれた嚆矢であらうか。

大西祝博士のことに就いてはよく話し出された。心の花に、大西博士の來書についての君の文が出てゐる。

自分は、君に著書の出版を度々奬めたことであつた。夏目さんもしばしば促してをられたといふことである。（夏目さんは熊本の高等學校から外遊されたのであるが、歸朝後東京帝國大學に講師として來られたのは、大塚博士の斡旋に依るものであつた。）

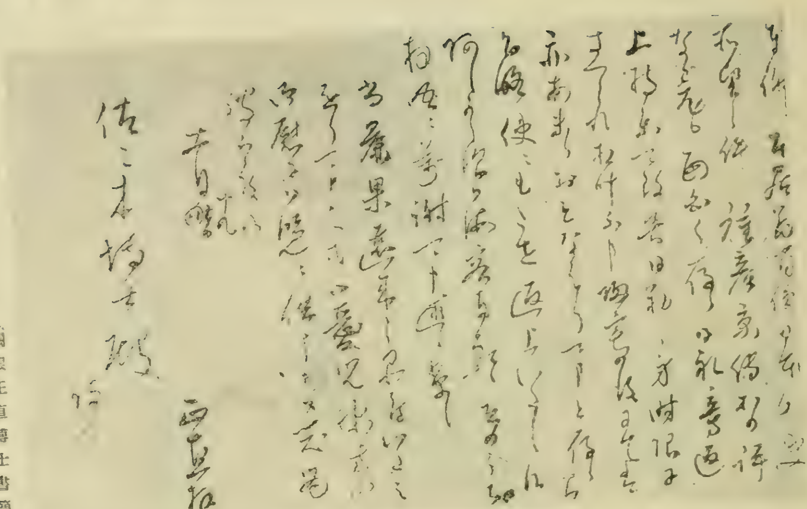
又、西田幾多郎博士のことに就いて、西田君の論文を藤岡君（東圃博士）から讀むやうにといはれつゝ、讀む機會を得ずに過したが、若し早くそれを讀んでをつたならば、東大に推薦するのであつたに、と語られたこともあつた。

帝展の起りに就いても、多大の貢獻をなしてをられる。大學を去られて後、支那の畫論を讀んで研究してをると話されたことがあつた。「畫はわからぬが、音樂は」と、よくいつてをられた。

大學構内の公孫樹のもとなどで會ふと、よく立止まつて話された。東洋文庫の門前でふと出會つて、例の立話をしたのが、君と語つた最後となつた。

ここに掲げた葉書は、楠緒子さんの遺稿出版に就いてのものであるが、中に峯さんとあるのは、竹柏會の同人峯百合子さんのことである。

（附けて云ふ、百合子さんは、幕末の醫師で好事家であつた樋口光義の後で、才とかたちと二つの美しさに惠まれてゐた偶然姓を同じうしたので、樋口一葉とも親しかつた。いつも時の流行の先に立つといつた所謂新しい人でありながら、し



（關根正直博士書簡）

かも貞淑な婦人であつた。住居は日本橋であつたが、後本郷彌生町なる沼波瓊音君の家の前に移られた。沼波君は百合子さんに就いて、いつも褒めてをられた。楠緒子さんとは、同人どちで親しくなられたのであつた。）

關根正直博士

○（某年十一月十九日）

拜啓。昨朝は御親切被仰下、尙又今朝御自身御持參被下、何共恐入深く御禮申上候。早速拜見、誠に忝く奉謝候。本居翁肖像、日本外史所望の件、種彥京傳等の評など、尤も面白く存候。御禮旁返上持參可致筈、日勤の身時限にさへられ相叶不申、歸宅の後にては亦あまりおそなはり可申と存候間、乍略使にもたせ返上致し候。あしからず御海容奉願候。其うち拜晤に萬謝可申述候。草々

尙麁果遠來の品に付いたみをり可申かとも存候へ共、御愛兒樣方の御慰に御覽に供申候。御笑留被下度候。

十一月十九日　　　正直　拜

佐々木博士殿

侍史

（竹馬の友なる伊勢の堀内鶴雄君が、馬琴の書狀を得られたに就いて、それを借りうけ、さらに關根博士に御見せした折の手紙である。本居翁像以下のことは馬琴の書狀中にあるのである。）

江戸子風の學者

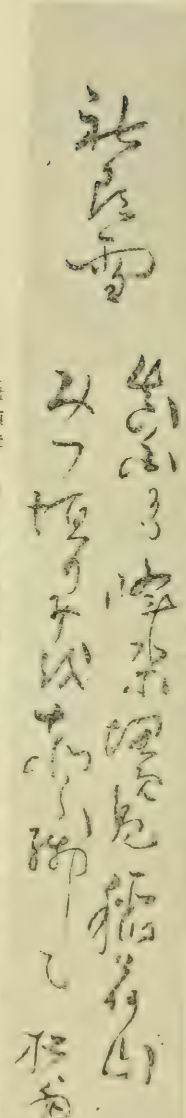
關根博士は、古典科の先輩であり、住居も森川町に在つて自分と近かつたのでよく往來してゐた。博士は江戸子で、能辯で、座談が上手で、講話も實に巧みであつた。しかしてまた懇切なかたであつた。

戸田茂睡の壽碑を淺草公園に再建して、傳法院で法事を行つた折、博士のされた講話は、江戸辯で頗る興味深く面白かつたので、參會者は、地下の茂睡も微笑して喜んでゐるであらうといひ合つたことであつた。

江戸人であつた關係から、千蔭、春海を貴はれもし、また研究した文章を發表もされた。千蔭の後裔なる直種の歿後、その藏書が賣られ、枝直の日記などは東大圖書館に入つたが、その他のものを數人の手に分けられた。關根博士の求められた枝直の「子に與ふる文」「歌の姿古へ今を論ふ文」は、自分が借り寫して日本歌學史の資料とし、同書に要點を掲げておいた。（原本は惜しいことに、震災の際に松の舍文庫で灰燼に歸したといふ。）

眞淵門人錄も、博士の所藏によつて續日本歌學全書に掲げたが、後、讓りうけて、竹柏園に藏してをる。

松居松翁君



（社頭雪　真白にも降り埋めけれ稲荷山みづ垣のみを赤く殘して　松翁）

「静一の評」

松居君の外祖父なる上野國大間々の二渡信經翁が、わが亡父の門人であつた爲め、君は若い時に詠草を持つて來たり、或はそれを取りに來たり、小川町に度々いつたものであると、後に流行會の席上で聞いたことであつた。

後進に親切な人で、木村富子さんが劇作の方で君の門人であり、歌は自分が指導してをつたので、逢ふごとに、富子さんの話が出た。また、歌をよまれる子息桃多郎君のことも、よく話してをられた。

昨年、五月、自分が中村魁玉の爲に、戯曲「静」を書いて、歌舞伎座に上演したをり、子息と共に訪問された。恰もその日、東京朝日新聞に某氏の批評が載つてをつたが、君はその評に對し、また素人の作に對して、なるほどと感ずる評をしてくれられたのであつた。

巖谷小波君

○　（明治四十五年二月二十二日、小田原早川清光館）

お見舞の御はがき嬉しく拜見致しました。おかげで此頃は九分通り本復、御安心下さいませ。

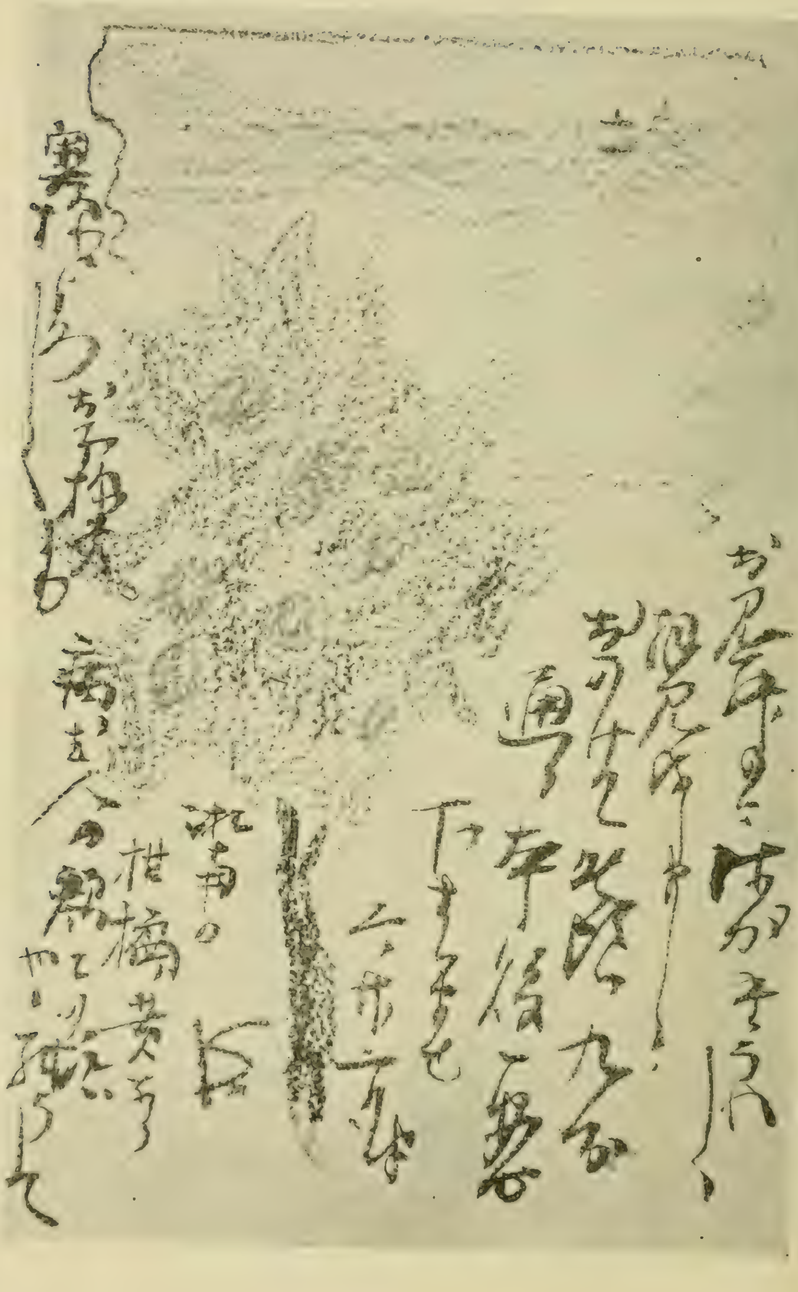
二月廿二日　　　　小　波

奥様によろしく、お子様方にも。

湘南の柑橘黄なり病む人の顔この頃はやゝ紅うして

曙覧の馬の歌

巖谷一六翁と亡父とは交はりがあつたので、従つて、小波君の名は、夙く知つてをつた。文人として會つたのは



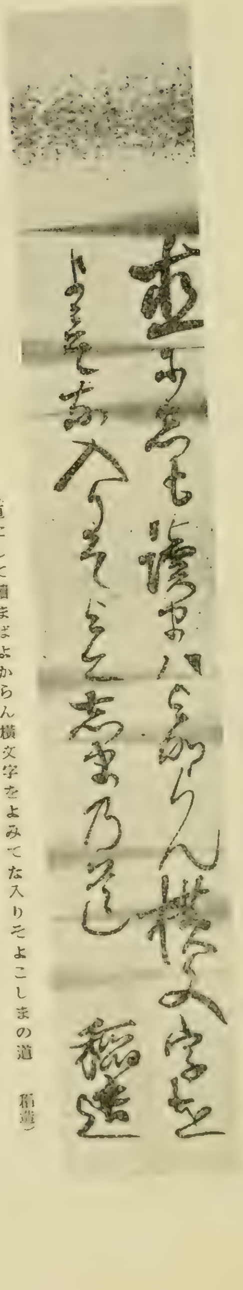
紅葉山人の條に記したごとくであるが、當日のことで今もおぼえてをるのは、漣山人と印刷してあつた名刺は、表が水色で裏が白かつた。川上眉山は、名刺を持たぬからといふので、小波さんの名刺の裏へ、美しい筆蹟で所を書きつけてくれたことであつた。爾來永い交を續けて、竹柏會の大會に講演をお頼みしたこともあつた。

小波さんに就いて忘れられない一つの記憶は、ある年の大會の前日になつて、その余興について困つたことが起つた。後から考へればさほどのことではなかつたが、當時は全く、どうしようかと思ふほど苦しい立場であつたので、朝早く小波さんを高輪に訪ねたに、懇ろに言つてくれられた。その結果はやはり無駄ではあつたものの、何か感謝の意を表したいと思つたに、其の頃から馬に關するものを集めてをられたので、自分は愛藏してゐた井手曙覽の「雨降れば泥蹈みなづむ大津道われに馬ありめさね旅人」と云ふ歌を萬葉假字で二行に達筆で書いてある掛物を贈つたことであつた。今も、千里閣に藏されてゐることと思ふ。

流行會から引つづき時好倶樂部の會で、年に數回會つてゐたが、いつも懇ろな巖谷さんは、天草に行かれた時も熊野に赴かれた折も、自分の竹柏園の名に負ふ梛の老樹を見られて、その繪葉書があつたからと送つてくれられたりしたことである。

圖版に掲げたのは、小田原に病を養うてをられたのを見舞うた返事であるが、君の短歌は珍らしい。繪といひ歌といひ、才人の面目が躍如としてゐる。

新渡戸稲造博士



（直にして讀まばよからん横文字をよみてな入りそよこしまの道　稲造）

忠臣藏の芝居に辨慶が

明治四十二年の春の竹柏會大會に、新渡戸博士は、「フアウスト物語に就いて」といふ題で話された。「自分は、一向に敷島の道を心得ませぬので、忠臣藏の芝居に辨慶でも出るやうな、あまりに釣合はぬことに……」などと、おもしろく話を進められた。

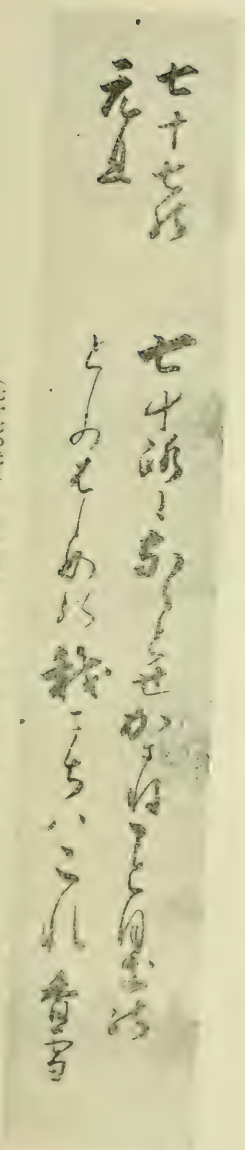
博士と逢ふごとに、修養に關する古歌について、その出所作者などをよく問はれた。記憶を供してをるものは、

後から知らせなどしたことであつたが、博士は講演の中にさうした歌をよく引用されるのであつた。

時好倶樂部の人々と桂川へ鮎狩に行つた汽車で、博士と隣席したが、歌がたりがはじまつた。米國移民法の問題を不快に思ふといふ長い話から、その感想を詠んだといふ十首あまりの歌に就いて相談される。自分がいふのを聞いて、よろこんで手帳にかいて居られた。やはり近くに居つた巖谷小波君が「今日は歌の侍講を御同行で」と極めて輕妙にいはれるので、新渡戸氏も自分も、微苦笑したことであつた。

輕井澤の山莊をおとなうた折、近作數首を示された。その折書かれたのが、ここに掲げた短冊である。

村山香雪翁



（七十七の元旦　七十路に七とせかさねことほぎの年のはじめの香か斗はこれ　香雪）

俊頼の古今切

村山龍平翁は、香雪と號して歌をも詠ぜられた。父君守雄翁は、伊勢の歌學者で、「神風の伊勢の海」といふ書を明治の中年に著はされたのであつた。

龍平翁が帝國ホテル滯在中、近衞公を主賓に、岡部子、原田男、瀧精一博士等を招かれた。宴終つて後、自分は、神風の伊勢の海や、露園長歌集を再版せられむことをすすめたが、それから間もなく、明治長歌集をも附して出版されることとなつた。

神風の伊勢の海は、神代の歌は世に傳はらず、神武天皇の御製を歌のはじめとし、長歌に男女二調のあること等歌格研究史の上で注意すべき論を含んでゐる。明治長歌集は、明治二十年に一般から募集した長歌の集で、更にその選者を選擧投票によるべしとする、珍らしい意見などが見えてゐる。

自分の華甲記念の會が大阪で催されたをり、郡家なる邸に、茶事にとて招かれ、所藏の古筆類を見せようとのことであつた。自分は喜んで、京大の新村出博士、濱田耕作博士と同行したが、廣間に三十餘幅の名物の色紙、懷紙、歌切が掛けられてあつたので、鑑賞に時をうつした。展觀が終つて茶席に入る時、自分はふと、床の掛物は何であらうかと考へた。それは翁が曾て、萬葉の古筆切は何も持たぬので、といはれたことがある。今あれだけの名幅を示された後に、何を床に掛けられたであらうと思つたのである。

席に入ると、そこには、俊頼の古今切、雜部なる、貞觀の御時萬葉集はいつばかり作れるぞと云々の掛物が掛けられてあつたには、まことに感嘆したことであつた。それは、自分へのこよなきもてなしであるからでもある。しか

して茶杓も、歌人借大綱の作であつた。後、知人に此のことを語つたに、茶人は只一品しか見せぬ習はしであるに、三十度の茶會によばれられたのはと、羨しがられたことであつた。

内藤湖南博士

○　（大正十二年九月二十六日、京都田中野神町）

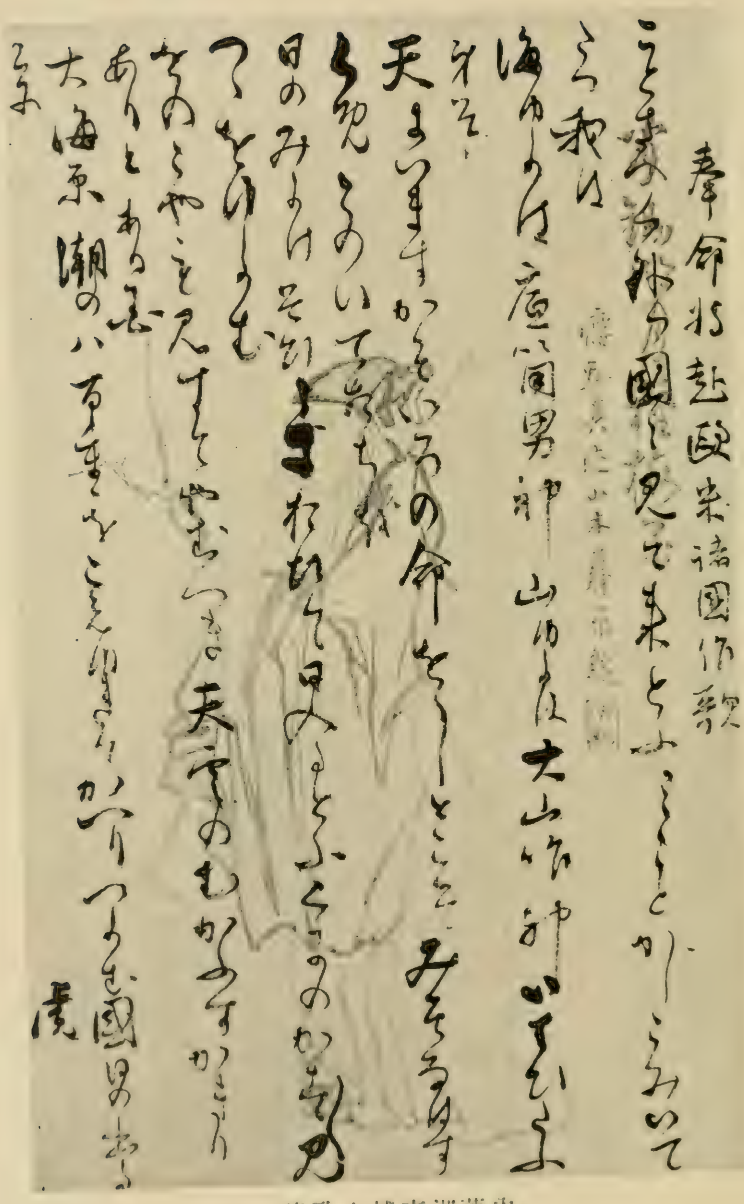
拜啓。曠古未曾有之災變、御家族皆々樣御無事の段奉賀候。多年御心盡しの校本萬葉集、灰燼に歸せられ候よし、歎惜之至、然るに、新聞紙上には、校正摺だけは殘り候やうの御話栽り居、果して信ならば何卒御屈撓なく、御再擧之程、爲道至禱々々。

先は御見舞旁とあら〳〵如此候。謹言頓首。

九月廿六日　虎

竹柏園大人　侍史

恭仁山莊



内藤湖南博士歌稿

自分の先輩交友には、幸に同じき昭代に生を享けたことを自分の喜とする數人のすぐれた人がある。湖南博士は實にその一人であつた。

博士の燕山楚水は、屢愛讀して、自分の南清行の一因ともなつた書であつた。

曾て南都祕笈の印行を企てたをり、博士は、聖武天皇宸翰の雜集、及び杜家立成の爲めに解說を書かれ、また百代草にも序文を贈られた。大震災の直後、校本萬葉集の原稿も、製本所にあつた五百部も全部燒失したに對して、同情ある書面を各方面から贈られて感謝したことであつたが、殊に自分に深い感銘を與へて、再び校本萬葉集の印行を成さしめたのは、自分を家に訪はれての月臺莊主人の激勵と、上に揭げた博士の書簡とであつた。

近年、宮內省の御物管理委員會、及び文部省の重要美術品等調査委員會に同じく委員となつて、博士と面談の機會があつたが、今はそれもあだである。先頃も、黑板勝美博士と逢つて、君の病症の輕からんことを共に祈つて別れたばかりであつたに。

博士は時に和歌を詠ぜられた。深邃なる谿谷から清冽な水の湧き出づるごとく、詠歌の窮極は畢竟その人である。博士の作は、氣魄に充ち、高邁なる精神を以て貫かれてをる。

先年歐米に官遊せられたをりの和歌に曰く、

奉命將赴歐米諸國作歌

ことさへぐ外つ國々を見て來(こ)とふみこと畏み出でたつ我は
海ゆかば底筒男神山ゆかば大山咋神いはひたぶ身ぞ
天にいますかぞいろの命(みこと)をしとこそみそなはすらめこのいでたちを

日のみかげそびらにおひて日入るとふ國のかずゝゝ見つゝをゆかむ

をのこそも見ずてやむべき天雲のむかふすかぎりありとある國を

大海原潮の八百重をこえゆきてかへりつかむ國日の出づる國

六首いづれも、命を奉じて赴くといふ大きな氣格によつて統一されてをり、祖國の神々を崇め、亡き父君を懷ひ、常に日出づる國といふ自覺に立つてをられる。

また、山城瓶原に新居を占められた折の作がある。

新築室瓶原作歌十首

天ざかるひなとな言ひそ朝日てり夕月さゆるうまし小國ぞ

うちわたす山は鰲山海原の波の穗に似るみどりむら山

水をあをみいさごを清み泉川夕ばえわたる頃のよろしさ

國つ神かものみ神と爭ひしそのふることを語りつぐ國

皇(すべらぎ)の宮つくらしし古へゆうましところぞ久邇の都は

淨瑠璃寺海住山寺の鐘の音ひびきかはしけむそのかみしのばゆ

うまし名ようましところよ妹とわが新むろつくる共みかの原

みかの原に新室つくり里人とみきくみかはし室ほがひすも

こん年は八むねづくりつくり足さむ吾が新むろに幸あれとほぐ

御民われいけるしるしありをまち米口畑芋に舌鼓うつ

をまち米は、瓶原村にてつくる米の中にて最もよき種也。口畑は村の中の字なり。そこより出づる芋ことにうましと里人いへり。

この恭仁の山莊には數回おとづれた。久邇の古京は、萬葉集の長歌に、「河近み瀬の音ぞ清き、山近み鳥が音とよむ」とうたはれたごとく、鹿背山は綠にそびえ、木津川の流は淸くさやかである。老木の茂つた故宮の跡をよぎり行けば、小高い丘の中腹に山莊がある。古京の景勝を一眸のもとに望む清楚な居宅の傍に、堅牢なる書庫がある。博士に案内せられて書庫の樓上にのぼると、その一隅には、國寶となつてをる漢籍の數々が收めてある。數冊を抽出して、かつ示しかつ語られたことであつた。

君が華甲の記念論文集の第二卷に、自分は成尋阿闍梨母集のことを書いたのであつたが、自分の還曆の際の論文集には、君は書くべきよき題目が見當らぬからといつて、論文はつひに寄せられなかつたが、後、萬葉書に短册に書いて歌二首を贈られた。

佐々木博士周甲壽賦歌二首雖匱斐然之藻聊紓景仰之懷云爾

其一

彭祖餓渠騰阿離弊牟望能惋豫能都泥能務曾餌飫那迩舸枳彌爾褒伽梅椰

其二

乃樂能彌夜能赴流宇多布離能多叙婆許曾譽美多娜之氣牟枳彌倭須羅叙梅

虎

こたびの最後の病床の歌をここに掲げて、哀悼の忱を表する。

內藤湖南博士

庚戌初夏臥病六首

わが腹ゆ下す血あかし我が心きよくさやけきしるしならずや

その平生、潔白自ら任ずる清淨の心のあふれ出るのを覺える。

わがのんどゆ吐き出す黒ききたなき血ねぢけ人らにはきかけてむを

世のねぢけ人に對する義憤をもらされたのである。かの萬葉集なる博士消奈行文大夫の作も思ひおこされる。

蟲の息になるまで我はかつ生きて生のくるしみつぶさに味はふ

左向けばわが骨いたむみぎり向けばわが節いたむいかにせむ我は

ますらをと我は思へど胸つかへ飯とほらねば苦しくもあるか

つぶさに重病の苦惱を味はひ、これを見つめをる現實觀がにじみ出て痛ましい。就中、左向けばの一首は、辛讀に堪へぬ。

天つ神われをもちふる心ありてめさせ給ふかはや歸りなむ

天を仰ぎ、神に委ねて、病苦を克服した、安らかな、かつ朗らかな心境が尊い。

病中雜興

木津川の瀨の音とほみふくる夜を病の床にさめつつぞゐる

ふくる夜をわれいねがてに病みをれば女子がくむつるべの音しるし

夢に見けむ現に見けむ病める吾がさまよふ野路に蓮華草さく

月かすむうづきの望のおぼろ夜に兜率天をぞあまがけらまし

いづれも病床に臥して、靜かにまどろみ、靜かにめざめ、或はつるべの音に現實の世界を思ひ、或は幻の中に彼岸の消息をうたひ、或は幽玄の境地に遊んでをられる。

　賤がかふかひこの夢やさめぬらむ背戶の畑の桑の葉かをる

　鶯よ汝も老いてや捨てられし吾が軒かさむ宿として鳴け

　枕邊にうちとのうまごうちつどひたはるる見れば心なぐさむ

その自然に對する深い愛情と、人間に對するやはらぎとがにじみ出てをる。しかも內外の孫のつどうてをるに心を慰められた老學者は、今は此の世にないのである。

　博士の歌は、よく萬葉の精神を體得せられたものであつた。從つて博士は萬葉集を愛せられた。さきに昭和三年は、聖武天皇の天平元年より千二百年に相當するを以て、大阪朝日新聞社は、天平文化記念會を開催した。當時副社長たりし上野君は、博士を山莊に訪うて、記念の爲めに不朽に傳ふべき事業として何が適當なるかを問はれたに、博士は、萬葉集古鈔本の復刻を以て答へられた。しかして、かの元曆校本萬葉集大成本十五卷の刊行となつたのである。自分がその事に當つたのは、實に博士の當時の答に基づくのであつた。

佐佐木信綱 明治時代 著作編纂書目録

題目の下に括弧して附記せる九種は、雜誌の寄稿、その他は單行本なり。（雜誌は初期のもののみを擧ぐ。）

詠歌論（女學雜誌）	明治二十一年二月
日本中古の男女風俗（女學雜誌）	明治二十一年三月
日本文範	明治二十三年六月
婦女詞藻	明治二十四年五月
聖徳歌	明治二十四年十月
近世歌學評論（城南評論）	明治二十五年三月
歌の栞	明治二十五年四月
國歌流派の變遷を論ず（歌學）	明治二十五年五月
新體和歌意見附言（城南評論）、	明治二十五年六月
校註徒然草	明治二十五年六月
校註竹取物語	明治二十五年七月
校註伊勢物語	明治二十五年七月
校註土佐日記	明治二十五年七月
校註方丈記	明治二十五年八月
校註更科日記	明治二十五年十月
標註十六夜日記讀本	明治二十五年十月
標註庭のをしへ	明治二十五年十月
近世國文學者年表（城南評論）	明治二十五年十一月
校註明倫歌集	明治二十五年十二月
標註七種百人一首	明治二十六年一月
繪入幼年唱歌	明治二十六年一月
後撰集講義（文藝）	明治二十六年四月
千代田歌集第三編	明治二十六年七月
近世文人傳（文藝）	明治二十六年八月
百人一首講義	明治二十七年一月
新古今集講義（文藝）	明治二十七年一月

明治歌集	明治二十七年二月
支那征伐の歌	明治二十七年八月
征清歌集	明治二十七年十月
増補詠歌自在	明治三十年二月
詠歌辭典	明治三十年八月
少年歌話	明治三十年九月
續日本歌學全書	明治三十一年一月
やまと錦	明治三十二年一月
竹柏園集第一編	明治三十四年二月
歴史唱歌菅公	明治三十四年十月
日英同盟平和の旗	明治三十五年三月
竹柏園集第二編	明治三十五年五月
歌集おもひ草	明治三十六年十一月
國歌評釋	明治三十六年十一月
露西亜征討の歌	明治三十七年二月
征露軍歌	明治三十七年三月
露國征討軍歌	明治三十七年四月
旅順陷落軍歌	明治三十七年八月
遼陽占領軍歌	明治三十七年九月
奉天占領軍歌	明治三十八年三月
文の栞	明治三十九年五月
あけぼの	明治三十九年六月
玉川集	明治三十九年十一月
鎌倉右大臣歌集	明治四十年九月
歌集玉琴	明治四十一年四月
和歌世々のあと	明治四十一年八月
歌學論叢	明治四十一年九月
日本歌選上古之巻	明治四十二年二月
國民歌集	明治四十二年一月
定家歌集	明治四十二年十二月
日本歌學史	明治四十三年十月
藍紙萬葉集解説	明治四十三年十二月
萬葉集古寫本攷	明治四十四年四月
名家短冊帖	明治四十四年四月
望東尼歌文集	明治四十四年十一月
和歌入門	明治四十四年十二月
新謠曲百番	明治四十五年二月
金鈴遺響	明治四十五年四月

明治文學の片影（了）

明治文學の片影

定價 參圓

昭和九年十月十五日印刷
昭和九年十月二十五日發行

著作者 佐佐木信綱

發行者 木田開
東京市麴町區丸ノ内二丁目一番地

印刷者 堀修造
東京市牛込區榎町七番地

發行所 東京市麴町區丸ノ内二丁目
丸ノ内ビルヂング五九二區
中央公論社
振替口座東京三四地
電話丸ノ内五三五―八番

日清印刷株式會社印刷

坪内逍遥著

柿の蔕

中央公論社出版部

沙翁を論じては世界一、劇界革新の先驅を唱へしては意氣壯者を凌ぐ老逍遥が、半生の蘊蓄と體驗とを傾けて語る、文學、演劇、知友交友のくさぐさ、人間逍遥の粋に觸れた歯切れの好さ、材料は珍貴なり庖丁はよし、滋味無限。就中二葉亭の文獻は絶對獨占記事。

平福百穂裝幀
菊判三二〇頁
口繪寫眞數十葉
定價二圓五十錢 送料十四錢

永井荷風著

荷風隨筆

中央公論社出版部

收むる所、成島柳北の日誌、柳橋新誌以下十九篇、或は私淑傾倒する故人を語りては寸言正鵠、觀賞深刻、現代世相を細叙しては批判辛辣、觀察奇警、その間、雀、巷の雜草の如き靜觀澄心、古玉に通ふ名小品を鏤め、全篇これ薫風清月、以て俗腸を洗ふに足らん。

焦茶[illegible]地裝幀
四六判四九〇頁
定價一圓八十錢 送料十四錢

谷崎潤一郎著

青春物語

中央公論社出版部

若き日の谷崎、文壇の麒麟兒が青春は人一倍惱み烈しく、明暗の陰翳も深かつたに相違ない。文壇にデヴューの華々しさは忽ち強度の神經衰弱の淵に沈淪し、京の舞妓との雜魚寢の夢も醒めては果なき旅の空。奇人佳人秀才相寄り相觸する天才兒が情緒圖こそ惱ましけれ。

木下杢太郎裝幀
四六判二四〇頁
挿繪寫眞十數葉入
定價一圓七十錢 送料十四錢

室生犀星著

文藝林泉

中央公論社出版部

著者は此書を作るにも、恰も彼が造庭の場合、一木一石の吟味配置に苦患呻吟するが如き熱意とねばりとを以てした。その特異なる名文は將にフオルムを超越して息づける心魂そのまゝを紙上に活現するの境に達した。即ち本書は、魚眠洞主人が心境を吐露する名人藝。

著者自裝特漉本
四六判五三五頁
名園寫眞十二葉入
定價二圓 送料十八錢

登張竹風著

人間修業

中央公論社出版部

一代の痛快兒竹風が人間修行は、必然酒修行に始まる。全篇十數篇一として酒の出ぬはない。併も篇中の酒豪酒仙悉く凡俗を脱し氣骨稜々鐵骨鳴る底の快男兒に非ずんば即ち天下の大秀才。其間、或は女傑あり大夫あり金髮の美女あり、醉竹風の面目躍如人を魅す。

津田青楓裝幀
四六判四八〇頁
漫畫寫眞入
定價一圓七十錢 送料十四錢

市島春城著

春城代醉錄

中央公論社出版部

春城先生齡古稀を過ぐる既に幾歳、酒盃を傾けんが爲に即ち隨筆をものすと言ふ。說くところ洋の東西に亙り古今に通じ、製墨古漢にして學殖見識飽くまで豐富暢達、その味正に茶料理の粋にも比すべきか。更に假によく酒に宜しきを言はず、四季机邊を離すべからず。

紺色葉表地裝幀
四六判六〇〇頁
著者近影口繪入
定價一圓八十錢 送料十四錢

